ENIX ORIGINAL GAME BOOK

ゲームブック

MOTHER™ 2

ギーグの逆襲

エニックス文庫

ゲームブック

MOTHER 2

ギーグの逆襲

エニックス文庫

EB56

P580

ぼくの名はネス。イーグルランドのオネットっていう緑いっぱいの町に、ママや妹のトレーシーといっしょに住んでいる。パパは出張で家を留守にしがちだけど、ごくごく普通の幸せな毎日を送っていたんだ。ところが、ある日突然、ぼくん家の裏の丘に隕石が落ちてきて、ぼくの運命は意外な方向に！　なんと、ぼくは〝地球を救う〟っていう、とんでもない使命を背負ってしまったんだ!!

——スーパーファミコン版MOTHER2の愛と感動のストーリーと、スリル満点の戦闘シーンを再現したオリジナルゲームブック！

さあ、地球を守るために立ち上がれ！

ILLUSTRATION／金子 統
COVER DESIGN／水野敏雄＋TWINSTAR ☆★

ゲームブック
MOTHER2

地球を救うために立ち上がれ!

静かな町オネットに落ちた隕石──。
それが、すべての始まりだった。
地球を危機から守るため、
今、ネス、ポーラ、ジェフ、プーの4人が旅立つ!

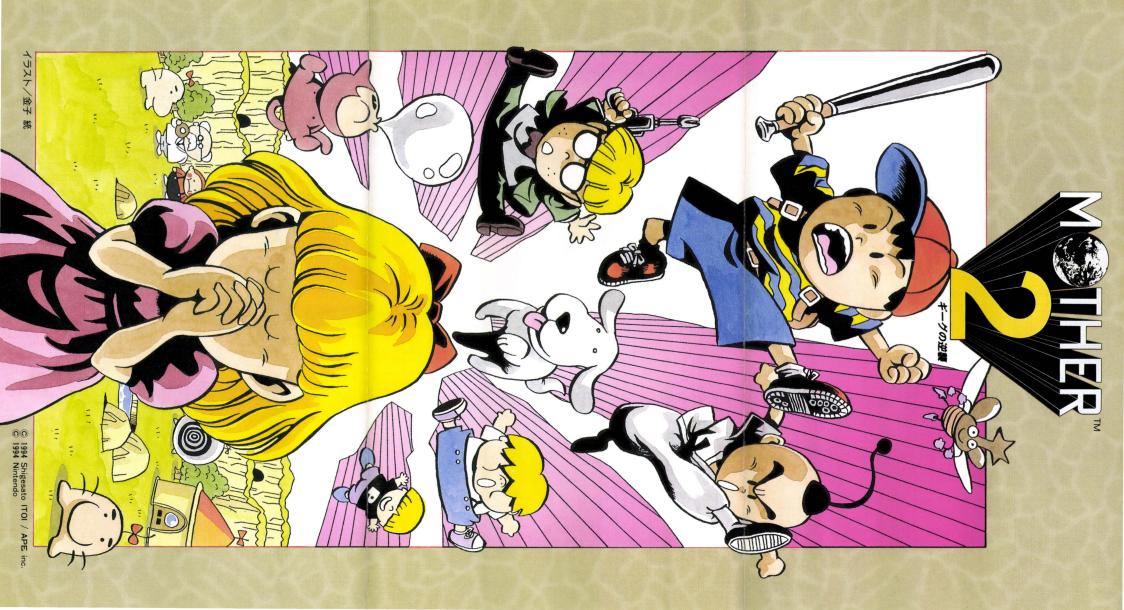
ENIX エニックス文庫

ゲームブック
MOTHER2
ENIX

ENIX ORIGINAL GAME BOOK

イラスト／金子 統

冒険の書

このページは、ゲームブックのためのチェック項目です。4ページの「遊び方」と以下の解説をよく読んで使ってください。ここに直接書きこんでもかまいませんが、できればコピーをとって使用するとよいでしょう。

●バトル対戦表●冒険を始める前にA～Eの下の空欄に、1～5までの数字をランダムに書きこんでください。使い方は、下のバトル対戦表記入例を参照してください。
●フラグチェック表●ゲームの中の「Aにチェックして」などの指示にしたがって、マス目の中に○印を書き込みます。「Aのチェックを消して」と指示がでたら、○を×などで消してください。
●アイテムリスト●アイテムを入手したときは○印、アイテムがなくなったときは、○を×で消すなど、ゲーム本文中の指示にしたがってチェックしてください。
●PSIチェック●ネス、ポーラ、プーがそれぞれ覚えたPSIを、ゲーム本文中の指示に従ってチェックしてください。
●HPチェック表●各レベルに合わせた表を使い、本文中の指示にしたがって、→でマイナス（←でプラス）していきます。レベルがあがった時点で、次のレベル用の表を使用します。詳細は、HPチェック記入例を参照してください。

●フラグチェック表

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P

Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	ア	イ	ウ	エ	オ	カ

キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ

●バトル対戦表

	A	B	C	D	E
初期設定					
書き替え用					
書き替え用					

バトル戦表記入例

A	B	C	D	E
2	1	3	5	4

『◆ネスはC、相手はB』の場合
C=3、B=1
⬇
1よりも3の数値のほうが上なので、『●上』へ進む

●HPチェック表

レベル1		0
レベル2		0
レベル3		0
レベル4		0
レベル5		0
レベル6		0
レベル7		0
レベル8		0

HPチェック表記入例

レベル1	
レベル2	

●PSIリスト

ネス
PK必殺
PKフラッシュ
催眠術
テレポート
シールドα
パラライシス
PK必殺Ω

プー
テレポート
PKスターストーム
シールドΩ

ポーラ
PKファイアー
PKフリーズ
サイコシールド
PKサンダー
オフェンスアップ
ディフェンスダウン

●アイテムリスト

武器	
普通のバット	
いいバット	
ミスターのバット	
ゴヂラのバット	
ゴージャスなバット	
ガッツのバット	
マジカントバット	
フライパン	
厚めのフライパン	
シェフのフライパン	
素敵なフライパン	
楽しいフライパン	
バンバンガン	
エアガン	
レーザービーム	
壊れたビーム砲（　　　）	
虹色ビーム	
王者の剣	

ステータスアイテム		
クッキー		
ハンバーガー		
ダブルバーガー		
マンモスバーガー		
ピザ		
スキップサンド		
いのちのうどん		
いのちの角笛		
うらカンポー		
すっきりハーブ		
ぬれタオル		
血清		

防具	
ミスターの帽子	
帽子ヘルメット	
ホームズキャップ	
リボン	
まっ赤なリボン	
守りのリボン	
王者のバンダナ	
王者のマント	
旅のお守り	
どせいさんのコイン	
魔封じのコイン	
輝きのコイン	
金の腕輪	
プラチナの腕輪	
ダイヤの腕輪	
海のペンダント	
大地のペンダント	
星のペンダント	

戦闘&戦闘補助アイテム		
殺虫スプレー		
アンチPSIマシン		
ペテネラの靴下		
バズーカ砲		
スーパーバズーカ		
ペンシルロケット		
ペンシルロケット5		
ペンシルロケット20		

特殊アイテム	
音の石	
受信専用電話	
タコ消しマシン	
フランクリンバッヂ	
どせいさんの辞書	
ちょっとカギマシン	
はえみつ	
コンタクトレンズ	
サイン入りバナナ	
小さなルビー	
ヒエログリフの写し	
タカの目	
こけし消しマシン	
グミドリアン	
赤い石	
青い石	

エニックス文庫

ゲームブック

MOTHER 2

ギーグの逆襲

ゲームブック
MOTHER 2
ギーグの逆襲

遊び方

●冒険の進め方

7ページのシーン**1**からゲームが始まります。シーン1を読み終わると文末に「**⬇2**へ」という指示がありますので、今度はシーン**2**へ進みます（ページ数ではないので注意してください）。それ以降は進んだ各シーンの文末の指示に従って読み進めてください。次のシーンへの指示が2つ以上ある場合は、自分の状況に適したものを、どれか1つ選んで進みます。間違って、指示と違う番号へ進むと、冒険が続けられなくなりますので、万一に備えて、自分の進んできた番号をメモしておくとよいでしょう。

●バトル対戦

冒険を始める前に、巻頭のカラーイラストの裏ページにある《冒険の書》・バトル対戦表のA〜Eそれぞれの欄の下の空欄に、1〜5までの数字をランダムに書きこんでください。冒険の途中で「**◆バトル対戦表で戦います。ネスはA、相手はC。相手よりも数値が……**」という指示が出てくることがあります。この場合、AとCの欄の下に書いてある数値を見比べて、相手のCよりもネスのAの数値の方が上ならば「**●上**」、下ならば「**●下**」（1が最下、5が最上となります）の指示するシーン数へ進みます（使い方は《冒険の書》の〈バトル対戦表使用例〉を参照してください）。なお、バトル対戦表の数値は、「**◆ここでバトル対戦表**

を書き替えてもOK」という指示で書き替えが可能です。

●フラグチェック

冒険の途中で「◆Aにチェックして」という指示が出てきたら、《冒険の書》・フラグチェック表の「A」の欄に、○印をつけてチェックしてください。また、「◆Aのチェックを消して」という指示が出た場合は、「A」の欄の○印を×などで消しておきましょう。

●アイテムチェック

ゲームを進めていくと、武器や防具、食べ物など役に立つアイテムが手に入ることがあります。「◆『○○○』を入手した。アイテムリストにチェックして」の指示が出てきたら、アイテムチェック表のアイテム名の欄に○をつけ、「◆アイテムリストから『○○○』を消して」という指示が出たら、アイテム名の欄の○印を×などで消してください。なお、ステータスアイテムおよびペンシルロケット類については、同じものを同時に3つまでしか入手できません。入手することによって4つ以上になる場合は、○印をつけないでください。また、武器に関しては、入手した段階では壊れていて使いものにならず、後で修理して活用させるものが出てきます。この場合、「◆アイテムリストの『○○○』の横の（　）内に『△△』と記入して」と指示が出ますので、指示どおりに書きこんでください。

●PSIチェック

ゲームを進めていくと、ネスをはじめとする登場人物たちが新たなPSIを覚えることが

ります。「**◆ネスが『□□□』を習得した。PSIリストにチェックして**」という指示が出たら、各々のPSI名の欄に○をつけてください。

●HPチェック

HPはネスたち全員の持っている総合体力を表す数値で、レベルごとに最大値が変わります。ゲームスタート時はレベル1のHPチェック表を使用しますが、「**◆レベルが2にアップしました。レベル2対応のHPチェック表に切り替えて**」と指示が出たら、レベル2のHPチェック表を使用してください。なお、レベルアップの段階で、HPはそのレベルの最大値になります。HPチェック表は減点方式を採用しますので、文章の途中で（HPマイナス1）などの指示が出たら、HPチェック表の最大値方向から、減ったHPの数だけ→印をつけてください。また、HPは回復することもあります。「**◆『○○○』を食べたらHPプラス10して**」あるいは「**◆HPを現在のレベルの最大値まで回復させて**」という指示が出たら、プラスされる数値分←印をつけてください。HPは、最大値よりも多くなることはありませんので、プラスすることで最大値より多くなるような場合でも、最大値で止めてください。

――それでは、冒険の始まりです。

1

どど——ん！　耳をつんざくような轟音（ごうおん）！　振動（しんどう）がベッドを揺（ゆ）する……。
「わっわっわっ！」
何が起こったのかわからないまま、ぼくはあわててベッドから飛び起きた。まだ頭ははっきりしてなかったが、なんだかとんでもないことが起こったことだけは理解ができた。とにかく部屋を飛び出して、階段（かいだん）を降（お）りる。
1階の居間（いま）では、これまた寝室（しんしつ）から出てきたママが、ちょっと眠（ねむ）そうに立っていた。
「なんだか、とんでもなく大きな音がしたわよね、ネス。どうも山の方からしたみたいだったけど、何が起こったのかしら？」
「ぼく、ちょっと見てくるよ」ぼくはすばやくパジャマを脱（ぬ）ぎ捨（す）て、服に着がえて外に出た。
時はまさに真夜中。空には満天（まんてん）の星が輝（かがや）いている。
思えば、これがすべての冒険（ぼうけん）の始まりだったんだ。

⬇2へ

2

ぼくの名はネス。ここオネットで、ママと妹のトレーシーといっしょに暮（く）らしてる。今、パパは出張で家を空（あ）けているため、わが家（や）ではぼくがただ1人の男。それだけに、さっきの轟音（ごうおん）は気になるところ。いざとなったら、ぼくが家を守らなきゃいけないもんね。

2

音のした方向は、うちから北西にあたる山の上あたり。勝手知ったるこのあたりの地理。
ぼくは山の上目ざして、てくてく歩いていった。
山の上に着くと、ものすごい人だかり。警察がてんやわんやで、整理にあたっている。
どうやら通行止めしているみたいで、これ以上先には行けないみたい。
そのとき、聞き覚えのあるけたたましい声が響いた。
「はい、どいた、どいた！　ほらほら邪魔しないで、もうみんな家に帰って……」
見れば、太った子どもが忙しそうに走りまわっている。隣の家のポーキーだ。
「ポーキー、いったい何が起こったの？」
「あ、ネスか？　実は山の頂上に隕石が落ちたんだ。オレが最初に発見したんだぜ。ところがヤジ馬がいっぱい来て調査の邪魔をするんで、こうして整理にあたってるんだ。おまえもこんなところでウロウロしてないで、早く家に帰んな。子どもはベッドで寝てる時間だぜ」
ポーキーったら自分も子どものくせに、どういうつもりなんだろ！
ムッとしてると、顔見知りのおまわりさんが話しかけてきた。
「ネス、ポーキーをなんとかしてくれよ。勝手に第一発見者だとか名のって、調査の邪魔してしかたないんだ。きみ、お隣だろ……。ほんと、最近はシャーク団が暴れて隣町のツーソンへの道を封鎖したり、隕石が落ちたりで事件が多くて大忙しさ」
シャーク団ってのはオネットの街を荒しまわっている不良集団で、街の悪事はほとんど彼

らのしわざってことになっている。
結局、ぼくは隕石の落下現場に入りこむことができず、そのまま家に引き上げた。 ➡9へ

3

オネットの南にある森を抜けると、そこはツーソンだった。さっそくポーラスター幼稚園を訪ねるが、ポーラはいなかった。園長さんであるポーラのパパが心配そうに語るには……。
「実は、ポーラは昨日から姿を消してるんだ。誘拐されたんじゃないかと、もう心配で、心配で……。きみもよかったらポーラを捜してくれないか」
もちろん2つ返事でポーラを捜すことを引き受けた。とはいえ、ツーソンには今来たばかり。心当たりなんかあるわけない。よし、まずは近所に聞きこみだ！ ➡299へ

4

ぼくらは、マスターがトイレに行ったすきにカウンターを調べてみた。
「ダメだ……。マニマニの像なんてないや……」
と、ジェフがため息まじりにカウンターの壁にもたれかかった。そのとたん！
グリンッ！　突如壁が回転し、ジェフの体は壁の裏側へ!!　か、隠し出口!?
そしてあわててジェフの手を取ったぼくも、引きずられるようにして壁の中へ！

何か虹の中をすり抜けたような錯覚を覚え、数秒後、ぼくらは元の酒場の中にいた。
確かにぼくらは店内から出たはずなのに……どうなってるの!?

⬇656へ

5

「距離、敵の大きさ、ロケットの威力からみて……狙いはこれでよし！」
ジェフのメガネがキラリと光り、マニマニの像に向けてペンシルロケットが発射された！
ズギュギュギュギューン！　ロケットは敵の胸のまん中に命中、像は粉々に砕け散った！
と、同時にあたりは虹色の光に満ち、その光にぼくらの頭はクラクラっときて……。

◆アイテムリストから『ペンシルロケット』を消して

……………………440へ

6

スカラビ文化博物館には、ピラミッドから発掘されたミイラや棺が展示してあった。
一般展示室から奥の部屋へ進もうとして、ぼくたちは係員さんに呼び止められた。
「おっと。そこには重要な遺物が展示してあるんですが、今は改装中で見せるわけにはいかないんですよ。ただ……気持ちのある人には特別にお見せしないわけでもないんですが……」
係員は、こすっからそうな目でぼくたちに言った。『気持ち』っていうのはつまり、袖の下をよこせってことか。ぼくたちはそんなお金もなければ高価な物も持ってないし……。

「これは、困ったときに使えと、老師が俺にくれたんだ」と、プーが小さな箱を取り出した。
中には、小粒のルビーが入っていた。それを見たとたん、係員の目がキラリ！
「ほお、その宝石を私に？」

●小さなルビーを係員に渡す………96へ　●渡さない………62へ

7

「ポーラ、これを！」ぼくは、ポーラの口に、すっきりハーブをくわえさせた。そうして、
みんなでポーラに風を送ってあげる。しばらくすると、ポーラの様子が落ち着いてきた。
「みんな、ありがとう。おかげですっかりよくなったわ。さ、行きましょう」
木陰でしばらく休んだせいで、ぼくらの体も好調。

◆アイテムリストから『すっきりハーブ』を消して………231へ

8

バルーンモンキーが頼めば、タッシーが向こう岸に連れていってくれるだなんて……。
ボクはあわてて雪原を引き返した。ドラッグストアへ向かうためだ。やっとたどりついた
ドラッグストアでフーセンガムを買うと、愛敬のあるサルがおまけについてきた。
バルーンモンキーを仲間に加えたボクは、再び雪原を南下した。

➡354へ

9

家に帰ったぼくは、することもないので、そのままベッドに直行した。うとうとうと……。心地(ここち)よい眠(ねむ)りに入りかけたそのとき……。

ドンドンドンドンドーーーン！　乱暴(らんぼう)に戸を叩(たた)く音が耳に入った。ほんとは無視(むし)して眠っていたかったんだけど、音はいつまでたってもなりやまない。しかたなく、ベッドから出て下へ。

「なんだか下品な叩き方ね。ちょっとネス開けてみてちょうだいな」

ママのいいつけに従(したが)ってドアを開けると。そこには、青ざめた顔のポーキーが。

「た、大変なんだネス。隕石(いんせき)を見にいくとき、弟のピッキーも連れていったんだけど、ピッキーのやついなくなっちゃったんだよ。もしこのことがとうちゃんにばれたら、オレはおしりを百たたきだ。頼(たの)む、いっしょにピッキーを捜(さが)してくれ！」

●ポーキーの頼みをきく……**17**へ　●断わる……**25**へ

10

ドラッグストアで旅のお守りを、ベーカリーでクッキーを買った。クッキーはすぐその場で食べてしまった。うん、おいしい。これで元気倍増。ジャイアントステップへ出発だ！

◆『旅のお守り』を入手した。アイテムリストにチェックする。HPプラス3して……**329**へ

11

心を無に保つ俺の耳に、次第に従者の声は聞こえなくなっていった。すると今度は、空から不気味な声が響き渡ってきた。
「プーよ、私はおまえの先祖の霊じゃ～。試練の仕上げにおまえの足を折る。よいな？」
それが試練ならと、心で従った瞬間、バキッと鈍い音とともに、足に激痛が走った。
苦痛の中で、心を平静に保とうとしている俺に再び霊が語りかけてきた。
「今度は、その体をバラバラに裂き、心をも奪うぞ。おまえは四肢をもがれて転がる物となるが、よいかな？　それとも、私と戦うか？」

●戦う　……………………230へ　●そのままでいる　……………………255へ

12

しばらく道を進んでいくと、急にこじんまりとした集落に出た。集落の入口には看板が立っていて、『ハッピーハッピー村』と書かれていた。おかしなことに、この村の建物はすべて青色。全部が青ってのもなんだか気味が悪い。通りかかった人に話を聞いてみても……
「ハッピーハッピー教の教えを守っていれば、世界は平和になるんだよ。だからすべてのものは青色でなければならないんだよ」
「本当にカーペインター様のお話はすばらしい。やっぱり神様の啓示を受けた人は違う。カ

ーペインター様万歳！　世界を青色に！」
なんでも、この村ではハッピーハッピー教という宗教が信じられているらしく、カーペインターっていう教祖の教えに従って、すべてを青色にしているんだって。
そういえば、トンチキさんは、『ポーラはなんとか教のいけにえにされるためにさらわれた』って言ってたな。それがこのハッピーハッピー教のことなのかな……。
そうこうするうちに、ハッピーハッピー教の教団本部の前にやってきた。中では礼拝の最中らしい。どうしよう、中に入ってみようか？

●中に入る……………………172へ　●入らない……………………94へ

13

ところが、バットは空振り。巨大モグラのパンチまで受けてしまう（HPマイナス3）。
「いた――ったたたた……」なんて痛がってる場合じゃない！　気を取り直して、もう一発、巨大モグラにおみまいだ！

⬇317へ

14

北の国ウインターズ、スノーウッド寄宿舎。
真夜中、夢うつつの中で、ポーラのメッセージを受け取った男の子がいた。

彼の名はジェフ。ネスとポーラの仲間になる宿命を背負った男の子……。

「！　ポーラ⁉　ネス⁉」
夢の中で不思議なメッセージを受けたボクは、思わずベッドの毛布をはねのけた。
ボクの名はジェフ。スノーウッド寄宿舎に住んでいる学生だ。
どうやらボクには不思議な使命があるようだ。夢の中のメッセージによれば、まず南に向い、ポーラという女の子とネスという男の子を救わなければならないらしい。
こうなったら、とにかく急いで行動することだ。ベッドから出たボクは、旅の支度をして、1階へと降りた。出発の前にガウス先輩に挨拶をしておくことにした。
ガウス先輩は、面倒見のいい最上級生で、この寄宿舎の顔役だ。
「なんだって、ジェフ。今から旅に出るって？」
話を聞いたガウス先輩は、案の定、声を荒立てた。
「何も聞かないでください先輩。ボクはどうしても行かなければならないんです」
「わかった。それなら、この〝ちょっとカギマシン〟と〝バンバンガン〟を持っていけ。きっと役にたつはずだ。それから、おまえの親友のトニーにはオレから説明をしておくよ」
ボクは先輩にお礼を言って、この2品を受け取った。そして音をたてないように、寄宿舎を抜け出し、塀を乗り越えて外へ出た。いよいよ冒険の旅の始まりだ。

◆『ちょっとカギマシン』と『バンバンガン』を入手した。アイテムリストにチェックして……………………………………181へ

15

気が付くと、ぼくらはみんなトトの海岸に打ち上げられていた。奇跡的に船も無事だ。
「え？　また、船を出せって？　おまえさんたち、クラーケンは怖くないのかい？　……えええい、わかった。オレも海の男だ、ヨーソロー！」
再び海へ！　すると、間もなくしてまたまたクラーケンが現れた。今度こそ、負けないぞ！
●PKサンダーで先制攻撃！　……366へ　●シールドαを張る！　……………174へ

16

右の通路を歩きはじめて間もなくすると、前方に1体の石像があることに気付いた。
「ねえ、ネス……。わたし、すっご～くイヤな予感がするんだけど……」
「うん、ぼくもだけど……でも、進まなくっちゃ……」
ぼくらは、石像をじいっと見つめながら、横をすりぬけようと急いだ。そのとき！
予感的中！　石像が、突然雄叫びをあげ、ぼくらに襲いかかってきたのだ！
「王家の石像だ。ネス、ダッシュすれば逃げられるぞ！」ジェフが前方を指差して叫ぶ。

●逃げる……………………92へ　●逃げない……………………383へ

17

「わかったよ。いっしょにピッキーを捜しにいこう」
ぼくはポーキーの頼みを引き受けることにした。幸いママも賛成してくれた。
「話はわかったわ。頼りにならない犬だけど、チビを連れていきなさい。きっと何かの役にたつはずよ。よその人はどういうか知らないけど、ママにはあなたがとっても頼もしく見えるわよ、ネスちゃん。イエーイ。でも外に出て行くときは、ちゃんと着がえていきなさい」
てなわけで、急いで着がえたぼくは、犬のチビを従えて、ポーキーといっしょにピッキーを捜しに出たんだ。

⬇241へ

18

ダイヤモンドをみたとたん、支配人の目の色と態度が変わった。
「まあ！　そのダイヤモンドでトンズラブラザーズの借金を返すっていうの？　ホ、ホホホ！　い、いいわよ。負けといてあげる、さ、契約書はさっさと破くザマス！」
やった！　これでトンズラさんたちは自由だ。
「ヘイヘイ、ボーイズ&ガール！　また世話んなっちまったな。おかげでオレたち自由の身

だぜ。この街で最後のライブをあんたたちにプレゼントするゼイ！　イエイ、イエイ！」
ぼくらの報告にトンズラさんたちは大喜び。コンサートはノリノリで最高だった。でも。
「ヒック！　何がトンズラだ。おおぁ、おめーら、オレらの若い頃はだな……クドクド……」
劇場を出たところでぼくらは、酔っぱらいの困ったオヤジにからまれてしまった！
●Wにチェックがあれば……………288へ　●なければ……………………112へ

19

ぼくはとっさに、『川』とこたえた。合言葉は昔から、『山といえば、川』だ。
ところが、この合言葉は、全然違ってたみたい。
「ダメだ、ダメだ。親分には会わせられない！」
ぼくは面会を拒否されて、ヌスット広場からおいだされてしまった。
⬇299へ

20

マル・デ・タコは、こっけいな体つきからは想像できないほどすばやい動きで、口からビームを発射させた。（HPマイナス5）
あわてて避けるが、ビームはぼくの太ももの脇をかすめる。鋭い痛みが脚全体に走った。
「まかせて！」ジェフがレーザービームを放ち、続いてポーラのPKフリーズが炸裂！　マ

ル・デ・タコは、どろどろに溶けたまま氷づけにされ、やがて動かなくなった。➡515へ

21

この戦いでぼくは、敵の体をしびれさせるPSI、パラライシスを覚えた。

◆ネスが『パラライシス』を習得した。PSIリストにチェックして……………309へ

22

ぼくたちは、ホテルへと向かった。ちなみに、泊まるためじゃなくてフロントで電話をタダで借りるためだ。この旅で、ぼくもだいぶやりくり上手になったなあ。

『はい、ストイッククラブでございます。ネス様他2名様ですね？　ご予約賜わりました』

よし、アポ完了。ぼくらはさっそくストイッククラブへ！

店は天井の高い、コンクリートうちっぱなしのシンプルでしゃれた作りになっていた。そこでは、みんな水を飲みながらステージをぼーっと見て、何か語りあっている。

ステージには、卵形の石があるだけだ。ちょっと会話を聞いてみよう。

「……つまり、今の世のエントロピーの増大っていう流れに……」

「資本主義の最終イメージというのは……」

はちゃー。ちんぷんかんぷん！　聞いてるだけで頭が痛くなってくるよ。ぼくたちは、バ

ーテンさんに教えてもらって、船乗りの奥さんを見つけた。
「私、この頃やっと自意識に目覚めたといってもいいと思うの。このクラブの人たちって自己の存在を穴があくほど見つめちゃってるワケ」
奥さんも、やっぱり他の人たちと同じようにわけのわかんないことを言っていた。でも、どことなく人の良さそうな女性だ。まずはジェフが声をかけた。
「船乗りの奥さん、旦那さんが待っています。トトのお家へ帰りましょう!」
「私、四六時中も五六時中もこの店に存在をしていたいと思ってるの……」
ダメだ……聞く耳もたずって感じだ。こうなったら……。

●ネスが説得する ……102へ
●ポーラが説得する ……70へ

23

ぼくはミスターのバットで、ゲップーの体をおもいっきりひっぱたいた! ボカッ! バットの攻撃力はさすがに高く、ゲップーは身もだえして苦しんでいる。

↓151へ

24

店に入ったぼくたちは、中をざっと見渡した。

●厚めのフライパンがあれば ……261へ
●なければ ……165へ

25

「ピッキーだって、このあたりのことはよく知ってるんだから、すぐに帰ってくるって」眠くなっていたぼくは、そんなことを言って、ポーキーの頼みを断ろうとした。でも、
「頼むよネス。おまえだけが頼りなんだ。な、親友だろ」
いつの間に親友になったんだろう。だけどポーキーは、ぼくがウンというまで、ここに居座るつもりらしい。しかたない。お隣のよしみで引き受けるとするかな……。

⬇17へ

26

ドラッグストアで殺虫スプレー、ハンバーガーショップでハンバーガーを買った。さあ、これで準備は整った。ジャイアントステップにレッツゴーだ！

◆**『殺虫スプレー』と『ハンバーガー』を入手した。アイテムリストにチェックして**

……**329へ**

27

グミ族の村を出て、西へ向かって歩いていると、ふいに右側の脇道から、一人のグミさんが出てきた。頭にリボンをつけているところを見ると、たぶん女の子なんだろう。
グミさんは、初対面のぼくらに向かって、明るい笑顔を見せる。

「こんにちは。今ね、私、溶岩し～んを取ってきたのよ」
「溶岩し～ん？　なんです、それ？」
「やあね、溶岩し～んは、溶岩し～んよ。あ、私、急がなくっちゃ。じゃあね！」
●脇道に入る……………368へ　●ファイアースプリングスへ……311へ

28

さて、十字路を今度はどっちへ行ってみようか？
●東の通路へ進む……………576へ　●西の通路へ進む……………495へ
●南の通路へ進む……………399へ　●北の通路へ進む……………351へ

29

巨大(きょだい)モグラの一撃(いちげき)にポーラがふっとばされた。ぼくはあわててポーラを助けおこした。
「大丈夫(だいじょうぶ)、全然効(き)いてないわ。きっとリボンのおかげね……」
●現在のＨＰが９以上……………341へ　●８以下……………………53へ

30

ウィンターズの寄宿舎(きしゅくしゃ)の前に着いたぼくたちは、大急ぎでストーンヘンジへ向かった。そ

して、迷路のような通路を進み、博士たちが捕らわれている部屋へ。ぼくらは、ますます苦しそうな博士たちに励ましの言葉をかけると、DXスターマンのいた部屋へと急いだ。
「フフフ……また来たのか。こりないヤツらめ！」
不敵に笑うDXスターマンに向かって、ぼくはガッツのバットの一撃を繰り出した。
「さっきはよくもやってくれたな！　くらえ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」

➡189へ

31

ぼくらは、素敵なフライパンと血清、そしてダブルバーガーを買うことに決めた。
「ええと、これで残り100ドルよ。どうする？」
ポーラがぼくらの顔を見回す。するとジェフが、冷静に口を開いた。
「さっき、ホテルの料金を調べておいたんだ。4人で100ドルだそうだよ。休憩をとりたいなら、残しておいたほうがいいと思うけど？
◆『素敵なフライパン』と『血清』と『ダブルバーガー』を入手した。アイテムリストにチェックして

●100ドルはホテル代にする　…642へ　●買い物に使ってしまう　……………319へ

32

ぼくは、おもいきってPK必殺をかけた。が、敵もさるもの、ぼくの攻撃にしっかり耐えて、逆に強烈なバット攻撃を繰り出してきた。（HPマイナス5）
バットの直撃を受け、思わず気を失いそうになるが、頭を振って気力をふりしぼる。
「見てろ！　パラライシス――――っ！」ぼくは、敵をしびれさせるPSIを放った。

◆バトル対戦表で戦います。ネスはB、相手はE。相手よりも数値が……

●上……………………195へ　●下……………………326へ

33

ぼくたちはおもいきってライヤーさんの家に入った。幸いライヤーさんはまだ起きていた。
「やあ、ネスかい。小さい子ども？　ああ、見た見た。たしか上の方に行ったはずだよ。だけど、オレは忙しくて、それ以上のことは見ていないんだ。じゃあ！」
とにかく、ピッキーが丘の上へ行ったのは間違いないらしい。

⬇201へ

34

ボクはさっそくモンキーに「タッシーを呼んでくれ」と頼んだ。すると、モンキーはニコニコ笑いながら、右手を出した。ん？　これ、何かくれと言ってるんだろうか？　ボクが持

っているものといえば……。「そうか、ガムがほしいんだね」
ボクがガムをあげると、モンキーはそれをクチャクチャかみ、プーと風船をふくらました。
風船がどんどん大きくなると、それにあわせて、モンキーの体が宙に浮き上がった。
10メートルも浮き上がったところで、モンキーが両腕を大きく回すと！　突然、湖にさざなみが立ち、ヌッと大きな頭が出現した。タス湖の恐竜、タッシーだ！

➡286へ

35

「なかなかやるじゃねえか。気に入ったぜ」
ダメージから回復したトンチキさんが、立ち上がりながら言った。
「屋根から飛び降りたとき、足をひねっちまったんだが、そんなことを言い訳にするつもりはねえ。おまえの聞きたいことを教えてやろう。ポーラって女の子のことだろう?」
ぼくは、ビックリしてうなずいた。
「ポーラは、グレートフルデッドって谷にある秘密の小屋に監禁されている。デブのガキと青い服を着たやつらがさらっていったのさ。たしか、なんとか教のいけにえにするとか言ってたな。まったくいやな話だぜ。おまえ、ポーラを救いに行くのか?」
「もちろんです!」
「そうか。おまえならできるかもな。よし、これから何かと金も必要だろう。これを持って

け。そのかわり、ポーラを救い出したら、もう一度ここに寄るんだぞ。わかったな」
トンチキさんは、ぼくにお金の入った袋を握らせると、さっさと家の中に入ってしまった。
確かめてみると、中には100ドル入っていた。もらっていいものかどうか、迷ったが、結局は受け取っておくことにした。

⬇51へ

36

「よおしっ！　くらえ〰〰〰〰〰〰〰っ!!」ぼくは、勢いよくマジカントバットを叩きつけた。
次いでポーラが、素敵なフライパンを振りまわす。
「次はボクだ！」叫びざま、ジェフが武器をかまえた。
◆Dにチェックして
●スーパーバズーカがあれば……178へ　●なければ……………………369へ

37

いつの間にか、ぼくたちはランマの洞窟の中にいた……。

⬇563へ

38

ジェフの手に握られた虹色ビームが、ギーグめがけて発射された。

7色に輝く光線が、ギーグに襲いかかる。そのとき――。
「ギーグ！　何をしてるんだ!!　攻撃だ！」
ポーキーの甲高い声が聞こえた。そのとたん、ぼくの体に衝撃が走る。しかしそれは、今までのギーグの力にくらべると、ずっと弱く感じられた（HPマイナス4）

●Rにチェックがあれば　……348へ　●なければ　……118へ

39

プーのテレポートでトトの港町へもどったぼくらを、船乗りさんが迎えてくれた。
「やあ、待たせたなあ。風邪も治ったし、さあ、船に乗んな。スカラビに向かって出航だ！」
ついにスカラビに行けるんだ。そしてそこにあるピラミッドがぼくらを待っている！
「ヨーソロー！」船乗りさんの威勢のいいかけ声とともに、船はまっ青な海をすべりだした。
ところが。「う、うげげ……すまねえ久しぶりの航海なもんで……うう……」
なんと、船乗りさんが船酔いだ。船を停泊させて、介抱していると、急に前方の海が荒れだした。そして、激しい波しぶきの中、巨大な海竜が現れた！　こいつがクラーケンか!!

●PKサンダーで先制攻撃！　……366へ　●シールドαを張る！　……174へ

40

「あんたら、ウチは18才未満はお断り！　それにここは従業員以外立入禁止だよ！」
酒蔵に忍びこんだぼくらは、店のママさんに見つかり蹴り出されてしまった。
くうう、いいキックしてる。おしりがズキズキするよ……（HPマイナス5）。
こうなりゃママさんが酒蔵からもどる前に、カウンターの中を調べよう。

➡4へ

41

ブンブーンは、いきなりスターマンの息子に体当り。思わずよろけるスターマンの息子。
しかし、スターマンの息子も火炎の攻撃で逆襲！　炎がぼくたちに襲いかかってきた。
あまりの熱さに、ぼくたちはその場で思わずとびあがった（HPマイナス2）。
「すまん、すまん、先にサイコシールドを施しておくべきじゃった」
ブンブーンはそう言うと、サイコシールドを試みた。その瞬間、ぼくらは光のシールドに包まれた。こうなればしめたもの。サイコシールドはPSIパワーによる攻撃をガードする力がある！　サイコシールドに守られたぼくは、すかさずスターマンの息子に体当り！　グラリと揺れるスターマンの息子。それに続いてピッキーもやつの足を蹴り上げる。さらに続いて、ポーキーも、と思いきや、ポーキーは何故か離れたところで、愛想笑いを浮かべてる。
そりゃないよ、ポーキー。とにかくPSIパワーによる攻撃を封じこまれたスターマンの息

子は、意外なぐらいもろかった。ぼくたちの連続攻撃にたじたじとなり、あっという間にダウンしてしまったのだった。

⬇331へ

42

洞窟に入る。中はゆるやかなのぼり坂になっているようで、さらに進んで行く。

すると突然、目の前にネズミが立ちはだかった。ぐれたネズミだ！

◆バトル対戦表で戦います。ネスはA、相手はC。相手よりも数値が……

●上……………394へ　●下……………58へ

43

「よおしっ！　くらえ〜〜〜〜〜〜〜っ!!」ぼくは、勢いよくマジカントバットを叩きつけた。

次いでポーラが、楽しいフライパンをおもいきり振りまわす。

「次はボクだ！」ジェフが武器をかまえた。

●スーパーバズーカがあれば……178へ　●なければ……………369へ

44

怪力ベアの鋭い爪が襲いかかってきた。ぼくはこれを間一髪でかわした……つもりだった

けど、足がすべって、もろにくらってしまう（HPマイナス3）。
3メートルもふっとばされただろうか。倒れたぼくめがけて、敵が迫りくる！　まずいぞ！
そのとき、ポーラが後ろから怪力ベアの頭にフライパンでバキッ！
「ネス、今よ！　立ち上がって!!」
立ち上がったぼくは、名誉挽回とばかりに、バットで怪力ベアの横つらをバキン！　続いて、ポーラがフライパンでゴツン!!　怪力ベアはたまらずダウンした。
「さあ、先を急ごう!!」
◆Aをチェックして……………………………………60へ

45

まず、いいバットを買った。これで一気に攻撃力アップだ。
◆『いいバット』を入手した。アイテムリストにチェックする。Mもしくはツにチェックは
●Mにチェックがあれば……197へ　●ツにチェックがあれば……245へ

46

ぼくたちは急いでポーラをサターンバレーの病院に連れていった。どせいさんのお医者にみせたところ、幸いにも彼女の意識はすぐにもどった。
➡248へ

47

ぼくたちは紙に書かれた住所を頼りにストイッククラブへ向かった。しかし……。
「恐れ入りますが、アポイントメントのない方のご来店はお断りしております」
と、門前払いをくってしまった。しかたない、電話でアポを入れよう。

⬇22へ

48

ドゴン、ドゴン、ドゴン、ドゴン、ドゴ〰〰〰ン！
ジェフが、ペンシルロケット5を発射させた。5発のペンシルロケットが、ゲップーの全身に叩きこまれる。しかし、ゲップーは、それでも倒れてくれなかった。ヨタヨタしながらも気力をふりしぼり、ぼくの体をはがいじめにしようと試みる。かろうじてしめつけ攻撃からは逃れたが、ぼくらは全身に臭い液を浴び、呼吸もままならない（HPマイナス3）。
◆アイテムリストから『ペンシルロケット5』を消して……………………338へ

49

ブンブーンと名のる虫は、あっけにとられているぼくたちをしりめに、しゃべり続けた。
「実は、わしのいた世界は今やさんたんたるありさま……なのじゃ。ギーグという銀河宇宙最大の破壊者が何もかもを地獄の暗闇に叩きこんでしまったのじゃ。しかしじゃ……。わし

のいる未来には、ひとつの言い伝えがあってな。『少年がそこにたどりつくなら、正しきものは光を見つける。時の流れは悪夢の大岩を砕き、光の道ができる』というのがそれだ。そして、その少年が、ネス、あんたなのじゃ！」

え、ぼくなの？　いきなりのご指名に、ぼくの頭はますます混乱した。

「ネスよ、ギーグの悪の計画は、もうすでに地球の一部に及んでいるはずだ。しかし今すぐ戦いを始めれば間に合うはずじゃ！　大切なのは、知恵と勇気とそして仲間たち。言い伝えでは3人の少年と1人の少女がギーグを倒すという。ネス、世界のために戦ってくれるな!?」

「え、いきなりそんなこと言われても……」

「選択する余地はないのだ。あんたがやらねば、世界はギーグによって地獄に変わってしまうのじゃ。立ち上がってくれネス！　未来のために!!」

突然のことで、なんだかよくわからなかった。だが、ぼくの心の中の何かが『地球のために戦え』と叫んでいた。

「わかりました。未来のために戦いましょう！」ブンブーンの熱意にうたれたぼくは、こうして世界の敵ギーグと戦うことを約束したのだった。

➡249へ

50

と、突然、ポーラが倒れた。日射病でまいってたところに、この空気の悪さだ。ぼくらは、

倒れたポーラを守るように輪になって、スネーク絵文字と対決した。
ポーラのPSIが使えず、かなり苦戦を強いられたが、それでもぼくらは、どうにかスネーク絵文字を倒すことができた（HPマイナス6）。でも、ポーラは……。
ポーラは、苦しそうに、荒い呼吸を続けている。こんな調子じゃ、この先ついてくるのは無理だ。かと言って、ここに残すわけにもいかない。
「ひとまず、どこか涼しいところ……そうだ、ウィンターズへ行こう！」
ぼくらはポーラを連れてピラミッドの外へ出ると、テレポートでウィンターズへ向かった。
ウィンターズの寄宿舎では、ジェフの友だちのトニーが、ポーラを親切に看病してくれた。おかげで、ポーラの容態はあっという間によくなり、元気に回復。
「それじゃトニー、ありがとう。ぼくらは、もう行くよ」
トニーに心からのお礼を言い、再び暑いスカラビにもどったぼくらは、急ぎ足でピラミッドへと向かう。そして、あいかわらずカビ臭い通路を、まっすぐに進んでいった。

⬇139へ

51

グレートフルデッドに行く前に、もう少し、ヌスット広場の露店を見ていくことにした。

●旅のお守りがあれば……………75へ　●なければ……………………………99へ

52

ジェフは、何かつぶやくと、スフィンクス前のタイルの上を、ポンポンと渡りはじめた。
「そこに、数字が書いてあるだろう、ネス。その数字の順番に、タイルの上を渡るんだよ。紙にはない1と6は、最初と最後に乗るいちばん奥のタイルだ。これが、謎の答えだ！」
ぼくは、改めてヒエログリフの写しに1と6を加え、タイルを見くらべてみた。どちらも、5つの点として考えられる。そして、点を数字順につないでみると、星の形になる！
「よし、これで最後、と！」
ジェフがスフィンクスの真正面にあるタイルの上にポンと乗った。すると！

⬇555へ

53

さらに巨大モグラが襲いかかってきた。ぼくに向けて鋭いパンチを放ってくる。
パンチをかわそうとしたとたん、ぼくの足が思わずぐらついた。まずいぞ……。
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはA、相手はE。相手よりも数値が……

●上……………………341へ　●下……………………285へ

54

ぼくたちは、勇気と力をふりしぼり、クラーケンに挑んだ！

ジェフがレーザービームで敵の気をひき、ポーラがシェフのフライパンでスマーッシュ！怒ったクラーケンは炎を吐いてきたが、プーがジャンプ一番、敵の額に飛び乗ると、空手チョップ！　のたうつヤツの体を、ぼくはゴージャスなバットでめったうち！
激しい死闘の末、クラーケンは海に沈み、２度と再び浮かんではこなかった。
「すごい、すごいよおまえさんたち！　あのクラーケンをやっつけちまうなんて!!　オレもスリッパをぶつけて戦いに参加していたんだけど……気付かなかったよね、ね！」
船乗りさんの言葉に、ぼくらはそろってＶサイン！　さあ、スカラビに向けてヨーソロー！
◆レベルが６にアップしました。レベル６対応のＨＰチェック表に切り替えて …３３３へ

５５

王家の石像は、ピラミッドに入りこんだ不埒な侵入者を倒すために置かれたものだと、ジェフが戦いながら説明してくれた。つまり敵はそれぐらい強いヤツなわけで、当然ながら、ぼくらは大苦戦！（ＨＰマイナス６）
「こ、このままじゃ埒があかないわ。みんな、下がって！」
言うが早いか、ポーラがＰＫファイアーを唱えた。すぐさまぼくが、とどめのＰＫ必殺をおみまい！　強烈なＰＫ攻撃の前に、敵はついに崩れ去り、本来の動かない石像にもどった。
◆Ｃにチェックして……３００へ

56

そういや、以前そんな話を聞いたっけ。うーん、今になって何か心にひっかかるなあ。
そこでぼくたちはスカラビ博物館を出ると、すぐさまフォーサイドの博物館へテレポート！
「おや、君たちは以前も来たことがある……。そうか、そんなに私が見つけたとんでもない物が見たいのか。その熱意、私がヴィーナスちゃんによせる気持ちにどこか似てるなあ」
例の不気味な学芸員さんが、ぼくらを見かけると声をかけてきた。
ヴィーナスちゃん……ああ、トポロ劇場に出ているアイドルのことか。

●サイン入りバナナがあれば……327へ　●なければ……………………547へ

57

ぼくはそのまま家に帰り、朝を待ってママに旅立たねばならないことを告げた。
「ママはすべてわかってるつもりよ。あ、それから、パパがネスの銀行口座に30ドル振り込んでおいてくれたって。何かあったらキャッシュカードで引き出すようにですって」
ママはそう言うと、ニッコリ笑ってぼくを送りだしてくれた。ぼくは、妹のトレーシーと犬のチビに別れを告げて、家をあとにした。

➡65へ

58

ぐれたネズミがかみついてきたが、うまく避けた。そのおかえしに、やつの頭をバットで
ゴツン！　やったね、命中！
けど、これで油断したのが大失敗。今度はやつのかみつきをまともにくらってしまった。
ぼくはもうフラフラ（ＨＰマイナス５）。けど、なんとか気を取り直して、ＰＫ必殺を！
この一撃がとどめとなったらしく、ぐれたネズミは目をぐるぐる回してダウン。
ふう……。できるなら、大切なＰＳＩパワーを使わずに倒したかったんだけどね……。

◆クをチェックして……………………………………**74**へ

59

そのとき、突然受信専用電話のベルがルルルと鳴った。アップルキッドからの電話だった。
『やあネス。ちょうど〝タコ消しマシン〟が完成したところだから、取りに来てよ』
タコ消しマシン！　ぼくが今まさに必要としているものじゃないか！
ぼくは急いでツーソンに引き返すことした。

⬇203へ

60

道を進んでいくと、突然モグラが地面から顔を出した。悪ぶるモグラだ！

◆バトル対戦表で戦います。ネスはC、相手はA。相手よりも数値が……

●上　……………………………………140へ　●下　……………………………………116へ

61

ぼくらは、ずぶずぶの泥沼に足をとられながら進んだ。泥沼は、次第に深さを増していく。

「どうしよう、ネス……わたし、泳げないのよ……」

ついに胸まで泥水につかった瞬間、ポーラが泣きそうな声をあげた。

「大丈夫だよ、これ以上は深くならないと思うよ……」

「いざというときは、ぼくとネスで助けてあげるよ。だから心配しないで」

ジェフと2人でそう励ました瞬間！

「きゃ、がぼっ……」ポーラの頭が、水の中に沈んだ！　そこだけ深い穴が開いていたのだ!!

●輝きのコインがあれば　…………150へ　●なければ　……………………………91へ

62

せっかくのプーのルビーをこんなヤツに渡してたまるか！

「……そうですか。じゃ、やっぱり特別室はお見せできませんな！」

しかたなく特別室をあきらめ、一般展示室に。すると、白衣を着た研究員らしき男が。

「いかがですか、ここの展示品は。フォーサイドの博物館にもひけをとらないと思うんですよ。ただ、あそこの学芸員がとんでもないものを発見したとかって噂が気にはなるんですけどね。とんでもないものって、いったい何なんでしょうねえ」

⬇56へ

63

「じゃあ、気をつけて。これはせめてもの償いだ。ぜひ持って行ってくれたまえ」

モノトリーさんは、プラチナの腕輪をくれた。これでぼくの防御力がアップした。

◆**『プラチナの腕輪』を入手した。アイテムリストにチェックして**　……………654へ

64

ヤツはサイコシールドに包まれていると、アンドーナッツ博士が言っていた。

ぼくは、PSIの使用を控え、ガッツのバットでDXスターマンに躍りかかった。そして、ポーラに向かって叫ぶ。「ポーラ！　ぼくにもサイコシールドを！」

次の瞬間、目に見えない温かい膜のようなものに、ぼくの体は包まれた。ポーラが、サイコシールドをかけたのだ。

⬇189へ

65

オネットの街は、人通りがまばらだった。不良の集まりシャーク団の悪さがあまりにひどいんで、みんな出歩かないようにしてるみたい。ぼくも気を付けて歩こう……。

●市役所へ……161へ　●図書館へ……233へ
●病院へ……105へ

66

「よしきた、行くぞ〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」
ジェフが、レーザービームを発射させた。ビームは、敵の眉間を直撃！　が、さすがは石像の元締め、この攻撃に耐え、強烈なパンチを繰り出してきた。
石像の怒りのパンチが狙うのは、プーの無防備な後頭部！

●Cにチェックがあれば……391へ　●なければ……619へ

67

「よおしっ！　くらえ〜〜〜っ!!」ぼくは、勢いよくガッツのバットを叩きつけた。
次いでポーラが、元気よく楽しいフライパンを振りまわす。
「次はボクだ！」叫びざま、ジェフが武器をかまえた。

◆Dにチェックして
●スーパーバズーカがあれば……178へ　●なければ……………………369へ

68

「ジェフ、そこでじっとしてるんだ！」
日射病にかかったジェフを守るように、ぼくとポーラがマル・デ・タコと向き合った。
ビビ―――ッ！　敵の口から白い光が発射され、ぼくの太ももを直撃！（HPマイナス8）
「ネス、大丈夫!?」心配そうな声をあげつつ、ポーラがPKフリーズを放つ。
敵は、カチカチの氷づけにされて、そのまま動かなくなった。

⬇515へ

69

ぼくはネスだよ。でも、どうしてこんなとこに来たのかわかんないや。

⬇1へ

70

「こんにちは。私はポーラっていいます。こちらオネットからやってきたネスと、ウィンターズのジェフです。マジックケーキの名人ていうのは、奥様ですよね？」
「そうですけど……あなたたち私のケーキが食べたくてわざわざそんな遠くから？」

奥さんの心がグラリと揺れたようだ。ポーラがさらに話を続けると——。
「うれしいわ！　私のケーキをそんな遠くから……。やっぱり私にはマジックケーキ作りが合ってるのよね。……本当のことというと、このクラブじゃ背伸びして疲れてたところだったの！　ねえ、ビーチで待っててちょうだい。すぐにケーキを焼いて行くから！」
奥さんは、スキップしながら店を出ていった。ぼくらは言われたとおりにビーチへ。
よかった。これで船乗りさんは元気になってスカラビ行きの船を出してくれるだろう。
「おまたせー！　さあ、自慢のマジックケーキよ、召し上がれ！」
小1時間もすると、奥さんは屋台をひいて現れた。マジックケーキは、色とりどりのクリームやドライフルーツで飾られていてとてもきれいだった。
いただきまーす！　と、口に入れた瞬間！　あたりの景色がグンニャリと歪み、世の中はみんなピンク、ピンク！　……次第にぼくは、夢の世界へと落ちていく……。

➡182へ

71

ふと、ぼくは意識を取りもどした。痛む頭を上げてまわりを見回すと、ロボットの姿のままの仲間たちが、死んだように倒れている。「ダメだったのか……みんな……」
そういうぼくにも、もう立ち上がる力は残されていなかった。
「いいよね。これで地球は救われたんだ。ぼくらは精一杯頑張ったんだから……」

そのとき、頭の中に、不思議な優しい響きを持つ声が聞こえてきた。
「ネス……ネス……聞こえますか?」
その声は、ママの声のようにまろやかな響きを持って、ぼくに話しかけてくる。
「私は……空、大地、海……そう、あなたがたの母なる地球です。優しく頼もしい私の息子たちよ。私を救ってくれてありがとう……。私にできるのはこれくらいですが、どうぞ、受け取ってください。私は、いつまでもあなたたちを見守っていますよ……」
その声を聞きながら、ぼくは再び深い眠りについた。

➡672へ

72

「あれ? もう行くところがないじゃん……」
呆然として、あたりを見回したとき、ぼくのリュックから3つのペンダントが飛び出した。
そして、天高く舞い上がると、3つ重なってまばゆい光を放ちはじめる
驚いて空をながめていると、なんと、四つ角の中心から北に向かい、大きな橋が架かった。
やがて、3つのペンダントが、ぼくの手の中にもどってくる。ぼくは、新しく架かった橋を、ゆっくりと渡りはじめた。橋を渡りきると、目の前に大きな海が広がった。エデンの海だ。
驚いたことに、エデンの海のまん中には、何度も見たことのある、あの黄金像が!
「ネス、よくきたな……」

黄金像が突然しゃべりはじめた。そして、みるみるうちに形を変え、ぼくそっくりの姿に。
「ぼくは、ネスの悪魔。ネス、おまえの心の中にある邪悪が、ぼくなんだよ」
「嘘だ！　ぼくの心には、邪悪なんてない！」
思わず叫ぶぼくに、ネスの悪魔はニヤリと笑う。
「誰の心の中にも邪悪は潜んでいるんだよ、ネス。キミは、邪悪に打ち勝てるかな？」
いつの間にか、ぼくと、ネスの悪魔は、向かい合ってエデンの海のまん中に浮かんでいた。
敵の全身に、殺気がみなぎる！

●PK必殺をかける　……………32へ　●シールドをかける　……………175へ

73

市長にお願いして、小屋の封鎖を解いてもらうために、市役所へと向かった。
ところがその途中、サングラスをかけた男と目が合い、インネンをつけられてしまった。
お調子者キッドと名のるそいつは、フラフープを挑戦的に回しながら近づいてくる！

●迎えうつ　……………177へ　●逃げる　……………257へ

74

洞窟を抜けると、また峡谷に出た。もうずいぶん標高が上がってきてるみたいだった。こ

の分だと、ジャイアントステップももう間近だ。さらに進んでいくと、切り立った崖に阻まれて行き止まり。見れば、正面と右手に洞窟が二つ。正面と右と、どっちに入る？

●正面へ……………………106へ　●右……………………378へ

75

露店を見てまわっている途中、突然きれいな女の人に呼び止められた。

「あんた、さっきトンチキさんと話してた子だね。ポーラを助けに行くんだったら、この街の発明家のオレンジキッドとアップルキッドの助けを借りるといいよ。きっといい発明品をあんたに持たせてくれるよ。わたしは、グレートフルデッドのやつらが大きらいだから、なんとしてもあいつらの鼻をあかしてほしいのさ」

なるほど、発明家と知り合いになっておけば、あとあとも助かるに違いない。ぼくは、女の人にお礼を言うと、２人の発明家の家に向かった。

⬇347へ

76

ピカピカピカドシャ――――ン！

いきなり雷がぼくを直撃した。黒コゲになったぼくは、虫の息で床に転がった。

「ほっほっほっ。神に逆らうおろか者め。外に捨ててまいれ」

薄れゆく意識の中で、カーペインターが教徒に命令を下すのを聞いた。意識があったのは、そこまで。気が付くと、ぼくは病院のベッドで寝ていた。
「きみがうちのドアを叩いたときには驚いたよ。何しろ、半分黒コゲ状態だったからね」
お医者さんが事情を説明してくれた。どうやらぼくは、半分失神状態のまま、本能的に病院のドアを叩いたらしい。けど、よく見たら、このお医者さんも青ずくめの格好している。だとすれば長居は無用。ぼくは50ドルの治療代を支払うと、急いで病院をあとにした。
それにしても、カーペインターが雷を操るとは……。このままじゃ、とても勝ち目はない……。すっかり弱気の虫にとりつかれたぼくは、1度家に電話をしてみることにした。家族の声を聞いたら、元気が出るような気がしたからだ。村の公衆電話をみつけたぼくはさっそく番号をプッシュした。電話に出たのはママだった。
『あらネス。パパから電話があってね、口座に50ドル振り込んでくれたそうよ。なんだか元気がないわね。どんなにつらい目にあっても男の子はへこたれちゃダメ。頑張るのよ！』
たったこれだけの会話だったけど、なんだかとっても元気が出た。さあ、カーペインターなんかに負けずに頑張るぞ――！

◆HPを現在のレベルの最大値まで回復させて
●もう一度教団に乗りこむ　………**172**へ　●村をもう少し探ってみる　………**94**へ

77

巨大モグラの一撃にポーラがふっとばされた。ポーラは地面に叩きつけられて、苦しげな声を（HPマイナス2）。そこへ襲いかかる巨大モグラ！　もう、ポーラには余力がない！
ぼくはありったけの力をこめ、敵に向けてバットを振りおろした。
バキッ！　バットは見事に命中。この一撃で巨大モグラは、あえなくダウンした。
「ネス、きっといいバットを買っておいたおかげね……」
「ほんと、あぶないところだったね」
ぼくはそう言うと、立ち上がろうとしているポーラに手を差し出した。

➡301へ

78

ぼくらは揃って首を横に振った。すると、溶岩の顔は、ふと眉を寄せる。
「ないのか～？　それなら、1度山を降りて、グミ族の集落に行く途中の脇道へ行くといい」
しかたなくぼくらはいったん山を降り、さっき女の子のグミがやってきた脇道へと急いだ。

◆Gにチェックをして……………………………………368へ

79

ぼくはとっさにどせいさんにもらったはえみつを取り出した。するとぐちゃぐちゃは、

「ゲップーさまがお待ちかねだ。すぐに持っていけ」と、通してくれた。

⬇400へ

80

ぼくらは、ジェフの攻撃力と防御力を上げるためにエアガンとホームズキャップを買った。あと、残金で買えるのは、ペンシルロケットかバズーカ砲のどっちかだ。

◆『エアガン』と『ホームズキャップ』を入手した。アイテムリストにチェックする。『ペンシルロケット』か『バズーカ砲』、いずれかひとつ買うことができます。選んだ方をアイテムリストにチェックして

……………………………232へ

81

お調子者キッドがすばやく回したフラフープが、ぼくの顔を直撃！（HPマイナス2）

痛みをこらえながら、反撃のパンチをおみまいすると、あらら、ヤツはそのまま、バタンと倒れちゃった。意外と、弱っちかったんだね、お調子者キッドって……。

⬇169へ

82

その時ぼくは、オネットで見た黄金像のことを思い出した。

「黄金の宝物？　それって、ライヤーさんが掘り当てた黄金像のことかな？」

「なに、ライヤー？　ライヤーってのは、トレジャーハンターのライヤーのことか？　そうか、あの小悪党のライヤーがな……。ありがとうネス、よく教えてくれた。こいつは持っていきな。中に1万ドル入っている」
トンチキさんはそう言うと、ポーラにアタッシュケースを手渡した。
➡298へ

83

ぼさぼさ頭でちょっと太めの少年アップルキッドは、ドーナツをもぐもぐ食べながらぼくの話を聞き、ぼうっとした顔で答えた。
「なるほどそうかぁ。なら、ボクに開発援助金を50ドルちょうだい。そうすれば、明日までにタコ消しマシンを作ってあげるよ」
なんだか頼りなさそうな少年だけど、この際しかたない。ぼくはアップルキッドにお金を渡した。するとキッドは、受信専用の携帯電話をくれた。「できあがったら、連絡するよ」
◆『受信専用電話』を入手した。アイテムリストにチェックして**……………155へ**

84

まずリボンを買った。リボンをポーラの頭につけてあげる。
うん、なかなかよく似合う。

◆『リボン』を入手した。アイテムリストにチェックする。Mもしくはツにチェックは？
●Mにチェックがあれば　……………197へ　●ツにチェックがあれば　……………245へ

85

店に入ったぼくたちだが、辞書を買ってしまったので、お金がほとんどないことに気が付いた。それで、店から出ようとしたところ……。
「おかねない、きもちさむかろぷー。これ、持ってく。げぷのこうぶつ〟はえみつ〟」
無理矢理どせいさんに〟はえみつ〟とやらをもたされてしまった。なんだか変な臭いがしたけど、返すわけにもいかないので、しかたなく持ち物に加えた。
◆『はえみつ』を入手した。アイテムリストにチェックして　……………………310へ

86

ジェフはレーザーをいなずま・あらしに向かってかまえたが、突進してきたヤツに弾き飛ばされてしまった！（HPマイナス3）
「待ちなさい、いなずま・あらしさん、今度は私の番よ！」ポーラが躍りでた。⬇588へ

87

気付くと、目の前にママの顔があった。
ここは……？　あわてて起き上がったぼくの目に、マジカントの不思議な風景が映った。
「そうだった、ぼくは、ネスの悪魔に倒されて……」
つぶやくぼくに、ママが優しく言う。「ネス。体はすっかり回復したわ。頑張ってね！」
ぼくは、ママに向かってうなずくと、再びエデンの海目ざして歩き始めた。
ネスの悪魔は、さっきと同じ場所で、ぼくを待ちかまえていた。
「ネス、ぼくに打ち勝つことは、できなかったね。今度もまた、倒されにきたのかい？」
「そうそう負けてばっかりいられないよ！　ぼくは、きっとキミに勝つ！」
◆HPを現在のレベルの最大値まで回復させて……………………175へ

88

案の定、敵は、反撃のサイコシールドをすでに身につけていた。ぼくの繰り出した催眠術は敵のシールドに跳ね返され、いつしか眠気が……。ハッと気付いたとき、ぼくは、頭に鈍い痛みを感じていた。眠っているすきに、電撃バチバチが何かしたのだろう（HPマイナス2）。あわてて頭を振り、周囲を見ると、ポーラが敵にPKフリーズをぶちかましている。ジェフの手に、アンチPSIマシンがあるところを見ると、どうやら敵のサイコシールドを無

力化したらしい。ぼくは、プーの跳び蹴りが炸裂するのを確認して、叫んだ。
「ジェフ！　今だ!!」ぼくの言葉に反応するかのように、ジェフが武器をかまえる。
●虹色ビームがあれば……………625へ　●なければ……………………593へ

89

小屋が封鎖されたのもシャーク団のせいだという。とにかく街はシャーク団のおかげで、混乱状態だった。1度シャーク団の実態を見ておこうと考えたぼくは、やつらのたまり場であるゲームセンターに行ってみた。はじめて入るゲームセンターの中。ちょっともの珍しげにあたりを見回していたぼくは、いきなり数人の不良たちに取り囲まれてしまった。
「なんだよ、おまえ、シャーク団に入りたいのかよ？」
「ううん、ぼくはとくに……」
「入りたくなったらいつでも来いよ。シャーク団に入れば、好き放題できるから最高だぜ」
ふう。どうやら、ふくろだたきにあうのはまぬがれたみたい……。
➡185へ

90

ジャイアントステップをあとにしたぼくは、そのままオネットの街にもどり、わが家に帰った。あたりはもうすっかり暗くなっていた。家でゆっくり休んでいい時間だ。

「まあ、ネスちゃん、お帰り。冒険はどうだった？」
帰ったとたん、ママはぼくに夕食を出してくれた。ママのおいしい料理に舌つづみをうったぼくは、今日の話もそこそこにきりあげて、早めにベッドに入った。と——。
（ネス、ネス、まだ会ったことのない、わたしの友だち……。聞こえますか？　わたしの名はポーラ……。ツーソンのポーラスター幼稚園のポーラ。ネス、ネス、早く来て）
ぼくは夢の中で、確かにポーラという女の子の呼びかけを聞いたんだ。

↓274へ

91

ぼくとジェフが同時にポーラのほうへ近づくと、ポーラは、死に物狂いでぼくらの体や腕にしがみついてきた。「ネ、ネス……ジェフ……た……たすけ……て！　がぼっ……」
「ポ、ポーラ……！　しがみついたら、ボクらまで沈むっ！」
水の中にひきずりこまれそうになったジェフが、あわてて叫ぶ。でも、パニックに陥ったポーラには、まったく聞こえていなかった。ぼくは、急いでポーラのうしろに回り、彼女の脇の下に腕を入れて支える。ようやく自由になったジェフが、ポーラを肩につかまらせ、ぼくらはやっとの思いで深い泥沼を泳ぎきった（HPマイナス6）。

↓279へ

「よし、みんな、逃げるぞ！」ぼくの号令とともに、仲間たちがいっせいに走りだした。背後で、王家の石像の怒号が聞こえる。が、ヤツは追おうとはしなかった。

⬇300へ

92

93

ぼくたちはまずはポーラの家を目ざすことにした。その途中……。
「ねえ、ネス。わたし、戦いの中で、ＰＫファイアーを覚えたみたいなの」
と、ポーラが打ち明けた。ＰＫファイアーは、指先から炎を出すすごい技だ。これで戦力はぐっとアップ。次からの戦いが楽になるぞ。
◆ポーラが『PKファイアー』を習得した。PSIリストにチェックして

……109へ

94

いきなり中に入るのは危険すぎると思い、しばらく村を探ってみると、怪しげな洞窟を発見した。おもいきって入ってみると、なんと、あの山小屋の前に出たじゃないか！
さっそく小屋の中に入ってみると、そこには鉄格子の牢がしつらえてあった。中には、金色の髪と青い目をした女の子が閉じこめれていた。
女の子は、上目づかいにぼくを見た。目には泣きはらしたあとがあった。

「きみ、ポーラ……？」
「まあ、ネス、ネスなのね。わたし、あなたがきっと来てくれるって信じてたの。わたしとあなたが運命をともにすることは、ずっと前からわかってたの」
「うん。少し前にぼくにテレパシーでメッセージを送ってくれたよね。それでぼく、ここにやってきたんだ。それよりも早くこの扉を開けなくっちゃ。カギはどこに？」
「カギは、ハッピーハッピーハッピー教の教祖のカーペインターが持っているわ」
ぼくはすぐにハッピーハッピー教の教団に向かおうとした。
「待って、ネス。カーペインターは、雷を自由に操るの。普通に戦ったんじゃ、勝ち目はないわ。これを持っていって」
ポーラーはそう言うと、鉄格子ごしに、バッジをぼくに手渡した。
「これはフランクリンバッヂ。このバッヂはカーペインターの雷を防ぐ力があるの。けどカーペインターは、雷以外にも何かしかけてくるかもしれないわ。気をつけてね、ネス」
フランクリンバッヂを手にしたぼくは、鉄格子ごしに、ポーラーの手を強く握った。
ところが外に出てみてまたびっくり！　そこにはあのポーキーが!!
「やい、ネス、なんでオレの邪魔をするんだ。カーペインター様に認められて、もう少しで教団の偉い人になれそうなのに。いいか、ネス、カーペインター様はすごい力を持ってるんだ。おまえなんかが逆らったって無駄なんだからな！」

ポーキーは捨てぜりふを残すと、ハッピーハッピー村めがけて、一目散に逃げていった。

◆『フランクリンバッヂ』を入手した。アイテムリストにチェックして ……… **172へ**

95

慎重に話し合ったぼくらは、結局、日射病なんかにかかったときに役だつすっきりハーブと、体力回復には欠かせないハンバーガーを買うことに決めた。

「さて、これで俺たちは文字どおり無一文だ。街でも散策してみるとするか」

プーがクールに提案をする。

◆『すっきりハーブ』と『ハンバーガー』を入手した。アイテムリストにチェックして ……… **280へ**

96

「おお、そうですか！　勉強熱心なかたたちですね、さあどうぞ、特別室へお入り下さい！」

ルビーを渡すと、係員はぼくたちを特別展示室へと通してくれた。そこには大きな石碑があり、よく見ると古代文字が刻まれている。なんて書いてあるんだろうと、思っていると、

「俺、古代文字ならイースーチー老師に習ってるから読めるぞ」

と、言ってから、プーがそれをおもむろに読みだした。

95~96

「天よりの侵略者に、我々は四角錐の要塞を建造し戦いに備えた。しかし、我々は敗れた。だが、我々の要塞はスカラビの神々によって守られた。天から来た侵略者は１０００年ごとに生まれかわり、襲ってくるという。侵略者は時の彼方に隠れ、悪の巣箱を置いた。時の彼方は魔境のはるか先。地の底の向こう。魔境は暗き闇。『タカの目』だけが見る。すべてを守り真の勇者の訪れを待つ。４３２５　スフィンクスの前で踊れ……と、書いてある。ちなみに数字のところは、４と３が上の段に、２と５が下の段に、それぞれ分かれているぞ」

プーの朗読を聞いていたジェフが、頭を上げて言った。

「ネス、今の内容からして、やっぱりピラミッドがカギだ。なんとしてもスカラビへ行こう！」

ぼくたちが、互いにうなずきあっていると、係員が話しかけてきた。

「どうです、偉大な歴史を感じるでしょう！　これはピラミッドで発見されたヒエログリフというんですよ。この間も、ヘリコプターでやってきた富豪の少年が写真を撮って行きました。あんときゃ現金をたっぷりもらったっけ！」

ヘリコプターの富豪の少年……ポーキーだ！　あいつ、またもぼくの先回りを!?

「よかったら、このヒエログリフの写しをさしあげましょう」

ルビーがよほど気に入ったらしく、係員はぼくたちにヒエログリフの写しをくれた。

「まあ、ここの展示品ほど見事な物はそうはないですね。ただ、フォーサイドの博物館で、とんでもない物が発見されたって噂が気にはなるんですけどね」

◆アイテムリストから『小さなルビー』を消す。『ヒエログリフの写し』を入手した。アイテムリストにチェックして……………56へ

97

雷が通じないとみたカーペインターは、ぼくの頭にゲンコツをゴツゴツゴツンと3連発！（HPマイナス5）頭にきたぼくは、PKフラッシュとPK必殺を2連発でおみまい！この2発で、カーペインターはあっけなくのびてしまった。意外にあっけないの……。
◆イをチェックして……………308へ

98

ぼくは、リュックからいのちのうどんを取り出し、プーの口に入れた。
やがてプーが、うっすらと目を開け、頭を振りながら、ムクリと体を起こす。
「プー、急に動いたらだめ。どこか痛いところとか、ない？」
ポーラが厳しい顔でプーを見る。
「い、いや、さしてどこも悪いところはないが……ポーラ、おまえ、怖いぞ……」
「ま、まあっ！　失礼なっ!!　こっちは心配したっていうのにっ！」
「まあまあ、なにはともあれよかったよ」

ジェフが2人の間に割って入り、ぼくらは再び腰を上げた。

◆アイテムリストから『いのちのうどん』を消して……646へ

99

露店で旅のお守りを見つけた。このお守りは、マヒ攻撃を防御する効能を持っている。ぼくは旅のアイテムを買うことに決めた。値段は50ドル。

◆『旅のお守り』を入手した。アイテムリストにチェックして……131へ

100

リリパットステップに行く前に、村のドラッグストアで買物をすることに。何を買おう?

●いいバット……380へ　●リボン……148へ

101

「わ、見て見てこのバット、ネスにいいわねえ。やだ〜、こっちのフライパンも素敵。きゃ〜っ、ペンシルロケット5ですって。ジェフにほしいわ。でも、食べ物とか薬も必要よね」

店に入ったとたん、うきうきと商品を物色するポーラ。

「ねえねえ、どれがいいか迷ってるの。900ドル分で組み合わせを考えてみたから選んで」

ポーラが、何かメモのようなものを持って、ぼくらのところにやってきた。

●素敵なフライパン＋ガッツのバット……………………386へ

●素敵なフライパン＋血清＋ダブルバーガー……………31へ

●ガッツのバット＋ぬれタオル＋ペンシルロケット5……………194へ

102

「ぼくに任せて。こういう時は、ガツンとやって目を覚まさせて上げるのが一番！」

「ちょ、ちょっとネス！　何をするつもり!?」

おもむろにバットを取り出したぼくを、ポーラとジェフがはがいじめ。結局、ポーラが奥さんを説得することに。……いい手だと思ったんだけど、乱暴すぎたかな？　⬇70へ

103

いつの間にか、ぼくらはデパートの前までやってきた。するとどうしたことか、休業中だったはずのデパートは、いつの間にか開店しているじゃないか。

「ここ、モノトリーさんがオーナーになってから何かヘンだよな……」

通りがかりのオジサンが首を捻りながらつぶやいている。その言葉は気になるけれど、まずは買い物。電話でパパからの振り込みを確認したぼくらは、さっそくデパートの中へ。

●エアガンがあれば……160へ　●なければ……80へ

104

「そうだ、これがあったんだ!」プーとジェフが、ダイヤモンドドッグの攻撃を防いでいる間に、ぼくは急いでいのちのうどんを取り出し、ポーラの口に含ませた。とたんに、堅く冷たかったポーラの体が温もりと柔らかさを取りもどす。

「あれ? ネス? わたし、どうしちゃったの?」

「説明は、ダイヤモンドドッグを倒した後だ! ポーラ立てる?」

何が起こったかわからず呆然とするポーラを、ぼくは急かして立ち上がらせた。

◆アイテムリストから『いのちのうどん』を消して……659へ

105

何の用もないんだけど、病院をのぞいてみた。病院には、お医者さんの他に、看護婦さんや特殊な症状を治すヒーラーさんなんかがいた。

病院の中をひと回りしたぼくは、再び外へ。

↓225へ

106

薄暗い洞窟をどんどん進んで行く。すると、目の前にヌメヌメした奇妙なヤツが立ちはだかった。むこうみずなナメクジだ！　ヤツはいきなり襲いかかってきた!!

◆バトル対戦表で戦います。ネスはB、相手はA。相手よりも数値が……

●上……………………………193へ　●下……………………………202へ

107

南へ南へと歩いた結果、大きな湖――タス湖に出た。さらに南に行くには、この湖の向こう岸に行かなければならない。となれば、必要なのは船。あたりを見回したところ、船が1艘見つかった。だけどそれを動かす人がいない。途方に暮れて、湖畔を歩いていると、キャンプをしている人たちと出会った。聞けば、この人たちは、タス湖の恐竜タッシーを見にきているタッシー・ウオッチャーとか。

「船に乗りたい？　タッシーが乗せてくれたら、簡単に渡れるんだけどね。でも、それを頼むことができるのは、タッシーの仲良しのバルーンモンキーだけだけどね」

●Tにチェックがあれば……………34へ　●なければ……………………8へ

108

ぼくが、ＰＫ必殺をかけた瞬間、ジェフが叫んだ。
「ダメだネス！　ヤツにはサイコシールドがかかってるんだ！」
しかし、時すでに遅し！　よりによってＤＸスターマンにかかっていたのは、反撃のサイコシールド。ぼくの繰り出したＰＫ必殺が跳ね返り、ぼく自身を襲う！（ＨＰマイナス３）
「ネス！　大丈夫!?」とっさにポーラが、サイコシールドをかけてくれた。温かい膜のようなものが、ぼくの体を守るように包みこむ。

➡１８９へ

109

ツーソンに着いたぼくたちは、さっそくポーラスター幼稚園に。
「ポーラ、よく無事で。ママたち心配したのよ！」
「ポーラを捜し出してくれてありがとう。お礼の言葉もないよ。そうだ、きみにこの帽子をあげよう。これはミスターの帽子といって、防御力をとっても高くする力を持っているんだ」
大喜びしたポーラのパパが、ぼくに帽子を手渡した。さっそくかぶってみる。
ポーラはこのあと、改めて、パパとママにぼくと旅に出ることを告げた。
「パパ、ママ、わたし、ネスといっしょに世界を救う旅に出るつもりよ。さしあたっては、次の仲間に会うためにスリークへ行くつもり……。わたしの心の中からスリークへ行きなさ

いって声が聞こえてくるの」
「そりゃ、お父さんたちは、おまえの力も知っているし、反対はしないさ。でもね、ポーラ。今はスリークの街に移動したくてもできないのさ。実はスリークの街へ向かう途中のトンネルに幽霊が出てね。どうしてもツーソンに引きもどされてしまうんだ」
「幽霊が邪魔を！　パパ、そこを通る方法は全然ないの？」
「さあな……。もしかすると、トンズラブラザーズなら可能かもしれないね」
トンズラブラザーズというのは、今ツーソンの街の劇場に出演している人気ミュージシャンで、ノリのよさでは天下一品といわれる人たちだ。
「何しろ幽霊の力をうちやぶるほどのノリのよさは、あいつら以外には望めないからな……」
なるほどトンズラブラザーズに頼めば、トンネルを越えられるわけか。なら、話は早い。今すぐにでも、トンズラブラザーズに会いに行こう。

◆**『ミスターの帽子』を入手した。アイテムリストにチェックして****……………397へ**

110

サブマリンには、魔境のデータがインプットされてたようだ。ジェフが、内部のコンピュータに〝魔境〟と入れると、サブマリンはためらいもせずに動きだし、1時間ほどで、どこかの海辺に到着した。ここが、ぼくらの目ざす魔境かどうか、確かめるすべはないけれど、

うっそうと生い茂る密林や、じめじめとした湿地の不気味な様子は、魔境の名にふさわしい。
「ネス、ポーラ……ここは間違いなく魔境だよ。これを見てごらんよ……」
ぼくの不安に答えるように、ジェフが何かを指差した。それは、信じられないけれど、間違いなくキャッシュディスペンサー。前面のプレートに〝魔境支店〟と書かれている。
なんで、こんなものが？　ぼくはためらいながらクレジットカードを差しこんでみた。
キャッシュディスペンサーは、まさしく本物で、ぼくはとりあえず、パパが振り込んでおいてくれた中から８００ドル分を引き出した。
「なんか拍子抜けだけど、ここが魔境ってはっきりしたから、先に進もうか……」
ぼくたちは、妙に白々しい気分で、ジャングルへと足を踏み入れた。

➡61へ

111

ぼくはミスターのバットで、ゲップーの体をおもいっきりひっぱたいた！
ミスターのバットの攻撃力はさすがに高く、ゲップーは身もだえして苦しんでいる。
「今よ！」ポーラは、フライパンでゲップーの頭を叩いた。しかしこれが空振り！
バランスを崩したポーラめがけて、ゲップーが粘液を飛ばした！（ＨＰマイナス３）
まずい、ポーラのリボンが粘液で汚れ、防御力が低下してしまったぞ！

➡303へ

112

困ったオヤジなんか、さっさと倒そうとしたんだけど……どうしたんだろう、ぼく。なんだか力がわいてこない……。ああ、空はどうして青いんだろ……。
「ネス、どうしたんだい!? なに空なんかながめちゃってんだよ！」
ぼくのブルーな心に、ジェフの声がうつろに響く……（ＨＰマイナス２）。

➡200へ

113

お調子者キッドは、フラフープを回しながら攻撃してきた。よけそこなって、フラフープの一撃を顔に受けてしまう！（ＨＰマイナス４）痛みをこらえながら、反撃のパンチをおみまいしようとしたけれど、これが見事に大はずれ！ さらにもう１発フラフープを受けたところで、何とかパンチが命中。このたったの１発で、やつはバタンとのびちゃった。なーんだ、意外と弱っちいの……。

➡169へ

114

巨大モグラに向かって、ポーラがＰＫファイアーを放った。指先から炎が吹き出て、敵を燃やす！ 巨大モグラは炎にまかれて苦しんでいる！

◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはD、相手はB。相手よりも数値が……

●上……………………381へ　●下……………………357へ

115

アップルキッドはあまり頼りにならないように見えた。
「悪いんだけど、また今度ということで」そう断ると、外へ出る。

⬇131へ

116

ぼくは悪ぶるモグラめがけて、バットを振りおろした。ところがこれが空振り……。
モグラはそのすきをついて、ぼくのおなかに頭突き攻撃！（HPマイナス3）
「大丈夫、ネス！」ポーラがあわてて駆け寄ってきた。
「大丈夫、戦いはこれからだ！」
気を取り直して、再びバットで相手を攻撃。今度は見事にヒット！
続いて、ポーラがフライパンでゴツン。この2発で悪ぶるモグラはあえなくダウンした。

●Aにチェックがあれば……356へ　●なければ……………188へ

117

「は、はえみつ？」はじめて聞く言葉に、思わずすっとんきょうな声を上げてしまう。

「こいつら、〝はえみつ〟を持ってきていない。侵入者だ！」
怒り狂ったぐちゃぐちゃ3匹が、いきなり襲いかかってきた!!
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはA、相手はB。相手よりも数値が……
●上……………………206へ　●下……………………223へ

118

ここは、とどめを刺しておきたいところ。ギーグのディフェンスが崩れたとなれば、ここでやるのはあれしかない！「プー、スターストームだ！」
大声で叫んだぼくの声に、すばやくプーが反応する。「任せとけ！　PKスターストーム！」
とたんに、天から無数の星のかけらが降り注いだ。ついに、世界をさんざん震撼させた恐怖の宇宙人ギーグの息絶える瞬間がやってきた！
大勢の人々の願いがこめられた宇宙に輝く星のかけらの痛烈な攻撃を受けたギーグは——。
ドッガ——————ン!!
凄じい爆発音を轟かせた。同時に、ぼくらの視界がまっ白になる。視界の片すみに見えた重装備ポーキーが「今日のところはこれで引き上げてやるが、本当にカッコいいのはどっちかな？　ふふふ、シーユーアゲイン！」と、言ってたところまでは覚えているが——。
ぼくらの意識は、深い深いところへと落ちていった……。
⬇71へ

119

「じゃあ、気を付けて。ワシは何もしてやれないが、これでも持って行ってくれたまえ」
モノトリーさんは、ホームズキャップをくれた。これがまた、ジェフによく似合うんだ！

◆『ホームズキャップ』を入手した。アイテムリストにチェックして……654へ

120

ビビビビビ――――――ッ！
ジェフが、レーザービームを発射させた。白い光が、ゲップーの体を鋭く貫く！
しかし、やつには、手ぬるい攻撃だったようだ。平然とこちらを見ると、そのぐにゃぐにゃした体からは想像もつかないほどすばやい動きで、ぼくの体をはがいじめにしてきた！
ゲップーの強力な締めつけ攻撃と、全身に浴びた臭い液とで、ぼくはもう息も絶え絶え(HPマイナス5)。

⬇338へ

121

黄金像の話を聞いたぼくは、ライヤーさんの家を訪れた。シャーク団が、この黄金像を狙うかもしれないことを教えるためだ。
「なーに、シャーク団が100人来ようと、このツルハシで追い返してやるさ。でもよく教

えてくれたなネス。お礼に、きみだけに黄金像を見せてやろう」
ライヤーさんはそう言うと、ぼくを地下の発掘現場に案内し、黄金像を見せてくれた。黄金像はぼくの2倍はあろうかという大きさで、怪しく光輝いていた。
「ふふ。オレはもっともっと大物を掘り当てるぜ」
ライヤーさんの自信満々な声を聞いたぼくは、安心して市役所へ向かうことにした。

◆Eをチェックして……185へ

122

険しい山道をどんどんのぼって行くと、行き止まりに。見れば、崖の上からロープが1本ぶらさがっている。覚悟を決めてロープをつたってのぼっていく。
なんとか崖の上に到着したところ、少し離れた先の洞窟の中で何かが鋭い光を発しているのが見えた。不思議に思って近づいてみると……。洞窟の中から、でっかいアリが2匹の子分を引き連れて、のっそりと出現した。巨大アリとアリアリブラックだ。
「ここは一番目の〝おまえの場所〟だ。だが今は、わたしの場所だ。奪い返すがよい！」
巨大アリたちが襲いかかってきた。ぼくはまずPK必殺をアリたちに放った。
PK必殺は、1発でアリアリブラック2匹をおとなしくさせ、巨大アリにも確かなダメージを与えた。よし、先制攻撃は成功だ！

●Hにチェックがあれば……………154へ　●なければ……………………218へ

123

なんと、ダンジョン男の体の中には、病院まで入っていた。さっそくジェフを中に入れ、日射病の治療をしてもらう。やがて外に出てきたジェフは、すっかり元気に回復していた。「治療代？　そんなのいらないでやんすよ」治療費はいつかきっと返すから、というぼくらに向かい、ダンジョン男はプルプルと首を振って辞退した。

⬇229へ

124

ザパパーーーーン！　クラーケンのたてた波に飲みこまれ、船は転覆してしまった！
「みんな、大丈夫か！　近くに浮いているものに、しがみつくんだ!!」
そう叫びながらも、何度も海水を飲み、波に揉まれぼくは気を失った……。
しかし、天に召されようとしていたぼくの耳に天の声が響いてきた。
『ネスと仲間たち……ここであなたたちが冒険を終えては、地球の未来はありません。私はあなたたちに力を与え、時間を少しだけもどしましょう……ランマの洞窟からやり直すか、それともう一度クラーケンと戦うか、自分で選びなさい……』
◆ここでバトル対戦表を書き替えてOK。HPをレベル5の最大値まで回復させて

●ランマの洞窟からやり直す……37へ　●クラーケンと再バトル……15へ

125

ポーラのパパに相談してみた。
「1万ドル？　うーん、今、幼稚園の景気もあまりよくなくてなあ……」
やっぱりいい返事はもらえなかった。無理もないけどね……。

⬇141へ

126

村の様子はいつもと変わらず、のどかなものだった。歩くうち、俺は村はずれの洞窟の前へと来ていた。その前には、大きな黒いうさぎが穴を塞ぐようにして座っている。
へえ、こんなところあったっけ？　俺は洞窟の中に入ってみようとした。が、うさぎはピクとも動かない。気にはなるが、今はひとまずあきらめて、修行の場、『無の場所』へ行こう！

◆セにチェックして……167へ

127

「ビンゴ！」中央のロープをのぼりきったぼくたちは、口をそろえて叫んだ。
正面の壁に埋めこまれるように、ブリックロードさんの顔があったのだ。

「よく、ここまで来たでやんす。ここを左に行くと、サブマリンがあるでやんすよ。サブマリンを手に入れたら、その先のさらば穴ってところに行ってくれやすか？」

⬇228へ

128

だが、ぼくにはうらカンポーがあった。ポーラに飲ませると、すぐに意識を取りもどす。
「よくもあんな臭いゲップをかがせてくれたわね――！」
怒りに燃えたポーラは、ゲップーに向けてPKファイアーを放った。指先から出現した炎が、ゲップーを巻きこむ！　続いてぼくは、バットをおもいっきり振りおろした。これがスマッシュ・ヒットとなり、ゲップーは悲鳴を上げながら、どこかへと逃げ去った。
ふう。苦戦はしたけど（HPマイナス7）、なんとか勝つことができた。やれやれ……。
なお、この戦いの中で、ぼくは催眠術を、ポーラはPKフリーズを覚えた。
戦いに勝ったぼくたちは、基地の中のどせいさんを解放して、いっしょにサターンバレーにもどることにした。
◆ネスが『催眠術』を、ポーラが『PKフリーズ』を習得した。PSIリストにチェックする。スにチェックして

……………………248へ

129

フランクさんがすばやい動きでナイフを繰り出してきた！　ナイフはヘビのようにうねうねと動き、ぼくの左腕を切り裂く!!（ＨＰマイナス２）

⬇345へ

130

「とにかく、いったんスカラビの街にもどるしかないよ、ネス」

ジェフの言葉に同意したぼくは、石像の元締めが守っていた部屋をグルリと見回した。と、部屋のすみの床に、唯一柄の違うタイルがはめこまれていることに気付く。不思議に思ってタイルの上に乗ると、どこからか、ゴゴゴ……と、重苦しい音が聞こえた。

何事かと思案していたジェフは、ひらめいたように顔を上げる。

「さっきの、あの棺の部屋へ行ってみよう！」

ぼくらは、意識のないプーをかつぎ、怪しい棺のあった部屋へと急いだ。すると――。

なんと、びくともしなかった棺が横にスライドしていて、もともと棺のあった場所に、大きな穴がぽっかりと口を開けていた。

「隠し階段だったんだよ」ジェフが、満足げに穴のふちに立つ。

「よし、スカラビの街でプーを回復させたら、この先に進もう」

ぼくらは道を引き返して外へ出ると、テレポートでスカラビの街へともどった。

⬇149へ

131

いよいよポーラの救出作戦開始。ぼくはグレートフルデッドの谷へ向かって出発した。
グレートフルデッドはツーソンの東に位置する渓谷だ。東に向かって歩いていくと、やがて洞窟に出くわした。地図によれば、この洞窟の向こうがグレートフルデッドの谷だが……。
迷わず洞窟の中に入り、薄暗い道を進んでいくと、突然、目の前に毒々しい赤色のキノコが立ちふさがった！ 見れば、根っこを足のように動かして歩いている。こいつは、歩くキノコだ！ どうやら、戦うしかないみたいだぞ!!

◆バトル対戦表で戦います。ネスはD、相手はA。相手よりも数値が……

●上……………………363へ ●下……………………187へ

132

「わかったぞ！」ジェフが、唐突に手を叩いた。「ネス！ サマーズのスカラビ文化博物館でもらったヒエログリフの写しがあるだろう。あれを貸してくれないかい」
あわててリュックの中からヒエログリフの写しを取り出し、ジェフに手渡す。
ジェフは、紙をしばらくじっと見つめると、五つのタイルの上をポンポンと渡りはじめた。
「そこに、数字が書いてあるだろう、ネス。その数字の順番に、タイルの上を渡るんだよ。紙にはない1と6は、最初と最後に乗るいちばん奥のタイルだ。これが、謎の答えだ！」

ぼくは、改めてヒエログリフの写しに1と6を加え、タイルを見くらべてみた。どちらも、5つの点として考えられる。そして、点を数字順につないでみると、星の形になる！
「よし、これで最後、と！」
ジェフが、いちばん奥にあるタイルの上にポンと乗った。すると――。

⬇555へ

133

いざというときに強力な武器があると心強い。そう考え、ペンシルロケット5を買った。
「さて、これで俺たちは文字どおり無一文だ。街でも散策してみるとするか」
プーがクールに提案をする。ぼくらは連れ立って、街を歩きはじめた。
◆『ペンシルロケット5』を入手した。アイテムリストにチェックして

……280へ

134

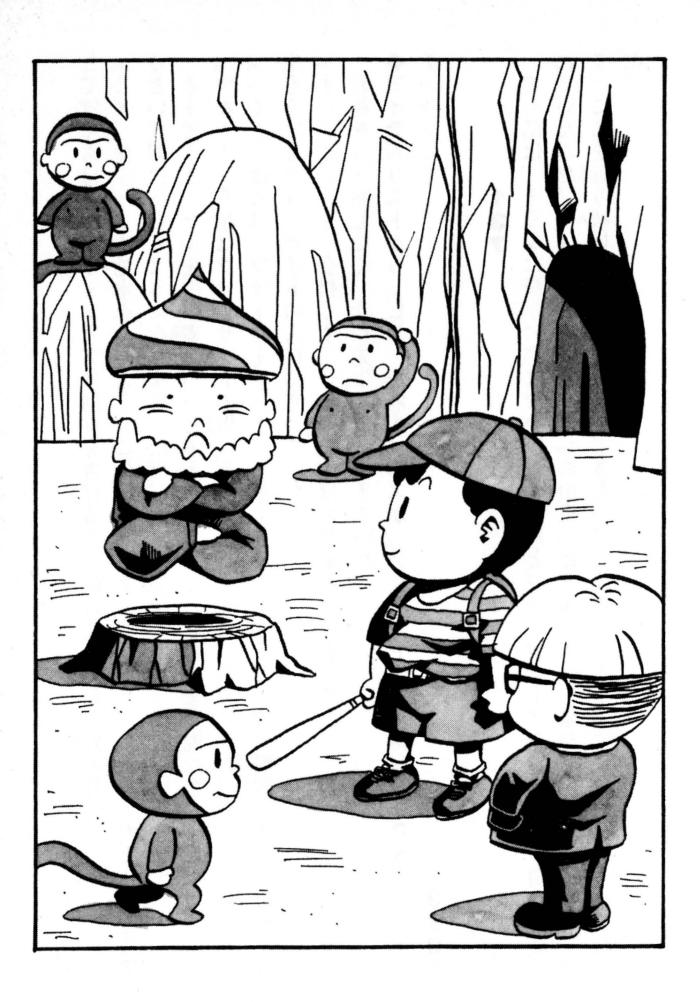
ぼくたちは観念して目をつぶった。しかし……。敵は攻撃してこない。
「ヘイヘイ、ボーイ。助けにきたぜ！」
聞き覚えのある声にそっと目を開けると、そこにはトンズラブラザーズが立っていた。どうしたことか、ロボットはピタリと止まったままだ。
「必死の顔でこのビルに飛びこんでいくおまえさんたちを見て、追っかけてきたのサ！」

「すごい、すごいよみんな。でも、どうやってやっつけたの!!」
ぼくはトンズラさんたちに飛びついて、言った。
「なーに。背中のスイッチを切っただけサ!」
「なるほどー! その手があったんですね!!」ジェフが感心してうなずく。
「さあ、ネス。隣の部屋に踏みこもうぜ。おっと、その前にオレはちょっとトイレだ!」
「オレも」「ワテも」「オイラも!」「ワシも!」
しかし、みんなを待ちきれないぼくとジェフは、モノトリーの部屋へ突入! ⬇183へ

135

「実は、ぜひこれを王子さまに差しあげたくて……」
じいさまは、家に入ると小さなたまて箱を取り出し俺にくれた。開けてみると、中には王家の文様が描かれたバンダナが入っていた。
「おお、お似合いですぞ。それには、御身を守る力があります。どうぞ、お気を付けて!」
俺はじいさまにお礼をいうと、彼の家を出た。そして……。
◆『王者のバンダナ』を入手した。アイテムリストにチェックして
●無の場所へ……………………167へ　●村を歩く…………………………126へ

136

ピザをやると、サルは喜んで扉を開けてくれた。
そこは広間になっていて、無数のサルたちが、薄布をまとった髭の男を囲んで座っていた。
「ようこそここへ、ウッキキッキ！　ネスさん、タライ・ジャブ様がお待ちかねです」
サルたちは、スス――ッとよけて道を空けてくれた。タライ・ジャブは静かに語り出す。
「宇宙の真理は粒のように波のように、宇宙を駆けめぐり、人と宇宙に語りかけているのだ。あなたがたを私がここで待つこともすべて定められた真理。ネス、ポーラ、ジェフ、そしてプー。４つの力が出会うとき、ねじれようとしている宇宙は安らかな呼吸を取りもどす……」
「……お、おいジェフ。何言ってるかわかるかい？」
「……わかるような、わからないような。とにかく、４人目の仲間はプー君ていうんだな」
と、ぼくらがヒソヒソやっていると、タライ・ジャブはにっこり微笑み続けた。
「今は、わからずともよい。あと……これを探していたのじゃないのかな？」
タライ・ジャブが顎をしゃくると、サルが銀色に光る四角いマシンを持ってきた。
「ウッカリ特急便が忘れたグルメ豆腐マシンだ。持って行くがいい。さて、この先の旅も並み大抵のものではなかろう。そこで、空を自由に移動できる力・テレポートを授けよう。そこのサルに習っていきなさい」
タライ・ジャブが指さしたそこには、酒場までお使いにきた、あのサルが立っていた。そ

してぼくらは、タライ・ジャブに別れを告げると、彼に連れられて穴の外へ。
「じゃ、先生がまず見本をみせよう。これができるようになると、1度行ったところならアッという間に行けるようになります。ただ、地下や部屋の中では使えないからね!」
そう言うと、サル先生の姿はパッと消え、瞬きしている間にまた現れた。
「ウキキ! 今私はフォーサイドの街に行って帰ってきたのです。さあ、やってごらん!」
「ハイ!」ぼくは、フォーサイドへ! と念じてみた。すると、次の瞬間、ぼくらはサル先生もろともフォーサイドの入口に立っていた。
「す、すごいゾ! 合格です、じゃ、先生はもどるから頑張って!」
お礼を言う間もなく、サル先生の姿は消えていた。
◆アイテムリストから『ピザ』を消す。ネスが『テレポート』を習得した。PSIリストにチェックして……………………………………350へ

137

でも話は、そんなに簡単に進まなかった。なんとジャイアントステップへ行く道が封鎖されていたのだ。ジャイアントステップへの山道へは、旅芸人の小屋が関所みたいになっていて、ここを通り抜けないと進むことができない。ところがこの小屋にカギがかけられてたのだ。

なんでも、シャーク団がここをたまり場にするため、怒った市長が封鎖してしまったとのこと。いったい、ぼくはどうすればいいんだろう？

●市役所へ行く……………………………73へ
●シャーク団のたまり場のゲームセンターに行く……………………………89へ

138

崖下に落ちたぼくは、なんとか気力をふりしぼって山道を下り、オネットの街に舞いもどった。痛む足をひきずって、病院に直行して手当てを受けたところ、たちまち回復。
気合いを入れ直したぼくは、再びジャイアントステップにやってきた。
「ふふふ。また倒されにやってきたか」再び、巨大アリがぼくの前に立ちはだかる。
ぼくは巨大アリに向かって、いきなりＰＫ必殺を放った。強力なＰＳＩ攻撃をまともにくらい、足元をふらつかせる巨大アリ。チャンスだ！

◆経験値を現在のレベルの最大値まで回復させて……………………………218へ

139

慎重に、ピラミッドの通路を進んでいったぼくらは、やがて広い部屋の中に出た。部屋の左側と右側に、それぞれ通路への出口がある。う〜ん、どっちだ？

●右へ……………………………16へ　●左へ……………………………626へ

140

ぼくは悪ぶるモグラめがけて、バットを振りおろした。バキッ！　バットの直撃を避けるため、すかさず穴にもぐったやつは、逆襲のために、別の穴から頭を出す。だが、今度はそれを待ちかまえていたポーラが、フライパンでゴツン！　まるでモグラたたきゲームだ。

悪ぶるモグラはしばらく抵抗したが（ＨＰマイナス１）、結局は白旗を上げて降参した。

●Ａにチェックがある……………356へ　●チェックがない……………188へ

141

1万ドルの借金か……。う～ん、どうしよう？

●パパに電話してみる…………269へ　●ポーラのパパに相談してみる…125へ
●トンチキさんに相談してみる……………………………………157へ

142

「やばいな、使えそうなものを何も持ってないよ。スカラビにもどるか……」

ぼくがそう言いかけると、ジェフは首を振って反対した。

「せっかくここまで来たんだ……もどるなんてもったいないよ。まだなんとか歩けるから……」

いくらスカラビにもどろうと言っても、頑としてうなずかないジェフ。
「それじゃあ、少し歩いてみるけど、これ以上悪くなったらすぐもどるからね、いいかい？」
ぼくのこの言葉で、ようやくジェフは納得した。

◆Yにチェックをして……243へ

143

スターマンは、すばやい動きでビーム攻撃をしかけてきた。ビームは狙い過またず、ぼくの太ももに！（HPマイナス5）でも、こんなことでへこたれてはいられない。
「みんな、頼む！」
ぼくの叫びで、ポーラたちもはっと我に返る。ぼくらはそれぞれの武器を手にスターマンに挑みかかった。夢中で攻撃を続けると、スターマンは意外にあっけなく消えさった。

●Kにチェックがあれば……21へ　●なければ……199へ

144

ジェフ、お願い……頑張って！　ぼくは祈るような思いで、ジェフの口にいのちのうどんを運んだ。しばらくすると、彼は意識を取りもどした。
「ん……あ、ああ。ボクはいったいどうしてたんだ……」

「よかった……。ジェフ、モノトリーはどうやら敵だ。ポーラを人質に捕られた……」
「なんだって！　じゃあ、モノトリーはギーグの手先なのかい？」
「まだわからないけど、とにかくモノトリービルへ行ってポーラを助けなきゃ！」
◆アイテムリストから『いのちのうどん』を消して　……………………**256**へ

145

トラベリング・バスは、スリークの街に着いた。
「とりあえずここでお別れだ。この街は暗いムードだけど、明るい気持ちで頑張りな」
トンズラさんたちは、そう言ってぼくたちを降ろし、別の街目ざしてバスを走らせた。
「なんでも街中にゾンビがはびこっていて、それで暗いんですって」
どこから情報を入手したのか、ポーラが街の事情を教えてくれる。
ゾンビ……生けるしかばねが街にはびこっていれば、そりゃ街も暗くなるわけだ。
「とにかく、今日はもうホテルに入って休もう」
ぼくたちは適当なホテルに入って休むことに。フロントから、パパに電話をかけると、「100ドル振り込んでおいた」とのこと。ありがとう、パパ。ぼくたちはフロントに2人分の宿泊料金80ドルを払って部屋をとり、その日はゆっくり休んだ。
➡237へ

146

「フフフフ……待ってたぞ」
黄金色に輝くDXスターマンは、部屋に入ったぼくらを、余裕の笑顔で迎えた。
「われらの計画に、おまえらは邪魔なのだ。ここで消えてもらうぞ！」
「計画？　計画とはなんだ!?」
尋ねるぼくを、DXスターマンは馬鹿にしたように笑う。
「聞く必要はないだろう。どうせ、おまえらはここで死ぬのだから！」

◆夕にチェックをして

●HPが8以下なら ……………… 339へ　●9以上なら ……………… 482へ

147

渓谷をどんどん進んで行く。途中、川にさしかかったが、橋が壊れていて先に進めない。
しかたなく、川に沿って上流にのぼっていくことに。と――。
ぼくは、変なものが道を塞いでいることに気が付いた。近づいてみると、それは大きな鉄のタコ。押しても引いてもビクともしない。めんどうなことにタコが塞いでいる道は、片側が切り立った崖、片側が川となっていて、こいつをどかさない限り、前に進めない。
「どけよぉ、おい！」一生懸命押したけど、タコはやっぱりビクともしない。どうしよう？

●受信専用電話があれば……59へ　●なければ……387へ

148

ぼくはリボンを買い、ポーラの頭につけてあげた。このリボンは、防御力をアップさせる力を秘めているらしい。
「ありがと、ネス♡　似合ってる?」リボンをつけたポーラがぐるっと回転してみせた。
◆『リボン』を入手したアイテムリストにチェックして……284へ

149

スカラビの街にもどったぼくらは、パパに電話して100ドルの振り込みを確認すると、すぐさま引き出して病院へと急いだ。プーの治療費は、ジャスト100ドル。看護婦さんにプーを任せ、待合室でうろうろしていると、やがて元気になったプーが姿を現した。
「心配かけてすまなかった。俺はもう大丈夫だ」
ぼくらは、元気になったプーに状況を説明しつつ、ピラミッドへ逆もどり。棺の部屋へ向かうと、隠し階段で下へと降りていった。
◆オにチェックして……566へ

150

ぼくらがあわてて、ポーラのほうへ近づいた瞬間、ポーラの頭が水面にプカリと浮かんだ。
「けほっ……水飲んじゃったけど……わたし、泳げるみたい……？」（HPマイナス2）
ポーラは、不思議そうな顔で、水をかいている自分の手足を見つめる。
「もしかして、さっき装備した輝きのコインのおかげかしら……？」
防御力をアップさせるコインなら、そんなこともあるのかも知れない。ぼくらはひとまず納得して、深い泥沼を泳いで渡った。

◆サにチェックして……………………………………279へ

151

続いて、ポーラがPKファイアーをおみまいした。炎がゲップーを巻きこむ。そこへジェフがバンバンガンを撃つ！　ゲップーは何もできず、あいかわらずもだえているだけだ。ぼくは、とどめとばかりに、バットをゲップーに振りおろした！
「ぐわ――――！　ぐえええええぷっ!!」
断末魔の叫び声をあげて、ゲップーは退散した。ぼくたちは勝ったんだ。とはいえ、最後のゲップはとっても臭く、ぼくたちが受けたダメージも小さいものじゃなかった。（HPマイナス2）。でも、この戦いの中で、ぼくは催眠術を、ポーラはPKフリーズを覚えた。

戦いに勝ったぼくたちは、基地の中のどせいさんたちを解放して、いっしょにサターンバレーにもどることにした。

◆ネスが『催眠術』を、ポーラが『PKフリーズ』を習得した。PSIリストにチェックする。スにチェックして……………………………**248**へ

152

ぼくらは再び、ファイアースプリングス目ざして歩きはじめた。

◆G、もしくはチにチェックは？

●ない……………………………**311**へ　●Gのみある……………………………**332**へ

●チのみ、もしくは両方ある……………………………**344**へ

153

スターマンの息子はいきなり火炎攻撃を放ってきた！　炎がぼくたちに襲いかかってくる！　だが、何のダメージも受けない！

「ふははは。ワシはサイコシールドを施しておいたのじゃ。光のシールドがお主らを覆っているうちは、ＰＳＩ攻撃をものともせんのじゃ。それ、今のうちに攻撃じゃ！」

ブンブーンの言葉を受けたぼくは、スターマンの息子に体当りをくらわした。続いてピッ

キーもスターマンの息子の顔面をひっかいた。さらにポーキーも……。
ん？　ポーキーは、いつのまにか脇に引っこんで死んだフリをしている。あのねえ……。
とにかくＰＳＩによる攻撃を封じこまれたスターマンの息子は、意外なほどもろかった。
ぼくたちの連続攻撃にたじたじとなり、あっという間にダウン！

⬇331へ

154

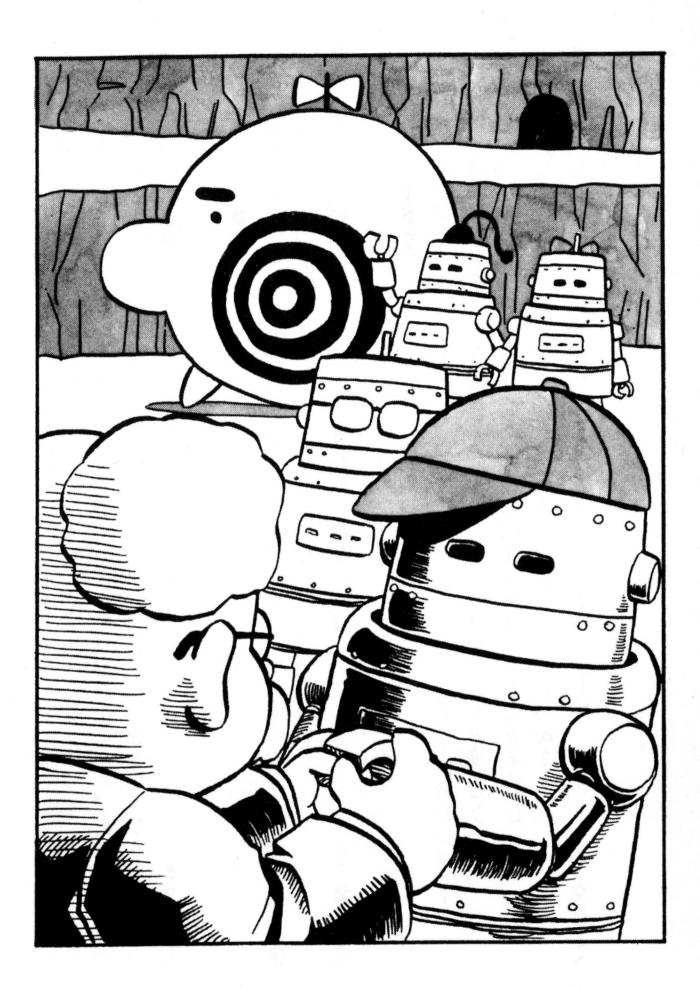
しかしぼくは、今のＰＫ必殺でＰＳＩパワーを使い果たしてしまった。あとはバットで戦うしかない。ちょっとめんどうなことになってきたぞ……。

●殺虫スプレーがあれば……………170へ　●なければ……………………234へ

155

翌日ホテルにアップルキッドから電話が入った。『マシンができたよ。取りに来て！』
さっそく彼を訪ねると、何やら複雑な形をしたヘンテコなマシンを渡してくれた。
「そのボタンを押せば、タコの形をしたものを即座に消すことができるんだ」
半信半疑ながら、タコ消しマシンを受け取る。ほんとに消えるのかな……。

◆『タコ消しマシン』を入手した。アイテムリストにチェックして……………283へ

156

ぼくらは、博士の持ってきたベッド型の機械の上に横たわり、1人1人ロボットに改造されていった。なんの味気もない、丈夫なだけが取り柄のロボットだけど、博士やアップルキッドの粋なはからいで、ぼくの野球帽、ポーラのリボン、ジェフのメガネ、プーのべん髪はそのまま残してもらえた。
「誰が誰だか区別がつかんと不便じゃからな……では気を付けて行くがよい。健闘を祈るぞ」
「みんな、頑張ってきてくれよ」「がんばれがんばれ、わーいわーい、ぷー」
ロボットになったぼくらは、みんなに見送られながらスペーストンネル3を作動させた！
過去の地底大陸の洞窟は、氷に閉ざされた世界だった。もちろん、ぼくたちに寒さは感じられなかったけれど……。
「おい、現代では行き止まりだったところも、先に進めるぞ！」
いちはやく歩き始めたプーが、前方を指差した。が！
歩きはじめたぼくらの前に、突然、タコのような手足を持ったモンスターが現れた！
「スーダララッタだ！　手ごわいぞ！」ジェフが叫ぶ。
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはA、相手はC。相手よりも数値が……
●上　……………………657へ　●下　……………………631へ

157

ヌスット広場のトンチキさんを訪ねた。
「よう、やっと来たな、ネス。どうやらポーラを助け出したらしいな」
トンチキさんは機嫌よくぼくたちを迎えてくれた。
「おまえ、トンズラブラザーズの借金を返すために、1万ドルいるんだってな？　オネットで見つかった黄金の宝物についての情報を持ってきたら1万ドルやるぜ。どうだ？」
オネットの黄金の宝物？

●Eにチェックがあれば……………82へ　●なければ…………………………253へ

158

東の墓地に到着した。垣根を越えて、不気味な雰囲気の敷地内に入ろうとしたところ！
あっという間に多数のゾンビに取り囲まれてしまった。いやな臭いをさせたゾンビたちは、腐った肉をボトボト落しながら、ゆっくりゆっくり包囲を縮めてくる。
結局、ぼくとポーラはゾンビたちをつきとばして、その場から逃げだした。
1度ホテルに帰って、出直しだ。

⬇270へ

159

長い洞窟を通り抜けると、再び山の表面に出た。
「ほら、見て！　あそこ、さっきの場所よ！」
ポーラが指差すほうを見ると、なるほど、溶岩の流れの向こう側に、さっきまでぼくたちのいた、ロープの垂れ下がっている場所が見える。
「やっぱり、プーの言ってたことは正しかったね」
「ボクは、機械のことは詳しいけれど、自然に対する勘みたいなものは、ないからなあ……」
「やっぱり、プーは修行を積んでるから、わたしたちとはひと味違うわね……」
などと話しながら山道をのぼっていくと、またもや溶岩の流れがぼくたちの邪魔を！　でも、今度の溶岩は、よく見ると崖っぷちすれすれで固まっており、なんとか通れそうだ。
「それより、見ろ。また、ロープがあるぞ」
崖っぷちを恐る恐る通ろうとしたぼくらに、プーが言った。見れば、山肌に、またしても上へのぼるロープが！

●ロープをのぼる……………205へ　●先に進む……………266へ

160

ぼくはポーラが選んでくれたセンスのいいプラチナの腕輪を買った。これで防御力がアッ

プだ！　あと、残金で買えるのは、ペンシルロケットかバズーカ砲のどっちかだ。
◆『プラチナの腕輪』を入手した。アイテムリストにチェックする。『ペンシルロケット』か『バズーカ砲』、いずれかひとつ買うことができます。選んだ方をアイテムリストにチェックする。Vにチェックして……………………………**232**へ

161

市役所を訪れると、職員さんたちが、なんだかとっても忙しそうにしていた。なんでもシャーク団に対する苦情が多くて、対応にてんてこまいだとか。ジャイアントステップの資料をもらおうと思ったんだけど、誰も相手はしてくれそうにない。ガッカリ……。**⬇225**へ

162

最後のスターマンが出てきた洞窟に入ると、うねうねと曲りくねった道が、奥の方まで続いていた。何者かが息づいているような気配がするが、攻撃をしてくる様子はない。
「よし、ここでひと休みだ」ぼくらは、腰を下ろして休息兼作戦会議を開くことにした。
◆『ダブルバーガー』か『ピザ』か『マンモスバーガー』があれば食べてＯＫ。『ダブルバーガー』を食べたらＨＰプラス10、『ピザ』を食べたらＨＰプラス15、『マンモスバーガー』を食べたらＨＰプラス20し、食べた分だけアイテムリストから消して……………**210**へ

163

「そうだ、俺の師匠・イースーチー老師ならわかるかもしれないぞ！」
プーの提案で、ぼくらはさっそくランマの宮殿へテレポート！
「まあ、素敵……今まで見たこともないような景色だわ」
ランマへ着くなり、ポーラが目を輝かせていった。確かに、エキゾチック！
「村のはずれに洞窟がありましてな、そこはテコでも動かないうさぎによって守られております。もしや、そのニンジンならばうさぎの心を動かすことができるやもしれません」
ぼくたちは、イースーチー老師の教えに従って、さっそくその洞窟へ行ってみた。
すると……いたいた！　大きなうさぎがデデ――ンと！

⬇438へ

164

進んでいくと、不思議な光を放つ洞窟を見つけた。慎重に近寄ると、案の定、洞窟の中から、巨大なモグラが出現！　いきなり襲いかかってきた。
「ここは2番目の〝おまえの場所〟だ。だが、今はわたしの場所だ。奪い返すがよい」
◆ポーラがPKファイアーを？
●覚えている……………………114へ　●覚えていない……………………324へ

165

厚めのフライパンを買った。これでポーラの戦闘力が一気にアップだ。

◆『厚めのフライパン』を入手した。アイテムリストにチェックして ……310へ

166

ジェフが、ペンシルロケット20を打ち上げた。20発のロケット弾がギーグの体を直撃。

「ギーグ、なにしてる!? 攻撃だ!!」ポーキーが大声で叫ぶが、ギーグはまるで無抵抗だ。

◆アイテムリストから『ペンシルロケット20』を消して

●Rにチェックがあれば ……348へ　●なければ ……118へ

167

無の場所とは、村のはずれにある切り立った岩山のてっぺんのことで、ちょうど人間1人が座るスペースがあるだけだ。

俺は座禅を組み、目を閉じ、瞑想に入る。心を無にする修行の始まりだ……。

修行に入って半日以上が過ぎようとした頃、岩山の麓から、老師の従者の声が響いてきた。

「プー王子様！　一大事です！　修行は中止してすぐ帰れと、イースーチー様が！」

●事情を聞く ……230へ　●黙っている ……11へ

168

ロープをのぼると高台に出た。人が4人、やっと乗れるだけの大きさのそこで、ぼくらはいのちの角笛を入手！　意識を失った者の魂を呼びもどす不思議な角笛だ。高台には、他に何もないので、ぼくらはいのちの角笛をしまうと、ロープを伝って、洞窟へと向かった。

◆『いのちの角笛』を入手した。アイテムリストにチェックして

……………159へ

169

「まいった、まいった。見逃してくれ……」

お調子者キッドは、気が付いたとたん助けを求めてきた。

「オレを助けてくれたら、いいことを教えてやる。ライヤーって、トレジャーハンターがいるだろ。やつは最近、すげえ黄金像を掘り当てたそうだぜ。うまく盗めば、けっこうな金になるぜ。なあ兄弟、こんないいことを教えたんだから、見逃してくれよ」

ぼくは、お調子者キッドを許すことにした。

⬇121へ

170

ぼくには殺虫スプレーって味方があった。即座に取り出し、巨大アリに向けてプシュー！

「うぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ――――！」

巨大アリといっても虫には変わりない。殺虫スプレーの威力に、ヤツはのたうちまわって苦しんだ。しかしこれでもとどめを刺すにはいたらなかった。
巨大アリは最後の力をふりしぼると、全力で体当りをしかけてきた。ドカッ！
その衝撃にぼくの意識はもうろうとなった(HPマイナス2)。もう体力がほとんど残っていない……神様！　ぼくは最後の力をふりしぼって、巨大アリの頭にバットを振りおろした。これがはずれたら、もうあとはない！　祈りが通じたのか、この一撃がとどめとなり、巨大アリは動きを止めて、すっかりおとなしくなった。

◆アイテムリストから『殺虫スプレー』を消す。『ハンバーガー』があればここで食べてOK。食べたらアイテムリストから『ハンバーガー』を消し、HPプラス5して……190へ

171

いっけんすると、ただのだらしない少年だけど、『人は見かけによらない』ともいう。
おもいきって、アップルキッドに開発援助金を50ドル渡す。すると、キッドはぼくに受信専用の携帯電話をくれた。

◆『受信専用電話』を入手した。アイテムリストにチェックする。Mをチェックして…………131へ

172

ぼくはおもいきって、教団の本拠地に入っていった。中では、青い覆面、青い服装の教徒たちが、熱心に教祖カーペインターさんの演説を聞いている。ぼくは、ものすごい数の教徒たちを無理矢理おしのけて、なんとか壇上のカーペインターさんに近づくことができた。
「なんと、この神聖なる教会に、青以外の服を来た者が紛れこんできておる。なんと罰当りな！　神罰を受けなさ――い!!」
ぼくに気付いたカーペインターさんは、いきなり両腕を高くさしあげ、怒りの言葉をはいた!!
その瞬間、轟音が轟いた！

●フランクリンバッヂがあれば……396へ　●なければ……76へ

173

PKフラッシュをゲップーにおみまい！　激しい閃光がおこり、ゲップーの涙が止まらなくなった。そこを、今だとばかりに、ポーラがフライパンで、ゴン！
続いて、ジェフのバンバンガンも命中する。よし、今がチャンスだ！

◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはC、相手はA。相手よりも数値が……

●上……151へ　●下……303へ

174

クラーケンのしっぽがぼくめがけて振りおろされた！　しかし、間一髪、シールドαが間に合い、ダメージを受けずにすんだ！　さあ、反撃開始！

◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはD、相手はA。相手よりも数値が……

●上……………………54へ　●下……………………358へ

175

ぼくは、自分の体にシールドをかけた。そのとたん、ネスの悪魔のバット攻撃が、ぼくを襲う。シールドのおかげでダメージ半減とはいえ（HPマイナス2）、衝撃はかなりのものだ。さすがは、ぼくの悪魔！　でも、こっちも負けてはいられない！

「パラライシス――――っ！」ぼくは、敵を痺れさせるPSIを放った。

◆バトル対戦表で戦います。ネスはB、相手はE。相手よりも数値が……

●上……………………195へ　●下……………………326へ

176

しかし、王者のバンダナを巻いていたプーにさしたダメージはなかった。

「よし、総攻撃開始だ！　ポーラ、ジェフ、プー、行くぞ！」

⬇322へ

177

やるしかないぞ！　ぼくは、お調子者キッドと一戦交える覚悟を決めた。
◆バトル対戦表で戦います。ネスはB、相手はD。相手よりも数値が……
●上……………………81へ　●下……………………113へ

178

バズッ、ドヒュ――――――――ン!!
サターンバレーで買ったジェフの強力な武器、スーパーバズーカが、でっかい音とともに火を吹いた。バズーカから発射された巨大な弾丸は、ギーグの体のどまん中、目玉のようなところに勢いよく打ちこまれる。
よし、次はプーの番。力まかせの攻撃よりもＰＳＩで地盤を整えておきたいところだ。
●シールドΩをかける……………433へ　●スターストームをかける　………352へ

179

もう1人ぐらい、しゃべってくれるグミさんがいるかも知れない……。そう考えて、村をもう1度ひと回りしてみたけれど、結局は無駄足だった。が、村のガラクタ置き場のようなところで、なぜかホカホカのピザを発見！　ぼくらはありがたく拝借し、村の外へ向かった。

◆『ピザ』を入手した。アイテムリストにチェックして……………………373へ

180

ぼくらが防御体制に入る間もなく、スターマンは強烈なビームを放った。
とたんに、目の前がまっ白になる。
ぼくの耳に、ポーラやジェフ、プーの悲鳴がこだまする……。
ああ、ぼくらは、いったいどうなっちゃうんだ……。

⬇275へ

181

まずは寄宿舎横のドラッグストアに立ち寄る。とはいえ、今のボクの所持金は2ドルだけ。
これで買えるものといえば、2枚のフーセンガムだけだ。と、店の人が声をかけてきた。
「今、フーセンガムを買うと、バルーンモンキーがおまけにつきますよ」
バルーンモンキー？　そんなものもらってどうするっていうんだ？

●フーセンガムを買う　…………292へ　●何も買わずに外に出る　…………221へ

182

ここは、東の果ての国ランマ。
しばし主人公はネスから、この国の王子プーへ——。

ふああ、よく寝た！　俺はプー。このランマの国の王子で、今はりっぱな王となるべく修行中の身だ。今日もさっそく修行に励むため、俺は服を着替えると、師であるイースーチー老師が待つ公室へと向かった。老師は俺の子ども時代からの先生で、世の中のことは何でも知っているんじゃないかと思うほど博識だ。
「王子、今までよくまじめに修行されてきました。いよいよ、最後の試練『無の修行』に挑むときが来ました」老師はいつになく厳しい顔で言った。
「厳しい修行ですが、一刻も早く〝無の場所〟へ赴き、見事試練を乗り越えて下され！」
俺はイースーチーに見送られ、村はずれにある修行の場へと向かった。その途中……。
「これはプー王子、修行ご苦労さまです。ぜひワシの家に寄ってからおでかけください」
「プー王子！　近頃遊んでくれなくて、あたしさみしい！　少し家に寄ってって下さいナ！」
村のじいさまと娘さんが同時に声をかけてきた。……1軒ぐらいなら寄ってもいいかな。

●じいさまの家へ寄る……………135へ　●娘の家へ寄る……………………214へ

183

「まあ、ネスにジェフ！　やっぱり来てくれたのね!!」
部屋の中では、ポーラがモノトリーの肩を揉んでいるところだった。
「モノトリーめ！　さてはポーラをこき使っていたな……許さないゾ！」
「違うの、違うのよネス！　モノトリーさんは本当はいい人なのよ!!　話を聞いてあげて！」
ポーラはモノトリーをかばうようにして、ぼくらに対峙した。これ、どうなってるの!?
「すまない、ネス君許してくれ。マニマニの像が壊れた今では、ワシには何の力もなくなった。あれは人に幻影を見せ、邪悪なパワーをもたらす恐ろしい物だった……。おかげでワシはここまでこれたのだが、逆にワシが操られるようになって恐ろしくなり、ボルヘスの酒場の倉庫に隠し、たまに様子を見に行っておったのだ。君たちの行く手を阻もうとしたのも、あの像の命令だよ。でも、ポーラちゃんの優しい心にふれてワシはすっかり目が覚めた」
と、モノトリー氏がうなだれた、そのとき。窓の外でパタパタパタッと大きな音が！
見れば、ヘリコプターに乗っているのは、ポーキー親子だ！
「ヘイ、トンマなネス！　ただのお人好しにもどったモノトリーはもうお払い箱さ！　オレはもっとビッグになるぜ。おまぬけネス、指をくわえて見てるんだな！　アバヨ!!」
ポーキーは憎まれ口をたたくと、空の彼方へ去って行った。いったい、ポーキーは何をしようとしているんだ!?　どうして、ぼくたちの行く手を阻むようなことを……。

「ああ、あのヘリコプターはワシがネス君たちにあげようと思っていたのに……」
と、モノトリーさんはため息をついた。
「マニマニの悪魔は、他にも〝ネスたちをサマーズに行かせるな〟とか〝ピラミッドを見せるな〟とか言っていた……。サマーズっていうのは、海の向こうの街だよ」
サマーズ……そこに行けば、パワースポットが見つかるのかも!
●Vにチェックがあれば……………119へ　●なければ…………………………63へ

184

アンチPSIマシンでも、PKおとこのPSIを封じこめることはできなかった。敵は、馬鹿にした表情でPKファイアーを! 強烈な炎に巻きこまれる!(HPマイナス8)。やっと炎を消し止めたが、ぼくらは全員ふらふら状態。どうにか気力をふりしぼって武器を繰り、ようやくの思いでPKおとこを倒した。
⬇208へ

185

ぼくは市役所に着いた。さっそく担当者にお願いする。
「あのー、旅芸人の小屋の封鎖を解いてほしいんですけど……」
ところが、市の職員はとりあってくれない。それでもねばっていると、突然市長が現れ、

「あー、きみかね、小屋の封鎖を解けと言ってきておるのは。しかしあそこを開けると、シャーク団が悪さをするんでね。まあ、子どもは、野球でもやって遊んでいなさい」と、ぼくにバットを手渡した。「それはわたしからのプレゼントだよ。今度の選挙よろしくと、お父さんたちに伝えておいてね。むふふふ」
ぼくはしかたなく、バットを受け取って、市役所をあとにした。
◆『普通のバット』を入手した。アイテムリストにチェックして……377へ

186

「そうだ、ぼくにはこいつがあったんだ！」
とっさに殺虫スプレーを取り出し、巨大アリに向けてプシューと吹きかけた。
「うぎゃぎゃぎゃぎゃ――――！」巨大アリといっても虫には変わりない。やつは殺虫スプレーの威力にのたうちまわって苦しみ、あっという間におとなしくなってしまった。
◆アイテムリストから『殺虫スプレー』を消して……190へ

187

こうなったら、先制攻撃だ！　歩くキノコにバットを振りおろした。が！　スカッ！
ヤツは、馬鹿にするように、いきなり胞子をまき散らした。

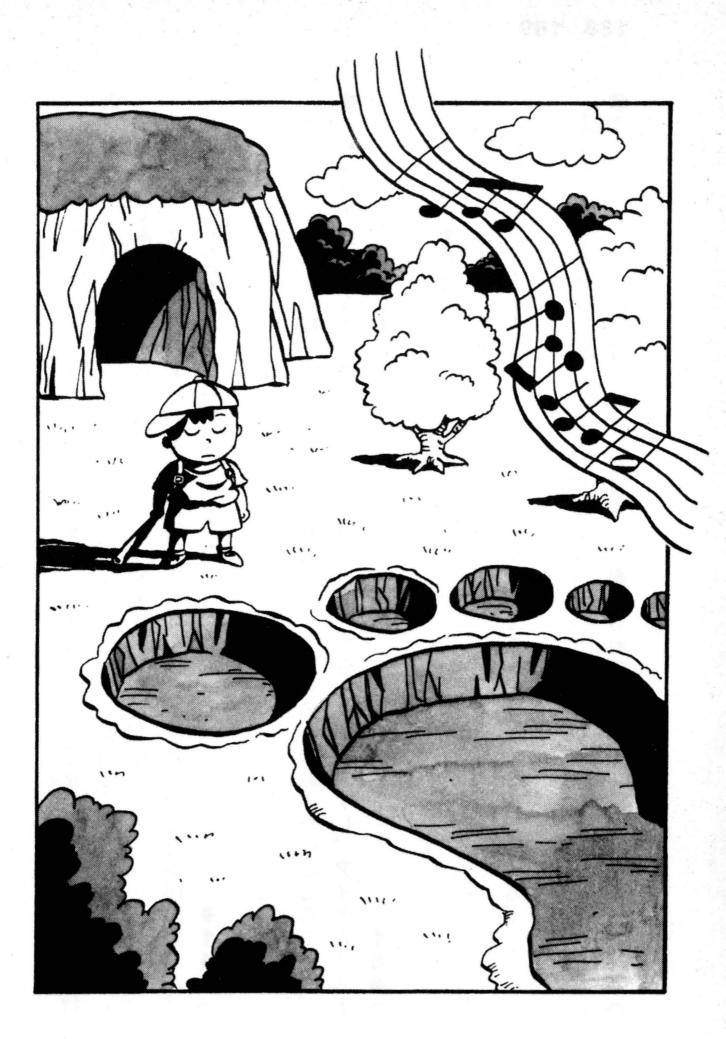
「なんだ胞子ぐらい」と、さらにバットを振りおろすと、今度こそ見事命中。歩くキノコは動かなくなった。やったね……でもなんだか、頭のてっぺんが変だぞ……。
手をやってみると、なんと、頭のてっぺんにキノコがはえていた。
うわーん、カッコわるいよ――！　あわててキノコを抜いたけど、なんだか体の力がぐったり抜けたような気分……（HPマイナス2）。
⬇147へ

188

勝ったけど、体力が減ってきているのは事実。少し取りもどしておきたいところだ……。
◆『ハンバーガー』があればここで食べてOK。食べたらHPプラス7し、アイテムリストから『ハンバーガー』を消して……………………164へ

189

次いでジェフが、レーザービームを発射させた。
ビビビビビビ――――！　白いビームが、DXスターマンの体を直撃する。
「くっ……なかなかやるな！」
度重なる攻撃で怒りに燃えたヤツが、ぼくに向かっていきなり強烈なビームを繰り出した。
●帽子ヘルメットがあれば……244へ　●なければ……………………294へ

190

巨大アリを倒した。その瞬間、ぼくにPKフラッシュという新たな攻撃技が身についた。
洞窟に入って進んでいくと、山の頂上に出た。見れば、そこには巨大な足跡がくっきりと残されていた。足跡はとにかくでっかくて、ぼくの体など楽に入るほどの大きさだった。
「なるほど、まさに巨人の足跡、ジャイアントステップだ……」
なんて感心してながめていると、突如不思議な旋律がぼくの耳に飛びこんできた。それはどこか懐かしく、人をせつない気持ちにさせるメロディだ。
そのとき、ぼくの目には、一瞬、ムク犬の姿が映った。なぜだかはわかないが……。
どうやら音の石は、ジャイアントステップの音をしっかり記憶したみたいだった。
パワースポットの力で体中が満たされたぼくは、ジャイアントステップをあとにした。
◆ネスが『PKフラッシュ』を習得した。PSIリストにチェックする。レベルが2にアップしました。レベル2対応のHPチェック表に切り替えて……………………90へ

191

でも、ぼくらには、たった1ドルのお金も残されていなかった。
「悪いが、俺たちには金がない」プーがニコリともせずにそう言う。
情報屋さんは「なら、グッドバ～イ」と、あっさり去っていった。

⬇476へ

192

「それじゃ、ぼくたちは行くよ。他のみんなにもよろしく！」
興味津々でぼくらの旅立ちを見守っているおしゃべりグミさんに挨拶をすると、ぼくらはおもいきって大穴の中へ。長い長い落下感が続き、やがて穴の底にドスンとしりもち。
「こんな長い時間落下してたのにケガひとつしないってことは、重力が変化している……？」
研究熱心なジェフが、不思議そうにつぶやいた。そのとき！

⬇307へ

193

むこうみずなナメクジが体当りをかましてきたけど、かすり傷を負っただけで簡単にかわす（HPマイナス1）。いけるぞ！
ぼくはバットを握りしめて、ナメクジのブヨブヨした体にきつい一発をおみまいした。
バキッ！　この一撃がスマッシュとなり、ナメクジはその動きを止めた。

⬇122へ

194

ぼくらは、ガッツのバットとぬれタオル、そしてペンシルロケット5を買うことに決めた。
「ええと、これで残り100ドルよ。どうする？」
ポーラがぼくらの顔を見回す。するとジェフが、冷静に口を開いた。

「ホテルは4人で100ドルだそうだよ。休憩をとるなら、残しておきたいよね」

◆『ガッツのバット』と『ぬれタオル』と『ペンシルロケット5』を入手した。アイテムリストにチェックして

●100ドルはホテル代にする ……642へ
●買い物に使ってしまう ……319へ

195

とたんに、ネスの悪魔の動きが止まった。パラライシスが効いたんだ!! 動けないと悟った敵は、PK必殺を放ってくる(HPマイナス5)。しかし、こっちは、行動自由自在。バット、PSIと多彩な攻撃を放って、ついにネスの悪魔を葬り去った。

「見たか! ぼくは、邪悪な心になんか、負けない!」

⬇259へ

196

道を進んでいくと、突然、大きなケモノが行く手をさえぎった。やっぱり出た! 怪力ベアだ!! 巨大な怪力ベアはいきなり襲いかかってきた!

◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはE、相手はB。相手よりも数値が……

●上 ……372へ
●下 ……44へ

197

お金が少し余ったので、ベーカリーでスキップサンドを買った。そのとき突然、携帯電話のベルが鳴った。電話に出てみると……。

『オレンジキッドです。最新の発明品グレオレマシーンが完成したので送りましたから！』

しばらくするとエスカルゴ運送が、グレオレマシーンを配達してきた。

さっそく試してみると、マシーンからはヘンテコな音が出てきただけで、すぐに壊れてしまった。なんだこれ……。

ポーラに言わせれば、「あまり知られていないけど、オレンジキッドの発明品って役にたたないのよね」だって。あーあ。ぼくはこんなものに50ドルも投資しちゃったのか……。

◆『スキップサンド』を入手した。アイテムリストにチェックして……………398へ

198

「た、たしか、血清があったっけ……」

ぼくは、裸の背に背負ったリュックを降ろすと、中からようやく血清を探しあて、説明書きを読むのももどかしく使った。しばらくすると、さっきまでの寒気が嘘のようになくなる。

「ふうっ……」ようやくひと息つき、立ち上がる。このときになってぼくは、新しいPSI、パラライシスを覚えたことに気が付いた。

「も、もっと早く覚えていればよかったのに……今さら……」
これからは積極的に敵と戦って、経験を積むようにしよう。決意も新たに、道を引き返す。
◆ネスが『パラライシス』を習得した。PSIリストにチェックする。アイテムリストから『血清』を消して ……………………389へ

199

どうやらこの戦いで、ポーラがオフェンスアップのＰＳＩを覚えたようだ。味方にかけると、攻撃力があがる。なかなか頼もしい超能力だ。
◆ポーラが『オフェンスアップ』を習得した。PSIリストにチェックして ……309へ

200

ぼくがため息をついている間に、ポーラとジェフが困ったオジサンを倒してくれた。その上ポーラはこの戦いで防御能力の『サイコシールド』を身につけた。
それから2人はぼくを引きずって近くのホテルへ入ると、フロントで電話を借りた。
そして、受話器をぼくの耳に押し当てた。
『ハーイネスちゃん！　セクシーで美しいママの声を聞いて元気になりなさい!!』
ママ!?　振り向くと、ポーラとジェフがニヤニヤとぼくを見ている。

『大変だろうけど、なんせ地球のためだもの、頑張って！　じゃ、またね。ガチャ』
あいかわらずさっぱりとした電話だったけど、ぼくはすっかり元気になっていた。
◆ポーラが『サイコシールド』を習得した。ＰＳＩリストにチェックして　………１０３へ

２０１

丘をどんどんのぼっていくと、隕石の落下現場に着いた。見ると、警察の封鎖はもう解けている。ぼくたちは、やすやすと隕石のそばに近づいた。すると……。
「クーン、クンクンクーン」と、チビが情けない声で鳴き出した。その気弱そうな目は、ぼくにこう訴えかけてるみたいに見えた。
（こ、こんな、怖いところと知ってたら、ボク来なかったよ）
そうこうするうちにチビは、ぼくたちを置いて逃げだしてしまった。
「なんだよネス。おまえん家の犬はずいぶん薄情なやつだな」
逃げていくチビの背中を見ながら、ポーキーがせせら笑う。
そんなポーキーを無視して、ぼくは大声でピッキーの名前を呼んだ。その瞬間……。
「わーん、怖かったよ――」木陰からピッキーが飛び出してきて、ぼくに飛びついた。やっぱりピッキーは、丘の上にいたんだ。
なんとかピッキーをみつけだしたぼくたちは、急いで家に帰ることに。ところがその瞬間、

隕石が光り出し、一筋の閃光が天空に走った！
「な、なんだ……！」呆然と立ちすくむぼく。そんなぼくの耳に、突如「ぶんぶんぶーん」という虫の羽音がとびこんできた。見れば、閃光の中から、1匹のかぶと虫が！
「わしはかぶと虫…ではない！　10年後の未来からやってきた。わが名はブンブーン」
か、かぶと虫がしゃべった!?

⬇49へ

202

むこうみずなナメクジが体当りをかましてきた！　かわせる!!　と思ったが、足がズルッとすべって、みぞおちにバキッ！（HPマイナス3）。
「いてて……よおし、こうなったら!!」
ぼくは精神を集中させ、PK必殺を放った！　さすが効果てきめん！　むこうみずなナメクジは即座に体をけいれんさせ、そのまま動かなくなった。

●クにチェックがあれば……306へ　●なければ……242へ

203

ツーソンに引き返したぼくは、すぐにアップルキッドに会った。
「これがタコ消しマシンだよ。必要になるだろうと思って、作っておいたんだ」

アップルキッドはそう言うと、なんだか複雑な形の機械をぼくに手渡した。
「そのボタンを押せば、タコの形をしたものを即座に消すことができるんだ」
半信半疑ながら、タコ消しマシンを受け取るぼく。ほんとに消えるのかな……。
再びグレートフルデッドに向かう前に、ぼくはパパに電話をかけてみた。
『やあ、ネスか。頑張ってるみたいだね。口座に100ドル振り込んでおいたよ』
100ドル！　パパ、ありがとう♡

◆『タコ消しマシン』を入手した。アイテムリストにチェックして

……………283へ

204

「ポーラ、まずはキミ自身にかけるんだ！」
ぼくの言葉に従って、ポーラがサイコシールドをかけたとたん、敵の口から、キラキラ光る無数の粒が飛び出した。ダイヤモンドのようなその粒は、勢いよくポーラの体を取り巻く。が、ポーラのサイコシールドが、光る粒をすべて跳ね返した！　ラッキー！

➡659へ

205

ぼくらは崖っぷちから山肌の方へ移動して、ロープをのぼってみることにした。結果は行き止まりだったけれど、そこにはプレゼント箱が置いてあり、中からマンモスバーガーが!!

やったね！　ほくほく顔で、荷物にしまいこむ。

◆**『マンモスバーガー』を入手した。アイテムリストにチェックして** ……………**266へ**

206

1匹目のぐちゃぐちゃめがけてバットを振りおろした！　ネチャッと、いやな手ごたえがして、見事に命中。1匹目を倒した。他の2匹も、ジェフとポーラが活躍してなんなく勝利！　でも、バットで殴った時に、やつらの粘液がついて、体がちょっと臭くなってしまった。な、なんかめげちゃうよ……（HPマイナス2）。

⬇**400へ**

207

ぼくはゴチラのバットで油断ロボを叩きつぶそうとした！　しかし、敵はフラフラとぼくの攻撃をかわし、逆にすきを見てはパンチやら体当りを繰り返す。

ビシュッ！　ビシュッ！　ビシュッ！　突如、エアガンの弾がぼくの頬をかすめた！

「うわあ、ジェフたんま！　ぼくに当る～！」（HPマイナス3）

こいつ見かけと違って強いぞ！　もはやこれまでか!?

⬇**134へ**

208

PKおとこを倒してファイアースプリングスをのぼりはじめたぼくらは、やがて、行く手を溶岩の流れに阻まれた。熱い溶岩を歩いて渡るのは、どう考えても無理だ。横を向くと洞窟があり、その横に、上へと向かうロープが垂れているのが見える。
「洞窟を進めば、溶岩の向こう側に行けそうだな」と、プーの声。

●ロープをのぼる……………168へ　●洞窟を進む……………159へ

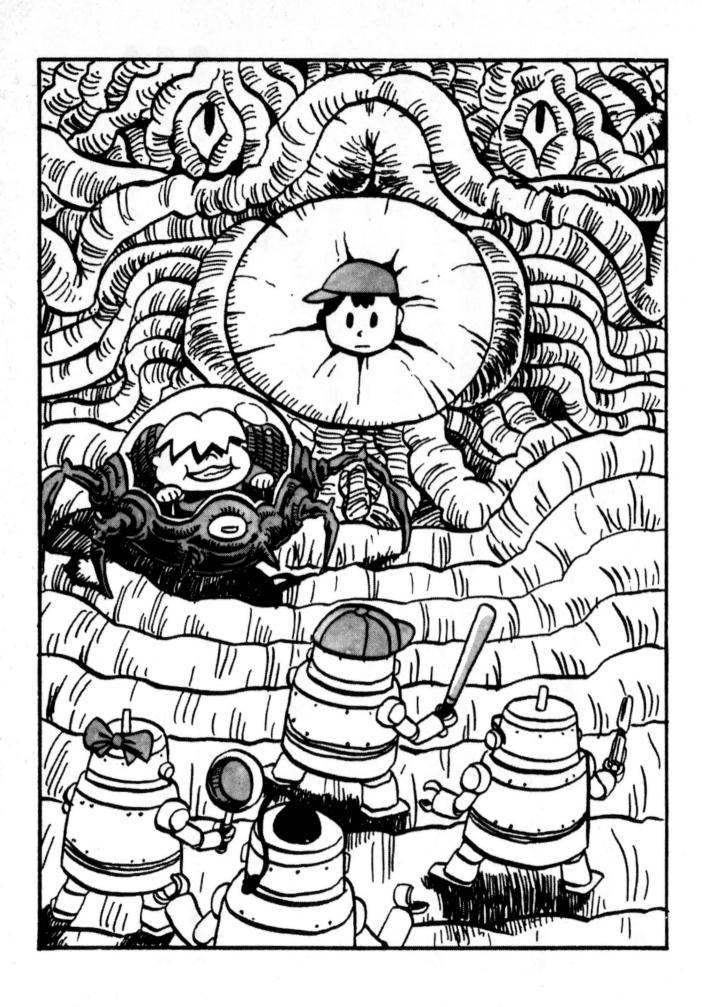
209

家の中では、ポーキーのパパとママが怖い顔で待ちかまえていた。
「ネス、うちのガキどもがどえらい迷惑をかけたようだね。2人ともおしおきだ！」
ポーキーのパパはそう宣言すると、ポーキーの首ねっこをつかんで隣の部屋へ。やがておしりをビシバシ叩く音が！　結局ポーキーは、百たたきを免れることができなかったわけだ。
「ふう。手が疲れちまった」ポーキーのパパは、なんとも不機嫌な表情でもどってきた。
「ところでネス、きみの家はいつ立ちのいてくれるのかな。ワシはきみのお父さんにずいぶん、金を貸してるんだけどな……」
「ほんと、正直ものが損する世の中だよ。あー、やだやだ」
ポーキーのママが嫌みたっぷりに言う。ぼくはじっと黙っていた。すると……。

「キー！　さっきから、ブンブンとうるさい便所バエだよ！　死んで地獄へお行き!!」
かんしゃくをおこしたポーキーのママが、いきなりブンブーンをはたき落とした。
ブンブーンはしばらくヨタヨタと飛んでいたが、しばらくして空しく床に墜落！。
あわててぼくが駆け寄ると、ブンブーンは文字どおりムシの息でこう言った。
「う……、わしは、思ったよりも、ずっとずっとかなり弱かった。だが、かまわずあんたは冒険の旅に出てくれ。いいか。最後に言っておく。ギーグを倒すには……、地球とお前の力を1つに合わすことが必要じゃ。この地球には、お前のパワーを揺り起こしてくれるスポット〝お前だけの場所〟が8つある。そのすべての場所を訪れるのだ。そのうちの1つは、このオネットにある。ジャイアントステップといわれる場所じゃ……。この石を持っていけ」
ブンブーンはぼくに石を1つ手渡した。
「これは音の石。〝お前だけの場所〟の音をしみこませるグレートなアイテムじゃ。うれしかろう……。もう外は夜明けのようなじゃのう。死んでいくわしには関係のない話だが……」
ブンブーンはそこまで言うと、ガクリと力つき、そのまま息絶えた。
よりによってポーキーのママにはたき落とされて死ぬなんて……。グッスン。
だけど、いつまでも悲しんでばかりはいられないぞ！　何しろぼくには、ギーグを倒すという重大な使命があるんだから!!　死んだブンブーンのためにも、きっとこの使命は達成してみせる。天国から見ていてくれブンブーン！

◆『音の石』を入手した。アイテムリストにチェックして……………………57へ

210

休憩を終えたぼくらは、いよいよギーグ目ざして、くねくねの道を歩き始めた。が、やがて、この道さえもがギーグの体の一部だったことに気付く。ぼくらの前に姿を現したギーグは、脳ミソのようにうねうねした体を持った、不気味な生命体だった。
が、それよりももっと驚いたのは、なんとあのポーキーが重装備に身を包み、ギーグの横で、ニヤニヤと笑みを漏らしていたことだ。
「やあ、ネス……」重装備ポーキーが、スピーカーを通して、ぼくに話しかけてきた。
「ロボットの姿になってまで、こんなところに来るとはご苦労なことだ。でも、見てくれよ。ギーグ様のこの強そうな姿を！　キミたちの力で、倒すことができるのかな？」
「でも、ギーグの持ってる知恵のリンゴは、わたしたちの勝利を予言したんでしょう？」
ポーラが負けじと言い返す。すると、ポーキーは、再びニヤリと笑って言い放った。
「ふふふふ。それは、ギーグ様が1人でキミたちと戦った場合のことだろ？　でも、この戦いにオレが入ったら？　どうなるかわからないよねえ……。さあ、無駄口をきいていてもしょうがないだろう。まずは、キミたちから攻撃しておいでよ。あ、言っておくけど、ギーグ様にはPSIなんて通じないからね……」

ポーキーは、いやらしい笑いを浮かべて、ぼくらを挑発する。

◆『マジカントバット』と『楽しいフライパン』は?

●両方ある……………………43へ　●マジカントバットのみある……36へ
●楽しいフライパンのみある……………………………67へ

211

ぼくらはポーラ抜きで戦うしか方法がなくなった。ゲップーは調子にのって、臭いゲップを連発した。あまりの臭さに鼻が曲がりそうになる。

「ぐぇぇぇぇぷ！　ぐぇぇぇぇぷ！　いい臭いだろ、ガキども！」

勝ち誇るゲップー。ぼくの怒りは頂点に達した。「でぇぇぇえい！」

臭さで目がかすんでいたため、バットをむちゃくちゃにふりまわしてゲップーにとびかかっていった。やけくそ気味の攻撃だったけど、これが見事にまぐれ当り。

「ぐあああああああ！」

ゲップーは臭い息をまき散らしながら、身もだえる。そこへジェフがバンバンガンを発射して、なんとかとどめを刺した。ゲップーはたまらずどこかへ逃げ去っていた。

勝つには勝ったが、ほんと、今回ばかりは苦労したよ。体には、ゲップーの臭いがしみついているし。とほほほほ……（ＨＰマイナス１２）。

➡46へ

212

ぼくらは、おいしそうな匂いがするパン屋に入った。

●コンタクトレンズがあれば……559へ　●なければ……502へ

213

ぼくたちはホテルに向かった。その途中……。
「もしもし、あなたたち、お勉強は好きですか？」突然、学者風の男の人に声をかけられた。
「あんまり好きな方じゃないかもしれません」ぼくがそう答える。
すると、男の人は、「それはいけませんね。これをあげますから、たまにはお勉強してください」と、1冊の本を手渡した。わけがわからないまま、ぼくは本を受け取った。
本の表紙には、『どせいさんの辞書』という文字が書かれてある。どせいさんって何……？

◆ケにチェックする。『どせいさんの辞書』を入手した。アイテムリストにチェックして……270へ

214

「プー王子！　娘子などと道草などなさっていては、老師が嘆かれますゾ！」
娘の家に入ろうとしたところを、たまたま通りかかった城の従者にみつかってしまった。

いけない、いけないい。娘のかわいい笑顔に、つい気が緩んだんだ。
さて、今度こそ気を引き締めてと。

●無の場所へ……………………167へ　●村を歩く……………………126へ

215

「ええ、持ってきましたよ」すかさずポーラが、ゲップーにはえみつを手渡す。
「グェ――プ。わしはこれには目がないんじゃあ。あ――、ゲップが出る」
はえみつを受け取ったゲップーは、ゲップを連発しながら、ビンのふたを開け、これをピチャピチャと音をたててなめはじめた。まったく、お下品なんだから……。
しかし、ゲップーがはえみつに気を取られている今がチャンス！

◆アイテムリストから『はえみつ』を消して

●ミスターのバットがあれば……23へ　●なければ……………………444へ

216

ネス……ネス……ネス……。「ネス！　しっかりして!!」
聞き覚えのある声で、ぼくは目を覚ました。目の前に、ポーラの顔がある。ゆっくりと体を起こすと、ジェフやプーも心配そうにぼくを見守っていた。「ここは……？」

「ファイアースプリングスよ。ネスったら、パワースポットの音を聞いてすぐに倒れて……」
そうか……マジカントは、ぼくの心が見せていた世界だったんだっけ……。ぼくは、心の中で旅をしていたってことだ……。
「よし、行こう！」ぼくは立ち上がると、久しぶりに見た懐かしい仲間たちに言った。
「行くって、どこに？」ジェフが、不思議そうな顔で尋ねてくる。
「サターンバレーだよ、サターンバレー！　理由は、行きながら教えるよ」
わけがわからない、という表情の3人を引っ張り、ぼくは外へと向かった。

⬇571へ

217

「任せとけっ！」
叫びざま、プーが剣を勢いよく叩きつけた。さっき手に入れたばっかりの王者の剣だ。ものすごい速さで繰り出された剣は、狙い過たず敵の急所にズブリ！　敵は往生際悪く、最後の攻撃を放ったが（HPマイナス4）、そのままバタリと息絶えた。
しかも、この戦いで、プーが、シールドΩを覚えた。味方全員に反撃のシールドをかける頼もしいPSIだ。
◆プーが『シールドΩ』を習得した。PSIリストにチェックして

…………162へ

218

「よし、このまま一気に勝負だい！」
弱ってきている巨大アリに向かって、さらにPK必殺をおみまいした！
グワッ！　巨大アリの足がよろめいた。効いてるみたいだぞ！

◆Sもしくはクにチェックは？

●どちらか一方にある……362へ　●どちらにもない……346へ

219

バットでいきなりトンチキさんを殴った。しかしトンチキさんはニヤニヤ笑っているだけだった。気持ち悪くなったぼくは、さらにトンチキさんをめった打ちにした。
「どうした、どうした、お前の力はこんなものか！」
トンチキさんはあいかわらず手を出してこず、ニヤニヤ笑っているだけ。ぼくの方もいい加減疲れてきて、ゼーゼー息が切れる始末(HPマイナス2)。そうこうするうちに、バットの一撃がスマッシュヒットになり、トンチキさんがバッタリ倒れた。

⬇35へ

220

ドッゴーーーン！　バズーカ炸裂!!　ぼくたちは勝利を確信した。ところが！

少しボディがへこんだものの、油断ロボは何事もなかったかのようにぼくに迫ってきた！
ヤツはフラフラとぼくらの攻撃をかわし、逆にすきを見てはパンチやら体当りを繰り返す。
こいつ見かけと違って強いぞ！　もはやこれまでか!?

⬇134へ

221

結局何も買わずにドラッグストアの外へ。そして雪原を南へ南へと歩いた。

⬇107へ

222

気が付いたとき、ぼくらは薄暗いジメジメした部屋に閉じこめられていた。
ドアにはカギがかかっており、押しても引いてもビクともしない。
「どうしよう、ポーラ。完全に閉じこめられたよ……」
「ネス、今のわたしたちを助けられるのは、まだ会ったことのない仲間だけよ……」
ポーラはそう言うと、目を閉じ、両手をあわせて、一心に祈りはじめた。
「ジェフ、ジェフ……。まだ会ったことのないわたしの仲間……。ジェフ、ジェフ、わたしはポーラ……。そしてネス……。わたしたちはあなたの助けを必要としてます。ジェフ、ジェフ、このメッセージを受け取ってください。ジェフ、ジェフ……」

⬇114へ

223

1匹目のぐちゃぐちゃめがけてバットを振りおろす。ネチャッといやな手ごたえがして、1匹目を倒した。ジェフもすかさずバンバンガンで攻撃。1発でしとめた。だが、ポーラのフライパンの一撃は、空振り。ぐちゃぐちゃは、きたない粘液をポーラに向かって飛ばす。
「いやーん！」ポーラはあまりの汚さにしゃがみこんでしまう。
だけど、ぐちゃぐちゃの反撃もここまで。ヤツはぼくのバットの一撃であえなくダウン。白旗をあげた。が──。勝つには勝ったものの、やつらが飛ばした粘液の臭いがぼくらの体にしみついてしまう。体に別状はないものの、3人ともなんともイヤな気分に陥ってしまった（HPマイナス5）。

➡400へ

224

ストーンヘンジには、不気味な雰囲気が漂っていた。しばらく歩くと、ぶきみな鉄のこけしが、ぼくらのゆくえを阻むように立ちはだかっているのが見えた。ぼくがこけし消しマシンを作動させると、こけしは、あの鉄のタコ同様、どこかへと消え去った。
「この奥には本当に、博士やトニーがいるんだろうか……？」と、不安そうなジェフ。
「わからないけど……きっとなにかヒントはあるはずだよ。さ、行こう」
と──！　いきなり目の前に、銀色に光輝く人型の生き物が現れた。

「スターマン……！　宇宙人(うちゅうじん)だぞ、気を付けろ！」
ジェフが、ぼくのうしろで叫(さけ)ぶ。
●HPが5以下なら……180へ　●6以上なら……264へ

225

さて、これからどこへ行こう？（1度行った場所へは行けません）
●市役所へ……161へ　●図書館へ……233へ
●病院へ……105へ

226

「そんなもの、持ってきてないよーだ！」叫(さけ)びざま、ぼくは、ゲップーに先制攻撃(せんせいこうげき)！
●ミスターのバットがあれば……111へ　●ければ……173へ

227

ぼくは、リュックの中からぬれタオルを出し、ジェフの額(ひたい)に乗せた。
「これで、様子を見てみよう」
楽になったらしいジェフはムクリと起き上がり、2、3回首を回すと、笑顔(えがお)を見せた。

「ありがとう。おかげで楽になったよ。もう大丈夫、先を急ごう」

➡243へ

228

左へ進んだぼくらは、まるでガラクタ置き場のような場所で、黄色いサブマリンを発見した。案の定、壊れていたが、ジェフがちょっと手を加えると、すぐ動くようになった。

「さらば穴の前まで持ってってたら、サブマリンの中に入ってくれやすか？」

右の方角から、ブリックロードさんの声が聞こえる。ぼくらは、サブマリンをひきずるようにしてさらば穴の前まで持っていくと、そのまま中に乗りこんだ。

「乗ったでやんすか？　ちょっと揺れるけど、我慢でやんすよ～」

ブリックロードさんの声が聞こえたかと思うと、ものすごい衝撃がサブマリンを襲った。

「きゃあああああああっ！」恐ろしい落下感に、ポーラの悲鳴が重なる。唐突に落下感がとぎれたかと思うと、サブマリンは海の上にいた。

「元気でね～～～」窓から見えるダンジョン男に向かい、ポーラが手を振る。ポーラの声が聞こえたのか、ダンジョン男も、こちらに向かって大きく手を振った。

➡110へ

229

ダンジョン男の作ってくれた日陰でしばらく休んだぼくらは、そろそろ行かなくてはと、

重い腰を上げた。そんなぼくらに、巨大なダンジョン男は、いっしょに連れてってくれとねだる。仲間になってくれるなら、ぼくらとしても大歓迎。ぼくら3人は、ダンジョン男と連れ立って、再び海を目ざした。が――。あと1歩で海、というところで、ダンジョン男が進めなくなってしまった。体が大きすぎて、狭いヤシのトンネルをくぐれないのだ。

「あっしは、ここまででやんすね。別にかまわないでやんす。では、さらばでやんす」

いやにあっさりと別れを告げるダンジョン男。ぼくらも口々に別れの言葉を述べると、海に向かってまっしぐらに歩いた。

でも。ようやく海に着いたというのに、ぼくらはそこから1歩も進めなくなってしまった。海には、船も飛行機も、とにかく、海を渡るためのものが、何1つなかったのだ。

「海を渡りたいのか？　なら、サブマリンがなくっちゃだめだな」

どこから来たのか海辺に立っていた男の人が、ぼくらにそう語る。

しかたなくぼくらは、ヤシのトンネルをもどって、どうしたのかと不思議そうな顔をするダンジョン男に相談してみた。すると――。

「サブマリン？　潜水艦でやんすね。あっしの体の中にあるでやんすよ！」

◆ここで、バトル対戦表を書き替えてもOK。『ダブルバーガー』があれば、食べてもよい。食べたらHPプラス10し、アイテムリストから『ダブルバーガー』を消して　…**291**へ

230

「愚かなり王子！」俺が立ち上がろうとしたとたん、あたりに老師の声が響き渡った。

「このようなことで心を乱していたのでは、無の境地にはとてもたどりつけませんぞ！　本来ならENDのところですが、今日の始めからやり直すことを許しましょう！」

◆アイテムリストに『王者のバンダナ』があれば消して

……………………182へ

231

ようやくピラミッドの前にたどりついた。が、案の定、扉は閉まっている。

「スフィンクスの方へ行ってみよう！」

ジェフが、ピラミッドの前にあるスフィンクスの方へすばやく走った。

あわてて、あとを追うと、一足先に到着していたジェフは、スフィンクスの前にある、5つのタイルを、じっと見つめていた。すると――。

「よく来た……」

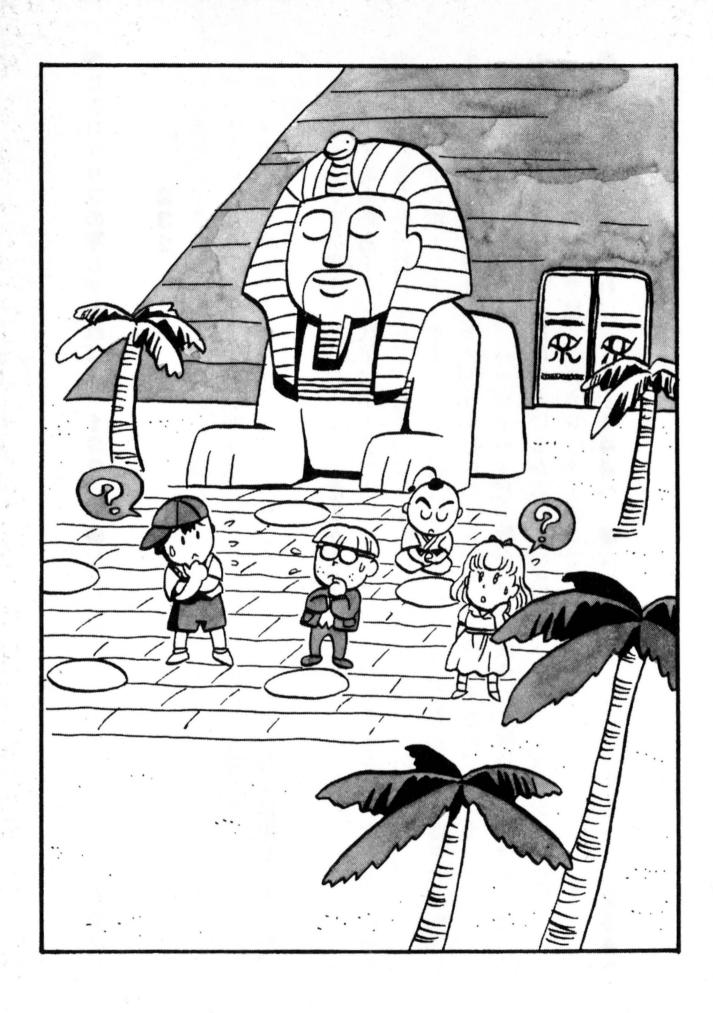
いきなり、スフィンクスがしゃべりはじめた。

「謎を解くがいい。さすれば、ピラミッドの入り口は、おのずと開くだろう……」

「謎……？　いったい……」

スフィンクスの言葉を聞いて、ジェフの顔がますます真剣になる。

●ヒエログリフの写しがあれば ……132へ ●なければ ……524へ

232

「いい買物ができたね！」と、ぼくらは喜んでエスカレーターに乗った。そのとき！
バッ！ いきなりデパート中の照明が消えてあたりはまっ暗に。停電か？
「め、メガネメガネ〜〜〜！」ジェフがメガネをなくしたらしい。いっしょに探そうとした、次の瞬間！
「イ、イヤアアアアア！」館内にポーラの悲鳴がこだました！
イヤアアあああ……。次第にポーラの声は遠くなり、やがて明りがついたときにはその姿はどこにもなかった。そして、悪夢のような館内放送が鳴り響いたのだった。
『ポンポンポンポ〜ン！ オネットから起こしのネス様。お友だちのポーラ様をお預かりしました。返して欲しければモノトリービルの48階までお越し下さい。ポンポンポ〜ン！』
「……かわいそうなポーラ。ハッピーハッピー教からこの前やっと解放されたばかりだってのに……。きっとぼくらが助けてあげるからね。なあ、ジェフ！ ジェ、ジェフ!?」
なんと、頼りのジェフは、エスカレーターの下でノビていた！

●いのちのうどんがあれば ……144へ ●なければ ……254へ

233

図書館を訪ねた。何しろここにくれば地図を借りることができる。そしてぼくは、ジャイアントステップのおよその位置を知ることができた。さあ、出発だ。

⬇137へ

234

ぼくはバットを巨大アリの頭めがけて振りおろした。ドカッ！　確かな手ごたえがあった。だけど同時に、ぼくの体に衝撃が走り、5メートルもふっとばされてしまった。

いたたたた……。巨大アリのタックルをまともにくらってしまった。

まずいことに体の自由がきかない。こりゃもう逃げるしかない……。

そう決心したぼくは、おもいきって崖の下へ身を躍らせた。ここにいてもアリにやられるだけ。それなら運を天にまかせて、崖下に落ちた方がましってもんだ。

「うわあー」悲鳴とともに崖下へ落下。でも、ほんとに助かるのかな。

⬇138へ

235

「とあああああ！」バットでいきなりトンチキさんを殴った。しかしトンチキさんはニヤニヤ笑っている。気味が悪くなったぼくは、さらにトンチキさんをバットで殴った。その一撃がスマッシュヒットとなり、トンチキさんはがっくりと地面に片膝をついた。

⬇35へ

236

山小屋に向かう途中、ぼくは、カーペインターさんの言っていた黄金像が、かつてライヤーさんの家で見た黄金像とそっくりだったのを思い出した。
「これはいったい……？　まさか、ライヤーさんもおかしくなってるんじゃないだろうな」
少し心配になったけど、今はポーラを助け出すことの方が先だった。

⬇340へ

237

翌日は朝早くから買物に出た。さっそくドラッグストアに入る。

●リボンがあれば……………45へ　●なければ……………84へ

240

ぼくらは、タコ消しマシンで鉄のタコを消し、先へ進んだ。

⬇450へ

241

とりあえずぼくたちは、最後にピッキーを見た場所、山のてっぺんにある隕石の落下地点を目ざすことに。どんどん坂道をのぼっていったところ、途中でライヤーさんの家の前にさしかかった。ライヤーさんってのは宝物探しの専門家、つまりトレジャーハンターで、この

小屋でひとり暮しをしている。ぼくは、このライヤーさんとはけっこう仲がいい。
そうか、ライヤーさんにピッキーを見なかったか聞いてみるのもいいな……。
でも、夜中にいきなり押しかけたら、やっぱり迷惑かな……。

●ライヤーさんの家に入る……33へ　●入らない……201へ

242

なんとか勝利したぼくだが、あまり喜んでもいられない。この先どんな強敵が現れるのかわからない。とにかく気を引き締めていかないとね。

◆クをチェックして……122へ

243

南にあるという海を目ざしてどんどん歩いていくぼくらの前に、突然、銀色に光る8本脚の不気味なロボットが立ちはだかった。
「マル・デ・タコだ！　こいつはビームを使うぞ！」ジェフが、警戒の声を発した。

●Yにチェックがあれば……68へ　●なければ……20へ

244

敵の恐ろしいビームは、ぼくの頭を直撃した。が、装備していた帽子ヘルメットのおかげで、ダメージ半減（HPマイナス2）。そのとき、プーがフワッと飛び上がり、叫んだ。
「ネス、避けろ！　PKスターストームっ！」
とたんに、天井が物凄い音をたてて崩れ、空から無数の星のかけらが落ちてきた。星は、石のつぶてのように、DXスターマンの全身を攻撃！
「ま……まさか……このオレ様がやられるとは……！」DXスターマンは、苦痛をこらえるようにしばらくうずくまっていたが、やがてバタリと息絶え、星のかけらの中に倒れふした。

●サにチェックがあれば……448へ
●なければ……514へ

245

まだまだお金に余裕があったので、ポーラに厚めのフライパンを買ってあげた。
「ちょっと重い分だけ、〝叩きがい〟があるわね♡」
ポーラはにっこり笑って、厚めのフライパンを振りまわしてみせた。

◆『厚めのフライパン』を入手した。アイテムリストにチェックして**……398へ**

246

「ポーラ、まずはプーだ！」ぼくの言葉に従って、ポーラがプーにサイコシールドをかけたとたん、敵の口から、キラキラ光る無数の粒が飛び出した。ダイヤモンドのようなその粒は、勢いよくポーラの体を取り巻く。とたんに、ポーラの動きが止まった。なんと彼女は、光を受けて輝くダイヤモンドの体にされてしまったのだ！

「ワハハハハハ……ダイヤモンド攻撃だ。手も足も出まい!?」

サイコシールドをポーラにかけておけばよかったと思ったが、すでに後の祭。ポーラ抜きで戦うのは、かなりつらそうだ、どうする？

◆『いのちのうどん』もしくは『いのちの角笛』は？

●どちらもない……………325へ　●いのちの角笛のみある……………273へ
●両方もしくはいのちのうどんのみある……………………………104へ

247

ぼくは、ひとまずママのところへ帰ることにした。ふらつく足を必死で動かし、なんとかママたちのところまでたどりついたとき、ぼくはもう息も絶え絶え（HPマイナス3）。ママは、まっ青な顔をしたぼくに驚き、すぐさま血清を打ってくれた。

「さあ、これで大丈夫よ、ネス……」5分もすると、さっきまでの寒気が嘘のようになくな

った。ようやくひと息ついたぼくは、ママたちに再び別れを告げ、橋に向かって歩きはじめる。このときになってぼくは、新しいPSI、パラライシスを覚えたことに気が付いた。「もっと早く覚えてれば、悪魔のディープキスを簡単に倒せたかも知れないのになあ」と、悔やんでみてもしかたがない。これからは、もっと積極的に敵と戦って、経験を積むようにしよう。決意も新たに、軽やかな足どりで先を急ぐ。

◆ネスが『パラライシス』を習得した。PSIリストにチェックして……………389へ

248

ぼくたちはサターンバレーに、捕われていたどせいさんたちを連れ帰った。
「あなたたち、げぷたおした。えらい、ほめてさしあげる、ぷー。いやいや、みなかんしゃです。いっぱい、それは、ほんとです。ぽえーん」
感謝感激、といった口ぶりで、どせいさんの1人が、ぼくにコインを1つくれた。それは表にどせいさんの顔が刻まれた、どせいさんのコイン。ぼくはありがたくそれを受け取った。また、別のどせいさんによれば……。「あなたたち、げぷたおしたとき、じしんありました。それでどうくつできた。あなたさがすもの、そのさきあるます。いくとよろしいぷー」
なんでも地震のあと、突如洞窟が出現し、それを通っていけば探しているものがみつかるというんだ。ぼくたちは、その言葉を信じて、洞窟の中に入ることにした。

◆『どせいさんのコイン』を入手した。アイテムリストにチェックして

●スキップサンドがあれば……401へ　●なければ……425へ

249

「なんだか、とんでもないことに巻きこまれちまったみたいだなネス」

ブンブーンを仲間に加えた帰り道、ポーキーがちょっと不安そうに言った。

「3人の少年って、オレも入っているのかなあ……。やだなあ」

と、突然、閃光とともに不思議な物体が出現し、ぼくたちの行く手をさえぎった。

「ヒサシブリダナ、ブンブーン。ギーグサマノケイカクヲブチコワスコトニ、キサマハムカシカラ、ネッシンダッタガ、ソレモキョウデオシマイダ……」

「き、きさまは、スターマンの息子！」ブンブーンが憎しみをこめて叫んだ！

「ブンブーン、オマエハカンチガイシテイル。キサマハ、エイユウデハナイ、タダノムシケラダ！　ソレヲイマカラ、オモイシラセテヤル！」

　スターマンの息子はいきなりぼくたちに襲いかかってきた！

◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはB、相手はE。相手よりも数値が……

●上……153へ　●下……41へ

250

ぼくは、残ったお金で大きな花束と、ママの好きそうなストライプのワンピースを買った。
店員さんにお金を支払うと、オネットへ向けてテレポートをかける。
ママ、ぼくはもうすぐ帰るよ……。

⬇エピローグへ

251

「うーん。ヌスット広場のトンチキさんなら、何か知ってるかもしれないなあ。何しろあの人の犯罪に関する情報はすごいからね」と、おむかいの家の男の人は言う。
その話を聞いたぼくは、さっそくヌスット広場に向かおうとした。すると……。
「もしもし。ヌスット広場に行っても、合言葉を知らなかったら、トンチキさんは会ってくれないよ。いいかい、『山』と言われたら、必ず『大きい』って答えるんだよ」
男の人は親切にも合言葉まで教えてくれた。ぼくはお礼を述べると、さっそく広場へ。

◆アにチェックして……**267**へ

252

ぼくたちは再びあの光る洞窟の前に立っていた。巨大モグラがのそりと洞窟から出てくる。
「また来たかネス。こりないヤツだ！」巨大モグラが襲いかかってきた！

●Aにチェックがあれば……………114へ　●なければ……………………324へ

253

オネットの宝物のことならライヤーさんだ！　さっそくライヤーさんの小屋を訪ねた。
「おう、ネス、よく来たな。実は最近こんなものを掘り当ててな。どうだすごいだろう」
ライヤーさんがぼくに見せたのは、普通の大人よりもひと回りでかい黄金像。それは、あのハッピーハッピー教団で見たものとそっくりのシロモノだった。
ツーソンにもどったぼくは、ライヤーさんの黄金像のことをトンチキさんに教えた。
「そうか、あの小悪党のライヤーがな……。ありがとうネス、よく教えてくれた。こいつを持っていきな。中に1万ドル入っている」
トンチキさんはそう言うと、ポーラにアタッシュケースを手渡した。

⬇298へ

254

なんてことだ。ジェフは息をしていない！　ぼくはジェフをかつぐと、大あわてで病院へ！
祈るような気持ちだった。やがて扉が開き、お医者さんが笑顔を見せた。助かったんだ！
ぼくは、お礼をいうと、診察台に横たわったジェフの側へ駆け寄った。
「……ネス、すぐにでもポーラを助けに行かなきゃいけないのに……ごめんよ……」

「何言ってるんだよ、ジェフ。キミが無事で本当によかった……」
「でもこれで、モノトリーが敵だってはっきりしたね。ヤツはギーグの手先かもしれないな」
「うん。とにかく、まずはモノトリービルへ行ってポーラを助けなきゃ！」

➡256へ

255

霊は、黙ったままの俺の体を引き裂いていった。不思議と悲しみや怒りは湧いてこず、激しい苦痛も何も感じなくなった……。気が付くと、俺は宮殿の公室に座っていた。目の前には、老師が目を潤ませて立っている。
「無の修行によくぞ耐えられました。これでこのイースーチーめがあなたにお教えすることは何もなくなりました」
そうか、修行は成功したのか。見ると、さかれたはずの俺の体は無傷だった。
「……王子、天のお告げを伝えまする。すべての邪悪な物を動かし支配する神が、歴史上最大の戦いを挑んでおります。これを受けて立てるのはネスという者を頭とする、たった4人の少年たち。そのうちのひとりが、プー王子……あなたです。最後の試練にうち勝った今、すぐにネス殿のもとへ飛んで下され！　人々のため、この世の平和のために！」
それは、はじめて聞く話だった。しかし、不思議なことに以前から決められていたことのように俺の心は、それを自然と理解した。

「さあ、これはイースーチーからのはなむけです！　何かのときにお開け下され」
老師は俺にたまて箱を1つくれた。中には小さなルビーが。俺はそれを脇に抱えると、まだ見ぬ仲間に思いをはせた。次の瞬間！　俺は見知らぬビーチに立っていた……。
◆『小さなルビー』を入手した。アイテムリストにチェックする。プーが『テレポート』を習得した。PSーリストにチェックして……………………………………**302**へ

256

ぼくとジェフはポーラを救うべくモノトリービルへ！　しかし、どうしても47階から先へ進めない。とにかく情報収集をしようということになり、ひとまずモノトリービルから退却。街の人から話を聞くのもいいし、酒場もなんか怪しかったから行ってみる価値あるかも。
●街を探索……………………**384**へ　●酒場へ行く…………………………**336**へ

257

すぐさまダッシュ。幸い、不良は追ってこず、なんとか逃げきれた。
⬇**185**へ

258

しかし巨大アリも最後の気力をふりしぼって逆襲に転じてきた。まずい！

●殺虫スプレーがあれば …………170へ ●なければ …………234へ

259

と、そのとき――。エデンの海が、きらきらと不思議な光を放ちはじめた。光は、徐々にこり固まって、ぼくの全身を包む。今まで回ってきた、8つのパワースポットの力が、ぼくの体の中にみなぎるのがわかった。ジャイアントステップ、リリパットステップ、ミルキーウェル、レイニーサークル、マグネットヒル、ピンククラウド、ルミネホール、そして、フアイアースプリングス……。8つのパワーが、ぼくの中でどんどんふくらんで――。

ぼくは、新しい力に目覚めた。さらに強力な必殺技を覚え、レベルアップしたのだ！

『ネス……ネス……。新しいPSI、PK必殺Ωの使いかたには気を付けなさい。体力を消耗するPSIですから……わかりましたね。さあ、仲間たちのところにもどるのです。そして、サターンバレーに行きなさい……』

サターンバレーへ……サターンバレーへ……サターンバレーへ……。

その声を聞きながら、ぼくはいつしか意識を失って……。

◆レベルが8に上がりました。レベル8対応のHPチェック表に切り替えます。ネスが『PK必殺Ω』を習得した。PSIリストにチェックして …………216へ

260

「これをくらいなさーい」カーペインターはこりずにまた雷を落とした。だけど、フランクリンバッヂをつけたぼくには通用しない。
「平気だねー」ぼくはバットでカーペインターの頭をゴツンゴツンゴツンと3連発した。
カーペインターも負けじと殴りかえしてきたが(HPマイナス1)、バットの3発の前にあっけなくのびてしまった。

➡308へ

261

うらカンポーを買った。気絶やカゼなどさまざまな症状を、1発で治してしまう素晴らしいアイテムだ。でも、これでお金はほとんどなくなってしまった。

◆『うらカンポー』を入手した。アイテムリストにチェックして ……310へ

262

さらに進むと、やがて前方に洞窟が見えてきた。
「あの中に、ギーグがいるのかしら……?」ポーラが、誰にともなくつぶやく。と――。
「そうだ。我らが王ギーグ様は、この中におわす! そして、我こそはギーグ様の近衛だ」
洞窟から、肩と頭にとげのある最後のスターマンが現れた。全身が金色に輝いている。

最後のスターマンの体が、いっそう激しく輝いた。あたりに殺気が満ち溢れる！
「みんな！　ヤツを倒さなくっちゃ、先に進めない！　行くぞ！」

➡342へ

263

受付にグルメ豆腐マシンを持ってきた旨を話すと、重役用エレベーターで48階へ！
「助かったわ！　これでポーキー様にイチゴ豆腐がお出しできるわ！」
秘書さんはグルメ豆腐マシンをもぎとるようにして受け取ると、厨房へ向かってかけ出した。そんな、重要な客がポーキーにだったなんて……。アッ！　それよりも!!
「待って！　モノトリーは、そしてポーラはどこ!?」
と、叫んだがもう遅い。ぼくたちは自力で捜すことにした。
幸い、ガードマンやらボディガードやらにみつかることもなく、ぼくたちは『社長室』とプレートが貼られた扉にたどりついた。ノブに手をやり、そっと回す。

➡287へ

264

いそいで防御体制をとったぼくらに向かい、スターマンは不敵の笑みをみせた。
「ふふふ……今さらムダな悪あがきを、くらえっ！」
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはB、相手はC。相手よりも数値が……

●上 ……662へ
●下 ……143へ

265

洞窟から出ると、そこは峡谷地帯だった。谷間をさらに進んでいくと、今度は目の前に2つの洞窟が……。右と左、どっちの洞窟に入る？

●右の洞窟に入る ……42へ
●左の洞窟に入る ……361へ

266

崖っぷちの溶岩が固まって冷えているところを渡ったぼくらは、ついに、パワースポットを発見した。モンスターの姿は見えないが、白い光が凝っていて、まるでぼくらを待ちかまえているようだ。でも問題が1つ。よりによってパワースポットへの通り道が、溶岩の池で塞がれていたのだ。溶岩を泳いで渡ることもできず立ち往生していると、突然、溶岩の池の中心がボコッと膨れあがり、人のような顔を作った。そして溶岩の顔は口を開いた。

「溶岩し～んはあるかね～？　あったら、ここに投げるといいぞ～」

溶岩し～ん？　溶岩し～んって、ここに向かう途中で出会ったグミさんが言ってたヤツ？

●赤い石があれば ……332へ
●なければ ……78へ

267

ヌスット広場に到着。広場では、多くの人たちが露店を開き、いろいろな物を売っていた。
でも、いつまでも道草を食ってるわけにはいかない。ぼくは露店商を1人捕まえて、トンチキさんに会わせてもらえるように頼んだ。
「なに、親分に会いたい？　よし、合言葉が言えたら会わせてやろう。『山』？」
えーと、えーと、なんて答えればよかったんだっけ……。

●アにチェックがあれば……315へ
●なければ……19へ

268

左へ折れ、舗装されていない、むきだしの土の道をまっすぐ進む。しばらく行くと、大きな土の山に行く手を阻まれた。しょうがないからもどろうと、Uターンしたぼく。
「待たれよ！」威勢のいい声がしたのは、そのとき！　驚いて山の方を見ると、サイコロのような体にシルクハットをかぶった、妙な形のモンスターが、ステッキを振りまわしている。
「私は浮気なダイス。逃げずに、正々堂々と戦いなさい！」そいつは、ぼくにそう叫ぶ。
「別に逃げやしなけどさ……浮気なダイスって、なんで浮気なの？」
「それは……ええいっ！　そんなことを説明している暇はないっ！　行くぞ！」
浮気なダイスは、土の山から身軽に地面に降り立ち、飛びかかってきた!!

◆バトル対戦表で戦います。ネスはC、相手はA。相手よりも数値が……
●上 ……………………349へ ●下 ……………………297へ

269

ぼくはパパに電話してみた。
『やあネス元気かい？ なに、1万ドル？ そいつは無理な相談だよ、ハハハ』
やっぱり無理だった……。

⬇141へ

270

ぼくたちはホテルに着いた。昨日からとってある部屋に入ろうとしたところ、突然ロビーで女の人に声をかけられた。
「トンチキさんから伝言を頼まれましたが、ここでは何ですから、わたしの部屋へどうぞ」
女の人は、髪が長く背の高い人で、口紅の鮮やかな赤さが印象的だった。
ぼくたちは言われるまま、彼女の部屋に付いていった。だが部屋に入った瞬間……。
バサリ！ いきなり袋のようなものをかぶせられた!! 目の前がまっ暗に！ ぼくたちはそのまま縛りあげられ、どこかへ運ばれていった。いったい……。

⬇222へ

271

勇気を出して唸り声のする方に進んでみると、そこは、一面に青く輝く石が落ちている場所だった。唸り声だと思ったのは、細道を吹き抜ける風の音だったようだ。

ぼくは、てごろな大きさの青い石を1つ掴むと、ズボンの左ポケットにしまった。

◆『青い石』を入手した。アイテムリストにチェックして……………**152**へ

272

チカチカする光の中へ進んでみると、ぼくらはマンホールの外へ出た。そこにはきれいな石の置物があり、優しい音楽が流れていた。ここがマグネットヒルか……。音の石にその音楽を記憶させる間、ぼくには一瞬、哺乳瓶が見えたような気がした。ぼくら全員の体が、パワースポットの力で満たされていく……。ふと気付くと、石の置物の脇にプレゼント箱が置かれていた。なにかと思い開けてみると、中には大きなニンジンが入っていて『うさぎごのみのニンジン』と書かれたメモが添えられていた。はて？　これは何に使うんだろう。ぼくらが食べちゃっていいもんなのかな……。ぼくらはニンジンを前に首を捻る。

◆HPを現在のレベルの最大値まで回復させて

●セにチェックがあれば………**634**へ　●なければ……………**163**へ

273

「そうだ、これがあったんだ！」プーとジェフが、ダイヤモンドドッグの攻撃を防いでいる間に、ぼくは急いでいのちの角笛を取り出し、願いをこめて吹いた。太く穏やかな音色が、あたりに響き渡る。とたんに、堅く冷たかったポーラの体が温もりと柔らかさを取りもどした。
「あれ？　ネス？　わたし、どうしちゃったの？」
「説明は、ダイヤモンドドッグを倒した後だ！　ポーラ立てる？」
何が起こったかわからず呆然とするポーラを、ぼくは急かして立ち上がらせた。
◆アイテムリストから『いのちの角笛』を消して……………………659へ

274

翌朝、ぼくは新聞で、ツーソンへの封鎖が解けたことを知った。
「ツーソンか……。そういえば、夢の中の女の子は、ツーソンのポーラスター幼稚園にいるって言ってたっけ……。よし、決めた。ツーソンへ行こう」
「まあ、ネスちゃん、ツーソンに行くの？　わかったわ。あなたの思ったとおりにしなさい」
ママは、ぼくを快く送りだしてくれた。妹のトレーシーも見送ってくれた。
「おにいちゃん、元気でね。実は、わたし今日からエスカルゴ運送でアルバイトすることになったの。よかったら利用してね。わたしは、いつでもお兄ちゃんの無事を祈ってるわ」

ぼくが新たな冒険への1歩を踏み出そうとしたそのとき、突然、電話のベルが鳴った。ママがあわてて電話に出る。どうやら電話はパパからのようだった。ぼくはママにかわって電話に出た。
『ネスかい。パパだよ。ママから話は聞いたよ。これからいろいろな困難にあうだろうが、自分の力を信じて頑張りなさい。お金は時期を見て、口座に振り込んでおくから、うまく使って冒険の旅に役だててくれ。パパは、いつもお前のことを誇りに思っているよ』
パパはそう言うと、電話を切った。受話器を置いたぼくは、改めて家の中を見回した。なぜか、このまま家を出るとしばらくは帰ってこれないような予感がしたからだ。
ぼくは自分の生まれたこの家をしっかり瞼に焼きつけると、そのままママとトレーシーに別れを告げて外に出た。いよいよ本当の冒険の旅を始めるときがきたんだ。

⬇3へ

275

ぼくたちは、ついに力尽きた。薄れていく意識の中で、次々と倒れる仲間たちの姿をぼんやりとながめる。みんな、ぼくが頼りないばかりに……ごめん……。
はっ。気付くと、ぼくは、病院の中にいた。看護婦さんが、うれしそうにぼくを見る。
「ああ、やっと気が付いたのね。よかったわ。お友だちはみんな元気に回復しているわよ」
看護婦さんの言葉が終わらないうちに、ポーラたちがどやどやと病室に入ってきた。

「ああよかった、ネス！　なかなか気付かないから、ちょっと値の張る薬を使ってもらったのよ。さっき、ネスのパパから100ドル振り込みの電話があったの。全部治療費に使ってしまったけど、しかたないわよね？」
ぼくは、ポーラに向かってうなずくと、ベッドを降りた。先生たちにお礼を言って外へ出たぼくたちは、ここがダンジョン男の体の中の病院だったことに気付いた。
「みなさ〜ん！　気をつけて進むでやんすよ〜！」
テレポートでウィンターズへ向かうぼくたちに、ダンジョン男が大きく手を振った。
◆HPを現在のレベルの最大値まで回復させる。シにチェックをして
●タにチェックがあれば……30へ　●なければ……388へ

276

王家の石像は、ピラミッドへの侵入者を倒すために置かれたものだと、ジェフが戦いながら説明してくれた。つまり敵はそれぐらい強いヤツなわけで……（HPマイナス4）。
でも、ぼくらだって、だてにここまできたわけじゃあない！
「みんな、少し下がって！」叫びざま、ぼくはPK必殺を、敵のおなかに叩きこんだ。
「ぐわあああああっ」断末魔の叫び声をあげながら、ゆっくりと崩れ落ちる王家の石像。
床に倒れた敵は、堅い石のかたまりとなって、本来の動かない石像にもどった。

◆Cにチェックして……………………300へ

277

ジェフが、アンチPSIマシンを作動させ、マッドサインの攻撃を封じこめた！　そこに、プーの拳が炸裂！　勝負は瞬時に決った。会ったばかりのぼくらだけれど、チームワークはバッチリさ！

➡6へ

278

「きったないわねえ、もうっ！」

3人の中で一番すばやいポーラが、いきなりゲップーにフライパン攻撃を繰り出した。ゴオ～～～～～～～～～～～～～～～～～ン！　次いでぼくが、ガッツのバットを力任せに振りまわす。しかし、ゲップーには、強烈な攻撃があった。

「よくもよくもこのわしに！　くらえ～～～～～～っ！」

グエ――――――ップ……グガゲ…ッ！　気味の悪い音とともに、とんでもなくくさい臭いが、ぼくらの鼻を直撃する。ううう……くっさい……。（HPマイナス3）

「よ、よし……つ、次はボク……だ……」苦しげな息づかいで、ジェフが攻撃体制に入った。

●ペンシルロケット5があれば……48へ　●なければ………………120へ

279

湿地をしばらく進むと、前の方の陸地に人影が見えた。おそるおそる近づいてみると――。
「おやっ？　こんな魔境の奥で、かわいらしいお客さんだねえ。おっと心配はいらない、オレは闇商人さ。他よりも安く売ってるから、内緒にしといてくれよ。さ、何を買う？」
緊張していたぼくらは、愛想のいいお兄さんの声に、思わずホッ。
「今、800ドルあるのよね？」買い物好きのポーラが、うきうきと商品に近づいた。
◆『素敵なフライパン』と『ガッツのバット』は？
●両方ある……………516へ　●ガッツのバットのみある……666へ
●素敵なフライパンのみある……………………379へ

280

ぼくらは、連れ立って街を歩きはじめた。そして、すれ違う人たちに、情報を聞いて回る。
街の人々によると、スカラビの南の方に、大きなピラミッドとスフィンクスがあるということだった。でも、ピラミッドの入り口は、1000年以上も開いていないらしい。
「それから、こいつは噂なんだけどさ……」ぼくらに親切にしてくれた若いお兄さんが、信じられない話をしはじめた。ピラミッドのある場所よりもさらに南、大きな川を越えた向こうには、ダンジョン男という謎の建物があること。そして、そこよりもっと南、広大な海の

途切れるところには、魔境と呼ばれる謎の地があることを。
「ダンジョン男……？」お兄さんと別れたあと、ジェフが変な顔をして考えこむ。
「ジェフ、なんか、心当りがあるの？」
尋ねると、ジェフは「いや」と言って、いつもの冷静な顔にもどった。と、そのとき——。
「ようよう、そこ行く4人の坊っちゃん嬢ちゃんたち。とっておきの情報があるんだがね。大まけにまけて100ドルでどうだい？」
スカラビの街の情報屋さんが、大きな声でぼくらに話しかけた。

◆ソにチェックして

●Jにチェックがあれば……**191**へ　●なければ……**376**へ

281

フランクさんがすばやくナイフを繰り出した！　間一髪、ナイフをかわす。

➡**345**へ

282

ぼくは、リュックの中からタカの目を出し、空に向かって高く掲げてみた。と——。
ふいにぼくらの視界が開けた。さっきまでまっ暗だった密林に、まるで光が入りこんだかのようだ。しかし、単純に喜んではいられない。ここから先が本当の魔境なのだから……。

「さ、先に進もう」ぼくらは再び、魔境を奥へ奥へと歩きはじめた。
◆アイテムリストから『タカの目』を消して……………………………421へ

283

ぼくは再びグレートフルデッドのあの鉄のタコの前にやってきた。
さっそくアップルキッドからもらったタコ消しマシンのスイッチを押してみる。
ビビビビビ――とマシンに振動が走ったかと思うと、あら不思議、道を塞いでいたタコは一瞬のうちにあとかたもなく消え失せてしまった。
タコさえいなくなればこっちのもの。ぼくは川沿いの道を上流へと進んでいった。しばらくすると橋が架かっているのを発見。この橋を渡って向こう岸へ。
景色のよい渓谷地帯をさらに進んでいくと、いきなり見晴らしのよい場所に出た。そこであたりを見回していると、少し離れた谷間に小屋があることに気が付いた。
あれが、トンチキさんの言っていた小屋なのかな？　でも小屋に行くには、険しい谷を降りていかなければならない。行って確かめてみる？
●谷を降りて小屋に行ってみる　…371へ　●他の道を探す　……………12へ

284

リリッパットステップに向かうため、ハッピーハッピー村の東にある洞窟に入った。
広い内部は起伏が激しく、ところどころに泉が湧いて出ている。
複雑に入り組んだ内部を進んでいくと、道が2つに別れている！　正面の道と、右への細い脇道だ。正面の道には、なんだか動物の骨らしきものが散乱しているが……。

●正面の道を行く　……………196へ　●脇道へ行く　……………60へ

285

「あぶないネス！」ポーラがフライパンを振りまわして、巨大モグラに突っこんでいった。
だが敵は、フライパンを簡単にかわして強烈パンチ！　ポーラはたまらずノックアウト!!
まずい！　ぼくにはもう戦う力は残されていない。逃げるしかない……。
そう決心したぼくは、意識のないポーラをかついで、その場をスタコラと逃げだした。
痛む足をひきずりながら、ぼくたちはなんとかハッピーハッピー村の病院にたどりついた。
「これでもう傷は大丈夫。ケガをしたら、いつでもここに来てくれよ、ネス。きみは何といってもこの村の恩人だ」
先生はそう言って、決して治療費を受け取ろうとしなかった。
「いろいろとありがとうございます！」

ぼくたちは、お礼を言って、病院を出た。
さあ、もう一度、巨大モグラに挑戦だ。

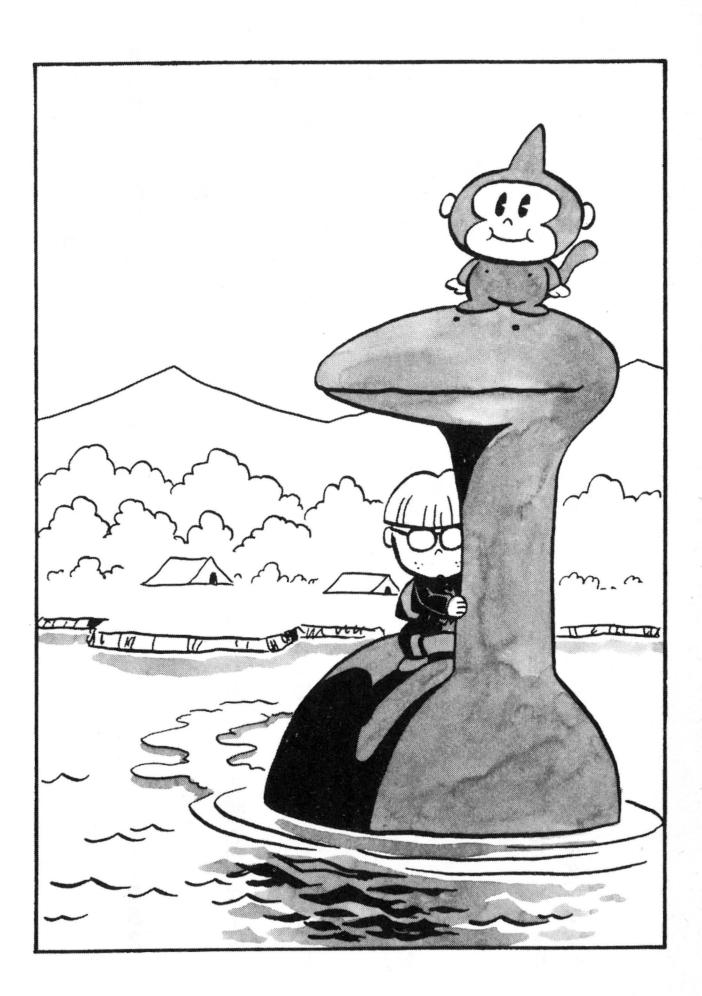
◆HPを現在のレベルの最大値まで回復させて……………252へ

286

タッシーは、快くボクたちを背中に乗せてくれた。おかげであっという間に湖の対岸に。
雪の原をバルーンモンキーといっしょに進んでいくと、なんだかダンジョンらしきものに入りこんでしまった。
ダンジョンの入口には、『ようこそ、わたしの低予算ダンジョンへ。ブリックロード』という立て札が。気を引き締めて入ったが、低予算というだけあって、中はいくつもの大石を転がして作った簡単な迷路。あまり迷うこともなく、あっさり通過してしまった。
「ちょっと簡単すぎやしたかな……」
迷路を出たところで、突然おじさんに声をかけられた。
「あっしはブリックロードっていうダンジョン職人でやんす。予算が足りなくて、あっさりとしたダンジョンになってしまいやしたが、もっと修行して、いつか自分自身がダンジョン男になってみせやすぜ。そのときまたお会いしやしょう!」

「ぜ、ぜひ頑張ってください……」

⬇629へ

287

扉を開けると、そこは待合室で、さらに奥に扉があった。いよいよ、モノトリーとご対面と、思いきや、部屋のすみにいたロボットが、ぼくらを見つけてスーーッと近寄ってきた！
『ワタシハ油断ロボ。アナタノコード番号ハ？　10秒以内ニ答エナケレバ排除シマス。10、9、8……』と、メタル音が響く。もちろん、ぼくたちにコード番号なんかあるわけない。でもコイツ、ちっこいし、ポヨヨンとしてて弱そうだな。こいつなら楽勝かも！

●バズーカ砲があれば……………220へ　●なければ……………………207へ

288

「オジさん、シャンとして！」ぼくのバットとポーラのフライパンが困ったオジサンに炸裂！
「……ワシャ何しとったんだ……」目を覚ましたオジさんは、スタコラ家へ帰って行った。
この戦い（？）でポーラはＰＳＩ攻撃から味方の身を守る『サイコシールド』を身につけたようだ。やったね！

◆ポーラが『サイコシールド』を習得した。PSIリストにチェックして　………103へ

289

「初めて負けたぜ……」よろよろと立ち上がったフランクさんは、素直に負けを認めた。
「こうなったらもう、俺たちもおとなしくするしかないな。ネス、おまえ、ジャイアントステップへ向かうんだろう。あそこはある種のパワースポットで、特定の人間に何かをもたらすようなエナジーがあるらしい。しかし、あそこにはパワースポットの影響を受けた化け物がうじゃうじゃいる。気を付けな。健闘を祈るぜ」

➡353へ

290

ジメジメして、悪臭漂う下水道を進む。と、背中の方で、なんか妙な気配が……。
振り返ると、小さな半透明のような物がふわふわとついてくるじゃないか。
「ああ、これはミニミニ幽霊だ。どうやらぼくたちはとり憑かれたんだな、うん」
と、ジェフが冷静にいう。特に害もなさそうだし、ま、いっか！
ぼくたちは、幽霊をくっつけたまま、さらに奥へと進んだ。
すると、薄暗い中に、チカチカと光が見えてきた。そしてその前には、学芸員さんが言ったとおり、巨大ネズミがズオオンと立っていた。
「ここは5番目のおまえの場所マグネットヒル。でも今は私の場所だ、取り返せるかな？」
「もちろん！」

●先制攻撃(せんせいこうげき)をしかける……………663へ　●シールドαを張る……………424へ

291

ぼくらは、さっそくダンジョン男の体の中に入れてもらった。
「いいでやんすか？　最上階にはあっしの顔があるでやんすから、そこまで来てくだせえ」
簡単(かんたん)に相談を済(す)ませたぼくらは、くねくねと曲がったダンジョン男の体の中を歩きはじめる。しばらく進むと、左と右に道が分かれる場所に行きあたった。

●右へ進む……………650へ　●左へ進む……………541へ

292

フーセンガムを買うと、本当にバルーンモンキーがおまけについてきた。
よくわからなかったが、とにかくボクは、バルーンモンキーを連れて南へ向かった。

◆Tにチェックして……………107へ

293

ぼくは、リュックの中からすっきりハーブを出し、ジェフの口に含(ふく)ませた。
ジェフは、しばらく苦しそうにしていたが、やがてムクリと起き上がり、笑顔(えがお)を見せた。

「ありがとう。おかげで楽になったよ。もう大丈夫、先を急ごう」

⬇**243**へ

294

敵の恐ろしいビームは、ぼくの頭を直撃した。とたんに、頭の中がまっ白になり、あまりの痛みに気を失いそうになる（HPマイナス5）。と、そのとき——！

プーがフワッと飛び上がり、叫んだ。「ネス、避けろ！　PKスターストームっ！」

とたんに、天井がものすごい音を立てて崩れ、空から無数の星のかけらが落ちてきた。星は、石のつぶてのように、DXスターマンの全身を攻撃！

「まさか……このオレ様がやられると……は……！」DXスターマンは、苦痛をこらえるようにしばらくうずくまっていたが、やがてバタリと息絶え、星のかけらの中に倒れふした。

「ネス、見て！　これを早く装備してみて！」

ポーラが、倒れたDXスターマンのうしろに回り、そこにあったプレゼント箱をちゃっかりと開けている。中には、ぼく専用の防具、帽子ヘルメットが入っていた。

◆**『帽子ヘルメット』を入手した。アイテムリストにチェックして** ……………**562**へ

295

テレポートの瞬間、マッドサインに突っこまれたぼくらは黒焦げ！（HPマイナス1）

でも、チームワークでどうにか勝利!! しかもジェフが、スクラップになったマッドサインの残骸でアンチPSIマシンを作ってしまった！ さすが!!

◆『アンチPSIマシン』を入手した。アイテムリストにチェックして……………6へ

296

宿を出たぼくたちは、怪力グミさんのところへと急いだ。夕べ寝る前に相談して、大岩の下の洞窟を探索しようと決めたのだ。なんでもこの下には不思議な光を放つルミネホールという場所があるとか。もしかしたら、そこが7番目のパワースポットかも知れない……。
「わたしたちグミ族は、その光の場所から先へは進めないんです。でも、あなたたちなら」
おしゃべりグミさんは、期待に満ちた目で、ぼくらの顔を見回した。

●穴に飛びこむ……………192へ ●もう少し村を探索する……………611へ

297

浮気なダイスは、ステッキでぼくの頭をゴンゴンと叩き、突然、仲間を呼んできた。ぼくは、浮気なダイスと、やじろべえみたいな形のモンスターたちに、グルリと囲まれてしまう。
「この子たちは、ジッパヒトカリゲ。私の仲間の中で、もっともかわいいやつらなんです」
浮気なダイスは、そう説明しながら、目を細めてジッパヒトカリゲたちを見る。

なあるほど、いろんな仲間を次から次へと呼んでくるから『浮気』なんだな……なんて、感心してる場合じゃなかった！　ヤツらが、いっせいに飛びかかってきたのだ！
あわてて身をかわすが遅く、あっという間に全身アザだらけ（HPマイナス5）。ぼくは、必死の思いでジッパヒトカリゲたちを倒し、浮気なダイスに向かってバットを繰り出した。
パッコ～～～～～～～ン!!　この一撃で、敵はあっけなく倒れた。バットに叩かれ大きくふっとんだ浮気なダイスは、土の山の上にポテッと転がる。すると、土は、みるみるうちに浮気なダイスの体を飲みこんだ。そして、ぽいっ！　と何かを吐き出す。鈍く光る銅の色をしたそれは、草原の模様が彫りこまれた、大地のペンダントだった。ぼくはそれを大事にしまうと、四つ角に向かって歩きはじめた。
◆『**大地のペンダント**』**を入手した。アイテムリストにチェックして****……………389へ**

298

さっそく1万ドルを持ってトンズラブラザーズ――略してトンズラさんたちを訪ねた。
「イヤッホー。これを劇場主に叩き返せば、オレたちは自由の身だ！　ありがとうよ、ネス！」
「よーし、オレたちのトラベリング・バスに乗りな、ネス、ポーラ。スリークまであっという間に連れて行ってやるぜ！」
言われるままに乗りこむと、バスはすぐに動き出した。

「それじゃあ、気分よくぶっとばすか！」この言葉を合図に、バス内は、ノリノリのコンサート状態。問題のトンネル内に入ると、バスに幽霊がからんできたけれどトンズラさんたちのビートがきいたサウンドにはかなわない様子で……。
結局バスはあっさりとトンネルを通過してしまったんだ。

⬇145へ

299

さて、どの家に話を聞きにいこう？（1度行った場所へは行けません）

●右どなりの家……395へ　●おむかいの家……251へ
●左どなりの家……323へ

300

どうやら、この右の道が正解ルートだったらしい。しばらく進むとぼくらは、中央に石の棺が置かれた部屋に出た。
「この棺、いかにも怪しい。いったい、何が入っているというのか？」
プーが、棺の蓋を、無造作に開けようとする。でも、蓋はピクリともしなかった。
ジェフは、考えるような顔をして「先に進めば、手がかりがあるかも」と、つぶやいた。
そこでぼくらは、部屋の奥にある通路へと移動。すると、またもや広い部屋に出た。

ところが！　奥の部屋では、石像の元締めともいうべき、巨大な石像が!!
「みんな、頑張ってくれ！」ぼくは叫びながら仲間たちの顔を見た。
◆『素敵なフライパン』と『ガッツのバット』は？
●両方ある　…………**644**へ　●ガッツのバットのみある　……**603**へ
●素敵なフライパンのみある　…………**556**へ

301

巨大モグラを倒したぼくたちは、洞窟の中に。洞窟を抜けるとそこは、心地よい風の吹き抜ける青空の下の原っぱだった。
原っぱには、子どものものよりも小さな足跡がいっぱい残されていた。
「これがリリッパトステップなのね……」ポーラがぽつりとつぶやいた瞬間……。どこからか不思議な音色が聞こえてきた。なんだか楽しげで、聞いているだけで微笑みがもれてくる、そんな音色……。ぼくはその時、赤い帽子をかぶった赤ちゃんの幻を見ていた。
音の石がこの音をしっかり記憶した。これで目的は果たしたぞ。
◆レベルが3にアップしました。レベル3対応のHPチェック表に切り替えて
●Aにチェックがあれば　……**93**へ　●なければ　…………**109**へ

302

舞台はサマーズ。主人公は再びネスへ——。
マジックケーキでトリップしている間、ぼくはまだ行ったこともない東の国の少年の夢をみていた。そして目が覚めると、目の前に、カラテの胴着のような服を着たべん髪の少年が立っていた。意志の強そうな太い眉に澄んだ瞳……ああ、夢の中の少年だ！
「俺の名はプー。君たちと共に戦う者だ。ネス、俺は君に命を預けるゾ！」
これで、仲間が4人揃った！　ぼくら4人は互いに紹介しあいながら、トトの港町へと向かった。これで、スカラビへ行けると思っていたんだけれど……。
「いやあ、おかげで、女房が元にもどってくれたよ。すぐにでも船を出してやりたいんだが……ハ〜、ハ〜……ブワックション！　ごらんのとおり風邪をひいちまって。めんぼくねえ。速攻で治すから、その間サマーズでよ、スカラビ文化博物館でも見てきてくれや」
そこでぼくらは、博物館へ。何かピラミッドに関する情報があるといいな。
さっそくテレポートしようとしたぼくらの前に、敵のマッドサインが現れた！

●アンチPSIマシンがあれば　…277へ
●なければ　…………………………295へ

303

ポーラがゲップーに向かって、PKファイアーを放った。ところが思ったよりも効果がない。ちょっと余裕を取りもどしたゲップーは、ポーラに、ものすごく臭いゲップを吹きかけた。「ぐうぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぷぅ!!」

そのあまりの臭さに、ポーラは意識を失ってしまう。大変だ——!!

●うらカンポーがあれば……………128へ　●なければ……………………211へ

304

「もしかして、あの、不気味な唸り声がしていた方にあるんじゃない?」

ポーラが思いついたように言った。確かにそうかも知れない。モンスターがいると思って避けたんだけど……。ぼくらはファイアースプリングスを降り、脇道の奥の洞窟へと急いだ。

◆チにチェックをして……………………………271へ

305

フランクさんは、ナイフをめちゃくちゃに振りまわしてきた(HPマイナス2)。だけどこれはフェイント。実は左手にもナイフを隠し持っていて……。

右手の動きで幻惑しておき、左でとどめを刺す! ぼくは、あぶないところで攻撃をかわ

した。そしてそのままバットのひと振り！　フランクさんは床に倒れふした。

⬇289へ

306

う〜ん、またも大切なＰＳＩパワーを使ってしまい。ちょっぴり反省。

◆Hにチェックして……………………………………122へ

307

「よく、来た……」背後で、低い声が響いた。驚いて振り返ると、そこには、放射状の金属質な体を持ったモンスターが！
「ここ、ルミネホールが、７番目の〝おまえの場所〟だ。だが今は、この私、電撃バチバチの場所だ。奪い返せばいい……できるものなら！」
電撃バチバチは、体から黄色い稲妻を発しつつ、ぼくらに挑みかかってくる！
「ネス、気を付けろ！　こいつも反撃のサイコシールドをかけているかも知れないぞ！」
プーが、鋭い叫び声を上げた。サイコシールドをかけてるかかけていないか、確かめるにはＰＳＩを使ってみるしかないか！

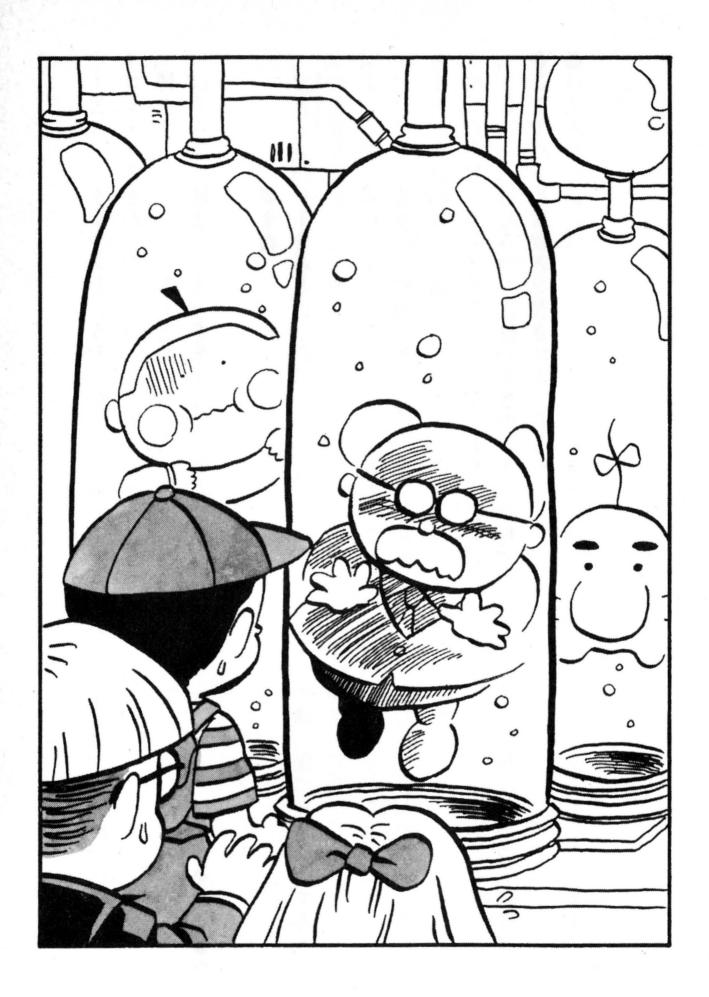
●催眠術で様子を見る……………88へ
●ＰＫ必殺を使う……………382へ

308

「はっ、わたしは、今までなんてバカなことをしていたんだろう……」
意識を取りもどしたカーペインターさんは、いきなり反省し始めた。
「あの黄金像を拾ってから、わたしはおかしくなってしまったんだ……」そう言いながら、祭壇に安置されている黄金像を指差す。「……みんなには済まないことをした。黄金像は捨てる。このわたしを許しておくれ。これがポーラが閉じこめられている牢のカギだ」
ぼくは牢のカギを受け取ると、急いで山小屋に向かった。

●Eにチェックがあれば……236へ　●チェックがなければ……340へ

309

スターマンを倒し、迷路のように入り組んだ通路を苦労しながら進んだぼくらは、ようやくたどりついた広間で、信じられないものを見た。なんと、博士やアップルキッド、トニーたちが、透明のカプセルのようなものに入れられていたのだ。ほかにも、タッシーウオッチング隊の1人や、あの、どせいさんまでいる。ぼくらは捕われた人たちの前に駆け寄った。
「へいき、いき、できる」と、平然と答えたのは、言わずもがなのどせいさん。でも、ほかの人たちは、かなり苦しそうだ。と――。博士が、苦しい息の中で訴えてきた。
「こ、ここの隣の部屋に……カ…カプセルを解除するレバーがある……が…そこには……D

……Ｘス…スターマンというヤツがい……る……はあはあ……ヤツは……最初から…サ…サイコシールドをか…かけている……気……をつけろ……！」

「博士！　みんな！　きっと助けるから、待っててください！」

ぼくらは、捕まった人々を励まして、隣の部屋へと急いだ。

⬇146へ

310

サターンバレーをあとにしたぼくたちは、グレープフルーツの滝の前に立った。すると、『合言葉を言え』との声。どせいさんに教わったとおり、3分間黙って立っていると……。

『よし、中へ入れ……』たちまち滝の流れの向こうで扉が開いた。ぼくたちは中に入った。

ゲップーの基地は、機械の多い近代的なつくりをしていた。感心してながめていると、たちまち、ねばねばした液体状の生き物3匹に取り囲まれてしまった。

ヤツらの名はぐちゃぐちゃぐちゃ。文字どおり、粘液質の生き物だ。

「きさまら〝はえみつ〟は持ってきたか？」ぐちゃぐちゃは、ぼくたちに向かって怒鳴った。

◆ここでバトル対戦表を書きかえてもＯＫ

●はえみつがあれば……………………79へ　●なければ……………………117へ

311

ファイアースプリングスは、ところどころに溶岩の流れる、小高い山だった。
「よし、パワースポットを探して、のぼっていくぞ」
そう言いながら、熱気のたちこめる山に1歩足を踏み出した瞬間、目の前に、まっ赤な服を着た男が現れた。頭には、精密な機械のようなものをかぶっている。
「こいつ、機械で特殊能力を強めたPKおとこだ！」
ジェフが、叫びざま、アンチPSIマシンを作動させた。
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはA、相手はD。相手よりも数値が……
●上 ……………………**335へ** **●下** ……………………**184へ**

312

すっきりハーブをトンチキさんに飲ませると、彼は少し元気を取りもどし、さらに続けた。
「ネス、いいか。酒場のカウンターの裏を調べるんだ。ヤツはこの酒場のどこかにその像を隠しているはずだ。じゃ、おでかけは、ひと声かけてカギかけて……」
トンチキさんはそれだけ言い残すと、ヨロヨロと去っていった。
◆アイテムリストから『すっきりハーブ』を消して ……………………**360へ**

313

しかしフランクさんによれば、ジャイアントステップには化け物がいっぱいいるって話だ。やっぱりそれなりに買い物をしていかなくっちゃね。ドラッグストア、ハンバーガーショップ、ベーカリーなどをのぞいてみたところ、今のお金で買えそうな品物の組合せは、『旅のお守り＋クッキー』か『殺虫スプレー＋ハンバーガー』ぐらいのものだけど……？

●旅のお守り＋クッキー ……10へ
●殺虫スプレー＋ハンバーガー ……26へ

314

ドガッ！　また、まともに体当りをくらってしまった。こうなったら、やぶれかぶれだ。ぼくはバットをめちゃくちゃに振りまわして、巨大アリに飛びかかっていた。ポカポカポカポカ！　バットが何発か、巨大アリに命中したが、その分ぼくも巨大アリの前足で頭をドカドカ蹴られた（HPマイナス3）。壮絶な殴りあいの末に勝ったのはぼく。巨大アリはダウンし、すっかりおとなしくなった。

⬇190へ

315

とっさに『大きい』と答えると、「よし、親分に会わせよう」という返事。どうやら、合言葉は正確だったみたい。そのままぼくは、トンチキさんのところへ。

トンチキさんはひげもじゃで、サングラスをかけた大男で、いかにもヌスット広場のボスといった風格だった。屋根の上からぼくを見おろしていたが、すばやく飛び降りて言う。
「ほほう。なかなか骨のありそうなヤツだ。まずオレと勝負しろ。話はそれからだ！」
◆バトル対戦表で戦います。ネスはC、相手はB。相手よりも数値が……
●上……………………235へ　●下……………………219へ

316

でも、残念ながらぼくは、敵をしびれさせるPSIを習得していなかった。しかたなく、バットをかまえて悪魔のディープキスに躍りかかる！　しかし、敵もなかなかしぶとかった。
「いったあ〜〜〜〜〜〜い！　アタシの体、傷つけたわねえ！　これでもくらいなさい！」
ぶっちゅうっ！　ヤツが繰り出したのは、強烈なキッス！　しかも、猛毒つきの……！
毒を受けたぼくは、とたんに猛烈な寒気に襲われたが(HPマイナス6)、こんなことでくじけていられない。必死にバットを振りまわし、ようやく敵をうち倒した。
すると――。倒れている悪魔のディープキスの体が突然かき消え、代わりに、金色に光るペンダントが空から降ってきた。中心に、星の絵が彫られたペンダント、星のペンダントだ！
「や、やったあ……」全身を襲う寒気と戦いながら、星のペンダントを手に入れる。
◆『星のペンダント』を入手した。アイテムリストにチェックして

●血清があれば……………………198へ　●なければ……………………247へ

317

バキッ！　バットが巨大モグラの肩を直撃した。もだえ苦しむ敵に、今度はポーラがフライパンでパコーン！　巨大モグラは痛そうに頭を押さえているぞ。チャンス!!　⬇357へ

318

エレベーターはやっぱり47階で停止。ぼくらは、エレベーターガールのお姉さんに、「48階の秘書さんに会いにきたんです！　お願いです、上に行かせて！」と、頼んでみた。でも「アポがない方はお通しできません。失礼。下にまいりま～す！」と、冷たい返事。しょうがない、当って砕けろ。受付で頼んでみよう！　⬇263へ

319

相談の上、ぼくらは100ドルを、おもいきって買い物に使うことに決めた。ポーラがさっそく、100ドル分の買い物リストを持ってくる。

◆Jにチェックして

●いのちのうどんを買う……………488へ　●ペンシルロケット5を買う……133へ

●ハンバーガー＋すっきりハーブを買う……………………95へ

320

プーは、赤い石のあるところからさらに奥へ進んだ狭い洞窟の中にいた。ぼくらが入っていくと、プーは前方を指差して言う。「あれ、何かわかるか？」
プーが立っているとこは、崖っぷちだった。そして、こっちの崖と向かい合うようにしてもうひとつ、向こう側にも崖がある。プーが指差したのは、向こうの崖の上にある、奇妙な形のオブジェだった。まるで、金属でできた1本のタコの足のようだ。
「なんだろう？　わからないな……」ジェフが、目を凝らして、変なオブジェをみつめる。
勉強家のジェフにわからないんじゃしかたない。ぼくらは洞窟の出口に向かった。と、そのとき！　出口の脇にあった細道の奥から、ゴゴゴ……と低い唸り声が！　モンスターか!?

●細道に入る……………271へ　●外へ出る……………152へ

321

敵が爆弾を投げつけてくる前に倒したい！　というぼくの願いは、残念ながらかなわなかった。ぼくが2、3発バットで攻撃を繰り出すと、敵はついに切り札を持ち出す。
「ぼくちゃん、あったまきた！　爆弾、投げちゃうもんね〜〜〜！　ぽいっ！」

あわてて逃げようとしたが遅かった、安心ボムの投げた爆弾は、ぼくの目の前で大爆発！
小さい爆弾だったけど、爆風で勢いよくふっとばされる！（HPマイナス6）
道に倒れこんだぼくは、フラフラする体をなんとか立て直すと、必死でバットを振りまわした。運よく2度目の爆撃は受けることなく、ぼくはようやく安心ボムを倒した。と――。
突然、安心ボムの体が水たまりに飲みこまれ、代わりに、マリンブルーのペンダントが、浮かび上がった。ペンダントには、大海原の絵が彫られている。
「海のペンダントだ！」うれしい戦利品を手に、ぼくは道を逆もどり。さっきの四ツ角へ。

◆『海のペンダント』を入手した。アイテムリストにチェックして……**389へ**

322

ぼくたちは、傷つきながらも巨大ネズミに果敢に挑んだ！　次第にヤツの動きが鈍くなり、ついには、ドウッとコンクリートの上に倒れふした。ぼくらは勝ったんだ！　**➡272へ**

323

左隣の家にお邪魔して、奥さんに話を聞いた。
「あらあら、ポーラちゃんがいなくなったの。それは心配ねえ――。わたしも、もし宅のペスちゃんがいなくなったら、心配で眠れなくなってしまいますもの。ペスちゃんたらね……」

ペスというのは、犬の名前らしい。ぼくは話を適当にきりあげて、外に出た。⬇299へ

324

せまり来る巨大モグラに向かって、ぼくはバットで攻撃！

◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはB、相手はC。相手よりも数値が……

●上……317へ　●下……13へ

325

しかし、ぼくらは、ポーラのダイヤモンド化を解くアイテムを持っていなかった。しかたない、ここは3人、いや、ジェフの物理攻撃は使えないから、2人で戦うしかないようだ。

「ヤツを倒してパワースポットの音を聞いたら、ポーラも元にもどるだろう。ポーラはボクが見てるから、頼むよ」

ジェフが、堅くなったポーラを抱え、ぼくらのうしろに下がった。

◆力にチェックして……659へ

326

しかし、パラライシスは失敗に終わってしまった！　しかも、反対にパラライシスをかけ

られ、動きを封じられてしまう。「あははは、そんなんで、ぼくに勝てるかな?」
ネスの悪魔は、ここぞとばかりに多彩な攻撃をしかけてきた。足に腕に体に、強烈な痛みが走る!(HPマイナス8)
「く……っ! ぴ、PK必殺……っ!」動けなければ、PSIに頼るしかない! ぼくは必死で、必殺技を連発させた。こうなったら、根くらべだ!
——長い長い戦いの末、ネスの悪魔は、ついに倒れさった。勝利の女神は、ぼくに微笑んだのだ!「見たか! ぼくは、邪悪な心になんか、負けない!」

⬇259へ

327

ぼくは、以前彼女にもらったサイン入りバナナを学芸員さんにあげた。バナナはだいぶ黒ずんでいたけれど、彼は大喜び!
「お礼に教えてあげましょう。とんでもない物っていうのはですね、すっごいでかいおばけネズミなんですよ! なんか、ちかちか光る場所の前で、ドーンとふんばってましてね……」
! おばけネズミに、光る場所……もしや、その先にはパワースポットがあるんじゃ!?
「この先に、マンホールがあります。そこを降りると下水道になっていて、その奥ですよ。そうだ、これを持っていくといい。魔封じのコインです」
学芸員さんにお礼を言うと、いざマンホールへ!

◆『魔封じのコイン』を入手した。アイテムリストにチェックして ……………… 290へ

328

敵はいきなり強烈なPSI攻撃をしかけてきた。が、間一髪、うまく直撃を避ける。プーとポーラが腕に傷を負ってしまったが(HPマイナス5)、ぼくらの連続攻撃を前に、スターマン・センゾは、あっさり倒れふした。

「やったね!!」

262へ

329

オネットの街を抜けて、丘陵地帯へ。途中の旅芸人の小屋も、カギを持ってるから簡単にクリア。小屋を越えた先にある洞窟にいよいよ入りこんだ。

265へ

330

洞窟でクッキーを発見。さっそく食べちゃおーっと(HPプラス3)。

106へ

331

ブンブーンが、倒れふしたスターマンの息子のまわりを飛び回りながら言った。

「ヤツは十年後の世界からわしを追ってやってきた殺し屋じゃ！　しかし、ヤツを倒したからといってまだ安心できん。ネスよ、あんたが戦うのは、ギーグが送りこんでくる敵たちばかりじゃないぞ。同じ地球の悪しき心の人間たちが、あんたの冒険の旅を邪魔するであろう。動物たちも攻撃的になり、あんたを襲うじゃろう。それもすべてギーグの邪悪な力、彼らの悪の心を刺激しているためじゃ」

どうやら、ぼくはこの先、さまざまな敵と戦わなくちゃならないようだった。しかし、地球の未来のためには、弱音なんか吐いてる暇はない。

そうこうしているうちに、ぼくたちはポーキーの家の前にたどりついた。

⬇209へ

332

「溶岩し～んっていうのは、これのことかい？」

尋ねながら、右ポケットから出した赤い石を、溶岩の中に投げ入れた。すると――！

ド――ン！　バシュ――ッ！　いきなり、溶岩が荒れ狂ったように噴きあがる。

「だめだよ～、それは、溶岩どど～んだ。溶岩し～んは青い石だよ～」

◆アイテムリストから『赤い石』を消して

●青い石があれば……………344へ　●なければ……………304へ

333

「さあ、スカラビに着いたぞ。忘れ物はないかい。気を付けて行くんだぞ」
「おじさん、ありがとう。おじさんこそ、気を付けて帰ってね」
ぼくらは船乗りのおじさんにお礼を言って、砂漠の街スカラビに足を踏み入れた。
「や〜ん、日焼けしちゃう！」数歩歩いただけで、ポーラが悲鳴をあげる。
「砂漠が暑いのはあたりまえ、我慢しろ」プーは、さすがに、すっかり悟りきっている。
ぼくは、みんなに買い物をしようと提案した。さっきパパから電話が入って、ぼくの口座に1000ドル振り込んでくれたと教えてくれたのだ。
「お買い物？　いいわね、行きましょ！」
買い物と聞いて、今さっきまで不機嫌だったポーラは、とたんにルンルンしはじめる。
「まったく、女の子って、ホント現金だよね」ジェフが、ぼくに耳打ちした。

➡101へ

334

ぼくたちは必死で頑張ったけれど、巨大ネズミの前に、次々と倒れていった。
薄れる意識の中、ぼくたちは天の声を聞いた——。
『ここまで来ておきながら、残念でしたね……しかし、ここであなたが冒険を終えては、地球の未来は絶望的。私はあなたに力を与え、時間を少しだけもどしましょう……では！』

気が付くと、ぼくたちは下水道の中に立っていた。なんだか、頭がボーっとするなあ。
◆バトル対戦表を書き替えてOK。HPをレベル5の最大値まで回復させて　……290へ

335

アンチPSIマシンは、PKおとこのPSIを見事封じこめた。あわてて放たれたパンチが、油断していたぼくの頬をかすめたが（HPマイナス4）、PSI抜きのPKおとこなど、キバをなくしたライオンも同然。ぼくらは、あっという間に敵を倒した。
➡208へ

336

ぼくらは、以前モノトリーが出入りしているという噂を聞いたボルヘスの酒場へ行った。
「おまえたち、この前からしつこいぞ。モノトリーさんがこんなとこに来るわけないだろ」
「しっし、あっちへ行きな！」酒場の連中はあいかわらずで、まともに話もしてくれない。
イラだつぼくの肩を、ジェフが叩いた。
「ねえ、ネス。なんか酒場の外が騒がしいよ。どうしたんだろう？」
そこで、酒場の外へ出てみた。すると、そこには人垣ができており、その輪の中心にはなんと、あのツーソンのヌスット広場の親分、トンチキさんが倒れているじゃないか！
ぼくらは、人波をかきわけてトンチキさんの元へたどりつくと、抱き起こした。

「ああ……おめーはネス……。実はよ、ハッピーハッピー村のカーペインターが隠し持っていたおかしな像〞マニマニの悪魔〟を手に入れたまではよかったんだけどよ、ゼイゼイ……モノトリーのヤツに騙しとられちまったんだ。おまけにヤツはその秘密を知っているオレを消そうとしやがった……。あの像にゃよ、悪魔のパワーが潜んでんだ。ヤツはそれを利用してのし上がりやったんだ……」トンチキさんは苦しそうに言った。

●すっきりハーブがあれば……312へ
●なければ……483へ

337

ギーグと戦うまでに、少しでも体力を残しておこうと考えたぼくらは、ギッとスターマン・センゾを睨むと、一気にダッシュをかけ、敵をつきとばした。ヤツは大声でののしったが、そんなことは、おかまいなしのスタコラサッサ！

⬇262へ

338

あたり一面にゲップーの臭いが充満して、ぼくら全員が呼吸困難に陥ったそのとき――。
「スターストーム――――ッ！」上空で、聞き覚えのある声が轟いた。
何が起こったのかと上を見上げたぼくらの目に映ったのは、きららかな星を振りまきながら、マントを羽織って優雅に舞い降りてくるプーの姿だった。

プーによって落とされた無数の星のかけらは、引き寄せられるようにゲップーの体へ！
恐ろしい数の星の直撃を受け、強敵ゲップーは、ついに息絶えた。
プーは、星を落とす術ＰＫスターストームを習得して、ぼくらの前に帰ってきたのだ。
「待たせて済まなかったな。この、俺専用の防具・王者のマントを手に入れて、今日ようやく修行を終えたのだが、間にあってよかった……」
プーによると、スターストームは、１回の戦闘で１回きりしか使えないということ。
「でも、すごいわ。それに……それに、わたしたちはやっぱり４人がいいわよ」
ポーラがうれしそうにプーの手をとったのをきっかけに、ぼくらは再会を喜びあった。
◆プーが『ＰＫスターストーム』を習得した。ＰＳＩリストにチェックする。『王者のマント』を入手した。アイテムリストにチェックして……………………………………**445**へ

339

突然、ＤＸスターマンのてのひらから、強烈な光が炸裂した！
光は、ものすごい熱さをともなって、ぼくら全員の体を直撃する。
「く……っ……」
必死で起き上がろうとしたけれど、どうしても体がいうことをきかない……。⬇**275**へ

340

ぼくはカギを使って、ポーラを牢から救い出した。
「ありがとうネス。ケガはなかった？　あなたは、わたしが思ってたとおりの人だったわ」
「そんな、照れるなあ。それよりもポーラ、ぼくの仲間になって、冒険の旅に出てくれないかい。力を持った仲間が必要なんだ」
「あら、わたしはもうとっくにそのつもりよ。わたし、少しは超能力もあるし、このフライパンで戦うことだってできるし……」
ポーラーはそう言うと、フライパンをテニスのラケットみたいに振ってみせた。
「ね。それじゃあ、これからこの村の東にあるリリパットステップに出発しましょう。そこには、あなたが探している物があるはずよ」
もちろん、ぼくに異存はない。さっそく小屋の外に出た。するとそこにはポーキーが！
「やい、ネス、カーペインターを倒したからっていい気になるなよ。オレは、オレの好きなようなやってやるさ。なんだよ正義の味方づらしやがって！」
ポーキーは捨てぜりふを残して、どこかに走りさっていった。
「あの子、わたしを誘拐して、あの牢に閉じこめた子よ。とっても感じの悪い子だったわ」
そう言ったのは、両手を腰に当たポーラ。ちょっとプンプンしてるみたい。

◆**『フライパン』を入手した。アイテムリストにチェックして**

…………⬇100へ

341

さらにモグラが襲いかかってきた。ぼくに向けて鋭いパンチを放ってくる。それをなんとか避けて、バットの一撃をヤツにおみまい！

見事命中したけど、まだヤツは倒れない。しまった、あの時やっぱり『リボン』じゃなくて、『いいバット』を買っとくべきだった。なんて、後悔していたのがまずかった。今度はまともにモグラの一撃をくらって、しりもちをついてしまう（HPマイナス3）。

今度こそほんとにジ・エンドか！　思わず目をつむったとき……。

バキッ！　ポーラがうしろからモグラの頭をフライパンでぶちのめした。

今だ！　すかさず立ち上がったぼくは、力をふりしぼって、モグラの頭をバットでバゴーーン！　これがスマッシュヒットになり、モグラは力尽きて、その場に倒れた。⬇301へ

342

スターマン系の敵は、反撃のサイコシールドを自らにかけている場合が多い。今までの経験から、ぼくらは物理攻撃のみで攻めることを考えた。

まず、ポーラがフライパンをぶっぱなし、続いてぼくがバットを繰り出す。間髪おかず、ジェフが虹色ビームを放った。敵は相当ダメージを受けた様子。よし、次はプーだ！

●王者の剣があれば……………217へ　●なければ……………………661へ

343

「パラライシス————————ッ！」

いちかばちか、ぼくはパラライシスをかけてみた。作戦成功！

悪魔のディープキスは、ぶるぶると体を震わせたまま、身動きとれずに硬直している。

「やだあ、しびれちゃう——」

すかさずバットを繰り出す。1回、接近しすぎて腕をガブリと噛まれたけれど（HPマイナス2）、パラライシスのおかげで大した苦労もなく、ぼくは敵をうち倒した。すると——。

倒れている悪魔のディープキスの体が突然かき消え、代わりに、金色に光るきれいなペンダントが、空から降ってきた。中心に、星の絵が彫られたペンダント。星のペンダントだ！

「やったあ！」ぼくは星のペンダントをしまうと、今来た道をもどりはじめた。

◆『星のペンダント』を入手した。アイテムリストにチェックして

……………389へ

344

「よ〜し、今度こそ！」

フツフツと煮えたぎる溶岩の池に向かって、ぼくは青い石を投げ入れた。

すると、湯気の出るほど熱かった池が、みるみるうちに冷えていった。泡立ちがなくなり、やがて池全体が石の固まりになる。溶岩の顔も池といっしょに固まり、灰色の顔になった。

「この奥には、カーボンドッグというモンスターがいるよ～。気をつけてお進み～」
顔の言葉で、ぼくらはピッと身を引き締め、溶岩の固まりの奥の白い光へと歩を進めた。
と――。「よく、来た……」何度も聞いたことのある言葉が聞こえてきた。白い光が弱まり、代わって、まっ黒い犬のようなモンスターが姿を現す。カーボンドッグだ！
とっさにぼくは、ガッツのバットを振るった。続いてポーラが、PKフリーズを放つ。不意打ちにあい、あわてるカーボンドッグ。ここで、強烈なダメージを与えたい！

◆アイテムリストから『青い石』を消して
●ペンシルロケット20があれば……359へ　●なければ……462へ

345

こうなったら、あの手しかない！　ぼくは、精神を集中して、PK必殺を放った!!
これは、今のところぼくが使える唯一のPSIパワー。精神の力で相手を攻撃できる。この力は、ブンブーンに出会ったあの時から、ぼくの中に目覚め始めたようだった。
PK必殺は見事にフランクさんを直撃！　でも、まだ油断はできないぞ！

◆ネスが『PK必殺』を習得した。アイテムリストにチェックする。バトル対戦表で戦います。ネスはD、相手はA。相手よりも数値が……
●上……305へ　●下……393へ

346

だけど、これで引っこんでいる巨大アリじゃなかった。ヤツは負けじと、体当りをかましてきたのだ。さっきのPK必殺で、PSIパワーを使い果たしていたぼくは、やむをえずバットで応戦したけど、きつい体当りを1発くらってしまった（HPマイナス3）。でも！負けじと、巨大アリの頭にバットでボカリ！　巨大アリはくらくらよろめいてるぞ。

●現在のHPが8以上……362へ　●7以下……258へ

347

アップルキッドとオレンジキッドの家はごく近所にあった。まずは、オレンジキッドの家を訪ねた。会ってみると、オレンジキッドは、坊っちゃん刈りの頭にぶ厚いメガネをかけた、いかにも発明家といった風貌の少年だった。

「なるほど、あなたは世界を救うための旅に出ているわけですね。わかりました。開発援助金を50ドルください。そうすれば、きっとあなたに役立つ品物を発明してみせますよ」

ぼくは、自信に満ちたオレンジキッドがすっかり気に入り、迷うことなくお金を渡した。

続いて訪ねたのは、アップルキッドの家。アップルキッドは、ぼさぼさの髪をした、食いしんぼうの太った少年で、オレンジキッドにくらべると、頼りなさそうな感じ。

「ふうん、50ドルくれたら、いろいろ発明したげるよ。ああ、このドーナッツおいしい」

●50ドルを渡す……………171へ
●渡さない……………115へ

348

本当は、ここで、とどめを刺しておきたいところだ。しかし、ぼくのPK必殺Ωは今使ったところだし、プーのスターストームは、さっきのぼくの判断ミスですでに放たれている。どちらも、1度の戦闘の中で、1回きりしか使えないのが辛い。

「しかたない！　総攻撃だ!!」ぼくらは、それぞれの武器を手に、ギーグに挑みかかった。ポーキーの命令を受けたギーグは、ときおり不気味な攻撃をしかけてきたが（HPマイナス5）、世界中の人々の祈りがこめられたぼくらの攻撃には、とてもかなわない様子。やがて、世界をさんざん震撼させた恐怖の宇宙人ギーグの息絶える瞬間がやってきた！

ぼくら4人が同時に繰り出した攻撃を受けたギーグは――。

ドッガ――――ン!!

盛大な爆発音を轟かせた。同時に、ぼくらの視界がまっ白になる。視界の片すみに見えた重装備ポーキーが「今日のところはこれで引き上げてやるが、本当にカッコいいのはどっちかな？　ふふふ、シーユーアゲイン！」と、言ってたところまでは覚えているが――。

ぼくらの意識は、深い深いところへと落ちていった……。

↓71へ

349

浮気なダイスは、ステッキでぼくの頭をゴンゴンと叩いた。
「いっ、痛いよ！」（HPマイナス3）あわてて身をかわし、バットを横に払う。この一撃で敵はあっけなく倒れた。バットに叩かれ大きくふっとんだ浮気なダイスは、土の山の上にポテッと転がる。すると土は、みるみるうちに浮気なダイスの体を飲みこんだ。そして――。
ぽいっ！　何かを吐き出す。鈍く光る銅の色をしたそれは、草原の模様が彫りこまれた、大地のペンダントだった。ぼくはそれを大事にしまうと、四つ角に向かって歩きはじめた。
◆**『大地のペンダント』を入手した。アイテムリストにチェックして**　……………**389へ**

350

ぼくとジェフは、グルメ豆腐マシンをこわきに抱え走った。目ざすはモノトリービルだ！
イチゴ豆腐が作れるっていえば、48階の秘書さんの所まで行けるぞ。そしてその48階にはポーラがいるはずだ。ぼくらは、勢いこんで、モノトリービルに飛びこんだ。
●**受付へ**　……………**263へ**　●**エレベーターへ**　……………**318へ**

351

ぼくとジェフは、北の方の通路へ進んでみた。

●Bにチェックがあれば……374へ　●なければ……632へ

352

「スターストームで一気に勝負をつけよう！」

ぼくが叫ぶと、プーはちょっと意外そうな顔で「いいんだな？」と確認をとった。そして、

「PKスターストーム――――ッ！」

その瞬間、ジェフが血相を変えて叫んだ。

「ダメだ！　ギーグは反撃のサイコシールドを身につけているかも知れないんだぞ！」

その声を聞いたとたん、ぼくはポーキーの言葉を思い出した。『PSI攻撃は効かない』ヤツは、確かにそう言っていたっけ……。ということは――。

最悪!!　天から降ってきた無数の星のかけらは、ギーグのサイコシールドによって跳ね返され、攻撃をしかけたプーの体にまで襲いかかる。しまった！（HPマイナス15）

◆Rにチェックをして

●Dにチェックがあれば……437へ　●なければ……673へ

353

ぼくは再び市役所におもむき、シャーク団をおとなしくさせたことを市長に報告した。

市長はそれを聞いて大喜び。二つ返事で、旅芸人の小屋のカギをくれた。

⬇313へ

354

ぼくたちは、タス湖にたどりついた。

⬇34へ

355

ポーラが祈りはじめて間もなくのことだった。
ギギ…ギギッギギ…ギギギ……ギギギイ…。なんと、ギーグの様子に変化が現れはじめた。
「ヤツのディフェンスが不安定になったぞ！」ジェフが、驚いたような声を上げた。
「ポーラの祈りが、届いたのか？」プーも、信じられないという表情をする。と――。
祈りながら、ポーラが大声で叫んだ。「みんな、今よ！」
ぼくはすかさずＰＫ必殺Ωを放つ。強烈な破壊力を持ったそれは、ディフェンスの崩れたギーグを直撃！　シールドに跳ね返されることもなかった！
「いいぞネス！　その調子だ！」ジェフが、武器を手に声を張り上げる。

●ペンシルロケット20があれば……166へ　●なければ……………………38へ

356

この戦いの中で、ポーラはＰＫファイアーを覚えた！　精神力で炎を出す、すごい技だ。

◆ポーラが『ＰＫファイアー』を習得した。ＰＳＩリストにチェックして……188へ

357

今だ！　ぼくはすかさずＰＫ必殺をおみまいした！　ところが、巨大モグラのサイコシールドに、むなしく跳ね返されてしまう。ガックリしていると、今度は巨大モグラがショルダータックル！（ＨＰマイナス３）。さらにモグラは、ポーラめがけて襲いかかる！

●リボンがあれば……29へ　●なければ……77へ

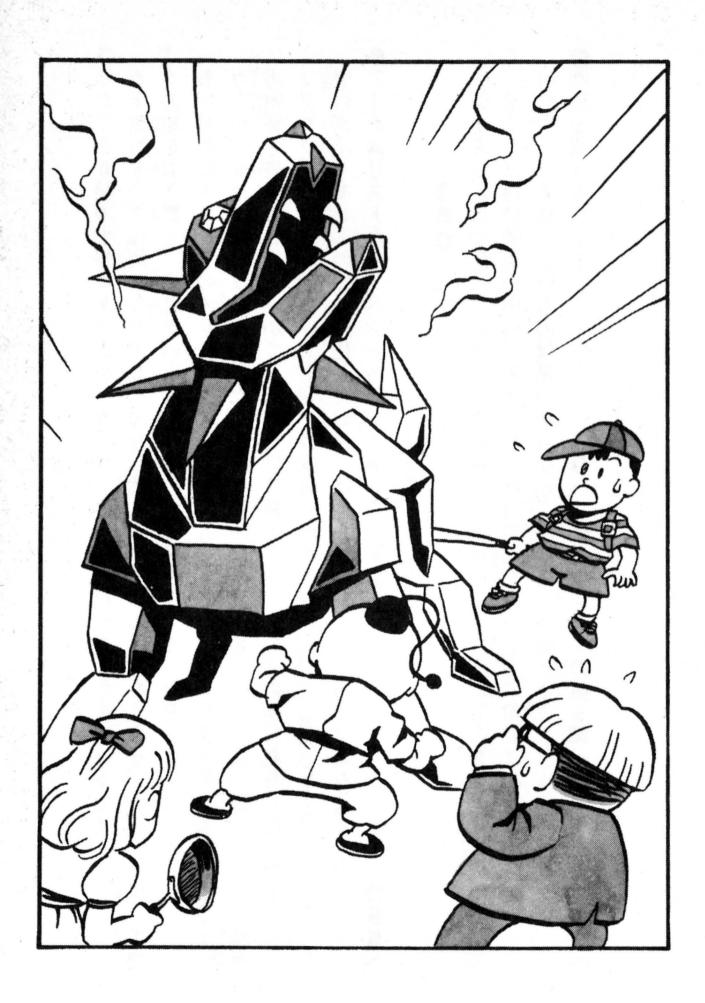
358

ぼくらの反撃に、クラーケンはひとたび海にもぐると、船の底をつきあげてきた！

ザパーン！　海水が大波となって、ぼくらに襲いかかる！（ＨＰマイナス４）

●ＨＰが０以下なら……124へ　●１以上なら……54へ

359

ズドドドドドドドドド――――ン！　ジェフが、ペンシルロケット２０を勢いよく発射

させた。20発の小型ロケットが、カーボンドッグの頭やおなかを勢いよく襲う。が——。
カーボンドッグは倒れなかった。怒りに燃えてらんらんと瞳を光らせ、いきなり鋭い爪でぼくの頬を引き裂く。生温かいものが、ぼくの右頬を伝った（HPマイナス3）。
「お、おのれ～！　このオレ様を、ここまで追い詰めるとは！　しかし、それもここまでよ」
カーボンドッグがそう叫んだとたん、ヤツの体に異変が起こった。まっ黒だった体が徐々に透明感を帯びはじめ、やがて、光を受けて輝くダイヤモンドの体に変身したのだ！
「フフフフ……ダイヤモンドドッグに変身したオレ様を、倒した者など1人もいない……」
堅いダイヤモンドの体に変化した敵は、ぼくらに向かって不敵な笑みをよこした。
◆アイテムリストから『ペンシルロケット20』を消して……………………**385**へ

360

トンチキさんは心配だったけど、修羅場を生き抜いてきた人だし、きっと大丈夫だと信じて、ぼくらは再び酒場の中へ。モノトリーの力の源である悪魔の像がこの中にあるんだ！
店の中にはそれらしいものは見つからない。あとは、酒蔵とカウンターの中だけか。
●酒蔵を調べる……………………**40**へ　●カウンターの裏を調べる……………**4**へ

361

洞窟に入る。中はゆるやかなのぼり坂になっていた。あとひと息だ。

⬇74へ

362

しかし巨大アリも最後の気力をふりしぼって逆襲に転じてきた。これはなんとかしなきゃ！

●殺虫スプレーがあれば……186へ　●なければ……………314へ

363

こうなったら先制攻撃だ！　歩くキノコに、バットをおもいっきり振りおろした。

バキッ！　歩くキノコは、へなへなとカサをたたんで簡単に降参！

⬇147へ

364

相手の出かたをうかがっていたぼくは、タコ・ソ・ノモノの右側を見た。あそこから、向こう側に逃げられそうだ。さっそくみんなに『逃げるぞ』と目で合図。そして——。

「あ、あれは!?」

左上空を指差して、そのままダダーッとダッシュをかけた。ぼくのあとに仲間たちが続く。

タコ・ソ・ノモノは、左上に何があるのかと呆然と見上げたまま、まったく動かない。

う、宇宙人って、ものすごーくニブいのかも……。

⬇665へ

365

ぼくらは、道を引き返して元の部屋に出ると、今度は右の道に向かった。

⬇16へ

366

バリバリバリッ！　ポーラが、ＰＫサンダーを繰り出した！　しかし、クラーケンはそれをさっとかわすと、船に突進、ぼくらはみな、甲板に叩きつけられた！（ＨＰマイナス６）

●ＨＰが０なら……124へ
●１以上なら……174へ

367

「ネス！　オフェンスアー～ップ！」

ゲップーを確認したとたん、３人の中で１番すばやいポーラが、ぼくに攻撃力アップのＰＳＩをかけた。とたんに、ぼくの体の中にむくむくと力があふれてくる。

「くらえ～～～～っ！」力任せに繰り出されたガッツのバットが、ゲップーの体を直撃する。

「よし、次はボクだ！」ジェフが、攻撃体制に入った。

◆Ｋにチェックして

●ペンシルロケット5があれば……48へ
●なければ……………120へ

368

グミさんの来た脇道を奥に進むと、やがて、一面に赤く輝く石が落ちている場所へ着いた。
「この赤い石が溶岩し〜ん？」ポーラが恐る恐る石を持つ。ジェフが石をいろいろな角度から観察していたけれど、結局どういう効果があるのかは、わからずじまいだった。
「とにかく、この石を1個持っていこう」
ぼくがそう言って石をズボンの右ポケットに入れたとき、唐突にプーが叫んだ。
「おい、ちょっと、こっちに来てくれ！」

◆『赤い石』を入手した。アイテムリストにチェックして……………320へ

369

ビビビビビ――――ッ！　ジェフが、虹色ビームを放った。とたんに7色の光線が、ギーグの体のどまん中、目玉のような場所を直撃する。
が、ついにギーグはしびれを切らしたようだ。
ギギギギギッギギギギギッギギギイッギ……。
奇妙な音を発したかと思うと、突然、正体不明の攻撃を放ったのだ。ギーグは寸分たりと

も動いていないのに、ジェフが、はり倒されたように横にふっとぶ（ＨＰマイナス４）。プーがとっさにジェフを助け起こす。ジェフは驚いたような顔で、ギーグを見た。
「なんなんだ、あいつは……？」
「ま、とにかく、やるしかないだろう。ネス、次は俺の番だぜ。どんな手でいく？」
ここは、力まかせの攻撃よりもＰＳＩで地盤を整えておきたいところだ。

●シールドΩをかける…………433へ　●ＰＫスターストームをかける…352へ

370

「よしきた、行くぞ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」
ジェフは、ペンシルロケット5を取り出し、石像の元締めめがけて発射させた！
5発のロケットは、すべて敵に命中！　さしもの石像の元締めも、これには耐えられなかったようだ。手でむなしく宙をかいたかと思うと、そのままバタリと息絶えた。
「なんだ、俺の出る幕がなかったな……」隣でプーが、不満そうにぼやいた。

◆アイテムリストから『ペンシルロケット5』を消して…………………646へ

371

ポーラを助け出したい一心で、ぼくは谷に降りていった。だけどこの谷の険しさは想像以

上。生い茂った木に邪魔され、しかたなく逆もどり。ほかの道を探すことにした。

⬇12へ

372

怪力ベアの鋭い爪が襲いかかり、ぼくの頬をかすめた（HPマイナス1）。
今度はこっちの攻撃。ぼくとポーラの攻撃の前に、怪力ベアは、たまらずダウンした。

◆Aにチェックして……………………………………60へ

373

「さて、と。これからのことを相談しよう。まず、無口を治す本のことだけど……」
ぼくらは、村の入り口にある草むらに座り、休憩をとりながら話し合いをはじめた。
と――。唐突に、受信専用電話が鳴り響く。相手は、なんと、あのアップルキッドだった。
「あ、ネスだね。ボクは今、ウィンターズのアンドーナッツ博士のところにいるんだ。共同でね、こけし消しマシ……わっ！　誰だ、おまえは⁉」
「どうした？　アップルキッド⁉」
思わず叫んだが、電話は無情にも切れてしまった。いったいどうしたんだろう……と、思う間もなく、再び電話が！
「あ、ネスさん？　ぼくは、アップルキッドの友人のオレンジキッドです。こんにちは‼

アップルキッドを知りませんか？　ぼく、彼から無口を治す本を借りる予定だったんですよ」
一瞬、耳を疑った。まさか、アップルキッドが無口を治す本を持っていようとは！
ぼくは、オレンジキッドに、これからアップルキッドを捜しに行くところなのだ、と説明し、あわただしく電話を切った。
「みんな、どうやら無口を治す本は、アップルキッドが持っているらしいよ。彼は今、ウィンターズにいるみたいなんだ。なんか、様子がおかしかったけど、さっそく向かおう」
◆**『ダブルバーガー』か『ピザ』があれば、ここで食べてOK。『ダブルバーガー』を食べたならHPプラス10、『ピザ』を食べたならHPプラス15し、食べたアイテムをアイテムリストから消して**…………**652へ**

374

通路の先では、サルがダブルバーガーを食べていた。おっと、ここにはさっき来たんだっけ。ぼくらはまた十字路へとUターン。

⬇28へ

375

通路はすぐさま行き止まりに。そこには空のプレゼント箱が転がっていた。おっと、ここはさっきダブルバーガーを手にいれたところだっけ。単純な迷路だけど、ナメてかかったら

いつまでたっても先へ進めないよね。とりあえず、また十字路へもどってと。

⬇28へ

376

100ドルなら、ホテル代にとってあるけど……。ぼくは、ポケットに入っているお金を触りながら、みんなの顔を見回した。
「俺たちは、おまえの決定に文句は言わん」プーの意見に、ほかの2人もうなずく。

●情報を聞く……………414へ　●聞かない……………561へ

377

こうなったら、シャーク団をおとなしくさせるしかない！　そうすれば、市長も封鎖を解いてくれるだろう!!　ぼくは、シャーク団と対決するために、ゲームセンターへと向かった。
勢いこんで、ゲームセンターの扉を開ける。ところが、中に入ったところを、あっという間に取り囲まれてしまった。
「なんだ、こいつ。バットなんか持って！　殴りこみか!?」
シャーク団の不良たちは、今にも襲ってきそうな勢いだった。ところが……。
「まてまて、みんな手を出すな」
まっ赤な派手なスーツを着た男が店の奥から現れ、みなを制した。

「1人でシャーク団の本拠地にまでくるとは、いい度胸だ。覚えておけ、オレはシャーク団のボス、フランクさまだ。おまえの度胸に敬意を表し、オレが相手になってやる！」

●Eにチェックがあれば……281へ　●なければ……129へ

378

右手に見えた洞窟に入った。

「なんかいいものありますよ〜に」

➡330へ

379

「わたしの武器は、スカラビで買ったから、ネスとジェフが使えそうなものを買いましょう」

相談の末、ぼくにはガッツのバットを、ジェフにはペンシルロケット20を買った。

◆『ガッツのバット』と『ペンシルロケット20』を入手した。アイテムリストにチェックして……567へ

380

いいバットを買った。これで戦闘力が、ばっちりアップだ！

◆『いいバット』を入手した。アイテムリストにチェックして……284へ

381

苦しまぎれに繰り出した敵のパンチが、ぼくの腕をかすめたけれど(HPマイナス2)、ぼくはかまわずPK必殺をおみまいした！「くらえ〜〜〜〜〜〜っ！」
巨大モグラは悲鳴とともに、地面にがっくりと崩れ落ちた。

⬇301へ

382

案の定、敵は、反撃のサイコシールドをすでに身につけていた。ぼくの繰り出したPK必殺は敵のシールドに跳ね返され、ぼくの全身を直撃する。
「う…わあっ！」体中に強烈な痛みが走った(HPマイナス5)。それを見たジェフが、ここぞとばかりにアンチPSIマシンを取り出して敵を狙う。マシンでサイコシールドを無力化したら、今度はポーラがPKフリーズを！ プーの跳び蹴りが炸裂するのを確認すると、ジェフが、今度は武器をかまえた。

●虹色ビームがあれば……625へ
●なければ……593へ

383

攻撃は最大の防御なり！ ぼくは、バットをかまえて、みんなを促した。
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはD、相手はA。相手よりも数値が……

●上 ……………………276へ　●下 ……………………55へ

384

「モノトリー？　ヤツの周りにはヤバそうなヤツらがゴロゴロしてるっていうぜ。なあ、アンタヤバイ橋渡るなら、このペンシルロケットがお勧めだ。安くしとくぜ」
ぼくが街で声をかけた相手は、闇商人だったようだ。
「何、金がない？　だったらバズーカ砲と交換でもいいぜ」
ぼくらは彼と商談をしてから、今度は酒場へ行ってみることにした。
◆『ペンシルロケット』がなければ『バズーカ砲』を交換することが可能。交換したらアイテムリストから『バズーカ砲』を消し『ペンシルロケット』にチェックして ……336へ

385

「ダイヤモンドは、最強の鉱物だ！　物理攻撃は受け付けないぞ。ＰＳＩで戦うんだ！」
ジェフの叫びを聞いて、ポーラがＰＳＩをかける体制に入った。
「こっちにサイコシールドをかけておいた方がいいわね。まず、誰にかける？」
ここは、ＰＳＩ戦闘力の高いポーラか、経験の浅いプーにかけたいところだが……。

●ポーラにかける ……204へ　●プーにかける ……246へ

386

ぼくらは、素敵なフライパンとガッツのバットを買うことに決めた。
「ええと、これで残り100ドルよ。どうする？」
ポーラがぼくらの顔を見回す。するとジェフが、冷静に口を開いた。
「ホテルの料金は、4人で100ドルだよ。休憩をとるなら、残しておいた方がいいよ」
◆『素敵なフライパン』と『ガッツのバット』を入手した。アイテムリストチェックして
●100ドルはホテル代にする …642へ ●買い物に使ってしまう ………319へ

387

しかたなくぼくはツーソンに引き返し、ホテルに部屋をとって休むことにした。
ホテルに入ったついでにパパに電話をかけてみる。パパは、
『ネスか。頑張ってるようだな。口座に100ドル振り込んでおいたから、必要なら使ってくれ。パパはおまえのことをいつでも誇りに思ってるよ』と優しく言った。
パパからの振込金を口座から下ろしたぼくは、そこからホテルの宿泊費20ドルをフロントに支払い、おもいきって、謎のタコの話をしてみた。すると――。
「なるほど、それでしたら、アップルキッドという少年を訪ねてはいかがでしょう。彼は発明好きの天才少年で、ペットのネズミをしゃべれるようにしたほどなんですから。きっとあ

なたの助けになってくれると思いますよ」
◆HPを現在のレベルの最大値まで回復させる。ツにチェックして　……………………83へ

388

ウィンターズの寄宿舎の前に着いたぼくたちは、大急ぎでストーンヘンジへ向かった。こけしのあったあたりを過ぎると、またもやスターマン！
「ネス、さっきは、こいつにやられたんだぞ。心してかかれ！」プーが、厳しい声を出す。
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはE、相手はA。相手よりも数値が……
●上　……………………662へ　●下　……………………143へ

389

ぼくは、再び四ツ角に立った。ええと……？（1度行った方角へは行けません）
●右に曲がる　…………592へ　●左に曲がる　…………268へ
●まっすぐ進む　………616へ　●全て行った　…………72へ

390

やがて、美しいビーチ・サマーズが見えてきた。と、スカイウォーカーがいきなり急降下。

「ジェ、ジェフ、もっとゆっくりでいいから……」
「ち、違う、操縦が効かないんだ。墜落してるんだよおおおおお！」
ヒュルルルル、ドッカンコ！　スカイウォーカーはビーチに不時着というか墜落。幸い仲間にケガはなかったけど、スカイウォーカーはついに本物のスクラップになってしまった。
サマーズは、海岸を中心に開発されたおしゃれなリゾートシティだった。
少し疲れていたぼくたちは、パパからの送金を引き出して、ホテルへと向かった。
大理石でできたロビーカウンターや柱、ふかふかのじゅうたんに高そうな置物。高級なホテルだと思っていたら、宿泊費はやっぱりすんごく高かった。どうしよう？

●泊まる……417へ　●泊まらない……641へ

391

ポーラの悲鳴を聞いたプーは、動物的な勘のよさで、敵の攻撃をかわした。
間一髪、石像の元締めの強力なスマッシュは、プーの腕をかする（ＨＰマイナス２）
しかしプーは、何くわぬ顔で攻撃の体制をとると、両手両足を舞うように動かした。プーの、この攻撃の前に、敵はなすすべもなく倒れふした。

⬇646へ

392

しばらく歩いていると、ポーラの足取りが遅れはじめた。
「どうしたポーラ、大丈夫か？　俺につかまれ」プーが、心配そうに肩を貸す。
「日射病にかかったらしいぞ。すごい熱だ」ジェフが、ポーラの額に手を当てて言う。
「よし、あそこのヤシの木陰にとりあえず避難しよう！」
ぼくはみんなにそう言いながら、荷物を探った。何か、いいものはなかったっけ？
◆アイテムリストに『ぬれタオル』か『すっきりハーブ』は？
●両方、もしくはぬれタオルがある……………………………615へ
●すっきりハーブがある……………7へ　●どちらもない……………643へ

393

フランクさんはめちゃくちゃに、ナイフを振りまわしてきた。だけど、これはフェイント！　実は左手にもナイフを隠し持っていて、いきなり鋭い攻撃をみせた！　それを見破るのが一瞬遅れたぼくは、右肩をザックリやられる（HPマイナス4）。
「くくく。おまえはおしまいさ……」
フランクさんが勝ち誇ったように言う。だが、彼のダメージも小さくないようだった。その足がふらついていると見たぼくは、そのままバットを振り上げて、果敢にとびかかってい

った。バットは見事に命中し、フランクさんは床にバッタリ倒れふした。

⬇289へ

394

ぐれたネズミが噛みついてきたが、うまく直撃を避けた(HPマイナス1)。こいつ、体は小さいが、とがった前歯はなかなか強力。だけど、それさえくらわなければ敵じゃない。ぼくのバットが2発命中したところで、ぐれたネズミはグロッキー。白旗を上げて降参した。

◆Sをチェックして……………………74へ

395

右隣の家にお邪魔した。

「それはもうあなた、ヌスット広場のトンチキって男が怪しいに決まってるわ」

右隣の奥さんによれば、ツーソンで起きた悪事には、必ずトンチキという男がからんでいるとのこと。うーん、確かに広場の名前自体が限りなく怪しいけど……。

⬇267へ

396

ピカピカピカドシャーーーン！

いきなり雷がぼくを直撃した。だがフランクリンバッチが雷を跳ね返えしてくれた。

「うぬぬ……生意気なお子さんですね。覚悟なさい！」
ぼくとカーペインターの戦いが始まった。
◆バトル対戦表で戦います。ネスはA、相手はE。相手よりも数値が……
●上 ……………………260へ ●下 ……………………97へ

397

トンズラブラザーズが出演している『カオス劇場』にぼくらは着いた。劇場の入口には、トンズラブラザーズの熱狂的なファンたちが集まって、押すな押すなの大盛況だ。
「これは普通に行っても会えそうにないわね」
確かにポーラの言葉どおり。そこでぼくらは、裏口からそっと楽屋に忍びこんだ。
確かに楽屋にトンズラブラザーズはいた。全員が黒ずくめの服装。そして帽子にサングラス。こんなグループはほかにはいない。
ただ楽屋での彼らは、ステージで見せるファンキーさからは想像もつかないほど、暗く沈んでいた。不思議に思いながら、おもいきって話しかけてみる。
「実はみなさんにお願いが……。ぼくらをスリークまで送っていってもらえませんか？」
「それができたら、どんなにいいか……」
「え……？」

「実はオレたち、ここの劇場主に1万ドルの借金があってな。それを返さない限り、他の街に行けないの。あーあ、早く別の街で演奏したいなあ……」
ということは、ぼくらもスリークへ行けないってこと？　どうしよう？
⬇141へ

398

さて、これからどうしようか……、なんて考えていた矢先、ポーラがぼくに告げた。
「ネス、わたしの直感が東の墓地に何かがあるって告げているの」
なるほど、女の子の直感ってやつか……。言うとおりにしたいのはヤマヤマだが、東の墓地は特にゾンビが多いことで有名だ。どうしたもんだろ？
●東の墓地に向かう……………158へ　●1度ホテルにもどる……………213へ

399

「よし、こっちへ行ってみよう！」ぼくはジェフを促して、南の方の通路へ進む。
●ーにチェックがあれば……………375へ　●なければ……………431へ

400

ぼくたちはとうとうゲップーのいる部屋をみつけだした。勇気を出して、部屋に入ってみ

ると、そこにはねばねばした巨大な液状の化け物がいた。
その姿は、よく言えば、もんじゃ焼き。悪くいえば……ううん、く、口にできない！　とにかく、やつこそゲップーに違いない！　ゲップーは、きつい口臭をまき散らして怒鳴った。
「なんだおまえら、〝はえみつ〟を持ってきたのか！」
◆はえみつがあれば……………215へ　●なければ……………226へ

401

スキップサンド食べたぼくらは、あっという間に洞窟の中を駆け抜けた！
⬇505へ

402

ブーン！　ぼくのバットは空振り！　逆に笑いボールのアタックを受けてしまった！
「まて、今度はボクが相手だ！」
ジェフがぼくをかばうようにして立つと、バンバンガンを発射！　見事命中したまではよかったが、敵の体がペカペカと点滅をはじめた。「まずい、爆発するつもりだ、ふせろ！」
バーン！　間一髪、砂漠にふせたぼくらの頭上で、笑いボールは大爆発。背中に熱風が吹きつけ、バラバラと部品が降ってきた。その1つがぼくの頭にゴン！（HPマイナス4）
「みんな大丈夫？　ねえ、ねえ、これを見て！」

少し離れたところにいたポーラが、駆け寄ってくると手のひらを差し出して見せた。そこには、コンタクトレンズがのっかっていた。

「さっき光ってたの、これだったみたい。あなたたちが戦っている間に拾ったのよ！」

とポーラはススに汚れた顔でにっこり。

「それと、ほら。近くにこんな手紙まで落ちていたの」

ポーラが差し出した紙には、次のようなメッセージが書かれていた。

『ドコドコ砂漠でコンタクトレンズを落としました。おばあさんの形見でとても大切にしているものなので、みつけて届けてくださったらお礼をします。

フォーサイドパン屋の2階ペテネラ・ジョバンニ』

コンタクトレンズをポケットにしまうと、ぼくらはまた歩き出した。

どのぐらい歩いただろう。もうヘトヘトで倒れそうになっていたぼくらの目に、立ちのぼる煙が見えてきた。やった、あともうひと頑張りだ！

◆『コンタクトレンズ』を入手した。アイテムリストにチェックして ……………415へ

403

左手の方へと進んだが、ただ同じ風景が続くだけ。このまま遭難なんて、冗談じゃないぞ。

●さらに進む ……………519へ
●もどって右の方へ行ってみる …411へ

404

「まあネス、どうしたのかしら？　そんなさみしい声出して。家が恋しくなったの？……え？　100万ドル？　残念ながら家にはないわ。援助できなくて悪いけど、ママのセクシーな声を聞いて元気になりなさい。じゃ、ママ、アイロンかけてる途中だから、バーイ！」

と、ママはあいかわらずさっぱりしていた。でも、なんだか元気とやる気もりもり！

よし、当って砕けろ。銀行へ相談に行ってみよう！

◆Wにチェックして……………………………………………653へ

405

ロープをつたって、崖の上にのぼる。と！　そこには歩くキノコがいた。

◆ペンシルロケットがあれば……557へ　●なければ……………………565へ

406

「下さらないなら、ほかへ行ってくださサル？」サルはそう言うと、そっぽを向いてしまった。

力づくでどかすわけにもいかず、とりあえずぼくたちは十字路までもどることに。➡28へ

407

スカラビ文化博物館の例の部屋の前には、あいかわらずいやらしい目つきをした博物館員が立っていた。「おやおや？　私に宝石をくれる気になりましたかな？」
下手に出ればつけこみやがって！　ぼくがヤツを睨むと、プーがぼくの肩にポンと手を置く。そして、そしらぬ顔でたまて箱と小さなルビーを放った。
「おお、そうですか！　勉強熱心な方たちですね、さあどうぞ、特別室へお入り下さい！」
係員はぼくたちを特別展示室へと通してくれた。そこには大きな石碑があり、よく見ると古代文字が刻まれている。なんて書いてあるんだろうと、思っていると、
「俺、古代文字ならイースーチー老師に習ってるから読めるぞ」
と、言ってから、プーがそれをおもむろに読みだした。
「天よりの侵略者に、我々は四角錐の要塞を建造し戦いに備えた。しかし、我々は敗れた。だが、我々の要塞はスカラビの神々によって守られた。天から来た侵略者は1000年ごとに生まれかわり、襲ってくるという。侵略者は時の彼方に隠れ、悪の巣箱をおいた。時の彼方は魔境のはるか先。地の底の向こう。魔境は暗き闇。『タカの目』だけが見る。すべてを守り真の勇者の訪れを待つ。4325　スフィンクスの前で踊れ……と、書いてある。ちなみに数字のところは、4と3が上の段に、2と5が下の段に、それぞれ分かれているぞ」
プーの朗読が終わると、係員が、何か紙切れを手渡してきた。

「こいつはヒエログリフっていうんですよ。スフィンクスの脇にあったものでね。先日も、ヘリコプターに乗った富豪の少年が、写真を撮っていったんですよ。あのときは現金をたんまりくれてね。さあ、このヒエログリフの写しをあげましょう」
博物館員から紙切れを受けとって、しばらくじっと見つめていたジェフが、突然ひらめいたように言った。「わかったぞ！　さあ、もう一度スカラビへ行こう！」
博物館を出たぼくらは、すぐさまスフィンクスに向かった。
◆アイテムリストから『小さなルビー』を消す。『ヒエログリフの写し』を入手した。アイテムリストにチェックして……………………………………**52へ**

408

ぼくらはボロボロになりながらも、マニマニの像に応戦！
そしてついに、ぼくのゴチラのバットが敵の胴体のどまん中を捕えた！
ブワッコ――――ン！　大きな音をたてて像は砕け散った。と、その瞬間。あたりに虹色の光が満ち、その光にぼくらの頭はクラクラ……クラ……ク……ラ……。

➡440へ

409

ぼくたちには余分なお金の持ち合わせがなかったので、丁重にお断り。

➡633へ

410

言葉が通じないので、滝のことを聞こうにもラチがあかない。ぼくたちは、しかたなく滝にもどろうとした。その途中、深い山道で男の人とすれちがった。
「きみたち、サターンバレーから来たの？　あそこは、まだ人間の言葉をマスターしていない集落なんだよね。よかったら、この辞書を買わない？　これをどせいさんに渡してごらん」
男の人はそう言うと、荷物の中から1冊の辞書を取り出した。
ぼくたちは半分疑いながらもこの辞書を買った。代金はけっこう高く、持っていたお金はこれでほとんどなくなってしまった。
さっそくサターンバレーにもどったぼくらは、この辞書をどせいさんに手渡した。
どせいさんたちは、それをふんふんと興味深そうに読んでいる。
「だいだい、わかったです。どせいさん、ことばしゃべるます。あなたべんり、まあえんりょすなで、もっとよってけ。ぷー」
なんとどせいさんは、少したどたどしいながらも、あっという間に人間の言葉をマスターしてしまった。ひょっとしてこの人たち、すごい種族なんじゃないの……。

➡558へ

411

しばらく行くと、サルが1匹現れた。そのうしろの地面には、ぽっかりと穴が開いている。

「ようこそここへ、ウッキキッキ！」と、サルクンが手招きしてよこす。
「……まさか罠？」と、ジェフは慎重。穴に入ってみようか、それとも別の方へ進もうか？

●穴に入る……………………………………435へ　●入らないで方向転換して進む……519へ

412

地面に頭を強く打ったぼくは、そのまま気絶してしまったようだった。
気が付いたときは、病院のベッドの上だった。サターンバレーの病院まで、ポーラとジェフが連れてきてくれたらしい。病院で治療を受けすっかり回復したぼくは、ポーラとジェフとともに再び長年樹の芽のいる洞窟を目ざした。
例の穴の前にさしかかると、中から、長年樹の芽がのそりと出てきた。バトル再開！

◆HPを、現在のレベルの最大値まで回復させて……………………604へ

413

ズズンッ！　ジェフを弾き飛ばしたバッファローが（HPマイナス3）、ぼくにも襲いかかってきた！　しかし、ぼくはゴヂラのバットでヤツの額をジャストミート！　バッファローはしっぽを巻いて逃げていった。

●0にチェックがあれば…………535へ　●なければ……………………664へ

414

「じゃ、情報をお願いします」ぼくは、おもいきって、100ドルを使うことに決めた。
「まいど、気前がいいね、坊っちゃん。でも、絶対に損はさせないよ。耳の穴かっぽじって、よおく聞いとくれ。これからスフィンクスに向かうんだろ？」
情報屋さんの質問に、ぼくらは、揃ってうなずく。すると、
「なら、スフィンクスの出口でこう言いな。〝タカの目よ、われらに力を貸したまえ！〟。すると、天からタカの目ってえもんが落ちてくる。こいつは、魔境で絶対に必要なものなんだ。ここいらに伝わる言い伝えだがね、嘘じゃないぜ」
「タカって、鳥のタカのことかな？　タカは、ものすごく目がいいと聞くよ。もしかしたら、人の目には見えないものが見えてくるのかもしれないね」ジェフが、そうつぶやく。
ぼくらは呪文をしっかり暗記して、情報屋さんと別れた。

◆Lにチェックして……………………………476へ

415

ぼくらがたどりついたそこには、丸木を積み上げたほったて小屋が立っていた。そのまわりにはショベルカーやら、削岩機などの機械類が並び、さながら工事現場のようだ。
小屋には『ドコドコ砂漠埋蔵金発掘本部』と書かれた看板がかかっていた。

「よお、どうしたい。お若いの！」声をかけられ振りむくと、ニッカボッカにヘルメット、首にはタオルを巻いたオジサンが2人、つるはしとスコップをかついで立っていた。まっ黒に汚れた顔はとてもよく似ている。どうやら兄弟のようだ
「ぼくら、フォーサイドを目ざしていたんですが、砂漠で迷ってしまって」
「それだったら簡単だ、すぐに教えてやるよ。けど、今日はもうすぐ日もくれることだし、家で休んでいったらいい。オレはジョージ・モッチー。こいつは弟のチュージだ」
ぼくらはこの気の良さそうな兄弟の小屋にひと晩泊めてもらうことにした。
「最初は人に頼まれて発掘を始めたんだけどね、今じゃ、意地になっちまってよ……」
その晩は、ジョージさんの苦労話しを聞きながらぼくらは眠りについた。

◆HPを現在のレベルの最大値まで回復させて……………………**622へ**

416

左のロープを選んだぼくら。残念ながら、小さな部屋にたどりついたに過ぎなかったが、部屋の中で帽子ヘルメットを手に入れた。
「これは、ネス専用だね」ジェフが、ぼくの頭に帽子ヘルメットを乗せてくれる。
ぼくらは部屋を後にして、ロープを下へともどった。ええと、次は？

◆『帽子ヘルメット』を入手した。アイテムリストチェックして

●右のロープをのぼる　………670へ　●中央のロープをのぼる　………127へ
（1度のぼったロープは、2度とのぼれません）

417

ここまで来たら体力が勝負。おもいきってホテルに泊まることにした。次の朝、すっかりリフレッシュしたぼくたちは、その足でドラッグストアへと向かった。あと、ゴージャスなバットかシェフのフライパン片方は買えるな。どっちを買おう？

●ゴージャスなバットを買う　……449へ　●シェフのフライパンを買う　……473へ
◆HPをレベル5の最大値まで回復させて

418

ポーラがすかさずPKファイアーを放った。激しい炎が舞い起こり、長年樹の芽を取り囲んだ。ヤツは植物だけに、炎の攻撃には弱いようだ。火を消そうと、必死になって身もだえている。今だ！

●金の腕輪がある　……………489へ　●ない　……………………513へ

419

さて、どこへ行こうか？

●トポロ劇場へ…………430へ　●博物館へ…………580へ
●モノトリービルへ…………484へ　●パン屋へ…………212へ
●酒場へ…………525へ　●全部行った…………493へ

420

パパン、パンパン！　ジェフの援護射撃のおかげで、なんとか敵の目がそれた！
ぼくは肩で息をしながらも、ゴヂラのバットを敵におみまい！　よし、お次はこれで勝負！
●バズーカ砲があれば…………529へ　●なければ…………5へ

421

最初にそれを見つけたのは、ポーラだった。
「ねえ、あそこにある黄色いの、もしかして、ヘリコプターじゃない？」
早足で、ポーラの指差す方角へ進むと、密林の中に、黄色く塗られた鉄の残骸が散らばっているのが見えた。近くにプロペラらしきものも落ちている。
「間違いない、これは、モノトリーさんのヘリコプターだ」

ジェフが、くず鉄に書かれた〝モノトリー〟の文字を読み取って言った。
「ポーキーが盗んだヘリコプター……ここにあるってことは……？」
「ポーキーも、魔境に来たのよ！」ぼくの問いにポーラが答えたそのとき！
「ゲップ……久しぶりだな、ゲエップウッ……」
聞き覚えのあるいやな音！
「ゲヘヘヘップ……驚いたか！　ワシが、帰ってきたゲップー様だ！」
あのゲップーが、こんな魔境の奥地で、ぼくらを待ちかまえていたのだ！

◆ポーラがオフェンスアップを？

●覚えている……………………367へ　●覚えていなければ……………………278へ

422

ジェフが1歩前に出て、巨大キノコをにらみつけた！

●レーザービームがあれば……………511へ　●なければ……………………………575へ

423

「ネス、わたしを家まで送っていってくれるでしょう？」
ぼくは、ポーラの問いにうなずくと、サターンバレーの仲間たちにもう1度挨拶をしてテ

レポート！　行く先はもちろん、ツーソンだ。
ポーラのパパとママは、ぼくらを大歓迎してくれた。特にパパなどは、「ネスくん、キミは実に勇敢な少年だ。これからも、ポーラと親しく付き合ってくれよ。あ、もちろん、青年らしい付き合いを、という意味だがな」と、目を細める始末。とにかくぼくとポーラは、今度、ジェフとプーのところへ遊びに行こうと約束をしてから別れた。
1人になったぼくは、う～んと大きく背伸びをして、ツーソンの街を見回した。
「そうだ。家に帰る前に、ママに何かプレゼントを買っていこう」
パパからの振り込みが、きっといくらか残っているはずだ。本当はパパに残らず返さなくちゃいけないんだろうけど、ママへのプレゼントだったらパパもきっと喜んでくれるだろう。

◆オとシにチェックは？

●両方ある……………**655**へ　●両方ない……………**250**へ

●どちらか一方のみある……………………………………**675**へ

424

敵は鋭い爪がついた丸太ン棒のような腕を振りまわしてきたが、シールドのおかげでぼくらは無傷！　さあ、今度はこっちの攻撃だ！

◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはB、相手はE。相手よりも数値が……

●上……………………………322へ　●下……………………………628へ

425

ミルキーウェルと名付けられた洞窟を進んでいくと、強い歩く芽とランブーブに出くわした。どっちも動く植物だ。戦いは避けられそうもないぞ！

◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはE、相手はB。相手よりも数値が……

●上……………………………649へ　●下……………………………637へ

426

その通路は行き止まりになっていたけれど、そこでぼくらはいのちのうどんを発見！　回れ、右！　ぼくらはさっきのT字路にもどった。そしてそこを？

◆『いのちのうどん』を入手した。アイテムリストにチェックする。コにチェックして

●右に曲がる………………497へ　●左に曲がる………………581へ

427

ゾンビホイホイをしかけるには、密閉された広い空間が必要。スリークの人たちと相談して、サーカスの大テントの中にしかけることにした。それから1度パパに電話して、800

ドルの振り込み確認をする。さっそくドラッグストアで買い物だ。さて、何を買おう？

●ミスターのバット……………599へ　●金の腕輪＋まっ赤なリボン……554へ

428

なんと敵は、物理攻撃を跳ね返す反撃のシールドで完全防備していた。勢いよく放ったガッツのバットの一撃は、シールドに跳ね返されて、ぼくの胸を直撃！（HPマイナス6）

それを見ていたポーラが、あわてて素敵なフライパンを引っこめ、PKファイアーをかける。PSIを持たないジェフは防御をきめこみ、しっかりと身がまえている。そこにプーが、PKスターストームを放って、勝利！

「ああよかった、ネスのおかげで、反撃のシールドに気付いたわ。ありがとう」

傷だらけのぼくを、ポーラが笑顔でポンと叩く。そ、それはよかった……。

⬇589へ

429

バンバンガンを歩くキノコに向かってぶっ放すと見事命中。続いて、モンキーがひっかき攻撃。そこを狙ってさらにバンバンガンを撃ったけど、今度ははずれて、逆にキノコの体当りをくらう！　まともに受けて頭がクラクラしたが（HPマイナス2）、なんとか気を取り直して、もう1発バンバンガンを!!　やった、勝ちーっ！

⬇453へ

430

「ほら！〝大人気・トンズラブラザーズ&ニューアイドル・ビーナス出演中！〟だってさ」
街角でジェフが派手な看板を見つけて言った。トンズラブラザーズか。ついこの前別れたばかりなのに、なんだか懐かしい。ぼくらはトポロ劇場に彼らを訪ねてみることにした。
楽屋へ訪ねたぼくらを、トンズラさんたちは歓迎してくれた。でも、どことなく元気がない。どうしたんだろう？
「いやあ、実はこの劇場のオーナーにだまされて、借金作っちゃったのさ、ベイビー！」
「面目ねえ。ネス坊に助けてもらったのによお。またニセの契約書でしばられちまって。なんと今度の借金は１００万ドルだゼイ、イエイ！」
「ひゃ、ひゃく万ドル！」
思わずポーラが口をあんぐり。と、そのとき、楽屋の扉が開き、やったら派手なおばさんが入ってきた。首には何重ものネックレスがまかれ、１０本の指にはごてごてと指輪がはめられている。持っているアクセサリーをありったけつけたってかんじだ。
「ちょっと！　このボクちゃんたちは何ザーマスか！　あんたたちには１００万ドルも貸してあるんですからね、私の目の届かないところで勝手なことはしないことザーマス！」
ぼくらは、彼女が呼んだ警備員によって、あっさりと楽屋をつまみだされてしまった。
そのとき、ぼくは思わず、「大丈夫！　なんとかするから、待っていて!!」って叫んでいた。

「……なんとかって、ネスどうするんだい？」
街をとぼとぼと歩きながら、ジェフが尋ねる。
実のところ、ぼくもどうしていいのかわからず黙ったままでいた。

➡419へ

431

南の方へと進むと、行き止まりにプレゼント箱があった。中には好物のダブルバーガーが！
「待った、ネス。今はまだそんなにおなかがすいていないから、我慢してとっておこう」
確かにジェフの言うとおり。ぼくはダブルバーガーをしまって、十字路にもどった。
◆『**ダブルバーガー**』**を入手した。アイテムリストにチェックする。Ⅰにチェックして**…

……28へ

432

道に沿ってどんどん歩いていくと、やがて橋が見えてきた。トレーシーの言ってた、あの橋だ。橋を渡って、向こう側へと足を踏み入れる。すると、間もなく、四つ角に差しかかった。まっすぐ進むか、左右のどちらかに曲がるべきか――？

●**右に曲がる**……592へ　●**左に曲がる**……268へ
●**まっすぐ進む**……616へ

433

「シールドを、ぼくたち全員にかけてくれ！」
とたんに、ぼくらの体を、淡い光の膜が包んだ。次の瞬間、ギーグが正体不明の攻撃をしかけてきたが、シールドのおかげで、重傷からは免れる（HPマイナス5）。

●Dにチェックがあれば…………437へ　●なければ…………673へ

434

さて、サマーズにもどったぼくたちは……。

●ストイッククラブへ行く…………47へ　●ホテルへ行く…………22へ

435

ぼくらは、サルが手招きする穴へ入ってみることにした。
「ようこそ！　ここの穴は何でも知っている偉大で優しいタライ・ジャブ様がぼくらのために作ってくれた地下室さ！　別名サルの洞窟っていうんだ」
ぼくらはサルに案内されて、洞窟の奥へと進んだ。すると、行き止まりに、髪と髭を延ばし放題にした痩せたオジサンが座禅を組んで座っていた。彼がそのタライ・シャブ様か!?
「あの～」と、ぼくが話しかけようとすると、サルがそれを制した。

「タライ・シャブ様はただ今断食と無言の修行と禁酒禁煙ををなさっておられる。邪魔をなさいませぬよう。代わりに、これをどうぞ」
サルは、ぼくにプレゼント箱をくれた。その中には、薬草の『すっきりハーブ』が入っていた。ぼくらは、お礼を言って穴を出ると、今度は左の方へと進むことにした。

◆『すっきりハーブ』を入手した。アイテムリストにチェックする。0にチェックして

…………**519へ**

436

ポーラが勢いよくフライパンを繰り出した。続いてプーの鉄拳が炸裂する。しかし、敵もさるもの。いきなりその口から、強烈なビームを放った。
ヤツのビームは、ぼくら全員を容赦なく襲う（HPマイナス8）。
しかし、敵の攻撃もそこまで！　ぼくらが次々と繰り出した武器を前に、ついにバタリと力尽きる。すると、どこに隠し持っていたのか、鈍い光を放つ丈夫そうな剣が転がり落ちた。
「剣か……ん？　こ、これは!?」剣を手にとって何気なくながめていたプーの表情が、唐突に変わった。驚いたように剣の柄をじっと見つめている。
なんと、タコ・ソ・ノモノが落としたのは、王者たる資格のある者のみが装備できる、世界に1つしかない剣——王者の剣だったのだ！　ぼくらの中でこの剣を扱うことができるの

は、もちろん、プーのみ。プーは珍しくうれしそうに、王者の剣を身につけた。
そして、喜ぶべきことがもう1つ。この戦いで、ポーラが、敵の防御力を下げるPSI、ディフェンスダウンを覚えたのだ。

◆『王者の剣』を装備した。アイテムリストにチェックする。ポーラが『ディフェンスダウン』を覚えた。PSIリストにチェックして……………………665へ

437

ギギイッギギギギ……。ギーグが不気味な音を発したと思うと、ポーラが突然宙に浮いた。
ポーラの体は、そのまま地面に叩きつけられる。「いったあい…」（HPマイナス5）
強く打ち付けた腰をさすりながら、ポーラがゆっくりと起きあがった。
「な、なんて力なの？　体のどの部分も動かしていないっていうのに……」

⬇673へ

438

うさぎごのみのニンジンを黒うさぎにやると、次の瞬間にはニンジンもろとも消えていた。
よし、洞窟にトライだ！　洞窟の中は、いくつもの枝道でなる迷路になっていた。
迷い、迷わされながらも奥へと進むボクらの前に、おっさんの顔に長い首のような胴体がついた天狗どのが現れた！　ヤツはピロローと不気味な音の笛を吹き出す！

●魔封じのコインがあれば……549へ　●なければ……459へ

439

ぼくは、PK必殺を繰り出した。続いてポーラが、PKファイヤーを発動させる。PSIを持たないジェフは、ビーム攻撃！　が――。

なんとハラペコザウルスは、物理攻撃を跳ね返す反撃のシールドで完全防備していたようだ。頭の回転の早いジェフは、敵の異変をすばやくキャッチしあわてて逃げたが、ちょっと遅かった。足に、跳ね返されたビームの攻撃を受けてしまう（HPマイナス3）。

しかし、敵の反撃もそれで終り。プーの放ったPKスターストームで、ハラペコザウルスはあえなく倒れふした。

➡589へ

440

気が付くと、ぼくらはコンクリートの床の上に倒れていた。さっきまでムーンサイドのモノトリービルにいたはずだったのに、ここは酒場の倉庫のようだ。あたりには、機械の部品のような物が飛び散り、壊れたマニマニの像が転がっていた。こいつ、ロボットだったのか。

そこは元のボルヘスの酒場だった。どうやらぼくらは元の世界にもどってこれたようだ。

◆レベルが5にアップしました。レベル5対応のHPチェック表に切り替えて……504へ

441

中に入って歩きはじめたが、巨大なコケシが道を塞いでいて、どうしても先へ進めない。
しかたなく引き返すことに……。

⬇500へ

442

ぼくはゴージャスなバットを、敵の体に叩きこんだ！　が！
バリバリバリッ！　逆に電撃を浴びてしまった!!(HPマイナス2)し、しびれる〜！　しゃがみこんだぼくの代わりに、次にいなずま・あらしに挑んだのは？

●ポーラ……………………588へ　●ジェフ……………………86へ

443

主の固い爪がついた手に張りとばされ、土壁に叩きつけられるぼく(HPマイナス5)。
「ぶわっはっは、これまでだな！」
ぼくの頭上に、主が迫ったその時!!　パーン！　ジェフのエアガンがヤツの背に命中！
「こんの、メガネ小僧！」と、主が振りむいたところに、今度はポーラの厚めのフライパンがスマッシュ！　見事な連携プレーで、大勝利だ!!　倒れた主の下にはプレゼント箱があり、中には『ゴチラのバット』が入っていた。ラッキー！

主の横には、下へと延びる穴が開いていた。さて、この穴を降りようか、それともさっきの分かれ道までもどって枝道へ行こうか？

◆『ゴヂラのバット』を入手した。アイテムリストにチェックして

●穴を降りる……………551へ　●もどって枝道へ……………503へ

444

ぼくのバットが炸裂！　ネチャリとイヤな手ごたえがして、バットはゲップーを捕えた。

「なにを生意気なー！」ゲップーが、ポーラに向けて、いやな臭いのする粘液を飛ばした。

「いや――！」ポーラが悲鳴を上げて、それを避ける。

ジェフがあわててバンバンガンを発射！　これが、見事に命中！　ゲップーは臭い息をまき散らしてもだえている。

◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはB、相手はE。相手よりも数値が……

●上……………151へ　●下……………303へ

445

再び4人になったぼくらは、やがて、見知らぬ民族の住む村にたどりついた。彼らは、青緑色の小さな体と頭、とても細い手足を持っていて、しかも、恐ろしく無口。皆、口を揃え

て、「無口……オレたち……」と、つぶやくだけ。村を回って見つけた、唯一会話をしてくれる人（？）の話だと、ここにいるのはグミという名前の民族だということだった。
「いやあ、無口を治す本さえあれば、みんなをおしゃべりにできるのになあ。ほら、この大岩なんかもね、村一番の怪力グミの手にかかればすぐに持ち上がるんですよ。岩の下にはねえ、なんかすごい洞窟があってね。でも、みんな、言葉が通じないみたいで……」
そう言っておしゃべりなグミさんは、かたわらの大岩を指差した。
「こんな調子じゃなあ……。ネス、まずは無口を治す本を手に入れるのが先決だよ」
ジェフが、ため息をつきながら、ぼくにそう言う。

●もう少し村を回る ……………179へ
●グミ族の村を出る ……………373へ

446

守りのリボンのおかげでポーラは無事だった！
ぼくたちは体勢を整えると、一気にマッドタクシーに襲いかかり、数分でヤツをスクラップにしてやった！　さらに今の戦いで、ぼくが味方の防御力を上げるシールドαを覚えた。
「ところで、ポーラのフライパンはもうボロボロだな。ちょっと待って！」
パパに電話をして送金を頼んだ。本当は送ってもらったばかりで心苦しかったんだけど。
そして、お金を下ろすと、闇商人を捕まえてシェフのフライパンを購入した。

◆ネスが『シールドα』を習得した。PSIリストにチェックする。『シェフのフライパン』を入手した。アイテムリストにチェックして
……………………573へ

447

「はあ、やっと追いついた。実は、金は出なかったんだが、ダイヤモンドが出てきたんで、あなたたちに渡すようにって、ジョージ兄貴に頼まれたんだよ！」

チュージさんのごつい手には、今まで見たこともないような大粒のダイヤが握られていた。

「わあ、これだけのダイヤなら100万ドル以上ですよ、ありがとうございます！」

ぼくらは、チュージさんにお礼をいうと、先を急いだ。待っててよ、トンズラさんたち。すぐに自由にしてあげるからね！　息を切らしながら、ぼくらはトポロ劇場にたどりついた。

◆『ダブルバーガー』か『クッキー』があれば、ここで食べることが可能。『ダブルバーガー』を食べたならHPプラス10、『クッキー』を食べたならHPプラス3し、アイテムリストから食べたぶんだけ消して

●楽屋へ行く……………………613へ　●支配人室へ行く……………………18へ

448

「ネス、見て！」

ポーラが、倒れたDXスターマンのうしろに回り、そこにあったプレゼント箱をちゃっかりと開けた。中には、ほかほかのピザが入っていた。ご丁寧にも保温材つきだ。

◆『ピザ』を入手した。アイテムリストにチェックして……562へ

449

ぼくは、金ピカで、レリーフまで施されているゴージャスなバットを買った。これでぼくの攻撃力がグンとアップだ！　さて、今度はどこへいってみようか？

◆『ゴージャスなバット』を入手した。アイテムリストにチェックして

●レストランへ……545へ　●ビーチへ……521へ

450

ダンジョンの先にあるレイニーサークルの洞窟を抜け、ようやく研究所にたどりついた。ところが、なんと、研究所はもぬけの殻。唯一、残っていたのは、アップルキッドに改良されたペットだと名乗る、しゃべるネズミだけだった。

「我輩が思うに、博士やアップルキッドをさらったのは、地球人じゃなかった様子だ」

ネズミくんは、ぼくらに向かって覚えていることを残らずしゃべってくれた。

「そうそう、それからこれは、アップルキッドの発明品だ。なんでも、こけし消しマシンと

かいうものらしい。ストーンヘンジに関係があるらしいのだが……。ネス、これを持っていってくれ。そして、アップルキッドをどうか助けてくれ！」

ぼくらは、ネズミくんに「きっと助けてくる」と約束し、研究所を後にした。

◆『こけし消しマシン』を入手した。アイテムリストにチェックして……………………224へ

451

プーは声こそ上げなかったが、かなり苦しそうだ！（HPマイナス5）

ミニミニ幽霊がうっとうしくて、ぼくたちも思うように戦えない、ピンチだ！

●HPが0なら……………334へ ●1以上なら……………322へ

452

元気をとりもどしてしばらく進んだが、なんせだだっぴろい砂漠で、ぼくらはどの方向へ進んでいいのかわからなくなってしまった。

「ええと、太陽の位置からいって、右の方へ進むべきじゃないかな」とジェフが言えば、

「あら、バスの走っていた方向から考えて左の方がよくないかしら……」とポーラ。さて？

●右の方へ進む……………411へ ●左の方へ進む……………403へ

453

ダンジョンを抜けさらに南に下ろうとしたところ、バルーンモンキーの姿がないことに気付く。あたりを探すとなんと彼は、かわいらしいメスのサルといちゃついているのだった。
「おーい、バルーンモンキー。ボクは南に行くけど、きみは、そのかわいコちゃんといっしょにいたいのかーい？」
ボクの呼びかけに、バルーンモンキーは大きくうなずき、手を振って別れの挨拶を。
「ウキャウキャウキャー」
引き裂くわけにはいかないな……。ボクも手を振って返し、あとは1人で行くことにした。
すると、なんだか変な並びかたをしている巨石群に出くわした。これは確か、ストーンヘンジと呼ばれる巨石遺跡だと思うけど……。

●ストーンヘンジの中に入る……441へ　●入らない……500へ

454

「そうだ、ネス。ボクは以前この近くで不思議な光を見たんだ。あそこ、もしかしてネスの場所なんじゃないかな。行ってみないか？」
「ふむ、そりゃ地元の人たちがレイニーサークルと呼んで、普段は近寄らない場所だ。行ってみるがいい。その間にスカイウォーカーは改造しおえるじゃろ」

ジェフと博士の提案で、ぼくたちはさっそくレイニーサークルへ行ってみることにした。ジェフの案内で雪の平原を横切り、小さな洞窟へ。この洞窟を抜けてすぐだという話だったが、なんと、洞窟の出口には巨大キノコが待ち受けていた！
「よく来た、ネス。ここは4番目のおまえの場所だが、今は私の場所だ。奪い返せばよい、できるものならな！」
さあ、ぼくの場所を取りもどす戦いだ。先制攻撃はぼくかジェフで様子をみよう！
●ネスが戦う……………………591へ　●ジェフが戦う……………………422へ

455

「ウッキー！」ダブルバーガーをやると、サルは喜んでどいてくれた。扉の中は小さな部屋になっており、プレゼント箱がポツンと置いてあった。その中にはピザが！　しかし、タライ・ジャブさんの姿はなく、ボクらは部屋を出てさっきの十字路にもどった。
◆アイテムリストから『ダブルバーガー』を消し、『ピザ』にチェックする。Bにチェックして……………………………………28へ

456

「何言ってるんだよ。あの通路にはもうさっき行っただろ。もう忘れちゃったのかい？」

と、ジェフがあきれ顔でボクを止めた。
「そ、そういやそうだね。じゃ、下へ降りようか」

⬇551へ

457

ミルキーウェルの音を手に入れたぼくたちは、どせいさんにお礼を言うと、スリークにもどった。ゾンビのいなくなったスリークは、以前とはくらべられないくらい明るい雰囲気だ。
それを喜んでいると、突然、受信専用電話が鳴った。出てみると、パパからの電話だった。
「ネス、ずいぶん頑張ってるみたいだな。口座に300ドル振り込んでおいたから、役に立ててくれ。あんまり無理して体を壊すなよ。じゃあ」
300ドルを振り込んでもらったボクたちは、そのお金でホテルに宿泊した。
翌朝になると、残りのお金を持って、ドラッグストアにショッピング。さて……。

●金の腕輪があれば……………522へ　●なければ……………………594へ

458

こんな、巨大なヤツと戦っていたら、いくら何でも身が持たない！
逃げるぞ！　ぼくらはいっせいに走りだした。幸いにもハラペコザウルスの動きは遅く、ぼくらは無事、ヤツのそばから離れることができた。

ラ、ラッキー!!

➡589へ

459

笛の音と同時に、ぼくたちは睡魔に襲われた。そして、動きが鈍くなったところに敵の打撃攻撃！　うわあ、全身打撲！　で、でも目は覚めたゾ！（ＨＰマイナス３）
ぼくはバットを取り出すと、天狗どのの顔をボールにみたててスマ——ッシュ！　一撃で、天狗どのはふっとんでいった！　後にはたまて箱があり、魔封じのコインが入っていた。
◆『魔封じのコイン』を入手した。アイテムリストにチェックして

……………563へ

460

ずんずん進んでいくと、通路の行き止まりにズズズ——ンッとでっかい影が！
「うわあ〜、なんだあのアザラシは！」
「あら、ジェフ。アザラシなんて失礼よ。あれはトドよ、トド！」
メガネをずり落としそうになりながらジェフが言えば、ポーラが反論。そう、そこにはモッチーさんが言っていたとおり、巨大なモグラの化け物が立ちはだかっていたのだ。
「ええい、何をゴチャゴチャいっとる！　オレはこの穴の主だ。この穴には３人の主がいる。コホン、さあ、どこからでもかかってこい！」

◆Fにチェックして
●ゴヂラのバットがあれば　……540へ　●なければ　……490へ

461

ぼくらの体はフワッと浮いたかと思うとまっ逆さま！　そう、穴に落ちてしまったのだ。穴はとても深くて、このまま地面に叩きつけられたら、ぼくらの体はきっとバラバラのグシャグシャのスプラッターだ！　そ、そんな……。
「ママ――――！」と、ぼくが叫んだ次の瞬間！
むぎゅう〰〰〰。ぼくらの体は弾力のあるマットのようなものに沈んだ。
見ると、ぼくらの下では大きなモグラ、そう例の穴の主がのびているではないか。
「私たち、何にもしないで敵を倒しちゃったのね！」と、ポーラがコロコロと笑えば、
「落下速度と落下距離、ぼくらの体重から割だして、相当なGがかかってるからね」
と、ジェフが解説。なにはともあれ、めでたしめでたし！
「あの化け物たちをやっつけてくれたとは！　え？　埋蔵金掘りを手伝う？　いいって、いいって。ここは穴掘りのプロに任せておきな。金が出たらあんたたちにやっからよ!!」
穴の外で待っていたモッチーさんは、ぼくらの報告に大喜び。
「それじゃあ、お願いします！」

ぼくらは金掘りはモッチーさんたちに任せて。フォーサイドにもどることにした。
砂漠を抜けて、トンネルをくぐり、あともう少しというところで……。
「おーい、ネスく————ん。待ってくれ————！」
モッチーさんの弟チュージさんが、ショベルカーで追いかけてきた。

➡447へ

462

ビビビビビビビビ————ッ！
ジェフが、ビームを勢いよく発射させた。肉眼でも見える高熱のビームは、敵の急所を突き刺すように襲う。が——。
カーボンドッグは、倒れなかった。怒りに燃えてらんらんと瞳を光らせ、いきなり鋭い爪でボクとジェフの頬を引き裂く。ジェフの左頬に赤い筋が滲んでくると同時に、ぼくの右頬を生温かいものが伝った（HPマイナス6）。
「お、おのれ～！　このオレ様を、ここまで追い詰めるとは！　しかし、それもここまでよ」
カーボンドッグがそう叫んだとたん、ヤツの体に異変が起こった。まっ黒だった体が、徐々に透明感を帯びはじめ、やがて、光を受けて輝くダイヤモンドの体に変身したのだ！
「フフフフフ……ダイヤモンドドッグに変身したオレ様を、倒した者など1人もいない……」
カーボンから、堅いダイヤモンドの体に変化をとげた敵は、ぼくらに向かって不敵な笑みを

よこした。

⬇385へ

463

気がつくと、ぼくらは薄暗い倉庫のような所に倒れていた。
「ハローグッバイって、テレポートのことだったのか……とにかくここを出なきゃ」
ぼくらが、出口を探していると、不気味な声がコンクリートの壁に響いた。
「ヒーヒヒヒ、どうした坊やたち。そんなとこにゃ出口はないぜ」
あわててあたりを見回したが誰もいない。あまりの気味悪さにジェフがブルルと身ぶるい。
「ヒーヒヒヒ、俺は透明人間さ」
と、透明人間だって!? こいつ、敵かそれとも味方か……思わずぼくは身がまえた。

●Uにチェックがあれば……584へ　●なければ……639へ

464

ぼくらは左へ進んでみた。が、やがて道は行き止まりに。もどるしかないだろう。

●右へまだ行ってない……667へ　●右へはもう行った……568へ

465

しかし、ぼくは考え直した。今後もっともっと強い敵が出てきたときのために、ペンシルロケット20は残しておきたい。と、思う間もなく、電撃バチバチの電気ショック攻撃が！バチバチバチ～ッ。猛烈な電撃をくらったぼくたちは、全身を鋭い刃物で切り裂かれたような痛みに襲われた（HPマイナス6）。

が、敵の反撃もそこまでだった。ぼくらにさんざん痛めつけられた体は、電気ショック攻撃のパワーに耐えられずショート！　バリバリバリッ！　電撃バチバチは、雷に打たれたようにまばゆい光を放ち、やがてゆっくりと倒れふした。や、やった！

⬇658へ

466

マニマニの像の力はかなりのものだったが、ぼくはプラチナの腕輪のおかげでだいぶ衝撃を防ぐことができた。さあ、こいつで反撃だ！

●バズーカ砲があれば……………529へ
●なければ……………………5へ

467

さらにポーラのために、厚めのフライパンも買う。お金はほとんど使ってしまったけど。

◆『厚めのフライパン』を入手した。アイテムリストにチェックする。Nをチェックして

……507へ

468

いくら大きくても相手は恐竜。脳ミソは、ぼくらよりも小さいはずだ！
ぼくらはハラペコザウルスと戦う決意を固め、それぞれに身がまえた。
いくぞ〜〜〜〜っ！　ぼくが、まず一番手だ。

●バットで戦う……428へ　●PK必殺を使う……439へ

469

「あぶない、ポーラ！」

●守りのリボンがあれば……446へ　●なければ……538へ

470

敵が爆弾を投げつける前に倒したい！　というぼくの願いはかなった。ぼくの繰り出したスマッシュが、安心ボムの急所を直撃！　悪あがきした敵のパンチをおなかにくらってしまったけれど（HPマイナス3）、ぼくは意外に軽々と安心ボムを倒してしまった。
「爆弾さえ投げなければ安心なんだ。なあるほど！」

と、妙なことに感心していると——。
突然、安心ボムの体が水たまりに飲みこまれ、代わりに、マリンブルーのペンダントが、浮かびあがった。ペンダントには、大海原の絵が彫られている。
「海のペンダントだ！」
うれしい戦利品を手にして、ぼくは道を逆もどり。さっきの四つ角へと向かう。

◆『海のペンダント』を入手した。アイテムリストにチェックして ……………………389へ

471

「……ここで押し問答しててもはじまらないよ。地上のグミさんに相談してみよう」
ジェフの提案で、ぼくらは地上のグミ族の村へとテレポートした。グミさんたちを集め、事情を説明しはじめると、長老だというグミさんが、とんでもなく臭い果物のようなものを持ってきた。なんでも、グミドリアンとかいう食べ物で、グミ族の大好物なのだという。
「これ、グミ族ならみんな喜んで食べる。きっと役にたつ」
ほかにめぼしい情報を得られなかったぼくらは、臭いのは少々我慢して、グミドリアンを地底大陸へと持っていった。そして、再び地底の集落へ向かう。門番のグミさんは、また来たのか、と、迷惑そうな顔でぼくらを見た。

◆『グミドリアン』を入手した。アイテムリストチェックして ……………………595へ

472

敵のいきなりな登場に気が動転したぼくは、ゴヂラのバットをつかみだそうとして、背中のリュックをひっくり返してしまった。すると。

ツ〰〰〰ン！　散らばった荷物の中に、異臭を放つブツが。そう、ペテネラの靴下だ！

ぼくは、せまり来る敵に向かって、ソレを投げつけた。ソレは、主の顔にビタンッと命中！

「たまらん〰〰〰！」さすがは5年モノの靴下だ。凄い臭いに、穴の主は失神！

「びっくりしたけどたいしたことなかったな。でも、あと1匹、油断しないで行こう！」

ぼくらは気を引き締めて先へ進もうとした。そのとたん！

⬇**461**へ

473

ぼくらは、本格的なシェフのフライパンをポーラに買うことにした。

さて、ドラッグストアを出て、今度はどこへいってみようか？

◆『シェフのフライパン』を入手した。アイテムリストにチェックして

●レストランへ……………**545**へ　●ビーチへ……………**521**へ

474

「ディフェンスダウン――――っ！」

ポーラが、敵の防御力を下げるPSIを放った。とたんに青い光が敵の体を取り巻き、吸いこまれるようにかき消える。成功だ！　あとは、物理攻撃でひたすら叩くのみ。必死になった敵の足が当って痛い思いもしたが(HPマイナス4)、ディフェンスダウンが効いてたおかげで、意外なほど短時間のうちにタコ・ソ・ノモノを葬りさることができた。
「ビビビビビ……わたしが……やられるなんて……」
力を失ったタコ・ソ・ノモノが、その場にコロンと倒れる。すると、どこに隠し持っていたのか、鈍い光を放つ丈夫そうな剣が転がり落ちた。
「剣か……ん？　こ、これは!?」
剣を手にとって何気なくながめていたプーの表情が、唐突に変わった。なんと、タコ・ソ・ノモノが落としたのは、王者たる資格のある者のみが装備できる世界に1つしかない剣——王者の剣だったのだ！　ぼくらの中でこの剣を扱うことができるのは、もちろん、プーのみ。プーは珍しくうれしそうに、王者の剣を身につけた。
◆『王者の剣』を装備した。アイテムリストにチェックして　……………………665へ

475

墓場から出たところで携帯電話が鳴った。アップルキッドからの電話だった。
『やあネスかい。スリークの街ではゾンビに苦労してるみたいだね。役にたつかどうかわか

らないけれど〝ゾンビホイホイ〟っていうゾンビ退治の発明品をそっちに送ったよ。じきに着くはずだから、よろしく。じゃあ』
電話がきれたとたん、いきなり運送会社の車が到着した。
「まいど、エスカルゴ運送です！　アップルキッドさんからのお届け物をお持ちしました」
ナイスタイミング！　ぼくは、ゾンビホイホイを受け取った。

⬇427へ

476

この街でできることは、もう全部やった。さあ、ピラミッドがあるという南を目ざそう。
「ピラミッドっていえば、モノトリーさんが言ってたわよね。わたしたちを、そこへ行かしてはいけないって、マニマニの悪魔が語ったって……」
「マニマニの悪魔？　それは、なんだ？」
事情を知らないプーが、不思議そうに問いかける。
「ああ、プーにも話しておいた方がいいね」
ジェフが、プーと並んで、説明をはじめた。そうしている間にも、太陽はサンサンと輝き、ぼくらに強烈な陽射しを浴びせてくる。

●Pにチェックがあれば……………231へ　●なければ……………………392へ

477

ストーンヘンジから外に出たぼくらは、その足でオネットへとテレポート。図書館で無口を治す本を手に入れ、すぐさまグミ族の村に向かった。

ぼくらの持ってた本は、グミ族たちに一大センセーションを巻き起こした。誰もが我先と無口を治す本を読みあさり、なんと、あっという間におしゃべりになってしまったのだ。

「おまえさまたち、いい人、オレの宿に泊まっていく、いいね」

ぼくらは、宿屋をやっているというグミさんに勧められ、ありがたく翌朝を迎えた。

◆HPを現在のレベルの最大値まで回復させて

●壊れたビーム砲があれば……636へ　●なければ……296へ

478

ぼくは、すっきりハーブを博士にあげた。博士はさっそくそれを飲む。

「お、こりゃいい。もう治ってしまったゾ！　頭もスッキリだ、そうそうお礼といってはこんな物でなんだけど、おもちゃぐらいにはなるだろう」

喜んだ博士は、壊れたレーザーをくれた。それを、ジェフは器用な手つきで直し、レーザービームに作りかえてしまった。さすが、カエルの子はカエル！

◆アイテムリストから『すっきりハーブ』を消す。『レーザービーム』を入手した。アイテム

リストにチェックする。エにチェックして……………………454へ

479

砂漠で体力を消耗していたぼくらは、無益な戦いは避けることに。笑いボールに気付かれないように、静かにその場を立ち去った。しばらく行くと、立ちのぼる煙が見えてきた。「やった、助かった、人がいるんだ。あそこで道を聞こう！　さあ、もうひと頑張りだ」ぼくは、疲れきった顔の2人を励まし、煙の立っている場所を目ざした。

⬇415へ

480

ぼくは力尽きて、ついにその場に倒れふしてしまった……。もうENDだ。が、しかし。遠ざかる意識の中に天の声が響いてきた……。『ネスにジェフ、大変でしたね。少し休みなさい……。しかし、ここであなたが倒れてしまったら地球もおしまいです。よいですか？　あなたたちを少し前の時間へもどします。ですからムーンサイドのはじめからまた頑張ってみて下さい。頼りにしていますよ……』

気がつくと、ぼくらは酒場の中に立っていた。

◆ここでバトル対戦表を書き替えてもOK。HPを現在のレベルの最大値まで回復させて……………656へ

481

「そういえば、前に〝どせいさんの辞書〟をもらったはずだぞ」
急に思い出したぼくは、辞書を取り出した。まさか、これが役にたとうとはね……。
ところが辞書をひろげてみてガッカリ。1つも文字が読めないんだ。それもそのはず、その辞書はどせいさん語で書かれていたものだったんだ。困っていると……。
突然、どせいさんが、ぼくから辞書をとり、ふんふんと読み始めた。
「だいだい、わかったです。どせいさん、ことばしゃべるます。あなたべんり、まあえんりょすなで、もっとよってけ」
なんとどせいさんは、たどたどしいながらも、あっという間に人間の言葉をマスターしてしまったんだ。ひょっとして、この人たち、すごい種族なんじゃないの……。

⬇558へ

482

「ここで死ぬ？　それはおまえだ！」
ぼくはとっさに身がまえた。仲間たちも、それぞれの武器を手にDXスターマンをにらむ。
「ふはははは……たいした自信だな！」
おかしそうに笑うDXスターマン。この〜っ、笑うなら笑え！

●PK必殺をかける……………108へ　●武器で攻撃……………64へ

483

「……ネス、いいか。ヤツはこの酒場のどこかにその像を隠しているはずだ。……も、もうしんどくてしゃべれねえ。そんじゃ、おでかけは、ひと声かけてカギかけて……」

トンチキさんはそれだけ言い残すと、ヨロヨロと去って行った。

➡360へ

484

ぼくらは、フォーサイドでひときわ高い『モノトリービル』の前までやってきた。

ビルの脇では、買い物帰りの奥さんたちが何やら井戸端会議に花を咲かせていた。

「モノトリーさんて怪しいわよ。あんな風采のあがらなかった人が急に街の実力者ですもの」

「そうそ。こんなビルなんか立てちゃって、てっぺんの48階でふんぞり返ってるらしいじゃない。今じゃ警察とかも自由に操っているって噂よ」

街の実力者であるモノトリー氏に会えば、何かわかるかもしれない。とにかくぼくらは、そのビルに入ってみることにした。天井の高いエントランスを抜けて、エレベーターに乗る。

しかし、エレベーターは47階で止まってしまった。

エレベーターを降りて、目の前にある扉を開けると、そこで待っていたのは！

「よお、ネス。あいかわらず貧乏臭いな、おまえ」

「こらこらポーキー、あんまり本当のことを言うもんじゃないよ、はっはっは！」

ソファーにふんぞり返ったポーキー親子じゃないか。なんか2人とも会うたびに太って人相も悪くなっていくみたいだ。
「ポーキー、なんで君がこんなところに……」
「モノトリーはちょっとばかり利用価値があるもんでね。おっと、こんなこと貧乏人のこせがれが知らなくていいことサ。それにしてもおまえ、目障りだなあ。さっさと消えろよ」
ポーキーが顎をしゃくると、脇でひかえていたごっついボディーガードたちがぼくらの前にズイッと立ちはだかった。
くっ！　ポーキーのヤツ、なんだってんだ！　ぼくは思わず拳を握りしめた。しかし……。
「こらえるんだ、ネス。こんな敵の巣みたいなところでトラブッたら、やっかいだ。あんなヤツの言うこと気にするなよ。それにモノトリー氏に会うにはまたの機会もあるさ！」
両脇からジェフとポーラに押しとどめられ、ぼくはぐっと耐えた。
「ハハハハハ、弱虫ネス、あばよ！」
ヤツの高笑いを背に、ぼくらはエレベーターに乗り、そしてビルを出た。

➡419へ

485

翌朝ぼくたちは、さっそくテントに行ってみた。中を見ると、いるわ、いるわ……。おそらく街中のゾンビが、ゾンビホイホイのネバネバに手足をとられて、苦しげにもだえている。

「これで、街も明るくなるわね。でも、こうなってはゾンビもあわれね」
このポーラの言葉を聞いて、1番近くに捕われていたゾンビが声をあらげた。
「ふん、あわれだと！　いい気になりやがって。いまにゲップー様がやってきて、おまえらなんかひと捻りにしてくださるさ！」
ゲップー？　初めて聞く名だ……。そこで少し、カマをかけてみることに……。
「ゲップーだって、あんなやつ、もうこの街からとっくに逃げちゃったよ」
「何をバカな。ゲップーさまは、グレープフルーツの滝の奥の秘密基地で、今もこの街を征服する準備をなさっておられるんだ。このマヌケめ！」
ゾンビは簡単にだまされ、ゲップーとやらの秘密基地の場所を明かしてしまった。
ぼくたちはさっそくグレープフルーツの滝を目ざした。

⬇640へ

486

「そうだ！　ポーラ、これを……」
ぼくは、バスの中で買ったぬれタオルを取り出すと、苦しそうにしているポーラの額にあててやった。
しばらくすると、彼女の呼吸は落ち着き顔色も普通にもどった。
「心配かけてごめんなさい。迷惑かけちゃったわ……」

「何言ってんだよ。それよか、具合いが悪かったら我慢しないでぼくらに言うんだよ」
ぼくの言葉に、ポーラはにっこり微笑むとコクンとうなずいた。
◆アイテムリストから『ぬれタオル』を消して……………452へ

487

「こりゃ、眉毛つながりの金歯さん、久しぶり。バーボンでもひっかけにいきましょうや！」
モノトリービルで通せんぼしていた男は、透明人間に会うと大喜びでさっさとどいてくれた。と！　ビルの中に人影が!!
あれは確か……モノモッチ・モノトリー！
ボロボロの作業服に帽子を深くかぶっていたけれど、確かにあの顔は街の入口の看板で見たのと同じ顔だ！
ぼくらは彼を追ってビルの中へ入った。
すると、そこには、黄金色に輝く、怪しげな像が立っていた。こいつは……見たことあるぞ。たしか、ハッピーハッピー教の本部にあったのもこれだ……。もしかしてこれがマニマニの悪魔か！
キラリ……。像の目が妖しく光る!!
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはE、相手はD。相手よりも数値が……

●上……………………………609へ　●下……………………………585へ

488

何といっても、気絶した仲間を回復させるアイテムが必要。ぼくらはそう考え、いのちのうどんを買った。
「さて、これでオレたちは文字通り無一文だ。街でも散策してみるとするか」
プーがクールに提案をする。
ぼくらは連れ立って、街を歩きはじめた。
◆『いのちのうどん』を入手した。アイテムリストにチェックする。Xにチェックして…

……………………………280へ

489

ぼくは勢いこんでバットを振りおろした。確かな手ごたえがあった。だが、とどめを刺すには至らない。さらにポーラが、フライパンをヤツの頭めがけて横殴りする！
だが、長年樹の芽はこれをかろうじて避けた。バランスをくずすポーラ。
そこをめがけて、長年樹の芽が体当りを！
「あぶない！」

とっさにジェフがバンバンガンを撃った。ヤツの足が止まる。今だ！
ぼくはバットをヤツの頭めがけておもいっきり振りおろした。
ボカ――――ン！　これがスマッシュヒットとなり、やつはおとなしくなった。
そして、ぼくとジェフはあわててポーラに駆け寄る。なんとか起き上がったポーラは、せいいっぱいの笑顔を向けて言った。
「うん、平気。きっとまっ赤なリボンをつけてたおかげね」

➡645へ

490

「さあいらっしゃい、トドさん！」
ポーラが厚めのフライパンをかまえ、ぼくもミスターのバットをギュッと握りしめる！
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはB、相手はC。相手よりも数値が……

●上……………………590へ　●下……………………443へ

491

続いてポーラがフライパンでヤツに襲いかかった。しかし、簡単にかわされてしまう。このあとジェフがバンバンガンで攻撃したが、これもまたはずれ。まずい！
動揺するぼくに長年樹の芽が体当り！　地面にしたたか頭を打ちつけた。

●現在のＨＰが１２以下 ……………412へ　●１３以上 ……………………531へ

492

ぼくは、キャッシュディスペンサーでお金を下ろすと、マジカントバットを買った。

◆『マジカントバット』を入手した。アイテムリストにチェックする。キにチェックして ……………………………………432へ

493

「さて、街（まち）のめぼしい場所にはだいたい行ったたな。これからどうしよう？」

と、ジェフとポーラに相談すると、

「私、トンズラさんたちのことが気になってしかたないの」

ポーラがかわいい顔を曇らせて言った。

助けたい気持ちはぼくもジェフも同じだ。だけど、額（がく）が大きすぎる。どうしたらいいんだ。

●銀行へ行く ……………653へ　●ママに電話する ……………………404へ

494

と、そのとき、プーが声を上げた。

「おい、あそこの壁の前に、なにかが置いてあるのが見えるぞ」
えっ？　目の悪いジェフが、メガネを動かしながら、前方をじっと見すえる。
「間違いない。俺は、少しだけど夜目が利くんだ」
言うが早いか、壁のほうへ走りよるプー。ぼくらのほうへ再び帰ってきたときは、手にいのちのうどんを持っていた。さ、さすが……。

◆『いのちのうどん』を入手した。アイテムリストにチェックして……………365へ

495

西の通路を選んで進んで行くと、壁につきあたった。そこには木の扉がついており、扉の前にはサルが座っていた。「この先へ行きたいならピザを下サル？」って言うんだけど。

●ピザがあれば……………136へ　●なければ……………406へ

496

「でも……ぼくはいいけれど、みんなは、それでいいのかい？」
ぼくは、仲間たちに聞いてみた。こんな大事なことを、ぼく1人の考えで決めてしまってはいけないと思ったからだ。
「なんだったら、ぼく1人で……」

パシッ！　突然、ポーラが、ぼくに平手打ちをくらわせた。
「なによ、ネス！　地球を救うためには、わたしたち4人が力を合わせなくっちゃならないのよ。今さらそんなこと言うなんて！　わたしたちは、今までいっしょに戦ってきたのよ。これからもいっしょに決まってるじゃない！」
言いながら、涙ぐむポーラ。ジェフとプーも、怒ったような顔でぼくを見ている。
「ネス。ぼくらをみくびっちゃ困るよ。ここまで来て、今さらもどれというのかい？」
「そうだ、水くさいぞ」
みんなのこの言葉で、ぼくの気持ちは固まった。

⬇156へ

497

ええと……Fのチェックはどうなっていたっけ……。

●Fにチェックがあれば……………551へ　●なければ……………………460へ

498

BOM！　テレポートの瞬間をバス停形モンスターのマッドサインに邪魔されてぼくらは黒コゲに！（HPマイナス3）
よくも！　怒りをバットにこめて、スイング！　あっという間にマッドサインはスクラッ

プに。よく考えてみりゃ、すぐ隣の町に行くんだから、歩いていこう。

⬇434へ

499

この戦いの中で、ぼくは催眠術を、ポーラはPKフリーズをそれぞれマスターした。

◆ネスが『催眠術』を、ポーラが『PKフリーズ』を習得した。PSIリストにチェックして……………………457へ

500

さらに南へ進むと、妙にメカっぽい建物にでくわした。表札を見ると、『アンドーナッツ博士の研究所』とある。え？　アンドーナッツ博士？　アンドーナッツといえば、なにをかくそう、ボクのお父さんじゃないか！

まさか、こんなところに研究所があろうとは……。ボクはさっそく中に入った。

「おおジェフか。10年ぶりか、お互いよく生きておったのう。それでなんでここに？」

ボクのお父さんっていうのは、こんな人。研究にばっかり打ちこんで、家族のことなんて二の次。もちろん、ボクのたった1人のパパで、決してきらいではないけれど、ボクは生まれてから1度も、彼のことを「お父さん」と呼んだことがない。

ボクは、ため息をついてこれまでのいきさつを話した。

「なるほど。きっとそのポーラという少女は、無意識のうちにワシの存在を感じ取り、きみに南に行くように指示したんじゃな。何しろ、今すぐきみをスリークに送る手段を持っているのは、ワシだけじゃからな」

博士はそう言うと、ボクにスカイウォーカーという乗り物をくれた。

「ずいぶん昔の発明品だが、スリークまで行くには十分だろう。ではまた10年後に会おう」

スカイウォーカーは丸っこい飛行メカで、ちょっと見た目には小型のＵＦＯに見えた。

ボクは、すぐさま研究にもどる博士を横目でちらっと見ると、さよならも言わずにスカイウォーカーに乗りこんで発進させた。

➡544へ

501

ジェフとポーラのふたりに勧められて、ぼくは『ゴヂラのバット』を買うことにした。

さてと、劇場に博物館、モノトリービル……いろいろあるけど、どこへ行こうか？

◆『ゴヂラのバット』を入手した。アイテムリストにチェックして……………419へ

502

パン屋に入ったが、数枚の小銭しか持っていないぼくらはクッキーだけ買って、店を出た。

◆『クッキー』を入手した。アイテムリストにチェックして……………419へ

503

「さっきの枝道へ行ってみよう！」と、ぼくは2人に言った。

●コにチェックがあれば……………456へ　●なければ……………………426へ

504

トゥルルルル。不意に電話が鳴った。

『やあ、ネス！　またヘンな物を作っちゃったよ……』受話器からアップルキッドの大きな声が響いてきた。『……〝グルメ豆腐マシン〟といって、いろんな味の豆腐が作れるんだ。ぜひ持ってっておくれよね。もう、ウッカリ特急便に持たせから。じゃ！』

アップルキッドは一方的にまくしたてると、電話を切ってしまった。でも、いろんな味の豆腐を作ってどうしろっていうんだろう……。

⬇600へ

505

さらに進むと、不思議な光がもれて来る穴を見つけた。が、中に入ろうとすると、変な植物に行く手をさえぎられた。土のかたまりにちょこんと乗った目を持つ芽〝長年樹の芽〟だ！

「よく来た。ここはおまえの3番目の場所だ。だが、今は私の場所だ。奪い返すがよい。できるものならば……」

●スにチェックがあれば……………612へ　●なければ……………………………604へ

506

再び長い落下感を体験したぼくらは、どこか見知らぬ黄色っぽい大地の上に到着した。あたりには、見たことのないような草花が生い茂り、気温はとても高くじめじめした感じだ。
「ねえ。わたしたち、いってみれば、地球の中心部に向かってどんどん落ちていたんでしょう？　なのに、どうしてこんなところに？　もしかして、地球の反対側に出ちゃったとか？」
ポーラの疑問に答えるように、ジェフが口を開いた。
「何かの本で読んだことがあるよ。地球の奥深いところに地底大陸があるって噂を……」
「と、いうことは、ここは、地底大陸なのか？」
プーが、ジェフにそう聞いた瞬間！
「きゃあ〜〜〜〜〜〜〜っ！」ぼくたち男3人の方を向いていたポーラが、前を指差し、鋭い悲鳴を上げた。ハッとうしろを振り返ると、なんと、何万年も前に絶滅したといわれている巨大な恐竜が。まさか……こいつは、ハラペコザウルスだ！

●逃げる……………………458へ　●戦う……………………………468へ

507

スリークでの仕事をすべてやり終えたぼくたちは、いよいよ次の街、フォーサイドを目ざす。フォーサイドへはバスが出ているから、これに乗るだけで移動することができるんだ。

さっそくぼくたち3人はバスに乗りこんだ。するとバスの中で話しかけてきた人がいた。

「わたしは旅のセールスマンですがね。どうです、この〝ぬれタオル〟を買いませんか？」

●Nにチェックがあれば……………409へ　●なければ………………………605へ

508

まぼろし老人に別れを告げ、広い一本道を歩きはじめたぼく。ニンジンやトマトの形をした木々の間をどんどん進んでいくと、道端でおままごとをしている人たちを見かけた。

のどかだなあ…、なんて思いながら、ふと布マットの上に乗っている人を見ると——。

「ママ!?　トレーシーも!!」

そう、なんと、ぼくがおままごとをしていると思っていたのは、ぼくの家族だったのだ！

ママの脇には、犬のチビまでいる。なんで、こんなところに——？

そんなぼくの驚きをよそに、ママはいつもの明るい笑顔を見せた。

「あら、ネス。お帰りなさい」

そうか……ここは、ぼくの心の中の世界なんだったけ……。

ぼくはようやく了解し、マットの上に座った。出張に行ってるパパの姿は、この心の中の世界でも見えなかったが、まあ、あまり気にしないでおこう。
ぼくはためしに、3つのペンダントのことを質問してみた。「知らない」と言われると思っていたが、なんと、トレーシーがあっさりと答えてくれる。
「それなら、橋を渡った向こう側にあるっていう噂よ、お兄ちゃん」
◆『ダブルバーガー』『ピザ』『マンモスバーガー』のいずれかがあれば食べてOK。『ダブルバーガー』を食べたらHPプラス10、『ピザ』を食べたらHPプラス15、『マンモスバーガー』を食べたらHPプラス20し、アイテムリストから食べたぶんを消して …**523**へ

509

洞窟の中には、プレゼント箱が落ちていた。中身はペンシルロケットだ。ラッキー!!
洞窟の奥はつきあたりになっていて、不思議な光が満ちていた。でも、その光はボクが近づいてもなんの反応も示さない。しかたなくボクは、引き返してロープをのぼることにした。
◆『ペンシルロケット』を入手した。アイテムリストにチェックして ……………**405**へ

510

——ポーラの祈りは、距離も、時さえも飛び越えた。

『……誰か……わたしたちに……力を貸して…………………』
ポーラの祈りを1番最初に感じとったのは、サターンバレーにいるどせいさんたちだった。どせいさんたちは、アンドーナッツ博士やアップルキッドを外に連れだし、ネスたちの無事を強く祈った。さらに、ポーラの祈りは野山を飛び越え——。
ランマの城の人々や、ウィンターズの寄宿舎の子どもたち、ツーソンのポーラスター幼稚園の人々、そして、オネットのママやトレーシーにまで届いた。
ポーラの強い呼びかけを感じた世界中の大勢の人々は、ネスの、ポーラの、ジェフの、プーの無事を願い、強く強く祈り続けた——。

⬇355へ

511

ジェフのレーザービームが巨大キノコの身体を射抜く！　ぼくらは、それぞれの武器を手にヤツに飛びかかると、連続攻撃を繰り返し、巨大キノコは動かなくなった。

⬇543へ

512

ダイヤモンドドッグは、その背後にプレゼント箱を隠し持っていた。開けると中から、防御力を上げてくれるダイヤの腕輪が！
「う～ん、これは、ジェフが装備するといいよ」ぼくは、ジェフに腕輪を渡した。

それから、この戦いで喜ぶべきことがもう1つ。なんと、ポーラが、敵の防御力を下げるディフェンスダウンを覚えたのだ！

「喜ぶのはまだ早いわよ。さあ、最後のパワースポットへ行きましょう！」

ポーラがぼくらを急かせるように、奥へ向かって歩きはじめた。

◆ポーラが『ディフェンスダウン』を習得した。PSIリストにチェックする。ジェフが『ダイヤの腕輪』を入手した。アイテムリストにチェックして……………………610へ

513

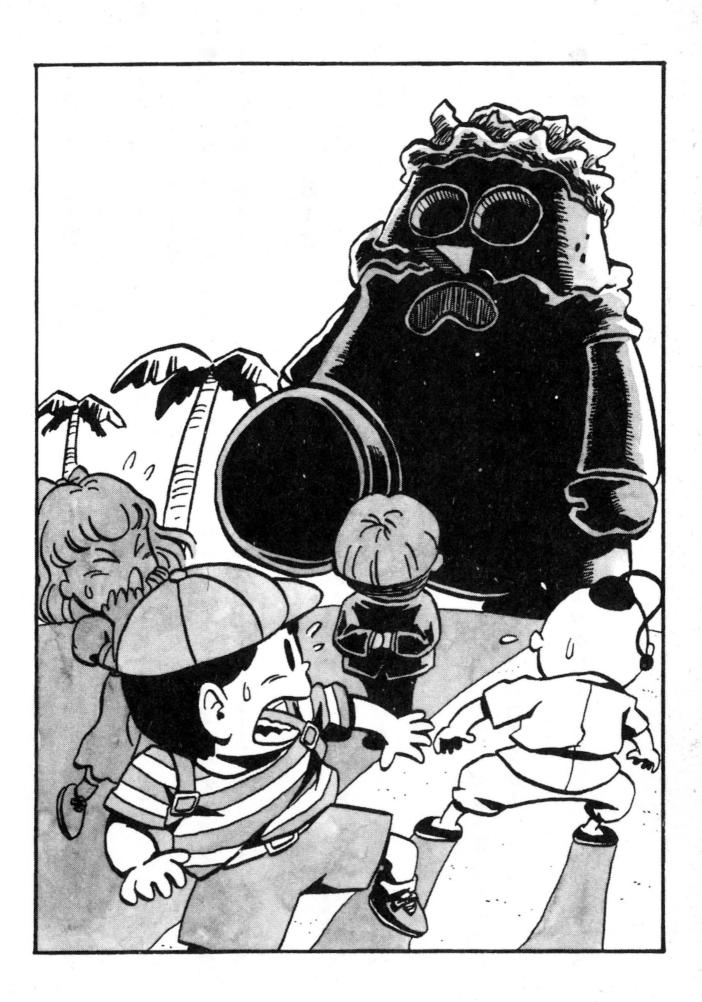
ぼくは勢いこんでバットを振りおろした。この一撃がスマッシュヒットとなり、長年樹の芽はおとなしくなった。さすがはミスターのバット。見事な威力だね。➡645へ

514

ポーラが、倒れたDXスターマンのうしろに回り、そこにあったプレゼント箱をちゃっかりと開けた。中には、なんと、防御力をアップしてくれる輝きのコインが！

「これは、ポーラが装備するといいよ」

◆『輝きのコイン』を入手した。アイテムリストにチェックして……………562へ

515

「それにしても、海はまだかしら、こう暑くっちゃ、たまらないわね……」
ポーラがぐちをこぼしたそのとき、ぼくらのいるところが、ふっと陰った。
何が起こったのかと、なにげなくうしろを見ると——。
「きゃあああああっ！」
ポーラが、すさまじい悲鳴を上げた。ぼくとジェフは、かろうじて悲鳴を飲みこむ。
ぼくは、ぼくらのまうしろに立つ、家ほどもでかいロボットを見上げた。すると、
「ジェフさん、お久しぶりでやんす。あっしですよ。ブリックロードでやんす」
なんと、このでっかいロボットみたいなのが、スカラビの街で聞いた、噂のダンジョン男だったのだ。しかも、このダンジョン男、ジェフの知り合いなのだという。
「スカラビであっしの噂を聞きやしたか？　そうなんでやんすよ。アンドーナッツ博士のお力を借りて、あっし、やっとダンジョン男になれたでやんすよ」
ダンジョン男のブリックロードさんは、自分のおなかをポンと叩いて話を続けた。
「あっしの体は、いろいろな施設が整ってるでやんす。親切設計がモットーでやんすからね！」

●Yにチェックがあれば……123へ　●なければ……229へ

516

「わたしの武器もネスの武器も、スカラビで揃えたばかりだから、ここではジェフが使えそうなものを買いましょうよ」

ポーラの冷静な意見に、ぼくもジェフも賛成。相談の末、ジェフにペンシルロケット20を2つ買って渡した。

◆『ペンシルロケット20』を2つ入手した。アイテムリストにチェックして ……567へ

517

さんざん悩んだ挙げ句、ぼくはスーパーバズーカを選び、ジェフに渡した。

◆『スーパーバズーカ』を入手した。アイテムリストにチェックして ……651へ

518

ウィンターズは、雪におおわれたきれいで静かな街だった。ぼくらは街はずれにあるアンドーナツ博士の研究所へ到着！　博士は、両手を広げてぼくらを迎えてくれた。

「やあ、ネスくんにポーラちゃん！　ジェフは時々オネショをするけど、よろしく頼むよ！」

「やめてよ、そんな昔の話なんて、博士!!」

「いやあ、バラしちゃって悪い悪い。とにかく、事情はわかった。スカイウォーカーを改造

するには少し時間がかかるからね。ゆっくりしていくといい」
その晩ぼくたちは博士の研究所に泊まることにした。さて、次の朝――。
「おはよう！　よく眠れたかい？　ブ、ブワックション！」
博士は徹夜で作業をしてくれていたらしく、そのせいか風邪をひいてしまっていた。
●すっきりハーブがあれば……478へ　●なければ……454へ

519

「あれ、何かしら？」
ポーラが足を止めて言った。彼女が指差す方を見ると、キラキラと何かが光っている。
が、よく見ると、その光る物体の上空には、笑いボールがプカプカと浮かんでいる。
こいつは、大爆発を起こす厄介な敵だ。どうする!?
●戦う……614へ　●戦わない……479へ

520

ぼくらは、埋蔵金を掘るためにドコドコ砂漠へと向かった。すると……。
「うへえ、助けてくれ――！」
どうしたことだろう、穴の中からジョージ・モッチーさんが大あわてで飛び出してきた。

「お、おめえさんたち！　……いやね、このめえから穴の中にでっけえモグラのバケモンが出るようになっちまって……今もまたその大モグラに追いかけられて、なんとか逃げ出てきたってわけよ……ああ、オレの勘じゃお宝まであと一歩ってとこなのに……」

モッチーさんはうらめしそうに穴を横目で見た。そこで、ぼくは言った

「モッチーさん。その化け物モグラは、ぼくらに任せて！　バッチリ退治するから！」「へ？　お、おめえさんたちがかい？」モッチーさんはキョトンとぼくらの顔を見る。

「実はね、モッチーさん。私たち、大金が必要になったの。それでモッチーさんたちの手伝いをさせてもらおうと思ってきたところだったのよ」

「けど、嬢ちゃん。中はさっきも言ったように、すげえバケモンがいるんだよ？」

「大丈夫ですよ。ボクらは今までもすごい敵を倒してきたのですから」

モッチーさんをジェフが説得し、ぼくらは埋蔵金が眠っているだろう穴へトライ！

狭い通路をしばらく進むと、右手に細い脇道が現れた。このT字路をぼくらは……。

●右に曲がる……………………**426へ**　**●そのまま直進**……………………**460へ**

521

ビーチを歩いていると、木に下げられた鳥かごからキュウカンチョウが話しかけてきた。

「ピラミッドのあるスカラビに行くには海を渡らなければならないんだワー。でも海にはク

ラーケンたら化け物がいて、元気に船を襲ってくれる。怖いっしょ？怖いっしょ？」
何か聞こうとしたけれど、キュウカンチョウは同じ言葉を何度も繰り返すだけだった。
●レストランへまだ行ってない……**545**へ　●すでに行った……**569**へ

522

ドラッグストアでミスターのバットを買った。これで攻撃力がぐんとアップだ。
◆『ミスターのバット』を入手した。アイテムリストにチェックして
●厚めのフライパンがあれば……**507**へ　●なければ……**467**へ

523

久しぶりにママたちと会って元気になったぼく。でも、ゆっくりしている場合じゃないと思い返し、立ち上がった。そして、トレーシーの言ってた橋の方へと歩きはじめる。
しばらく進むと、右手にお店を発見！　そこでは、マジカントバットが売られていた。
「マジカントバットは、これで最後だよ。買わなきゃ損だよ。1000ドルでどうだい!?」
電話で確認をとると、パパからはちょうど1000ドルの振り込みがあったが……。
●買う……**492**へ　●買わない……**536**へ

524

「ダメだ。ボクらには情報がたりないんだ」ジェフが、あきらめたように言った。
「ほら、サマーズのスカラビ文化博物館で、袖の下を要求してきたヤツがいた部屋があっただろう。あそこになにか重要な秘密が隠されている気がするんだ。行ってみよう」
ジェフの言葉に従って、ぼくらはサマーズへとテレポートした。

⬇407へ

525

「最近、モノトリーさんがうらぶれたボルヘスの酒場に出入りしてるらしいぞ」
「へえ？　あの大金持ちがなんであんなところへ……」
道すがら小耳にはさんだ情報が気になって、ぼくらはその酒場を訪ねてみることにした。
「すみません、ここにモノトリーさんはよくいらっしゃるんですか？」
まずカウンターの中のマスターに声をかけてみたが、「さあね」とかわされてしまった。
そこで、酒を飲んでいる男たちに聞いてみたが、みな肩をすくめたり、無視したり……。
そのうち裏の厨房から店のママさんらしき人がやってきて、ぼくらを、店の外に追い出してしまった。「子供は立入禁止だよ！」

⬇419へ

526

ダイヤモンドドッグは、その背後にプレゼント箱を隠し持っていた。開けると中から、防御力を上げてくれるダイヤの腕輪が！
「う〜ん、これは、ジェフが装備するといいよ」
ぼくは、ジェフに腕輪を渡した。
「よし、じゃあ、早いとこパワースポットの音を聞いて、ポーラを元にもどしてあげよう」
ダイヤモンドになったポーラを抱き上げ、ぼくらは急ぎ足でパワースポットへ。ダイヤモンドの姿もきれいだけど、やっぱりポーラはふくふくのほっぺがおにあいだよ。➡610へ

527

ポーラが気になったぼくらは、フォーサイドでいうところのモノトリービルへとやってきた。しかし、ビルの前では頑丈そうな男が通せんぼ。
「オレは眉毛がつながっていて、金歯の男に会いたくない。連れてきたら絶対ここを通さないぞ！」と言って、ガンとしてそこを動かない。
「ええと、つまりそれって、そういう男を連れてこいってことなんじゃないかな……」
と、ジェフが解読(?)。ぼくらは、眉毛のつながった金歯男を捜すことにした。
「おい、おまえたち。ハローグッバイするか？」

街をさまよっていたぼくらに、トレンチコートの見るからに怪しげな男が声をかけてきた。
あーもう！
「そんなもの、しないよ～っ！」　その時！
ヒュルルル――――！　ぼくとジェフの体はフワリ宙に浮いたかと思うと、すごい光の渦の中に巻きこまれてしまった！
「だからネス～～～イエスとノーは逆だってば～～～！」

➡463へ

528

ヒュンッ！　ジェフの頭をバッファローの角がかすめた！　が、ホームズキャップのおかげで無傷。そこで敵は、標的をかえて、ぼくに襲いかかってきた！　けれど、ぼくはゴチラのバットでヤツの眉間をジャストミート！　バッファローはしっぽを巻いて逃げていった。

●0にチェックがあれば……535へ　●なければ……664へ

529

ぼくはジェフに体を支えてもらって、バズーカ砲を放った！　だけど、なんてことだ。マニマニの像にあっさりとかわされてしまったじゃないか。
その仕返しに、敵はぼくたちの体に不思議な光線を浴びせてきた！（HPマイナス8）

●HPが0以下……………………480へ　●1以上……………………408へ

530

一瞬、逃げようかとも考えたが、ぼくは結局戦うことを決めた。
「じゃ、わたしから行くわよ！」すばやいポーラが、1歩前へ飛び出す。
◆ポーラが『ディフェンスダウン』を？
●覚えている……………474へ　●覚えていない……………436へ

531

「あいたたた……」頭にでっかいコブができたが、まだ戦える！　ぼくは新たにファイティング・ポーズをとった。その時……。ゴゴゴゴ――！　音を立てて炎が舞い上がり、長年樹の芽を取り囲んだ。ポーラがPKファイアーを使ったんだ！
「ぐわあああああああ！」
長年樹の芽は植物だけに、炎の攻撃には弱いのだ。必死になって身もだえている。今だ！
●金の腕輪があれば……………489へ　●なければ……………513へ

532

「ジェフのエアガンにしよう！」ぼくの提案でエアガンとダブルバーガーを買うことにした。
さてと……劇場に博物館、モノトリービル……いろいろあるけど、どこへ行こうか？

◆『エアガン』と『ダブルバーガー』を入手した。アイテムリストにチェックして

➡419へ

533

「あ！　あっちの方に何か建物みたいなのが見えるぞ！」ジェフが、遠くを指差して言った。
「よし、行ってみよう！　大丈夫だよ、ポーラ。すぐ楽になるから」
ぼくはポーラをおぶると、その建物目ざして砂漠を突き進んだ。
はあ、はあ……まずい、あまりの熱さに、ぼくまで目まいがしてきた（ＨＰマイナス３）。
倒れそうになりながらも、なんとかたどりついたそこは、ドラッグストアだった。
さっそくパパに電話すると、入金を確認。ぬれタオルを買ってポーラを癒す。
「心配かけてごめんなさい。迷惑かけちゃったわ……」
「何言ってんだよ。それよか、具合いが悪かったら我慢しないでぼくらに言うんだよ」
ぼくの言葉に、ポーラはにっこり微笑むとコクンとうなずいた。

➡452へ

534

カードの残金は少々。ぼくらはすっきりハーブだけを買って、ドラッグストアを出た。

◆『すっきりハーブ』を入手した。アイテムリストにチェックして

……………**598**へ

535

前に砂漠を横切った時、偶然訪れたサルの穴。ジェフがしっかり覚えていてくれてぼくらは迷わずにたどりつくことができた。

⬇**552**へ

536

「やっぱりやめとくよ……」ぼくは、マジカントバットをあきらめることにした。
「そうかい？　もう、こんな機会はないんだぜ？　本当にいいのか？」
残念そうな顔をする店員さんに向かって手を振り、ぼくは再び外へ出た。

⬇**432**へ

537

「ジェフ！　ペンシルロケット２０だ！」
ぼくの叫びを聞いたジェフが、すばやい動きでペンシルロケット２０を発射させた。
２０発の小型ロケットが、猛烈な勢いで電撃バチバチの体を襲う。もうもうとした白い煙

が舞い上がり、やがて、徐々に視界が晴れてくる。一瞬、身を固くして反撃に備えたぼくたちだったが、電撃バチバチはすでに息絶えていた。
◆アイテムリストから『ペンシルロケット20』を消して……………………658へ

538

とっさにポーラをつきとばしたぼくを、マッドタクシーがかすめる！（HPマイナス3）なんのこれぐらい！　ボクたちは体勢を整えると、せいので敵に襲いかかり、数分でスクラップにしてやった！　今の戦いで、ぼくが味方の防御力を高めるシールドαを覚えた。
「でも、ポーラのフライパンはもうボロボロだな。ちょっと待って！」
ぼくは、パパに電話をして送金を頼んだ。本当は送ってもらったばかりで心苦しかったんだけど……。そして、お金を下ろすと、闇商人を捕まえてシェフのフライパンを購入した。
◆ネスが『シールドα』を習得した。PSIリストにチェックする。『シェフのフライパン』を入手した。アイテムリストにチェックして……………………573へ

539

銀行には、なんと2000ドルが入っていた。スーパーバズーカと楽しいフライパン、両方でちょうどだ。ぼくはおもいきって両方を買い、それぞれをポーラとジェフに装備させた。

「わあ、すっごく軽いのね。戦うのが楽しくなりそう」
新しい武器をチェックするジェフの横で、フライパンをぶんぶん振りまわすポーラ。
◆『楽しいフライパン』と『スーパーバズーカ』を入手した。アイテムリストチェックして
……651へ

540

「さあ、ぼうず、かかってくるがいい。まあ、オレ様の相手じゃないがな。カッカカッ！」
ゴンッ！　Q〰〰〰バタン！　勝負は一瞬にしてついてしまった。油断しまくっていたヤツの頭にぼくのバットが炸裂したのだ！　さすがはゴチラのバット。威力が断然違うや。
さて、倒れた主の横には、下へと延びる穴が開いていた。さて、この穴を降りようか、それともさっきの分かれ道までもどって枝道へ行こうか？
●穴を降りる……551へ　●戻って枝道へ……503へ

541

左へ進むと、つきあたりに、壊れたビーム砲が落ちていた。
「こいつは、修理すれば使えるぞ！」
ジェフが荷物の中にしまいこむ。ぼくらは引き返し、今度は右の方へと向かった。

◆『壊れたビーム砲』を入手した。アイテムリストにチェックして ……………650へ

542

ふと気付くと、ぼくは見知らぬ場所にいた。あわててあたりを見回すが、仲間たちの姿はどこにもない。しかも！

「わ、わ、わ！　な、なんで、こんな格好を!?」

なんとぼくは、一糸まとわぬ裸んぼうの姿で立っていたのだ。と、突然、ぼくの目の前に、まっ黒いウサギが現れた。どこかで見たことがあると思っていると――。

「ネス、久しぶりだね。覚えてない？　ピンククラウドの洞窟の入り口にいたウサギだよ」

ウサギが、いきなりしゃべりはじめた!!

「そんなに驚かないで、ネス。ここはね、キミの心の中の世界なんだよ」

「ぼくの？　心の中の世界？」

「そうだよ。ま、歩いてごらんよ。きっと、いろいろな人に会えるはずだよ」

黒ウサギは、それだけ言うと、あっという間にどこかへと跳びはねていってしまった。しかたなく、目の前にある広い一本道を歩きはじめると、やがて、右手に脇道が見えてくる。

●まっすぐ進む ……………669へ　●右に曲がる ……………620へ

543

洞窟を抜けると、そこには小さな湖があって、そこだけに雨が降っていた。あたりには優しい音楽が流れていて、ぼくはさっそくそれを音の石にしみこませる。そのメロディを聞いている間、一瞬大好きなハンバーグの匂いがしたような気がした――。
研究所にもどると、ちょうどスカイウォーカーの改造が終ったところだった。
「さあ、これで海を渡ってサマーズに行きなさい。今度はたぶん壊れないと思うよ！」
「たぶん？」と、ポーラが心配そうに言うと……。
「いや、絶対……うん、だ、大丈夫！」と、博士は胸を叩く。
ぼくたちは、博士にお礼を言うとさっそくサマーズへと飛び立った！

●エにチェックがあれば　…………574へ　●なければ　…………………623へ

544

スカイウォーカーは、文字どおり天を駆け、あっという間にスリークに到着した。
「いよいよ着陸」と、操作を開始したところ、突如スカイウオーカーは、操縦不能に陥った。
「だ、だめだ！　落ちるう――――！」
BOO〜〜〜〜〜〜〜〜M！　スカイウォーカーは、スリークの墓地のどまん中に墜落した。
クラクラする頭を押えながら、ボクは乗り物の外に出た。驚いたことに、そこは地下室の中

だった。スカイウォーカー墜落の衝撃で、地下室の天井をブチ抜いてしまったんだ。
ところが、ここにはもっと驚くべきことが待っていた。なんと、女の子と男の子がここに閉じこめられているじゃないか。彼らがネスとポーラか！　ボクは直感した。
「ボクの名はジェフ。説明はいらないね」
ポーラとネスが駆け寄ってきて、ボクの手をとった。
「ああ、ジェフ。メッセージを受け取ってくれたのね」
「強度の近視で、力は弱い。そのくせ無鉄砲。こんなボクだけど、仲間に入れてくれるかい」
「もちろんさ」「もちろんよ」
こうして、ボクたち3人は仲間になった。そして、ボク、ジェフの話はここまで。
あとは、ネスに引き継いでもらおう。よろしく、ネス——。

やあ、久しぶり。ぼくはネスだよ。
ここに閉じこめられてから、ひたすら助けを待っていたんだ。だけど、いきなりジェフの乗ったスカイウォーカーが落ちてきた時は、さすがにビックリしたよ。
ともあれ、ジェフを仲間に加えたぼくたちは、彼の持っていた〝ちょっとカギマシン〟のおかげで外へ逃げ出すことができたんだ。〝ちょっとカギマシン〟はどんなカギでもちょいちょいっと開けられる便利なマシンだ。ジェフって頼りになる仲間だね。

⬇475へ

545

レストランでは、上品な格好の人たちが静かに食事をしていた。メニューには、わけのわからない名前の料理がズラリ並んでいて料金も目が飛び出るほど高かった。

水だけ飲んで外へ出ようとすると、隣の席でオーダーを待っていた紳士が話かけてきた。

「ねえ、君たち。スカラビへ行ったことあるかい？　あそこのピラミッドは見事だそうだよ。港町のトトから船が出てるそうだけど、私もいつかは行きたいね」

ピラミッド……〝ネスにピラミッドを見せるな……〟そうだ、マニマニの悪魔がモノトリーさんに言ってたという。これは、なんとしてもスカラビに行ってみなくちゃ！

●ビーチへまだ行ってない　………521へ　●すでに行った　……………………569へ

546

「さあ、行こう！」　どうしてぼくの心が壁に写し出されたのかはまったくわからず、不気味でもあったが、とまどっていてもしかたない。ぼくは、心配そうに見守る仲間たちに向かって、できるだけ元気な声でそう言い、ルミネホールを奥に向かって歩きはじめた。

つきあたりに人間が通れるぐらいの穴が開いている。さっそくジャンプ！　➡506へ

547

「そうです！　あなたがビーナスちゃんを想うのと同じぐらい、ぼくたちはその〝とんでもない物〟が気になってしょうがないんです！」
「うーん……そうか。いや実は、とんでもない物っていうのは、すっごいでかいおばけネズミなんですよ！　なんか、ちかちか光る場所の前で、ドーンとふんばってましてね……」
！　おばけネズミに、光る場所……もしや、その先にはぼくの場所があるんじゃ!?
「この先に、マンホールがあります。そこを降りると下水道になっていて、その奥ですよ」
ぼくたちは、学芸員さんにお礼を言うと、いざマンホールへ！

➡**290**へ

548

振り込みを確認してみると、1000ドルあった。しかし、スーパーバズーカと楽しいフライパンは、どちらも1000ドル。どっちを買うべきか……？

●スーパーバズーカを買う　……**517**へ
●楽しいフライパンを買う　……**597**へ

549

笛の音と同時に、毒の霧のようなものがあたりに立ちこめる！　しかし、魔封じのコインのおかげで、みなそれを避けることができた。そして、攻撃の失敗でひるんだ天狗どのに、

ぼくのバットがスマ――シュ！　天狗どのはふっとんでいった!!

⬇563へ

550

しかし、こんなことでひるんではいられない！　ぼくはプーと力を合わせ、敵にＰＳＩ攻撃を次々としかけた。鋼よりも堅い体を持つダイヤモンドドッグはさすがに手ごわく、ぼくらに矢のような攻撃を浴びせたが(ＨＰマイナス3)、天はぼくらに味方したようだ。やがてダイヤモンドドッグは地に倒れふし、粉々に砕け散った。

⬇526へ

551

ぼくらは縄梯子がかけられた穴を、地中深くへと降りていった。

「ふう、これだけ深いところまでくるとさすがに息苦しいな……」

「ほほお、なら、すぐ楽にしてやろう！」

な、な、なんと！　縄梯子を降りたぼくらの目の前には、さっそく第2の穴の主が！

●ペテネラの靴下があれば……472へ

●なければ……579へ

552

洞窟の中に入ると、そこは迷路のようになっていた。薄暗い通路を進むと、十字路に出た。

●東の方の通路へ進む……576へ　●西の方の通路へ進む……495へ
●南の方の通路へ進む……431へ　●北の方の通路へ進む……632へ

553

先手（せんて）を許してしまったぼくらは、体勢を整えることもできずマニマニにいいようにあしらわれ、何度も何度も地面に叩（たた）きつけられてしまった！（HPマイナス8）

●HPが0以下……480へ　●1以上……420へ

554

金の腕輪（うでわ）と赤いリボンを買った。金の腕輪はジェフが、赤いリボンはポーラがつけることに。これでそれぞれの防御力（ぼうぎょりょく）がアップするぞ。そのあとで、ホテルに部屋をとった。3人で150ドル。あとは明日になるのを待つだけだ。楽しみだな、ゾンビホイホイ。

◆『金の腕輪』と『まっ赤なリボン』を入手した。アイテムリストにチェックする。HPを現在のレベルの最大値（さいだいち）まで回復させて……485へ

555

「よく、やった」スフィンクスが、再び口を開いた。

「謎を解いた人間は、1000年ぶりだ。さあ、ピラミッドへ入るがいい」
その言葉が終わるか終わらないかうちに、ギギギギ～と重苦しい音をたてて、ピラミッドの入り口が開いた。
「さすがはジェフ、物事への考えかたが、実に理論的だ。俺らとは頭の作りが違うのか」
「プーったら、ジェフはね、天才アンドーナッツ博士の1人息子なのよ。こんな謎、おちゃのこさいさいなのよ！」
ぼくらは、口々にジェフを誉めたたえ、ピラミッドの中へと入っていった。
「でも、これからは、みんなの攻撃力が大事になるんだ。慎重にいこう」
ジェフが、照れたようにぼくらを見る。

➡621へ

556

まずぼくが、ゴージャスなバットを、力いっぱい振るった。次いでポーラが、スカラビの街で買ったばかりの素敵なフライパンを振りまわす。石像の元締めは頭にきたらしく堅い拳を繰り出してきたが、こんなもの、致命傷にはほど遠い（HPマイナス3）。
「ジェフ！　ぼくは大丈夫だ。強烈なヤツを頼むぞっ！」
ぼくはジェフに、攻撃命令を出した。

●ペンシルロケット5があれば……370へ　●なければ……………………66へ

557

歩くキノコに向かって、ペンシルロケットを発射した。ロケットは見事命中！
続いてバルーンモンキーが歩くキノコをひっかいて、とどめを刺した。

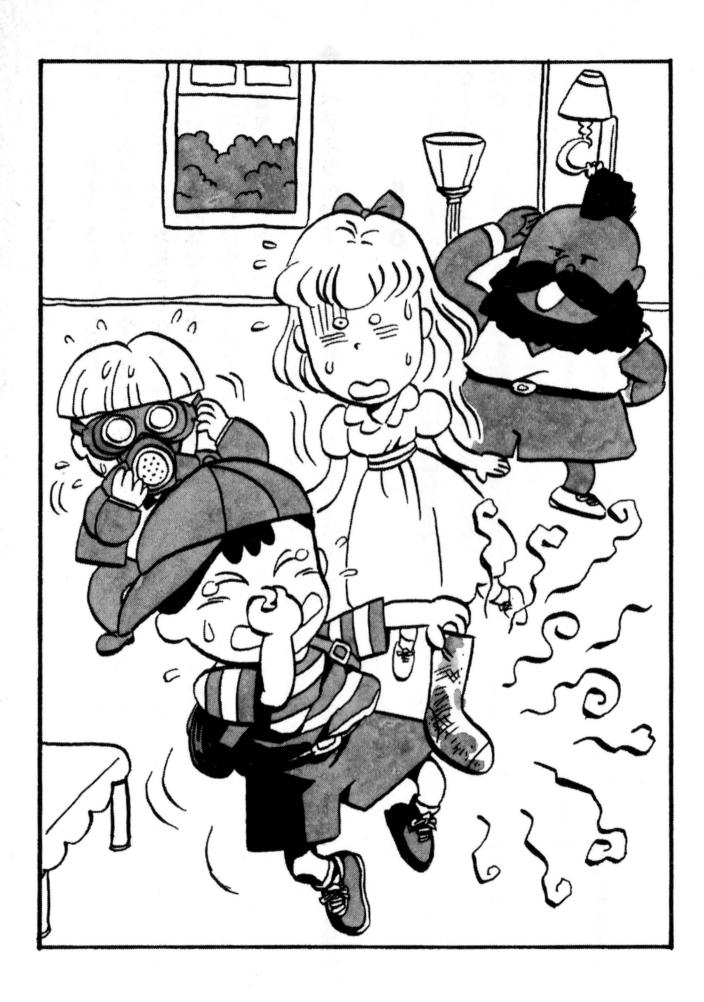
◆アイテムリストから『ペンシルロケット』を消して……………………**453**へ

558

ぼくたちはどせいさんに、グレープフルーツの滝のことを聞いた。
「ぼくらむかしもとたくさんいた、まいにちへていく、みなたきのげぷー、はたらかされてる。たきのまえたつ、『あいことばをいえ』いう。さんぷんだまてまてば、とびらあくぷー」
どうやら滝の前で3分間黙って立っていれば、中に入れるらしい。ゲップーめ、どせいさんたちを捕まえては労働力に使っているとは！　これはなんとしてもやっつけないと！
「たき、いくまえに、みせ、よれ。うったりかったりどせいさんいる。ぷー」
どせいさんに誘われたぼくたちは、彼らのお店に行くことにした。

●ケにチェックがあれば……………**24**へ　●なければ……………………**85**へ

559

さっそくぼくらは砂漠で拾ったコンタクトレンズを届けるために、2階のペテネラさんを

訪ねた。ペテネラさんは少し変わったオニイサンだった。
「わあ、ありがとう！　いや、ぼくの家系は物を大切にするのがモットーでして。うれしいなあ……そうだ、お礼をしなくちゃ。このぼくのよそいきの靴下をどうぞ。まだ5年しかはいてない、新品同様なんです。少し臭うけど……大丈夫！　遠慮なく使ってください！」
その靴下の臭いは少しなんてものじゃなくて、メガトン級！　その臭いのせいでポーラなんか貧血を起こしかけたほどだ。けれど、せっかくの好意だし……。
「あ、ありがほう。らいりにひまふ（ありがとう。大事にします）……」
◆『ペテネラの靴下』を入手した。アイテムリストにチェックして……………**419へ**

560

「はい！」変なモノが気になって、ぼくは意を決して言った。しかし……。
「なーんだ。じゃ、用はない。とっとと出てきな」
おやじさんはプイとそっぽを向いてしまった。あれえ？　『はい』って言ったのに……。
「ネス、ここじゃ、『はい』は『いいえ』で、『いいえ』が『はい』だよ！」
ジェフにつつかれて気付いたときにはすでに遅く、おやじさんはスネて店の奥へ消えてしまっていた。これ以上ここにいてもしょうがないので、ぼくらは店の外へ出た。**⬇527へ**

561

「ぼくら、ホテルに泊まらなくっちゃいけないんだ。だから100ドルは使えないよ」
ぼくはそう答えて、情報屋さんと別れた。
「ネス、わたしが暑い暑いって言ったから、気をつかってくれたの？　わたしなら、平気よ」
そう心配そうに言うポーラに、ぼくは首を振った。
「クラーケンと戦って疲れているんだ。情報よりも健康だよ」

➡570へ

562

強敵を倒してようやくホッとひと息ついたぼくらは、博士の言ってたレバーを探し、急いでオフにした。隣の部屋で、ガコンガコンとカプセルの解除される音がする。隣の部屋にもどると、捕われていた人たちは全員無事カプセルの外に出て、笑顔を見せていた。
「キミたち、助かったよ。ありがとう」
博士が、ぼくらの手をとってお礼を言う。博士はこれから、アップルキッドといっしょにサターンバレーに行って、スペーストンネルという空間移動マシンを作るつもりらしい。どせいさんたちの科学技術は、相当なものなんだそうだ。
「あ、そうだ。アップルキッド、ちょっと待って！」
ぼくは、博士たちといっしょに帰ろうとしたアップルキッドを呼び止め、本の話をした。

「無口を治す本？　ああ、あれなら、オネットの図書館に返したよ」
アップルキッドはあっさりそう言い放ち、博士たちと共にストーンヘンジから出ていった。
な、なあんだ……。

⬇**477**へ

563

ぼくたちは、さらに洞窟の奥へと進んだ。すると……ジャジャーーン！　今度は、おやじ顔のモンスター2体がグネグネとからまった、いなずま・あらしが現れた！
「ここは6番目のおまえの場所・ピンククラウド。しかし、今は私の場所だ。奪い返せばよい、できるものならな」

●武器で戦う　……………………**442**へ
●PK必殺を使う　……………………**635**へ

564

地底大陸に住むグミさんたちは、地上のグミさんと違って、とてもおしゃべりだった。そんな彼らがいうには、地底大陸にはしゃべる大岩がある、ということ。
そこで、さっそく岩のところへ行ってみると――。
「やっと、話しかけてくれたな。ネス、ポーラ、ジェフ、プー……」
岩は、いきなりぼくらの名前を呼んだ。

「おまえたちは、これまで、7つのパワースポットを巡ってきた……」
確かにそうだ。ジャイアントステップ、リリパットステップ、ミルキーウェル、レイニーサークル、マグネットヒル、ピンククラウド、そして、ルミネホール……。
「……そして、残りの1つは、ここ、地底大陸にある……。この村より西の方角に、ファイアースプリングスという洞窟がある。ネス、そこでおまえは、最後の音を記憶するのだ。ギーグの持っている知恵のリンゴは、ギーグの計画が失敗に終ると占っている。ネス、ポーラ、ジェフ、プー。予言を現実にするのは、おまえたちの持っている力にほかならないのだ」
しゃべる大岩はそれだけ言うと、あとは貝のように押し黙ってしまった。そこでぼくらは、さっそくファイアースプリングスへと急ぐことにした。

⬇27へ

565

歩くキノコがいきなり襲いかかってきた！　戦うしかない！
◆バトル対戦表で戦います。ジェフはD、相手はE。相手よりも数値が……

●上……………………429へ　●下……………………602へ

566

階段を降りて、一本道をしばらく歩いていくと、やがて、暑い砂漠へと出た。うしろを振

り向くと川があり、その向こうにスフィンクスとピラミッドが見える。
やった！　川の南に出たぞ！　魔境まであとひと息だ！　魔境に何があるのかは、まだぼくらにはわからない。でも、きっと魔境は、ぼくらを待っているに違いない。

●Lにチェックがあれば……**638**へ　●なければ……**607**へ

567

武器屋さんと別れて、さらに奥へと進んでいったぼくらは、突然、暗闇に行く手を阻まれた。今までは、木々の間から、わずかながらも光がもれていたが、この先はまっ暗で、とても進めたものじゃない。どうしたもんかと悩んでいると、突然、横の密林から老人が現れた。魔境に住む少数民族の長老だと名のった老人は、ぼくらに向かって淡々と話す。
「ここからが、本当の魔境じゃよ……。どうしても先に進みたいなら、タカの目を持ってくるがよい。スカラビ南部のピラミッドの出口でこう言うのじゃ。〝タカの目よ、我に力を貸したまえ〟とな」老人は、それだけ話すと、再び密林の奥へと消えていった。

●タカの目があれば……**282**へ　●なければ……**618**へ

568

「右も左も行き止まりって、いったい？　本当に、ここにギーグがいるんだろうか……？」

ぼくらは、スペーストンネルの脇に立って、考えこんでしまった。と——。
突然、ぼくらのスペーストンネルの横に、もう1つのスペーストンネルが！　中にはなんと、アンドーナッツ博士とアップルキッド、そしてどせいさんが乗っていた。
「すぺえすとんねるすりぃのとうじょうだぽえ〜ん！　……わ、やっぱり、こんなとこ、つれてこられていたですか。ぷー」
　うれしそうに再会した仲間を抱きしめるどせいさん。しかし、そのあとから降りてきた博士とアップルキッドは、妙に浮かない顔をしていた。
「大変なことになったよ、ネス、みんな……」アップルキッドが、困ったような表情で、ぼくらに話しかける。その言葉を継いで、博士が決心したように口を開いた。
「実はのう。よく調べると、ギーグたちは、過去のこの場所から攻撃をしかけているらしいのじゃ。いや、心配はいらん。このスペーストンネル3は、時間移動もできるからのう」
「なら、問題はないじゃないですか。スペーストンネルを交換しましょう。ぼくらは3で過去に行きますから、博士たちは2に乗ってもどって……」
「いや、それがの……」博士がぼくの言葉をさえぎる。それもそのはず。なんと、過去に行くためには、ぼくらの魂をロボットに移しかえる必要があったのだ。
「人の体じゃ、時間移動のときの衝撃に耐えられないのじゃ。それにの、過去のこの場所は、恐ろしく寒い、おそらく、生き物なら一瞬にして凍ってしまうほどにな……」

何でも、ロボットに魂を移しかえると、元にもどれる可能性は50%ほどだとか。でも、ギーグを倒すには、それしか方法はない！

●ロボットになる……………156へ　●少し考える……………………496へ

569

「とにかくスカラビのピラミッドを見に行こう。きっとそこにはギーグの秘密か、それともぼくの場所か……よくわからないけど大事なキーワードがあるはずだ！」

ぼくたちは、スカラビへの船が出ているという港町トトへ向かった。が、サマーズのはずれまで来たとこで、マッドタクシーがポーラめがけてつっこんできた！

●シェフのフライパンがあれば　…601へ　●なければ……………………469へ

570

「いらっしゃいませ、お泊まりですね。1泊100ドルのお部屋を用意してございます。安全には細心の注意を払っておりますが、サソリが出たら、フロントにお電話ください」

フロントマンは、笑顔でとんでもないことを言う。

幸い、部屋の中にサソリが出没することはなく、ぼくらは快適な一晩を過ごして目覚めた。

◆JとPにチェックをして

●ソにチェックがあれば……………476へ　●なければ……………………280へ

571

　サターンバレーでは、アンドーナッツ博士やアップルキッドが待っていた。
「そういえば、サターンバレーでどせいさんたちの力を借りて、スペーストンネルってヤツを作るとか言っていたっけ……」
　ジェフが思い出したようにつぶやく。それに答えるようにアンドーナッツ博士がうしろにある大きな乗り物を指差した。よく見るとそれは、どせいさんの体の形にそっくりで……。
「スペーストンネル2じゃよ。瞬間移動装置じゃ。ギーグのデータを入力することによって、ヤツの居所を突き止めてくれるのじゃ！」
「でも、2って？　1はどうしたの？　壊れちゃったの？」
　ポーラの素朴な疑問に、博士が眉をしかめて答えた。
「初期型は、服を着たブタに盗まれてしまったんじゃ……」
「服を着たブタって、もしかして、ポーキーのことかな？」
　勘のいいジェフが、ぼくにこっそり耳うちする。とたんに、ポーラが笑い転げた。
「あははは、服を着たブタ？　ポーキーのことよ。そうに決まってるわ！」
「ポーキー？　ポーキーとは誰のことだ？」

彼のことを知らないプーが、ぼくらの顔をきょとんと見る。ぼくらがプーにポーキーのことを説明していると、博士がうしろで咳ばらいをした。
「あー、ごほん。勝手に盛り上がるのはいいがね、スペーストンネル2は、このままじゃ動かないんじゃや。物質XYZというものが必要なんじゃよ。ところが、物質XYZは、盗まれたスペーストンネル1の中にすべて入っておってな……」
博士が言うには、物質XYZは、宇宙にある物質なのだということ。
「そうじゃな、たとえば隕石などがあればいいんじゃが……」
隕石？　知ってるぞ！　オネットの町に落ちたあれは、まぎれもなく隕石だ！

⬇660へ

572

先を急いだぼくらは、やがて、3本のロープが垂れ下がる壁の手前までたどりついた。
「3本のうちの1本が正解ルートなのかな？」ジェフが、上をながめながら言う。
「ダメだ。ここからじゃ、どのロープが正解かなんてわからない。とにかくネス、のぼってみるしかないみたいだよ」

●右のロープをのぼる……………670へ　●左のロープをのぼる……………416へ
●中央のロープをのぼる…………………………………………127へ

573

トトは、サマーズとは違って、開けてはいないけど、素朴で気取りのない港町だった。船乗りさんを訪ねたボクたちは、スカラビ行きの船に乗せてくれるよう頼んだ。ところが。
「悪いけど、オレは今とてもそんな気分になれないんだ……ハア〜」
いかにも海の男といったごっつい船乗りさんは、背中を丸めて深くため息をついた。
「いやね、ウチの女房がサマーズのストイッククラブってえ店に入りびたっちまってて……哲学だかなんだか知らねえが、朝から晩までわけのわかんねえことといってんだ」
「ストイッククラブ？」
「エセ文化人が集まる、気取った店さ。入店するにはアポが必要なんだと。スカシテらあ！あーあ……女房のやつが作るマジックケーキはこのあたりでも評判でよ。それが今じゃ、商売そっちのけさ。……オレたちもうおしまいなのかな」
うーん、スカラビへの船を出してもらうには、この船乗りさんに元気になってもらわなくちゃ。それには奥さんをその変な店から連れもどさなきゃならないな。
でもって、そのマジックケーキとやらもできたら一口食べてみたい、な！
「え？　おまえさんたちがかあちゃんを説得してくれるって？　そうか、駄目でもともとだ、ホレ、これがその店の住所と電話番号だ。頼んだよ！」
夫婦の危機と地球の危機を救うため、ぼくたちは再びサマーズへ！　移動は……。

●テレポートで ……………………498へ　●歩いて ……………………434へ

◆『アンチPSIマシン』を入手した。アイテムリストにチェックして ……390へ

574

飛行中、ジェフは燃えないゴミを組み合わせて、敵の特殊能力を封じこめるアンチPSIマシンを作りだしてしまった。お見事！

575

「こそばゆい、こそばゆい！」残念ながらエアガンは、巨大キノコには効きめがなかった！
敵は毒の胞子を飛ばしてぼくたちに迫る！（HPマイナス1）
でも、ぼくらは根気よく打撃攻撃を繰り返し、巨大な敵を打ち倒したんだ！ ⬇543へ

576

東の方へと進んでみたが、しばら行くと行き止まりになっていた。
「しょうがない、さっきの十字路へもどろう、ジェフ」 ⬇28へ

577

ぼくらが隕石のかけらを持って帰ると、アンドーナッツ博士とアップルキッドは、大喜びでスペーストンネルの中へ入っていった。
「ネス、完成したら呼ぶからさ、買い物でもしてなよ」
アップルキッドが、スペーストンネルの中から顔を出して言う。戦いに備えて、装備を整えよう。さっそくどせいさんのお店に入ると、スーパーバズーカと楽しいフライパンという、強力なアイテムが。ジェフとポーラのためにも、ぜひとも両方買いたいが……。

●キにチェックがあれば……548へ　●なければ……539へ

578

でもぼくは、あのブリックロードさんが作ったというダンジョンを、どうしても見てみたかった。みんなにそう言うと、
「あ、そ。じゃ、タコ消しマシンをわたしに貸して。ネス1人でダンジョンに行くといいわ」
と、ポーラの冷たい意見。わざわざ苦労してダンジョンを通るのは、バカバカしいと思っているらしい。プーとジェフは、気の毒そうな顔で、ぼくを見る。
「じ、じゃあ、俺たちは、ポーラといっしょに行くか……」
勝ち気なポーラの機嫌を損ねまいと、2人はボクを見捨てていった。

しかたなく、ぼくは1人淋しく低予算ダンジョンへ。モンスターたちの攻撃をうけながらようやくゴールすると、ダンジョンの出口でみんなが待っていた（HPマイナス2）。
「あーあ、傷だらけ。しょうがないわね」あきれながらも心配してくれるポーラ。

⬇450へ

579

ぼくはゴチラのバットを敵に向かって力いっぱい振った。が、しかし！　見事空振り！
バットは土の壁にめりこんでしまった！
さらに敵さんは、ジェフのかまえたガンをバンッとはたき落とす！　その衝撃でジェフの眼鏡がふっとんだ！（HPマイナス3）
「メ、メガネメガネ……」と、地面をはいずるジェフに敵の魔の手がせまる！
「待ちなさい！　わたしが相手よ！」ぼくらをかばうようにしてポーラが躍り出た！
バゴーン！　彼女の厚めのフライパンが、敵の鼻っつらをとらえる！　その衝撃に穴の主はあとずさり。ちょうど、バットを引き抜いたぼくは、ジャ――――ンプ！　敵の脳天めがけてゴチラのバットを振りおろした！
「ぐへえ……」情けない声をあげて、2番目の穴の主はその場に崩れ落ちた。
「さあ、残るはあと1匹。気を引き締めていこう！」と、言った矢先！

⬇461へ

580

ぼくらは博物館へとやってきた。恐竜の骨などを見ながら展示室の奥へと進もうとすると、白衣を着た学芸員がボクらの前に躍りでて通せんぼ。
「この先は立入禁止なんですよ。何せ、すごい物を発見したんでね、フフフ……」
と、光るメガネの下で不気味に笑う。ちょっと気になるけど、立入禁止じゃしょうがない。
ぼくらはあきらめて博物館を出ることにした。

➡419へ

581

前方にまぶしい光が！　もしや、埋蔵金!?　と思いきや、それはお天とう様で……。
そう、迷路に迷ったらしく、ぼくらは穴の外へ出てしまったんだ。
「……本当に大丈夫なのかあ……？」と、疑惑のマナコで見るモッチーさんに、
「だ、大丈夫！」と笑顔で答えて再びトライ！　でも、ぼくら、方向音痴かも。

➡497へ

582

でも、さっき歩いた一本道は、透明な膜のようなものがあって先に進めなかった。
「もう大丈夫じゃよ。ここがどういうところかわかれば、おのずと道は開けるのじゃ」
まぼろし老人は薄く笑みを浮かべて言った。

➡508へ

583

と——。突然、ポーラが躍りでて、敵に向かってPKファイアーを放った。まっ赤な炎が、ダイヤモンドドッグの体を丸ごと包みこむ。

「やった！　ダイヤは火に弱いんだ！」

ジェフの言葉を証明するかのように、ダイヤモンドドッグはバタリと息絶えた。ぼくらは、鋼よりも堅い体を持つダイヤモンドドッグに打ち勝ったのだ！

⬇512へ

584

「そうだ、姿見の粉だ！」ぼくは物の真実の姿が見えるようになるというその粉を、声のした方へとまいてみた。すると、そこに現れたのはなんと、眉毛がつながってて金歯の男！

「あなたを捜していたんです！　さあ、ボクたちといっしょに来てください!!」

ぼくとジェフは、彼の手を取ると、モノトリービルへGO！

⬇487へ

585

悪魔の像など壊してやる！　ぼくはゴチラのバットを持つ手に力をこめて、マニマニの像に挑んだ！　が、ヤツの不思議な力に捕えられ、地面に叩きつけられてしまった！

●Vにチェックがあれば……………466へ
●なければ……………………………553へ

586

ポーラがダブルハンドで振った厚めのフライパンが、笑いボールに命中！　でもってぼくの方に飛んできたところを、ミスターのバットで力いっぱいかっとばしてやった！

ドゴ――――ン！　空高く飛ばされた笑いボールはそこで大爆発！　ポンコツに。

「おおい、これ見てよ！　さっき光っていたのこれだったんだ。近くに手紙も落ちてたよ！」

離れたところにいたジェフが、駆け寄って差しだした手のひらには、コンタクトレンズと、メモ紙が乗っかっていた。さっそく読んでみる。

『ドコドコ砂漠でコンタクトレンズを落としました。おばあさんの形見でとても大切にしているものなので、みつけて届けて下さったらお礼をします。

フォーサイドパン屋の2階ペテネラ・ジョバンニ』

コンタクトレンズをポケットにしまうと、ぼくらはまた歩き出した。どのぐらい歩いただろう。もうヘトヘトで倒れそうになっていたぼくらの目に、立ちのぼる煙が見えてきた。

「やった、助かった、人がいるんだ。あそこで道を聞こう！　さあ、もうひと頑張りだ」

◆『コンタクトレンズ』を入手した。アイテムリストにチェックして ……**415へ**

587

「あれ、なにかしら？」倒れたスーダララッタの背後に、何か四角い物を見つけたポーラが、

急いで駆け寄っていった。そして──。
「みんな、プレゼント箱よ！　わあ、これ、虹色ビームだわ！」
さっそくジェフに装備させる。
◆『虹色ビーム』を入手した。アイテムリストにチェックして

……………671へ

588

ポーラはスカートを翻し、敵の電撃攻撃をかいくぐりながら鮮やかなフライパンさばきで敵を圧倒。そこへ、プーの鉄拳とぼくのバットが同時にジャストミート！　いなずま・あらしは降参し、ポーラは雷を操るPKサンダーを習得した。
いなずま・あらしの守っていた場所から1歩踏み出すと、ぼくらは洞窟の外へ出た。
そこは切り立った岩山の中腹で、あたりはまるでじゅうたんのようなピンクの雲に囲まれていた。そして、心にしみいるような音楽が静かに流れている。ぼくたちはそっとその雲に乗って音の石に、ここピンククラウドの音楽を記憶させた。これで残る場所はあと2つだ。
素敵な風景の中、ぼくは若い時のママを見たような気がした。
宮殿にもどると、イースーチー老師が満面の笑みで迎えてくれた。
「この先の旅はさらに過酷なものになるでしょうが、ワシはみなさんの力を信じてますぞ。ささ、ここにある守りのリボンと王者のバンダナ、必要なものを持っていかれるがよい」

◆『守りのリボン』と『王者のバンダナ』、持っていない物があればアイテムリストにチェックする。どちらも持っているなら、気持ちだけありがたくいただく。ポーラが『PKサンダー』を習得した。PSIリストにチェックして……………………39へ

589

何者かに踏み固められたような細い道を見つけたぼくらは、道に沿ってまっすぐ北上してみた。小一時間ほども歩いただろうか、やがて、小さな集落を発見。大喜びで駆け寄ると、そこはなんと、あのグミ族の集落だった。

「あの～、ぼくたち、地上から……」門番のグミにそう話しかけると、

「あ～、よそ者は村に入れちゃいけないって、決まりなんだよ……」

と、そっけない返事。この集落で、何か情報が入手できると期待してたのに……。

●グミドリアンがあれば……………595へ　●なければ……………471へ

590

突進してきた主の頭をポーラの厚めのフライパンが直撃！　次いでぼくが、ミスターのバットで思いきりかっとばした！　勝負、アリ！

「なーんだ、ぼくの出番はなかったなあ」と、ジェフが残念そうに言った。

倒れた主の下にはプレゼント箱があり、中には『ゴヂラのバット』が。ラッキー！
主の横には、下へと延びる穴が開いていた。さて、この穴を降りようか、それともさっきの分かれ道までもどって枝道へ行こうか？

◆『ゴヂラのバット』を入手した。アイテムリストにチェックして

●穴を降りる……………**551**へ　●もどって枝道へ……………**503**へ

591

ボムッ！　ゴヂラのバットで巨大キノコにクリーンヒット！　と思いきや!!
その衝撃で巨大キノコの笠から、毒の胞子が飛び散った！　苦しい!!（HPマイナス2）
でも、ぼくらは根気よく打撃攻撃を繰り返し、巨大な敵を打ち倒したんだ！　➡**543**へ

592

右に曲がったが、結局つきあたってしまった。しかたなくもどろうと振り返ると――！
目の前に、大きな唇の化け物が！
「アタシ、悪魔のディープキスっていうの。ああん、睨まないでん。シビれちゃううん」
悪魔のディープキスは、ぼくの方を向いて、そのでっかい唇をぶるぶる震わせる。
もしかしたらコイツ、しびれ攻撃に弱いかも!?

●パラライシスを覚えている　…**343**へ

●覚えていない　……**316**へ

593

ジェフが、レーザービームを発射させた。純白の光線は、なかなかの破壊力を見せる。しかし電撃バチバチも、放射状に散らせた体の先端を腕のように動かし、ぼくらに向かって猛攻撃！（HPマイナス4）ぼくらも必死で応戦したが、なかなか倒れる様子を見せない。何か強烈な攻撃を……そうだ、魔境で買ったペンシルロケット20があったじゃないか！

●ペンシルロケット20を使う　…**537**へ

●使わない　……**465**へ

594

ぼくたちはドラッグストアで、まっ赤なリボンと金の腕輪を買った。赤いリボンはポーラが、金の腕輪はジェフが身につけた。

◆『まっ赤なリボン』と『金の腕輪』を入手した。アイテムリストにチェックして

●厚めのフライパンがあれば　…**507**へ

●なければ　……**467**へ

595

門番のグミさんは、急に鼻をひくひくと動かしはじめた。

と――。

「お？　このいい匂いは？　おまえたち、いったい、何を持っている？」
ぼくらは、しめたとばかりにグミドリアンを出し、なぜここに来たのかを詳しく説明する。
あっという間にグミドリアンをたいらげた門番のグミさんは驚いていたようだったが、やがて、村長らしきグミさんを連れてぼくらのもとに。話をすっかり聞きおえた村長さんは、ぼくらに非礼を詫びて、門を開いてくれた。
◆アイテムリストから『グミドリアン』を消して……………………………564へ

596

脇道は、ポーラの言ったとおり、行き止まりだった。しかし、つきあたりの手前に置かれていたプレゼント箱の中から輝きのコインを入手！
「こっちに来てよかったよ。ええと、これは、ポーラがつけるといい」
◆『輝きのコイン』を入手した。アイテムリストにチェックして……………572へ

597

さんざん悩んだけれど、ぼくは結局楽しいフライパンを選び、ポーラに装備させた。
ポーラは大喜びで、フライパンをぶんぶん振りまわす。た、頼もしいコ……。
◆『楽しいフライパン』を入手した。アイテムリストチェックして……………651へ

598

ダメでもともと。ぼくたちはスカイウォーカーを置いてある墓場へと向かった。
「これ、そんなに壊れてないぞ！　よし、応急処置をしてウィンターズのアンドーナツ博士の所へ行こう。そして、サマーズに行けるように改造してもらおう！」と、ジェフ。
ほどなくして、修理も完了。さあ、ウィンターズへゴー！

➡518へ

599

ミスターのバットを買った。これで攻撃力がアップだ。そのあとで、ホテルに部屋をとった。３人で１５０ドル。あとは明日になるのを待つだけだ。楽しみだな、ゾンビホイホイ。
◆『ミスターのバット』を入手した。アイテムリストにチェックする。ＨＰを現在のレベルの最大値まで回復させて**……………………………485へ**

600

酒場を出ると、すでにウッカリ特急便のお兄さんがぼくを待っていた。そして、彼が話しかけるのと同時に、側にいたスーツ姿の女性とサルくんが、いっせいに話しかけてくる。
「ウッカリ特急便でーす！　実は私、ドコドコ砂漠のサルの穴に、アップルキッドさんからのお届け物・グルメ豆腐マシンを忘れて来ちゃったんですよ。ということで、私はこれで」

「ウキキのキ！（ドコドコ砂漠のサルの穴に住む偉大で優しくて何でも知っているタライ・ジャブ様が断食の修行を終えてあなたに会いたがっています！）」
「私はモノトリー氏の秘書をしてますの。あなたいちご味の豆腐なんてご存じなあい？　大事なお客様がどうしても食べたいとおっしゃって……困ったわ。ねえ、いちご豆腐なんてみかけたら私の所へいらしてね。モノトリービル48階よ！」
名々が好き勝手にまくしたてると、これまた同時に去っていった。
「ええと……モノトリーの秘書さんはいちご豆腐を探していて、サルはタライ・ジャブがネスを呼んでいるからドコドコ砂漠のサルの穴にこいって言ってて、特急便はその穴にグルメどうふマシンを忘れたと……こういうことだね。つまりネス！」
「そのマシンでいちご味の豆腐を作ればモノトリービルの48階へ行けるってことだ！」
ポーラ救出のヒントを得たぼくらは、急いで砂漠へ。が、途中でバッファローの攻撃に!!

●Vにチェックがあれば　……………413へ　●なければ　………………………528へ

601

シェフのフライパンで、ポーラがマッドタクシーをうちすえた！　すかさずぼくらも応戦！　たちまちヤツはスクラップに。そしてぼくは味方の防御力を上げるシールドαを習得。
「だけど……ネスのバットはもうボコボコね……」と、ポーラが心配顔。

そこでぼくはパパに電話して送金を頼んだ。本当は送ってもらったばかりで心苦しかったんだけど……、お金を下ろすと、闇商人を捕まえてゴージャスなバットを購入した。

◆ネスが『シールドα』を習得した。PSIリストにチェックする。『ゴージャスなバット』を入手した。アイテムリストにチェックして……573へ

602

バンバンガンを歩くキノコに向かってぶっ放した。しかしハズレ！

怒ったヤツはボクに体当り！　これは、ちょっとまずい！（HPマイナス4）

さらに2発めの体当りをくらったボクは、もう焦りまくり。

その時バルーンモンキーが、歩くキノコをおもいっきりひっかいた。ひるむキノコ。そこを狙って、すかさずバンバンガンを撃つ！　今度は命中。これがきっかけになり、ボクたちは歩くキノコをやっつけることに成功した。

「あぶないところだったけど、きみのおかげで助かったよ」

お礼を言うと、バルーンモンキーもうれしそうにしっぽを振って答えた。

↓453へ

603

まずぼくが、スカラビの街で買ったガッツのバットを、力いっぱい振るった。次いでポー

ラが、シェフのフライパンを振りまわす。
石像の元締めの堅い拳がボクの腕に当るが、致命傷にはいたらない（HPマイナス3）。
「ジェフ！　ぼくは大丈夫だ。強烈なヤツを頼むっ！」
●ペンシルロケット5があれば　……370へ　●なければ　……66へ

604

PK必殺を、長年樹の芽におみまいした。けっこう効いたみたいだ！　さて、お次は!?
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはE、相手はD。相手よりも数値が……
●上　……418へ　●下　……491へ

605

ぼくたちはぬれタオルを購入することにした。でも、これって、何の役にたつんだろ？
◆『ぬれタオル』を入手した。アイテムリストにチェックして　……633へ

606

「いや、ここはぼくがやるよ」怒りに燃えるプーをなだめ、ぼくはPK必殺を放った。まばゆい閃光が、敵の堅い体を襲う。しかし、致命傷にはならなかったようだ。

「おのれ〜〜〜〜、こしゃくなマネを！」
ぼくの攻撃を受けて逆上したダイヤモンドドッグが、鋭い爪を一閃させた！
ヤツの爪は、目にも止まらぬ速さで、ぼくとプーの足を切り裂く！（HPマイナス5）スターストームを使った方がよかったかも。ぼくの脳裏を、そんな考えがよぎった。

●力にチェックがあれば……………550へ　●なければ……………………583へ

607

ぼくらは、砂漠をさらに南へ向かうための、最初の1歩を踏み出した。と、そのとき！
どこからともなく、不思議な老人が舞い降り、プーの前に立ちはだかった。
「あなたは!?」プーが、驚いたように口を開く。
「プー、知ってる人なのか？」
ぼくが問うと、プーの代わりに、老人が話しはじめた。
「プー、あの〝ム〟の修行以来じゃな。わしか？　わしは、まぼろし老人とでも覚えておいてもらおうか。ときに、プー、そなたを新たなる修行の場に連れてゆきたいのじゃ。おっと、断ることはできんぞ。答えは1つだけじゃ。そこでおまえは、星を落とす術スターストームを習得しなければならんのじゃ」
まぼろし老人は、プーに向かって淡々と話す。ぼくら3人は、固唾を飲んで、じっと成り

行きを見守っていた。やがてプーは、ぼくらの方を向いて口を開いた。
「ネス、ポーラ、ジェフ。俺は、修行に行く。星を落とす術は、きっと俺たちのこれからのために必要なんだろう。俺は、術を覚えてきっともどってくる。それまで待っててくれ」
プーは、ぼくらに別れを告げると、老人とともに、どこかへと消えさった。

➡668へ

608

「いいえ！」
ぼくはきっぱりと断った。しかし、おやじさんはうれしそうに、
「そうか、そうか。よおし、おもいきり！」と、ぼくに向かってズンズン近づいてきた。
「ダ、ダメだよネス。ここははいといいえが逆の世界なんだから～」
と、ジェフが悲鳴を上げる。が、しかし！　ムギュウ。ぼくらはおやじさんにバンバンされることはなく、優しく抱きしめられた。そうか、おやじさんの言葉も逆だったんだな。
「この中には『姿見の粉』が入っているんだ。振りかけた物の真実の姿が見れるんだぞ」
おやじさんは、小さな皮袋をぼくによこした。へえ、そりゃ変なモノじゃなくて素敵なモノじゃないか！　ぼくらはおやじさんに一礼して店を出た。

◆Uにチェックして……527へ

609

悪魔の像など壊してやる！　ぼくはゴヂラのバットを持つ手に力をこめて、マニマニの像に挑む！　ジェフの援護もあって何度かヤツのボディにクリーンヒットを叩きこんだ！　次第に、像を包みこんでいた妖しいオーラが薄らいでいく。今だ、とどめはこれだ！

●バズーカ砲があれば……………529へ　●なければ…………………………5へ

610

さらに奥へと進んだボクらは、ついに8ツ目のパワースポットにたどりついた。どこからともなく懐かしい音色が響き、ぼくらの体を幸福感で満たしてくれる。と――。
『ネス……ネス……』ぼくの耳に、ママの声が響いた。目をつぶると、ママの優しい顔が浮かんでくる。赤ちゃんの頃のぼくが、ゆりかごに揺られていて、そのそばには、まだ小さいチビが……。でも、ぼくはどうして、こんな風景を見ているんだろう。ぼくは、仲間たちといっしょに、ファイアースプリングスにいるはずなのに……。

➡542へ

611

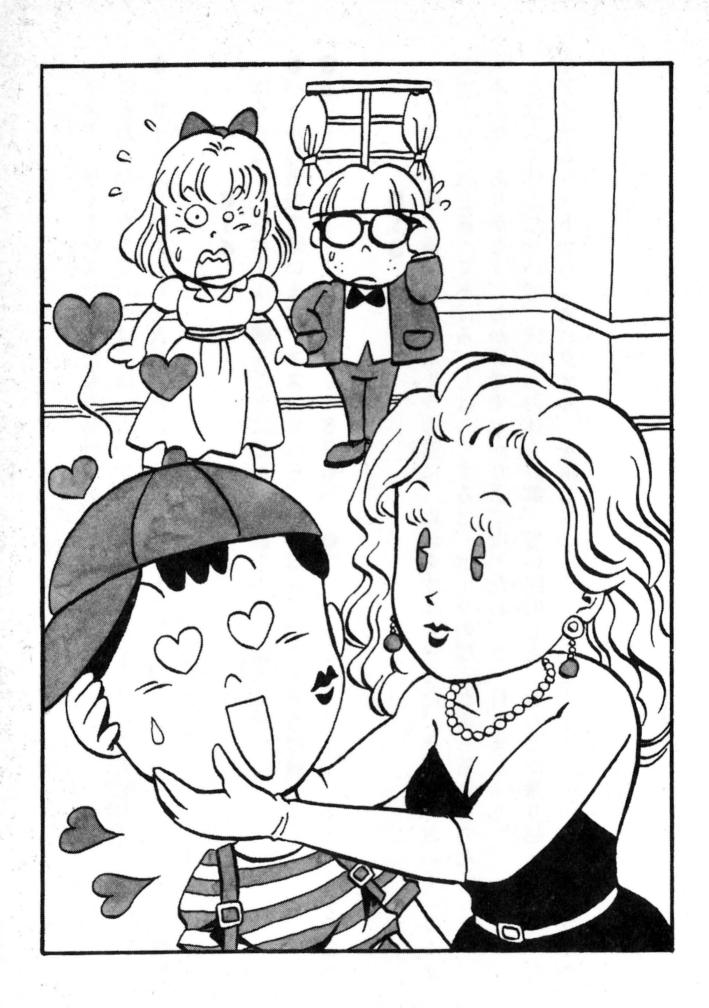
怪力グミさんが大岩をどかしてくれたが、ぼくらはすぐには穴に飛びこまず、村の人々に挨拶をして回った。すると、グミ族の村長だと名のるグミさんがやってきて、ぼくらになに

やら大きな果物を渡した。それが、臭いのなんのって……！
「あなたたち本当にお世話になった。これ、グミ族の大好きなグミドリアン。役だててくれ」
食べ物というからには、きっと役にたつときがくるだろう。
少々臭いのは我慢して、ぼくはグミドリアンをリュックの奥にしまった。
◆『グミドリアン』を入手した。アイテムリストにチェックして　……………**192へ**

612

「まずはこれだ！」ぼくはいきなり催眠術を試した！　と、長年樹の芽はたわいもなく眠ってしまった。続いてポーラが、覚えたてPKフリーズを試してみる。ゴゴゴ――――！　冷たい風が巻き起こった長年樹の芽は凍りついてしまう。もうこうなったら、勝ったも同然だ！
●金の腕輪があれば　……………**489へ**　**●なければ**　……………**513へ**

613

トンズラさんたちはショーの打ち合わせ中とかで楽屋にはいなかったが、そのかわりにセクシーな美少女アイドル・ヴィーナスが、胸の開いた衣装を着てスタンバッていた。
「あら、私のファンの人たちね。本当は楽屋は立入禁止なんだけど……特別よ！」
彼女は、机の上にあったバナナにサインをすると、ぼくのほっぺにチュッ！　ナハハハ。

「ネス！　早くトンズラさんたちを助けてあげるんでしょ！」
ぽわわ～んとなっていたぼくは、ポーラに引きずられるようにして支配人室へ。
◆『サイン入りバナナ』を入手した。アイテムリストにチェックして ……………18へ

614

ぼくらは、笑いボールと戦うことにした。武器を手に、慎重に近づく。
◆バトル対戦表で戦います。ネスたちはE、相手はA。相手よりも数値が……
●上 ……………586へ ●下 ……………402へ

615

ぼくは、木陰に横になったポーラの額に、ぬれタオルを乗せた。そうしておいて、みんなでポーラに風を送ってあげる。しばらくすると、ポーラの様子が落ち着いてきた。
「みんな、ありがとう。おかげですっかりよくなったわ。さ、行きましょう」
しばらく休んだせいで、ぼくらの体も好調。暑い陽射しも、なんとか乗り越えられそうだ。
◆アイテムリストから『ぬれタオル』を消して ……………231へ

616

交差点を曲がらずまっ直ぐ進むと、つきあたりの水たまりのところに、積み木の人形のようなモンスターがいた。頭と左手は三角、体と右手は丸、首や腕や足は、細い針金のようだ。
「やあやあ、ぼくちんは安心ボム。爆弾を持ってるんだ。安心してかかっておいでよ！」
爆弾を持ってるのに安心!? い、いい加減な名前、つけるなあ……。
◆バトル対戦表で戦います。ネスはD、相手はC。相手よりも数値が……
●上……………………470へ　●下……………………321へ

617

丘の頂上に向かう道は、不気味なモンスターたちの巣窟だった。ぼくらを上へ行かせまいとして、次々と襲いかかってくる。しかし、ぼくらはひるまず進んだ。そして、ついに隕石のかけらを入手。その場でサターンバレーへテレポート！
⬇577へ

618

「しかたない、もう一度スカラビに移動だ」
ぼくらは互いにうなずきあうと、テレポートでスカラビにもどった。そして、もう一度ピラミッドの中に入り、棺の部屋から外へと向かう。出口で、老人に言われたとおりの呪文を

唱えると、空から、目玉そのもの、といった感じのタカの目が、本当に降ってきた。
「ふーむ……タカとは、鳥のタカのことかな？　確かに、タカは、ものすごく目がいいらしいけれど。あの魔境の暗闇も、これで見えるようになるのかな……？」とは、ジェフの言葉。
ぼくらは、砂漠のまん中から、テレポートで一挙に魔境までもどった。途中の沼地で足をとられたポーラがまたもや溺れかけたけれど(HPマイナス3)、どうにかこうにか暗闇の前までたどりつく。

◆『タカの目』を入手した。アイテムリストにチェックして……282へ

619

ポーラの悲鳴を聞いたプーは、とっさに攻撃を避けようとした。が、敵の攻撃のほうが早かった。石像の元締めの強烈スマッシュを受けたプーは、その場で昏倒！
ぼくは再びバットを繰り出し、石像の元締めに挑みかかる。さしもの石像の元締めも、すでに戦う気力は残されていなかったようだ。怒ったポーラのフライパン攻撃を受けるか受けないかのうちに、バタリと床に倒れふした。
プーの介抱には、すでにジェフがあたっていた。しかし！
「ダメだ。意識がもどらないよ」ジェフが、厳しい顔で首を振る。

●いのちのうどんがあれば……98へ
●なければ……130へ

620

脇道を歩きはじめると、間もなく、意外な人に出会った。砂漠で、プーを修行に連れていった、あのまぼろし老人だ。
「ネスだな。久しぶりじゃ……」まぼろし老人は、ぼくに向かってゆっくり話しはじめた。
「ここはマジカント。おまえの心の中に芽生えた世界なのじゃ。おまえの喜びや悲しみ、怒り、苦痛、快楽……すべてがここにある。よいか、このマジカントにある海、星、大地、3つのペンダントを探し出し、北方のエデンの海を目ざすのじゃ……」
「エデンの海？」
ぼくの問いに、まぼろし老人はゆっくりとうなずく。
「そうじゃ。まずは、この道をもどり、広い一本道をまっすぐ進むがよい」

●Qにチェックがあれば……………582へ　●なければ……………………508へ

621

ピラミッドの中は、淀んだ空気が漂っていた。壁には、絵文字がぎっしり描かれている。
「涼しいが、空気が悪いな……」プーが、ぽつりとつぶやいた。と、そのとき――！
突然、壁に描かれていたヘビの絵が、ぼくらに向かって襲いかかるように飛び出した。
「スネーク絵文字だ！　気をつけろ！」ジェフが、大声を上げる。

●ウにチェックがあれば……………50へ　●なければ……………………647へ

622

次の朝、ジョージさんに道を教えられ、ぼくらはフォーサイドへ。
砂漠を抜けて、トンネルをくぐり、陸橋を渡ると眼前に大きなビルが立ち並ぶ近代的な街が現れた。街の入口には、『フォーサイドへようこそ／モノモッチ・モノトリー』と書かれた大きな看板が。そこにはまた、テカテカした顔のおじさんが笑っている絵が描かれていた。
「ようこそ、フォーサイドへ！　あなたたち、この街ははじめて？」
街について、キョロキョロとしていたぼくらに、親切そうなおばさんが声をかけてきた。
「この街は、モノトリーさんが活躍するようになってとても発展したのよ！」
すると、それを聞いていた近くのおじさんが、
「何いってんだい、あんた。街は便利になったが、人情ってやつが薄れちまった。それにモノトリーは、悪魔と取り引きしてるって噂もあるんだぜ」と口をはさんできた。
「そうそ、なんだか物騒なヤツらがうろつきだしたし」
と、これまた近くのお姉さんが話に加わってきてケンケンガクガク始まった。
ぼくらは話に加わることもできないのでそっとその場を去ると、街を探索することにした。
それにしても、街の実力者・モノトリー氏かあ。実際はどんな人なんだろう……。

と、考えこんでいたぼくの耳に、ポーラの弾んだ声が響いた。
「あのアドバルーン見て、デパートですって！　行ってみましょうよ！」
しかし、どうしたことか、デパートには休業中の貼紙が。しょうがないので、ぼくらは手近なドラッグストアへ入ることにした。
さて、パパに電話して入金を確認。その金額で買える物はと言えば、丈夫そうな『ゴヂラのバット』か『エアガン』だ。『エアガン』の方を選べば、残金で『ダブルバーガー』も買えるな。さて、どちらを買おう？

●ゴヂラのバット　……………501へ
●エアガン＋ダブルバーガー　……532へ

623

飛行中、ジェフは燃えないゴミを組み合わせてレーザービームを作った。さっすがー！

◆『レーザービーム』を入手した。アイテムリストにチェックして　……………390へ

624

ちょっぴり太っちょのドラッグストアのおやじは、ぼくらを見ると目を細めて言った。
「オレは子どもが大きらい。ほっぺつねらせて、おしりバンバンさせたら変なモノやるぞ」
すごいごっつい手。あれでバンバンされたらたまんないなあ。なんて答えよう……。

●「はい」と答える　……………………560へ　●「いいえ」と答える　……………………608へ

625

ジェフが、虹色ビームを発射させた。７色に光り輝く光線は、強烈な破壊力で敵の体を攻撃する。が、敵はなかなか倒れる様子を見せようとしない。なにか強烈な攻撃をしなければ！

そうだ、魔境で買ったペンシルロケット２０があったじゃないか！

●ペンシルロケット20を使う　……537へ　●使わない　……………………465へ

626

ところが、左の道は、あいにくと行き止まり。暗い通路の奥に、壁が立ちはだかっている。

「もおっ〝この先行き止まり〟の看板ぐらい、立てておいてほしいわ！」

ポーラが、ぷんぷんしながら腰に手を当てた。

●Xにチェックがあれば　…………365へ　●なければ　……………………494へ

627

「頼むよ、プー！」ぼくがそう言ったが早いか、プーはすばやくＰＫスタームストームを放った。とたんに、無数の星のかけらが、ダイヤモンドドッグの体を襲う。

「お、おのれ！」大打撃を受けたダイヤモンドドッグが、ぼくに向かって鋭い爪を一閃させ、腕に傷を負わせる(ＨＰマイナス２)。しかし、ヤツの悪あがきもそこまでだった。全身に打撲傷を負ったダイヤモンドドッグは、バタリと息絶えると、粉々に砕け散った。

●力にチェックがあれば……………**526**へ ●なければ……………………**512**へ

628

ぼくはゴージャスなバットで、巨大ネズミのスネを撃った！が、この攻撃に怒ったヤツは、鋭い爪のついた太い腕で、ぼくの頭を一撃！(ＨＰマイナス４)

「ネス、大丈夫！」ポーラの悲鳴に近い叫びが聞こえる。

●HPが0なら……………**334**へ ●1以上なら……………**322**へ

629

ブリックロードさんと別れて、さらに進んでいくと、またもダンジョンに入りこんでしまった。たしかこれは、レイニーサークルとかいう場所だったたっけ……。いくつもの洞窟を抜けてダンジョンを進んでいくと、突如広い空間に。見れば、正面の崖には、上からロープが垂れてきている。ちなみにその崖には洞窟も。奥の方で何かが光っている。

●ロープをのぼる……………**405**へ ●洞窟の中に入る……………**509**へ

630

陽気なトンズラさんたちは、スリークまでの間、歌いっぱなし。そりゃ、楽しい旅だった。

「さあ、スリークに着いたぜ、イエイ！　何かこの街に大事な物を置き忘れてたんだろ。おーっと、何も言わなくていいさ。じゃあ、元気でな、グッドラック！」

大事な物……壊れたスカイウォーカーだったら墓場に置いたままだけど、あれはもう動かないもんなあ……。さて、トンズラさんたちと別れたぼくたちは……。

●墓場へ　……………………598へ　●ドラッグストアへ　……………………534へ

631

強力な攻撃をしかけてくるスーダララッタに、ぼくらはいいようにもてあそばれた。全身、傷でボロボロだ(HPマイナス8)。ようやく敵を倒したとき、ぼくらは全員、肩で荒い息をついていた。こ……こんな調子でギーグを倒すことができるのだろうか？

●Zにチェックがあれば　…………671へ　●なければ　……………………587へ

632

北の通路を選んで進んで行くと、大きな岩壁につきあたった。そこには小さな扉がついており、扉の前にはサルがチョコンと座っていた。

「ここを通して欲しいなら、ダブルバーガーを下サル？」と、手を差し出してきた。

●ダブルバーガーがあれば……455へ　●なければ……406へ

633

バスは、砂漠地帯にさしかかったところで、渋滞に巻きこまれてしまった。バッファローの群れが道を横断してるとかで、もう1時間以上、同じ場所で止まったままだ。

ふう。渋滞ぐらいで身動きとれなくなっちゃうぼくらに、果して地球が救えるのかな……。

「この調子じゃ、いつ動き出すかわからないなあ……オレは仕事だから降りるわけにいかないけれど、お客さんがた、降りたきゃここで降ろすぜ。へたすりゃ砂漠を横切っていった方がフォーサイドには早く着くかもな」運転手さんが、ぼくらを振り向き、言った。

そこで、先を急ぐぼくらはバスを降りて歩いて行くことに。けれど……。果てしなく続く砂の平原に灼熱の太陽、ほこりっぽい風に、ぼくらの体力はみるみる奪われていった。

「あっ！」小さな声をあげて、ポーラが転んだ。

あわてて助け起こそうとしたぼくとジェフは思わず顔を見合わせた。ポーラの手はすごく熱くて、おまけに、息もはあはあと苦しそうだったんだもの。たぶん、日射病だ！

●ぬれタオルがあれば……486へ　●なければ……533へ

634

「そういえば、俺の住んでいる村のはずれに、テコでもうごかないうさぎが守る洞窟があるんだ」プーが、思い出したように言った。「そのニンジンをやれば、どいてくれるかもしれない。あの洞窟にどんな謎が隠されているのかわからないが、なぜか気になるんだ」
「そうか。プーが気になるなら、ぼくも気になる。よし、みんなで行ってみよう！」
ぼくらはさっそくランマへテレポート！　ランマは、建物から人から、すべてがぼくらの知っている風景とは違って、とても神秘的な国だった。
ぼくらは、ひとたびプーの宮殿に寄ると彼の師・イースーチーに挨拶をしてからさっそくその洞窟へ行ってみた。すると……いたいた、大きなうさぎがデーンと！

⬇438へ

635

強烈な勢いで繰り出されたPK必殺は、敵にかなりのダメージを与えた。よし、次は!?

●ポーラ……………………588へ　●ジェフ……………………86へ

636

「みんな、これを見てくれよ」
顔を洗ってさっぱりしたぼくたちに、ジェフが新しい武器を見せた。虹色ビームだ。

「夕べね、みんなが眠ってから壊れたビーム砲を直したのさ」
「ジェフはすごいな。今度、俺の家の機械も直してもらおう。お礼は宝石1箱でいいか？」
プーが、感心したようにとんでもないことをつぶやき、ポーラの目を丸くさせた。
◆『壊れたビーム砲』の横の（　）内に『虹色ビーム』と記入する。Zにチェックして……

……296へ

637

まずはPK必殺を、強い歩く芽におみまい！　そこへポーラが、PKファイアーを放った。植物だけに、炎には弱い。強い歩く芽は、火に包まれると、たちまちおとなしくなった。こりゃ、楽勝かなと思ったが……。ランブーブが、眠たくなる香りを漂わせた。たちまち、ジェフとポーラが眠りについてしまう。おいお〜い、まだ戦っている最中なんだよ……。
結局は、ぼくとランブーブの1対1の戦いに！　バットを振りおろしたが、これはハズレ！　そこをついて、ランブーブがドシンと体当り。あいたたた……（HPマイナス5）。
しかし、なんとか次の一撃でランブーブをおとなしくさせることに成功。こんなことなら、強い歩く芽じゃなくて、ランブーブを最初に倒しておくんだったね。

➡505へ

638

「ちょっと待って、ネス！」出口から先へ進もうとしていたぼくに、ポーラが声をかけた。
「忘れちゃったの？　スカラビで情報屋さんが言ってたじゃない。ピラミッドの出口で、することがあったでしょ？」
そうだった！　ポーラの記憶力に感謝。やっぱり女の子は、細かいことによく気が付く。
「ごほん、ええ～っと……タカの目よ、我に力を貸したまえ……だっけ？」
とたんに、天から、目玉そのもの、という感じのタカの目が舞い降りてきた。
「な、なんか、気持ちわるうい……」
ポーラが、いやそうな顔をして、タカの目から遠ざかる。
「なにを言うか、これは、天から授かった大事なものなんだぞ」
プーは、おもむろにタカの目をつかむと、ぼくのリュックにしまいこんだ。
◆『タカの目』を入手した。アイテムリストにチェックして …………………**607へ**

639

「退屈しのぎにおまえさんたちに着いて行きたいんだけど……。おっと、心配すんな。オレは何の手出しもしないからよ。そら、出口はそこの大きな箱をどけたら扉がある」
なんだかよくわからないけれど外へ出る。と、ぼくらの前に、突然ロボガロンが現れた！

に飛ばされ、ぼくらは側にあったビルの壁に叩きつけられてしまった！（HPマイナス5）

しかし、このバトルのおかげで意外な発見があった。爆発のススで、透明人間さんの姿が現れたのだ。それがなんと、眉毛がつながってて金歯の男なんだな、これが！

「あなたを捜していたんです！　さあ、ボクたちといっしょに来てください!!」

ぼくとジェフは、彼の手を取ると、モノトリービルへGO！

↓487へ

640

グレープフルーツの滝は、スリークの街から東へ、いくつもの山を越えたところにあった。

ぼくたちはかわるがわる滝をのぞきこんだけど、どこに秘密基地への入口があるのかわからない。しかたなくあたりを探ってみると、サターンバレーという谷間の集落にでくわした。

そこは、どせいさんというなんとも変わった種族の住まう場所だった。でも……。

「ふみねうね　えんぱずそ　らろ　うっぺんちりゃっちょ　ぷいぷー　よんとろ？」

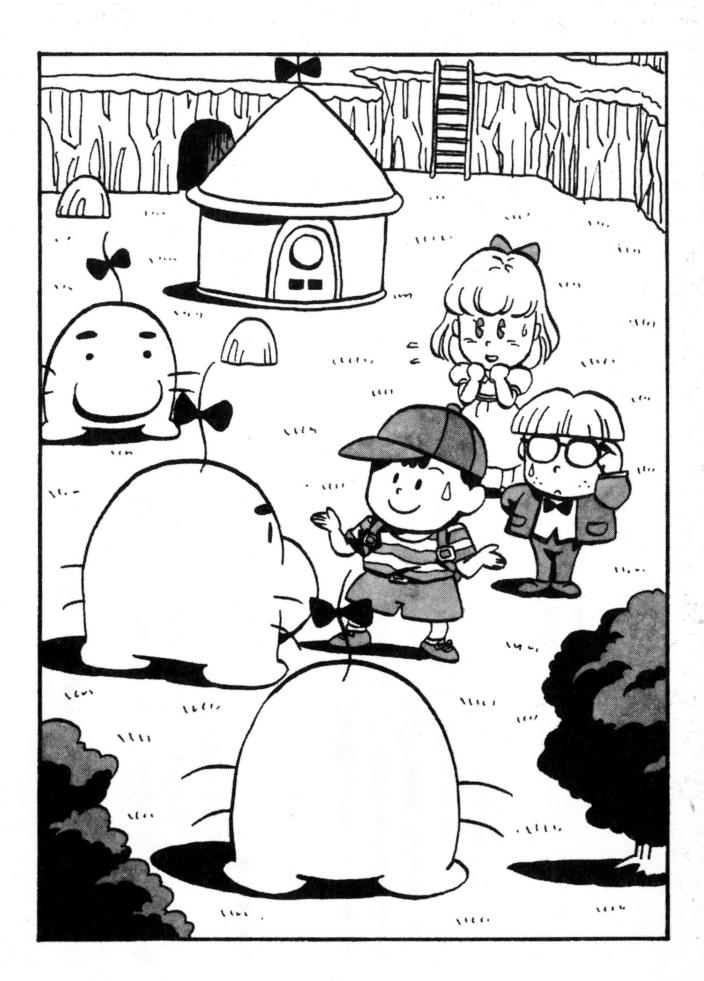
会話がぜんぜん成立しない。

どうやらどせいさんの言葉は、ぼくたちのものとは全然違うみたいだ。

「どうしたらいいかしら……」ポーラが、困ったようにぼくを見る。

「うーん……」ジェフも、お手上げという表情だ。

●どせいさんの辞書があれば　……481へ　●なければ　……………410へ

641

宿泊をあきらめ、ホテルを出ると、今度はドラッグストアへ。
まずは、ポーラのために守りのリボンを買った。ブルーの清楚なリボンだ。
「ええと、あとゴージャスなバットかシェフのフライパンが買えるけど……」
ポーラが残金を計算しながら言う。
◆『守りのリボン』を入手した。アイテムリストにチェックして
●ゴージャスなバットを買う　……449へ　●シェフのフライパンを買う　……473へ

642

「やっぱ、ホテルでゆっくり休みたいよねえ……」
相談の上、ぼくらは100ドルを残しておくことに決めた。
「じゃ、どうする？　さっそくホテルで休もうか？　それとも街を歩いてみるかい？」
ぐるりと街を見回しながら、ジェフが聞いてきた。
●ホテルへ直行　………570へ　●街を歩いてみる　………280へ

643

「困ったなあ。日射病に効きそうなものを、何も買わなかったから……」

ぼくは、ジェフとプーに、そっと耳打ちした。

「ないものはしかたない。風を送りながら、しばらくここで様子を見よう」

「プーはランマ育ちの自然児だからね。こんなときは頼りになるよ、ネス」

ぼくとジェフは、プーにならって、手でポーラに風を送ってあげる。しばらくすると、ポーラの様子がやや落ち着いてきた。

「みんな、ありがとう……。だいぶよくなったわ、少しは歩けそう。戦いになったら役にたたないかも知れないけれど……。ごめんなさいね」

「何を言う。こういうときは、お互いさまなのだ。調子の悪い者を元気な者がかばうのは当然。あやまることじゃない」

「そうだよポーラ、プーの言うとおりだよ。戦いは、ぼくたちに任せてくれ！」

プーとジェフが、口々に言う。ぼくは、本当にいい友だちを持ったもんだ。

「よし、じゃあ、今のうちにピラミッドへ行こう。中は、ここよりも涼しいはずだ」

ぼくらは、ポーラに交替で肩を貸しながら、再びピラミッドへと歩きはじめた。

◆ウにチェックをして……………………………………231へ

644

まず、ぼくとポーラが、スカラビで買った強力な武器を使い、敵にダメージを与えた。ガッツのバットと素敵なフライパンは、狙い過たず、石像の元締めの頭を直撃！さすがにこれには応えたらしい。

「よし、ジェフ、とどめを刺すぞ！」

●ペンシルロケット5があれば　…**370**へ　●なければ　……………………**66**へ

645

ぼくたちは穴の中に入った。穴を抜けた向こう側は、気持ちのいい匂いのする原っぱだった。そして、中央には、乳白色の水をたたえた池が……。これがミルキーウェルか……。

その時どこからか、不思議な旋律が流れてきた。それは、甘くなつかしい不思議なメロディ……。聞く者をつい詩人にしてしまう美しい調べだった。

その時ぼくは、遠くでママの声が聞こえたような気がした。その声は、おもいやりのある強い子にと、言っていた……。音の石は、ミルキーウェルの音を記憶した。

◆レベルが4にアップしました。レベル4対応のHPチェック表に切り替えて

●スにチェックがあれば　…………**457**へ　●なければ　……………………**499**へ

646

「石像の元締めがこの部屋を守っていたってことは……？」
ぼくは、部屋をぐるりと見回した。と、部屋のすみの床に、唯一柄の違うタイルがはめこまれていることに気付く。不思議に思ってタイルの上に乗ると、どこからか、ゴゴゴ……と、重苦しい音が聞こえた。
何事かと思案していたジェフは、ひらめいたように顔を上げる。
「さっきの、あの棺の部屋へ行ってみよう！」
ぼくらは、ジェフに従って、怪しい棺のあった部屋へと急いだ。すると――。
なんと、びくともしなかった棺が横にスライドしていて、もともと棺のあった場所に、大きな穴がぽっかりと口を開けていた。
「隠し階段だったんだよ」
ジェフが、穴の中の階段を降りながら、満足そうにそう答えた。

➡566へ

647

スネーク絵文字は、なかなか強かった(HPマイナス3)。しかし、ぼくらは4人。力を合わせりゃ、不気味な絵の1つや2つ、なんのその！
「いっくぞ〜！　スマ――――ッシュ！」

ぼくの強烈なスマッシュ攻撃が、スネーク絵文字のおなかを直撃！
敵は、その場にうずくまり、すうっと消えた。
◆ポーラが『オフェンスアップ』を覚えた。PSIリストにチェックして ……139へ

648

ママやトレーシーのことが気になったぼくは丘に向かう前に、ちょっと様子を見ることにした。が、心配にはおよばず。ママもトレーシーも、意外に元気でやっていた。
「もう、いったい何が起こったのか、ママにもわからないのよ。突然戒厳令が出て、外に出たらいけないって言われて……お買い物にも行けないわ」
ママは、あいかわらず怖いもの知らずの元気よさ。とりあえず安心だ。
「ネス、これを持っていきなさい。みんなで食べられるマンモスバーガーよ」
出かけようとしたぼくらに、ママは大きなバーガーを渡してくれた。
やった！　寄ってみてよかった。
「ありがとうママ、行ってくるね」
◆『マンモスバーガー』を入手した、アイテムリストにチェックして ……617へ

649

まずはPK必殺をランブーブにおみまい。そこへポーラが、PKファイアーを放つ。植物だけに、炎には弱い。
「ぐあああああああああ……」
ランブーブは火に包まれると、たちまちおとなしくなった。
こりゃ、楽勝かなと思ったところ……。強い歩く芽が強烈な一撃！　あぶないところで直撃はまぬがれたが、太ももに傷を作ってしまった！（HPマイナス2）
しかし強い歩く芽の攻撃もそこまで。ぼくのバットとジェフのバンバンガンで、敵は、たちまちおとなしくなってしまった。

⬇**505**へ

650

右へ進み、くねくね道をどんどん歩いていくと、途中で細い脇道を発見！
「なんだか、つきあたりっぽいわね……」
奥のほうを覗きながら、ポーラがつぶやく。

●**脇道に入る**……………**596**へ
●**まっすぐ進む**……………**572**へ

651

ぼくらが買い物を終えてもどると、スペーストンネルが完成していた。
さっそく乗りこみ、始動させる。
「出発進行！」
ガクン、ガクン、ガクガクガクン……。
ちょっとの間、振動があったかと思うと、スペーストンネル2は暗い洞窟のような場所に降り立った。ぼくらが外に出てみると、スペーストンネル1らしきものの残骸があって、その横に！　ど、どせいさん!?
「そう、どせいさんです。すぺえすとんねるのなかでかくれんぼしてますたら、ふくをきたぶたきて、いつのまにかこんなとこ、いたです。ぷー」
「ポーキは、やっぱりここまで……。いったい、何をする気なんだ？」
ジェフが、眉をしかめてそう言った。
「とにかく、先に進もう。どせいさん、ここで待ってて。ぼくら、きっともどってくるから」
「うん、わかった。ぽえーん」
にこにことぼくらを見送るどせいさんを、スペーストンネルの脇で待たせ、ぼくらは両脇が崖になっている道を歩きはじめた。が、やがてY字路にさしかかる。
右方向と左方向に延びている道、どっちへ進もうか？

●右へ……667へ　●左へ……464へ

652

ウィンターズの寄宿舎の前までテレポートしたぼくらを待っていたのは、ジェフの親友トニーが行方不明になったという悲しい知らせだった。
「ここ最近、ウィンターズでは、行方不明事件が続出しているんだ」
ジェフの先輩ガウスさんがそう話す。
「とにかく、アンドーナッツ博士のところに行こう。もしかしたら、何か知ってるかも」
ジェフの案内で、研究所への道を急いだ。タス湖まで歩いて行き、そこからタッシーという恐竜の背に乗って湖を渡る。恐竜の背中に乗るなんて、最初はびっくりしたけれど、タッシーはかしこく、優しい生き物だった。
対岸に到着してしばらく進むと、やがて、右手に『ブリックロードの低予算ダンジョン』と立て看板のあるところへ。
「これは、あのダンジョン男になったブリックロードさんが作ったダンジョンなんだ。本当は近道があるんだけど、あの鉄のタコが邪魔をしてるから、通れないんだよ」
ジェフが前方を指差して言う。
なんと、ジェフが示したところには、見覚えのあるタコが。グレートフルデッドの谷で、

ぼくがどこかへ飛ばした、あの鉄のタコだ。
「あ、そのタコなら、ぼく知ってるよ。この機械で消すことができるよ」
ぼくはリュックからタコ消しマシンを出し、みんなに向かって見せた。

●タコ消しマシンを使う ……………240へ
●ダンジョンに入る ………………………578へ

653

「あの、100万ドル貸してもらえませんか?」
銀行へやってきたぼくらは、貸付のカウンターに行くとおもいきって聞いてみた。しかし、
「ぶわっはっはっは！　坊やたちに？　そりゃあ、無理な相談だなあ！」
と、おもいきり笑われてしまった。ちぇっこっちは真剣なのにな。
「ま、ドコドコの埋蔵金でも掘り当てりゃ、軽いもんだけどね。あはは！」
銀行員さんの言葉を聞いたぼくの頭に、モッチー兄弟の顔が浮かんだ。そうか、よし！
「わかりました！　そうします」
ぼくは、意を決して銀行の椅子を勢いよく立った。
「へ？　ほ、本気かい坊や？　こいつはいい、あーははは！」
バカにするならすればいい。何だってやってみなきゃわからないじゃないか！
「埋蔵金を掘り当てても、ここの銀行に貯金するのだけはよしましょうね！」

振り向くと、ポーラが肩をすくめてそういった。
「確率的に、かなりキビシイけど、目がないわけじゃないもんな」
と、ジェフがメガネのふちをクイッとあげる。ぼくに賛成してくれるんだね！

⬇520へ

654

でも、サマーズへ行くっていってもどうやって海を越えればいいんだろう……。
「あ……」モノトリーさんの部屋を出た所で、ポーラが急に、頭を抱えて立ち止まった。
「どうしたんだい！　どこか痛いのかい？」
「ううん……大丈夫……ちょっとめまいがしただけ……。ただ、今、サマーズに行くにはスリークへって、強く感じたの」
スリーク？　なぜいまさら……でも、ポーラの超能力は確かだものな。
「よし、まずはスリークへ行こう！」
ぼくらがエレベーターに乗ろうとしたところへ、トンズラさんたちが現れた。
「オレたちがトイレに行っている間にカタがついちまったみたいだな、イエイ！」
「スリークへ行くなら通り道だ。ＯＫ、オレたちのトラベリング・バスで送るぜ！」
ぼくらは、トンズラさんたちのイカシたバスで一路、スリークへ！

⬇630へ

655

ぼくは、残ったお金をすべて使い、大きな花束を買った。
「うん。ママは花が大好きだから、きっと喜んでくれるぞ！」
花屋の店員さんにお金を払うと、オネットへ向けてテレポートをかける。
ママ、ぼくはもうすぐ帰るよ……。

⬇エピローグへ

656

「あの……ここはボルヘスの酒場ですよね……」
ぼくらはおずおずとシェーカーを振るっている蝶ネクタイの男に聞いてみた。
「いいえ、そのとおり。私はここのマスターだ」
変なの。ぼくをからかってるんだろうか。そこで今度は客に声をかけてみた。
「へ？　フォーサイド？　何寝ぼけてるんだよ。ここはムーンサイドだぜ！」
「いやいや違う。そのとおり！　ここはいつでも夜の街ムーンサイド！」
何だか、頭が痛くなってきて、ぼくらは深呼吸をしようと外へ出た。
そこで、またまたぼくらの頭は混乱した。だって、さっきまでまっ昼間だったのに、外は夜でおまけに街にはけばけばしいネオンがあふれているんだもの。作りはフォーサイドとほとんどいっしょなのに……。

「……うーん、ネス。ボクらはどうやら異次元に迷いこんでしまったようだね。それとさっきの会話から察するに、この街は『はい』と『いいえ』があべこべなんだな、うん……」
ジェフが眉間にシワを寄せていった。
そんなあ、ぼくらは、無事、元の世界に帰れるんだろうか……。
不安を抱きつつ、とりあえず目の前のドラッグストアに入ってみることに。
⬇624へ

657

強力な攻撃をしかけてくるスーダララッタに、かなり翻弄されたぼくたちだったが(HPマイナス5)、なんとか倒すことに成功した。
「さ……さすがに宇宙人は手ごわいな」プーが、肩で息をしながら言う。
確かに、こんな調子で、ギーグに勝つことができるのだろうか?
●Zにチェックがあれば……………671へ ●なければ……………………587へ

658

電撃バチバチの守っていたパワースポットは、緑色の不思議な光に満ちていた。
「なんだか、きれいね……」
ポーラがうっとりとそう呟いたそのとき!

横の壁に、テロップのような文字が流れはじめた。
ぼくはネスだ……ぼくはネスだ……ぼくはいったい、どこへゆくのだろう……ぼくは……な、なんだこれは……ぼくのこころのなかなのか……いったい……。
そう、壁に現れた文字は、まさしく、たった今ぼくが心の中で思ったことだったのだ！
と、唐突に、どこか懐かしいメロディが流れてくる。メロディと同時に、ママの声が聞こえたような気がして……。
ふっと我に返ると、ぼくの持っている音の石が、ルミネホールの音を記憶していた。同時に、ぼくらの体の中に、新しい力がみなぎる。

◆レベルが7にアップしました。レベル7対応のHPチェック表に切り替えて **…546へ**

659

「フハハハハ……おまえらの攻撃もここまでか？」
ダイヤモンドドッグが、不敵な笑みをもらした。
「ネス、俺はもう我慢できない！　スターストームを使うぞ！」
プーが怒りの声を上げる。しかし、PKスターストームは、体力、精神力ともに消耗度の高いPSIだ。もう少し様子を見た方がいいかも知れないぞ……。

●スターストームを使わせる **……627へ**
●使わせない **……606へ**

660

ぼくらは、さっそく、隕石を取りに、オネットの町へとテレポートした。
が、オネットは、不気味な雰囲気に包まれていた。店も病院も図書館も、すべて扉をぴったりと閉ざしているのだ。民家の扉を叩いてみても、返ってくる返事はない。
「もしかして、ギーグの手下たちが襲ってきたんじゃないかい？　ボクらが、隕石を取りに行くことがバレたんだよ」ジェフが、困ったような顔をする。
「とにかく、行こう。隕石が落ちたのは、うちの裏の丘なんだ」ぼくはそう答えた。
でも、ちょっと待てよ。ぼくん家は、いったいどうなっているんだろう……？　ママやトレーシー、それにチビは元気なんだろうか……？
考えれば考えるほど心配になるが……。

●家へ行く　……………648へ　**●まっすぐ丘へ向かう　……………617へ**

661

「任せとけっ！」
叫びざま、プーが勢いよく鉄拳を叩きつけた。素手ながら厳しい修行で鍛えられた拳だ。
しかし、残念ながら致命傷にはならなかったようだ。敵は憎々しげな視線を向けると、すばやい動きでＰＳＩ攻撃をしかけてきた。

鋭い痛みが、ぼくらの手足に！（HPマイナス6）
「な、なにくそっ！」
ぼくらは必死になって、次々と攻撃をしかけた。右に左にと敵を翻弄し、ついに仕留める。
大変な戦いだったが、そのかいあって、プーがシールドΩを覚えた。味方全員に反撃のシールドをかける頼もしいＰＳＩだ。

◆プーが『シールドΩ』を習得した。PSIリストにチェックして……162へ

662

スターマンは、すばやい動きでビーム攻撃をしかけてきた。とっさに避け、直撃を避ける。腕にかすり傷を負ったが（HPマイナス2）、気にせずガッツのバットで攻撃！
続けざまに繰り出されたポーラ、ジェフ、プーの連続攻撃で、敵はあっという間にバタリと息絶えた。

●Kにチェックがあれば……21へ　●なければ……199へ

663

ぼくたちはそれぞれの武器をかまえて、巨大ネズミに飛びかかろうとした！　ところが、それまでおとなしくしていたミニミニ幽霊が、冷たい手をのばし、邪魔をしてきた!!

「うわ、体が固まって動けないよ！」たまらず、ジェフの悲鳴！（HPマイナス2）
ブワシッ！　ジェフを助けようとしたプーの背に、巨大ネズミの爪がくいこんだ！

●王者のバンダナがあれば……………176へ　●なければ…………………………451へ

664

「サルの穴はどこ……ネス、なんだかボク……クラクラしてきた……」（HPマイナス2）。
「頑張って、ジェフ！　そうだ、埋蔵金発掘現場で少し休ませてもらおう！」
ぼくはジェフに肩を貸すと、埋蔵金発掘現場にある小屋へ。そこで一晩泊めてもらった。
「なんだ、最初からここに来りゃいいのに。サルの穴なら、この砂漠の西のはずれだぜ」
次の朝。モッチーさんに教えてもらったとおり、ズンズン西に向かって進んでいくと、やがて砂漠のまん中にサルが1匹現れた。そのうしろの地面には、ぽっかりと穴が開いている。
「ようこそここへ、ウッキキッキ！　この穴は何でも知っている偉大で優しいタライ・ジャブ様がぼくらのために作ってくれた地下室さ！」

⬇552へ

665

途中のワープゾーンを何箇所か越えて、さらに歩き続けたぼくらの前に、今度はスターマンが現れた。いや、よく見るとスターマンとは色がちょっと違う。全身が、まっ黒なスーツ

のようなものに覆われているのだ。こいつは——!?
「ふははははは……ただのスターマンとは格が違う。オレ様こそは、スターマン・センゾだ」
●戦う ……………………328へ ●逃げる ……………………337へ

666

「ネスの武器はスカラビで買ったから、わたしとジェフが使えそうなものを買いたいわね」
相談の末、ポーラには素敵なフライパンを、ジェフにはペンシルロケット20を買った。
◆『素敵なフライパン』と『ペンシルロケット20』を入手した。アイテムリストにチェックして ……………………567へ

667

右へ進んだぼくらは、つきあたりで見覚えのある物をみつけた。
「あのオブジェ、たしか地底大陸の洞窟で……。ほら、溶岩し～んを取りにいったとき……」
そう、ポーラの言ったとおり、あの洞窟でちらっと見た、タコのような足のオブジェが、そこにそびえたっていたのだ。
「なるほど。あそこで見たのは、この場所だったのか……」
プーが、腕組みして前方を見る。崖の向こう側には、確かに洞窟の入り口が見える。あの

中には、まっ赤な溶岩ど～んや、青く輝く溶岩し～んが、たくさん落ちているのだろう。
「とにかく行き止まりじゃしかたない。もどろう……」

●左へまだ行ってない　……………464へ　●左へはもう行った　……………568へ

668

「さあ、これからはしばらく3人だけど、頑張って進もう！」
ぼくは、ジェフとポーラを励ますようにそう言うと、南に向かって歩きはじめた。
「そうね、プーはきっともどってくるわ」
ポーラが、明るい声でそう言う。が、ジェフの返事がなかった。
振り返ると、青い顔をして、苦しそうに歩くジェフの姿が目に入った。
「いや……気……にしないで……くれ。ボクは……大……丈夫……」
「ジェフ！」ポーラが叫んで、ジェフに走り寄る。
「大変よ、ネス！　ジェフってば、日射病にかかったみたい！」
◆アイテムリストに『ぬれタオル』か『すっきりハーブ』は？

●両方、もしくはぬれタオルがある　……………………………227へ
●すっきりハーブがある　……………293へ　●どちらもない　……………142へ

669

ぼくは広い道を選び、まっすぐ歩きはじめた。でも、しばらく行くと、何か透明な膜のようなものに邪魔されて、1歩も前に進めなくなってしまった。結局あきらめて、脇道に入る。

◆Qにチェックして……………………………………………620へ

670

ぼくらは、右のロープを選んでのぼった。が、残念ながら行き止まり。ちぇっ。ロープを降り、再び考える。右は行き止まりだから……。

●左のロープをのぼる…………416へ　●中央のロープをのぼる…………127へ

(1度のぼったロープは、2度とのぼれません)

671

「とにかく、敵にいちいち付き合っていたら、身がもたないぞ。適当に逃げるのも手だな」

さすが、修行を積んだプー、言うことが一味違う。

「やっぱり、プーは冷静だなあ……」

「うんうん。だって、ランマでは、すっごくつらい修行をしてきたんでしょう。さすがよね」

「考え方が理路整然としてるんだ。今度、脳波とか、調べさせてくれないかい?」

などと、ぼくらが勝手なことをしゃべっていると、目の前に、タコのロボットが出現した。
「いや〜ん、色もまっ赤でタコみたい……ってより、タコそのものよ！」
ポーラがおもわず悲鳴を上げる。すると、タコの怪物は、自慢そうに胸を張って答えた。
「いかにも。私はタコ・ソ・ノモノ。タコ型モンスター最強である！」

●**戦う** ……………………**530へ**　●**逃げる** ……………………**364へ**

672

「ネス……ネス、ネス……」聞き覚えのある声で、ぼくは目を覚ました。
徐々に開けてくる視界のすみに、まずポーラの顔が映った。そして、ジェフ、プーのうれしそうな顔も見えてくる。
ぼくは、やっと体を起こした。ちょっとふらつくが、気分は悪くない。ぼくが起き上がると、仲間やどせいさんたちが、どやどやっと寄ってきた。
ネス、ネス、ネスと、ネスの大合唱が沸き起こる。そして、みんながようやく落ち着いた頃、プーがぼくの肩に手を置いた。
「ネス、やったな。オレはもう、ランマにもどるぜ。おまえらといっしょに戦った日々は、オレの一生の思い出だ。いつか、ランマにも遊びにきてくれよ。それじゃ！」
プーは、ポーラやジェフにも挨拶するとテレポートをかけた。瞬時に、プーの姿が消える。

「行っちゃったね……」ジェフが、ぼくに近づいてきた。
「ボクは、ここにしばらく残って、博士……いや、パパの研究を手伝うことにするよ。ネス、キミたちといっしょにいられて、本当に楽しかったよ。ボクが勉強してきたことが、こんなに役立つとは思わなかったよ。また、なにかあったら呼んでくれよ」
「うん、もちろんだよ、ジェフ。……それじゃ、また会おう、約束だよ」
ぼくは、ジェフに別れを告げると、ポーラの方を振り向いた。

⬇423へ

673

と――。それまで、戦いを傍観していただけだったポーキーが、ゆっくりと動きはじめた。
「ギーグは、もうダメだな……戦う意志を、ほとんどなくしているんだ……」
ポーキーは、何をするのかとながめているぼくたちの前で、ギーグの体の中心部、目玉のような場所に手を触れる。
とたんにギーグの体がぐにゃりと歪んだ。脳ミソのような形をしていながらも、規則的だったギーグの体が、アメーバのようにぐねぐねと変化をはじめる。
「あっはっは。ギーグの精神を統括していた悪魔のスイッチを切ってやった！　これでギーグは考えることができなくなったってわけだ。もうギーグは、スイッチを切った人間、つまり、オレの思いどおりにしか動けない。あーっはっはは……」

高らかな笑い声をあげるポーキー。と、そのとき、突然、ポーラが祈りはじめた。
「ポーラ、いったい、なにを……？」
呆然と見守るぼくらに向かって、ポーラはチラと顔を上げる。
「祈るのよ。わたしたちだけの力じゃ、ギーグを倒せないわ。世界中の人に呼びかけるの」
ポーラは再び顔をふせ、両手を組み合わせて一心に祈りはじめる。
「お願い。わたしの祈りに気付いたあなた……わたしたちに力を貸して……」
ポーラの祈りの声が、洞窟の中に響き渡る。

➡**510**へ

674

気付くと、ぼくらは全員、スペーストンネル3の中にいた。あれ、どうしたんだっけ？
呆然としながら、体を見回すが、特に変わったところはない。あいかわらず機械の体だ。
「ぼくらは、ギーグに出会ったんだっけ？」
みんなに聞いてみるが、わからない。どうやら揃って、記憶喪失になってしまったらしい。
「しかたない、さあ、ギーグを倒すぞ！」
ぼくらは、スペーストンネル3を出ると、薄暗い道を歩きはじめた。

◆HPを、現在のレベルの最大値まで回復させて……**210**へ

675

ぼくは、残ったお金をすべて使い、大きな花束(はなたば)ときれいな柄(がら)のエプロンを買った。
「うん。きっとママ、喜んでくれるぞ」
店員さんにお金を支払(しはら)うと、オネットへ向けてテレポートをかける。
ママ、ぼくはもうすぐ帰るよ……。

⬇エピローグへ

エピローグ

オネットの家に帰ったぼくを待っていたのは、ママのとびきり優しい笑顔だった。
「ネス、お帰りなさい。あなたがきっと元気に帰ってくるって、ママ信じてたわ！」
ぼくはたまらず、ママの胸に飛びこんだ。
「ママ！　ママ……ぼくたちのために祈ってくれたでしょう。わかったよ。ぼく」
ママは、優しくぼくを抱きしめたまま、ささやくような声で答える。
「ママには、ネスの様子が手にとるようにわかったわ。だから、ネスとみんながきっと無事にもどってきますように、宇宙からの侵略者なんかに負けませんように……そう祈ったのよ」
「ありがとう、ママ。……そうだ。ママは、この冒険の間じゅう、ずっとぼくの心の支えだったから……これ……余ったお金で買ったんだけど……」
ぼくは、ママにプレゼントを渡した。
「まあ、ネス……これを、ママのために？　うれしいわ。ありがとう！」
ママは、今度は、大きな花束ごと、ぼくをぎゅっと抱きしめた。と――。
「ああ～っ。ママにだけなんて、いいな～!!」
「わんわん！　くう～ん……わん!!」
リビングの扉が開いて、妹のトレーシーと犬のジョンが!!

「わたしだって、ママといっしょにお兄ちゃんの無事を祈ったのよ」
「わんわん、わお～ん！（ボクだって、祈ったんだよ）」
憎まれ口を叩きながらも、その表情はとても明るい。
「わかってるよ！　きみたちへのプレゼントは……ぼくの冒険の話じゃ、不満？」
ぼくがそう言うと、２人……いや、１人と１匹は、飛び上がらんばかりに大喜び。
「冒険の話？　わあ、聞きたい！　聞きた～い!!」
ぼくらはさっそく、揃ってソファに腰かけた。そこに、お手製のケーキと紅茶を持ってきたママが加わり、場はすっかりパーティムード。ママが生けてくれた花束を囲んで、久しぶりの家族だんらんだ。週末からは、ここにパパが加わる。出張先での仕事が終わって、やっと家に帰れるようになったって、ママがうれしそうに話してくれた。バラバラだった家族が、また同じ家に寄り添って暮らせる。平凡だけど、幸せな日々がもどってくるんだ……。
「……それでね、すっごく大きな街・フォーサイドではね……」
ぼくは今、『幸せ』って言葉の意味が、ほんのちょっとだけわかった気がした。はっきりと形が見えるわけじゃないけど、ほんわかとあったかい気持ちになれること、それが幸せだってこと。スリルだらけの冒険を終えた今だから、わかることなのかも知れない……。

＊　＊

ドンドンド――――ン！　ドコドコド――――ン!!

その、耳をつんざくようなものすごい音がしたのは、ようやく冒険の話を終え、ベッドに入ってまどろみかけた頃だった。そのまま無視していたかったけど、ママとトレーシーに起こされ、寝ぼけまなこでリビングに降りる。
「誰かがドアを叩いているみたいなのよ。ネス」と、ママが言えば、トレーシーも「なんだか下品な叩きかたねえ……」と眉を寄せる。
ん……？　なんだか、このシチュエーションって……？　ぼくは、いやな予感にとらわれながら、ドアを開けた。と——。
家の中に飛びこんできたのは、ポーキー……の弟のピッキーだった。手に何やら手紙のようなものを握っている。
「これ、ポーキー兄ちゃんから預かったんだ。ネスに渡してくれって……」
ぼくは、さっそく手紙を開いて読んでみた。すると中から、こんな文章が!!
『やい、ネス！　これで勝ったと思うなよ。俺は、もっとすごいこと考えてんだ。またいつか会おうぜ。ただし、味方同士としてではないけどな!!』
いったい、どういうこと？　そういえば、ギーグを倒した後、「シーユーアゲイン」って言ってたけど……ポーキーは、何を考えているんだ!?
なんだかぼく、すごくいやな予感がする……。どうしよう、ママ!?

THE END

エニックス文庫

ゲームブック
MOTHER 2　ギーグの逆襲
企画／**エニックス**
構成・文／エムズカンパニー(池田美佐、前川陽子)
　　　　安藤 夏、沙藤 樹
本文イラスト／金子　統

原作　ゲーム　MOTHER 2　ギーグの逆襲

ゲームブック
MOTHER 2　ギーグの逆襲

1995年6月6日　初版第1刷発行

制　作　**エニックス**

編集人　千　田　幸　信

●●●

発行人　福　嶋　康　博

発行所　株式会社 **エニックス**
東京都新宿区西新宿7-5-25
西新宿木村屋ビル3F
営　業　☎03(3369)8982(代)
書籍編集　☎03(3369)7200(代)

印刷所　大日本印刷株式会社

ISBN4-87025-811-0